
薔薇のマリア
11.灰被りのルーシー
Ao Jyumonji 十文字青
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫


愛しているわ。
愛しているわ。
愛しているわ。
母は何度も何度もそう呟いて、声を出すこともできなく
なると、やがて眠るように息をひきとった。
ルーシーは村はずれの小高い丘の上に母を埋葬した。
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
薔薇のマリア
11.灰被りのルーシー


「むうううううううううううううあああああああああああああああぁぁぁぁぁ……！」
トマトクンは猛獣のごとき咆吼をあげてマリアローズに飛びかかっていった。その大剣の一振りは、トマトクンに比べたら小動物みたいなマリアローズなんて簡単に木っ端微塵にしてしまうだろう。今のトマトクンなら、ためらわずにそうするだろう。終わりだ。マリアローズは殺される。


ものすごく寒い。真冬並みだ。景色も真冬だった。巨大甲虫モドキたちはあっという間に凍りついた。地面にも霜が降りた。空気も凍った。たぶん、あのキラキラしている無数の粒は空気中の水分なのだろう。壮観だった。感動した。恐ろしくもあった。
「歓楽Dued一切訣贋皓潔斎MouReu
Laud韻吟至極氷監獄」

薔薇のマリア

11．灰被りのルーシー

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE 11

LUCY

Ao Jyumonji

First published 2009 in Japan

By

Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

A BRAVE HEART OF RED ROSE

11

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF RED ROSE 11

MAIN CHARACTERS



Azian
アジアン

クラン《昼飯時(ランチタイム)》の頭領(マスター)。



Mariarose
マリアローズ

主人公。美貌の侵入者(クラッカー)。



Katari
カタリ

トラブル＆ムードメーカー。



Pimpernel
ピンパーネル

元暗殺者(アッサシン)。



Tomatokun
トマトクン

クラン《ZOO》の園長(マスター)。



Lucy
ルーシー

ニューカマー。



Yurika Snow-white
ユリカ白雪

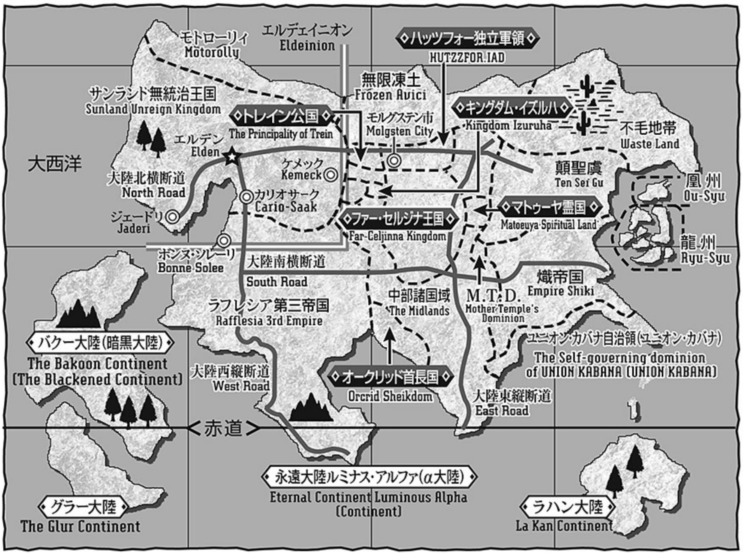
最強伝説。

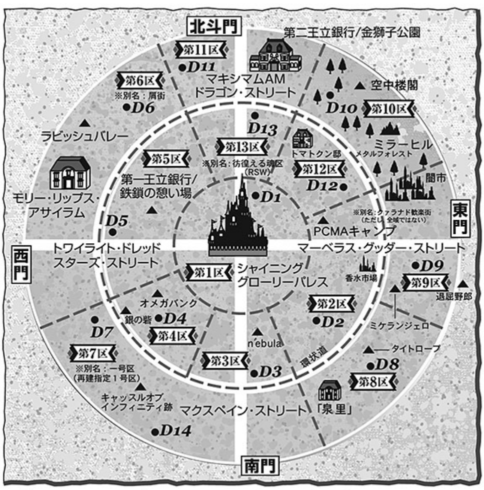


Safinia
サフィニア

魔術士。不幸。

The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Elden : the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics

illustration：*BUNBUN*
design work：*design CREST*

prologue

まず父と母のことから話さないといけない。

故郷はファー・セルジナ王国のシー・シリー。山やま間あいの小さな村だ。

父はそんな村には似合わない人だった。もともとシー・シリーとは縁えんもゆかりもなく、旅の途と中ちゆうに立ちよっただけらしいので、あたりまえだ。ずっと一いつ緒しよにいられればよかったのだけれど、そうもゆかなかった。それどころか、父は数年に一度、何の前ぶれもなく帰ってきて、十日くらい村ですごすと、また旅立っていった。とても忙いそがしい人だった。

「ルーシー。ハドリエラと二人じゃあ寂さびしいかい。もしそうだとしても、寂しいなんて言っちゃあいけないよ。ルーシー。お前も寂しいかもしれないが、ハドリエラだって同じなんだ。そしてこの俺もね。お前たちの顔を見られない日々はまるで地じ獄ごくのようだよ」

ハドリエラ。それは母の名だ。ハドリエラ・アッシュカバード。

小さなシー・シリーは、ワールー川によって二つに切り裂さかれている。

あるいは、川ではなく、そこに住む者たち、つまり人間が村を切り裂いているという言い方もできるかもしれない。

事の起こりは何百年も昔だ。

ブラーニーと称しようする人々がワールー川をさかのぼって、現在シー・シリーがある場所に居を定めようとした。ところが、そこにはアシェローンという名の先住者がいた。アシェローンは、当然のことながら、先祖伝来のこの土地は自分たちのものだと主張した。

この先の経けい緯いとして伝わっている話はいくつかある。ブラーニーはアシェローンの自じ業ごう自得だと嘲あざけり、アシェローンはブラーニーが自分たちを陥おとしいれ、虐しいたげたのだと嘆なげくのが常だったらしい。らしい、というのは、伝聞だからだ。ルーシーは、自分をのぞけば、たった一人しかアシェローンを知らない。母だ。

ともあれ、定さだかではない細かい事情を省いて事実だけを簡単に述べると、アシェローンはワールー川の西側に、ブラーニーは東側に住むことになった。ブラーニーは次し第だいに殖ふえ、栄え、アシェローンは衰すい退たいした。

ルーシーが知っているワールー川の西側は、もうすっかり荒あれ果てていた。土地は瘦やせ、井い戸ども涸かれていた。作物は母と二人で食べてゆけるほども実らず、川の水を汲くんできて飲まなければいけなかった。生活は苦しかった。父が置いてゆく金がなければ、たぶん飢うえ死にしていた。その金を遣つかうためには、でも、橋を渡わたって東側へ行かないといけなかった。

東側へ行くと、ブラーニーたちは母とルーシーを罵ののしり、唾つばを吐はきかけ、しばしば暴利を貪むさぼろうとした。ただ、父が帰ってきたときだけはおとなしかった。ブラーニーたちは父やその友人をことのほか恐おそれていた。

あるとき、母に石ころをぶつけたブラーニーがいて、ルーシーがそのことを父に打ち明けた。そのブラーニーは行方ゆくえ知れずになった。そんな出来事があったせいかもしれない。

「お父さまを心配させてしまうようなことを言ってはダメよ、ルーシー」

事あるごとに、母はそうルーシーに言いふくめた。

「お母さんはね。この家に帰ってらしたときは、お父さまにはゆっくりと羽をのばしていただきたいの。わたしたちも、何もかも忘れて、お父さまと一緒に笑って暮らすの。お父さまが帰ってらしたときは、夢のような時間なの。お父さまにもそう思っていただきたいの。わかって、ルーシー。お願いよ、かわいいルーシー」

母は父を愛していた。

それはもう、深く、深く、愛していた。

ルーシーも父が好きだった。母と比べて、どちらが好きか。そう尋たずねられたら返事に困ってしまうくらい、たまにしか会えない父のことが慕したわしかった。憧あこがれてもいた。父に強く抱だかれると、自分が壊こわれてしまいそうで、壊れてしまってもいいような気がして、恐ろしくて、同時に、これ以上ないくらい満たさ

れた。大きくて、たくましくて、強くて、やさしい父が大好きだった。

　お父さんはどこからきたの？

「どこだろうね。もう覚えちゃいない。故郷は捨てたのさ。遠い昔にね」

　お父さんは何のために旅をしているの？

「理由？　理由かい？　旅をするのに理由はいらないよ、ルーシー。男は船だ。浮うかんでいるだけの船に価値はない。大おお海うな原ばらをどこまでもゆくのさ。果ての果てを目指してね。とはいえ、たまには港で休まないといけない。ここが港だ。だが、船と言っても、お前にはわからないかもしれないね。いつかお前とハドリエラを、海の見える場所へ連れていこうか」

　海。

「そうだよ、ルーシー。あのワールー川は海につながっているのさ。でかい、途と方ほうもなくでかい水たまりだよ」

　行ってみたいな。

「願うことだよ。強く願うんだ。そうすれば叶かなう夢もあるだろう」

　もう行ってしまうの？

「終わらぬ夢はないんだよ、ルーシー」

　次はいつ会えるの？

「航海が終われば、船は港に戻もどってくるものだよ、ルーシー」

　また会える？

「俺はそう願っているし、ハドリエラもそう望んでいるだろうし、お前だって俺にもっと愛されたいだろう？　だったら、きっと会えるさ」

　絶対、と言って。

「いけないわ、ルーシー。お父さまを困らせては」

　母は悲しさと寂しさと心細さを押し殺して笑い、ルーシーを抱きしめて、それから父にきつく抱かれた。

　エルデンに用がある。

　そう言い残して、父はまた旅に出た。

　それから間もなくだった。

　母が病に臥ふした。

　貧ひん血けつ。低体温。重度の倦けん怠たい感かん。呼吸困難。ついには多臓器不全に至る。アシェローンのおよそ三分の一がその病に罹かかり、発病すれば必ず死ぬ。

　灰はい死し病びよう。

　ブラーニーはアシェローンの命を奪うばう病びよう魔まを恐れ、忌いみ嫌きらい、遠ざけようとした。アシェローンが衰退した直接の原因は、ブラーニーによる迫はく害がいではなかった。灰死病だった。

「三分の一だわ、ルーシー」

　母は病の床とこで弱々しくルーシーの手を握にぎって微笑ほほえんだ。

「お母さんが三分の一だったから、あなたはきっと三分の二だわ。泣いてはいけないわ、ルーシー。泣かないで。お母さんは嬉うれしいの。お父さまに会えて、あなたを授さずかった。お父さまに会えたからこそ、あなたに会うことができた。ルーシー。すべてお父さまのおかげよ。お父さまは強い人だわ。お父さまの血を引いているあなたは、絶対に三分の二よ。あなたは生きるの。生きるのよ、ルーシー」

　愛しているわ。

　愛しているわ。

　愛しているわ。

　母は何度も何度もそう呟つぶやいて、声を出すこともできなくなると、やがて眠ねむるように息をひきとった。

　ルーシーは村はずれの小高い丘おかの上に母を埋まい葬そうした。

　母を失ったルーシーには、古びた家と、荒こう廃はいした田畑と、父が置いていった金しか残っていなかった。

　エルデンに用がある。父はそう言って旅立った。

　ルーシーは橋を渡って東側へ行き、石を投げられながら、ぼろぼろの地図を買った。母に教わったので、字を読むことはできた。

　シー・シリー。

　エルデン。

　サンランド無む統とう治ち王おう国こく。

　あった。

　首都エルデン。ずいぶん遠い。

　父はそこにいるのだ。

Omenage 899 4th revolution 24th day

大陸北横断道（ノースロード）

chapter.1

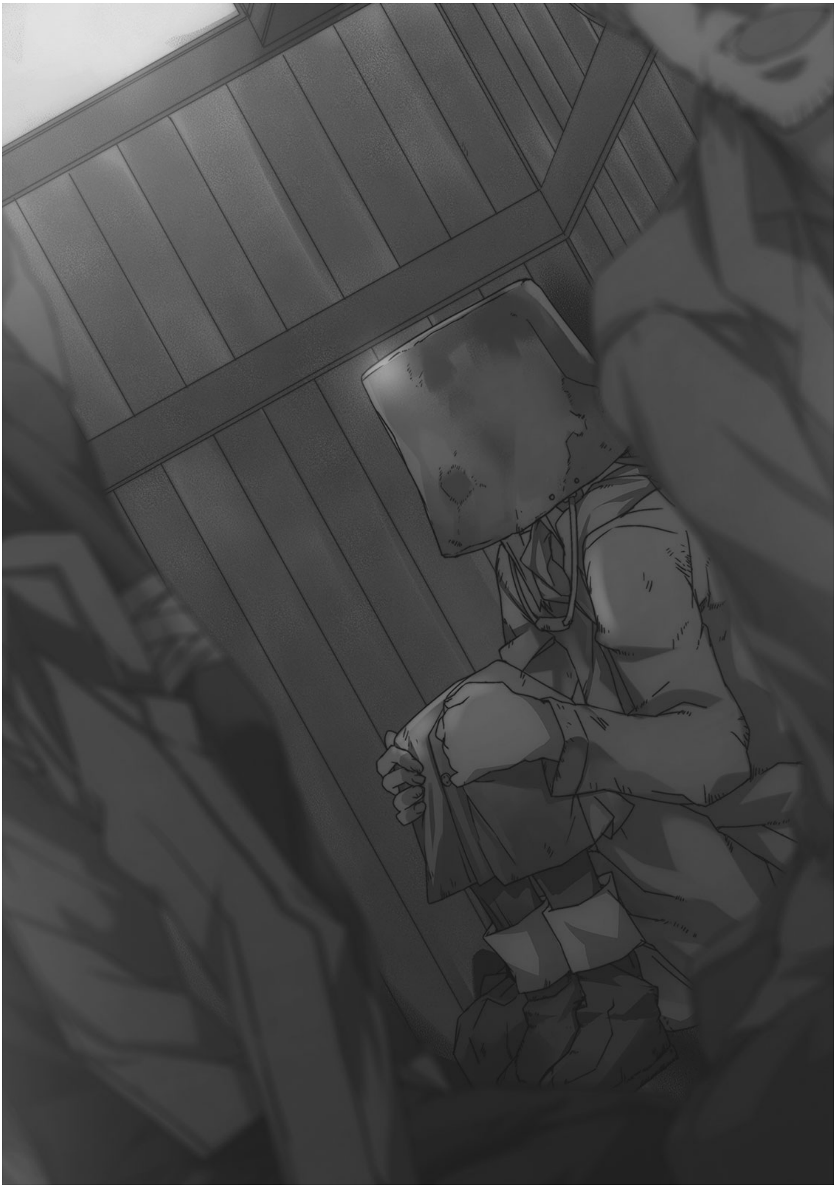
似つかわしき人

「東門が見えるぞ」

　ガタゴト走る馬車の中で誰だれかが叫さけんだ。その声を耳にした男たちは、次々と窓から身を乗りだして前方を見ては、おお、とか、まじだ、とか、ひゃっほー、とか叫んでいる。

　ルーシーも自分の目で東門を確かめたいが、男たちを押しのけて窓から顔を出す勇気はない。馬車の乗客は全員が全員、ルーシーより年かさだ。人相も身なりもよくない。彼らのような人種には要注意だ。気を抜ぬいたら、何をされるかわからない。これまで長い旅をしてきて、それくらいのことは心得ていた。しっかりした街の門番なら、顔を見ただけで門もん前ぜん払ばらいを食わせることもある。そういう手合いだ。

　用心のために、ルーシーはいつも目の部分に穴をあけた金属製のバケツを頭にかぶっている。もともとは故郷で東側へ行くとき、石いし除よけのためにかぶっていたものだが、村の外でバケツをかぶると、なぜかあまり人が近づいてこなくなった。



　きっとバケツには、何か人々を威い嚇かくするか、敬遠させる不思議な力があるのだろう。

　ハッツフォー独立軍領のモルグステン市から、サンランド無統治王国首都エルデンを目指して出発したこの乗合馬車でも、愛用のバケツは効果を発揮した。最初のうちは声をかけてくる者もいたが、

返事をしないでいると、そのうち無視されるようになった。明らかに定員オーバーで、窮きゆう屈くつだし、くさいし、息苦しい。そんな馬車の隅すみでバケツをかぶって小さくなっているルーシーは、不気味な置物みたいな扱あつかいだった。それならそれでよかった。強こわ面もての男たちにからまれるよりは、ずっとましだ。

　ルーシーは置物だ。置物は置物らしくしていればいい。

　もうすぐだ。じっとしていれば、間もなくエルデンだ。

　やがて馬車が停とまって、御ぎよ者しやが扉を開け放った。

　男たちが歓かん声せいをあげながら雪崩なだれを打って外へ飛びだしていった。

　ルーシーは我が慢まんした。出るのは最後でいい。男たちにもみくちゃにされたくはないし、足がすくんでもいた。エルデンだ。ついにきてしまった。とうとうエルデンに到とう着ちやくした。

　達成感はある。単純に嬉しくもあった。期待もある。知らない街だ。故郷を出てから、いろいろな土地を巡めぐってきたが、エルデンは別格らしい。きっと見るものすべてが珍めずらしいだろう。とにかく有名な街だ。この世の果てに人の住む場所があるとしたら、それはエルデンそっくりに違ちがいない。そんなふうにも言われている。もちろん不安もあった。いや、何を隠かくそう、不安が一番大きい。

　馬車はあっという間にからっぽになった。

　乗客はもうルーシーだけだ。

「おい、バケツ。何してる。早く降りろ」

　御者がいらいらした声で怒ど鳴なり、身み振ぶりで外を示した。

　バケツ。

　それはこの乗合馬車におけるルーシーの呼び名だった。

　もうさよならだ。

　ルーシーは立ちあがり、背もたれにしていた麻あさ袋ぶくろを持った。いちおう吊つり紐ひもを二本縫ぬいつけてあるので、肩かたに掛かけたり、背負ったりできる。この街はすこぶる治安が悪いという噂うわさだ。両手を自由にしておいたほうがいいだろう。ルーシーは麻袋を背負って馬車から降りた。

　御者が馬車の扉を閉めた。

　馬車が走り去ると、別の馬車が突つっこんできた。とっさに横っ跳とびして逃のがれなければ、間違いなく轢ひかれていた。轢れき死しせずにすんだのはいいが、道路に倒たおれこんでしまった。起きあがろうとしたら、通りすがりの人に蹴け飛とばされた。

「邪じや魔まだボケ」

「す、すみません……！」

　転がるようにして立ちあがり、きょろきょろあたりを見まわしているうちに、後ろから突き飛ばされた。

「どけ！　カス！」

「あうっ」

「何だぁ？　このゴミ！」

「やっ」

「どきやがれ！　こちとら急いでんだ！」

「うゅ」

「死ね！」

「ひぁ」

　突き倒されたり、撥はね飛ばされたり、蹴転ばされたりするたびに、舗ほ装そうされた道路にぶつかってバケツが鳴った。バケツの内側に留めた紐を顎あごに引っかけて、いちおう固定できる仕し掛かけになっている。そのせいで、脱ぬげてしまうことはなかったが、少しずれた。これでは前が見えない。直そうとしている間に、また殴なぐられたのか、蹴られたのか。何がなんだかわからない。

たまらなくなって闇やみ雲くもに駆かけだすと、誰かに怒鳴られた。

「どけ、どけ、どけ！　死にてえのか！」

　馬車の前に飛びだしてしまったのかもしれない。慌あわてて踵きびすを返すと、何かに衝しよう突とつしてよろめいてまた何かにぶつかった。飛び交かう怒ど号ごうに追い立てられて必死に走った。むやみに謝りながらバケツの位置を調整した。なんとか前だけは見えるようになった。細い路地があった。全速力で飛びこんで、しゃがみこんだ。それでもつらくて、四よつん這ばいの姿勢になった。

　息が苦しい。身体からだのあちこちが痛くて、涙なみだが出てきた。

　ここが、エルデン。

　こんな街に父がいるというのだろうか。

　もしいるのなら、今すぐ会いたい。会って、強く抱きしめてもらいたい。

　捜さがさないと。

　父を捜すために、遠くシー・シリーから、はるばるこのエルデンまでやってきたのだ。

　でも、捜せるだろうか。

　弱気の虫を追い払はらおうとして、首を横に振ふった。

　立ちあがって、自分の恰かつ好こうを確かめてみた。

　旅の途と中ちゆうに買った雨あま合がつ羽ぱは、最初、真っ白だったのに、今はもう見る影かげもない。何度か手洗いしたのだが、黄ばみや染しみは落ちなかった。雨合羽の下は肌はだ着ぎだけだ。靴くつ下したは穴があいているし、靴も靴底が剝はがれかけている。雨合羽のポケットには、フォークが一本。何かのときに役立つはずだと思って入れてあるのだが、いったい何の役に立つのだろう。少なくとも、護身用としては心こころ許もとない。家から持ちだしたナイフは、刃はこぼれしたり錆さびたりして使い物にならなくなったので、捨ててしまった。ちゃんと研とげばまだ使えたかも

しれない。捨てなければよかった。

　身につけているものは、これですべてだ。

「……れ？」

　おかしい。何か足りないような気がする。違ちがう。気がする、ではない。

　麻袋がない。

　ないはずがない。馬車から降りる前に背負ったはずだ。間違いない。ちゃんと覚えている。あのときはあった。いつだろう。いつからないのか。わからない。きっと、突き飛ばされたり蹴け倒たおされたりして転がっている間に、吊り紐が外れてしまったのだろう。麻袋の中には、肌着の替かえや、金もいくらか入っている。それから、母の遺い髪はつを入れた小箱と、母の日記。父に会うことができたら渡わたすつもりだった。言うまでもなく、とても大事なものだ。父の前に、まず麻袋を捜さないと。

　引き返して、路地から顔だけ出してみた。

　門のそばだからだろうか。すごい人通りの多さだ。しかも、誰だれも彼も殺気立っている。それとも、あんな目に遭あったから、そう見えるだけなのだろうか。

　勇気をふりしぼって往来を突っ切り、馬車から降りたあたりまで行ってみた。何もない。というか、場所はここであっているのだろうか。首をひねっていたら、馬車がものすごい速度で走ってきた。なんとかよけて、そのへんを駆けずり回りながら麻袋を捜したが、一向に見あたらない。

　ひょっとしたら、誰かが持ち去ったのかもしれない。もしそうだとしたら、これだけ人が大勢いる街だ。麻袋はもう見つからないかもしれない。それは困る。とても困るが、どうすればいいのか。わからない。さっぱり、わからない。

　とぼとぼ歩いていたら、気がつくと人波に押し流されていた。むしろ翻ほん弄ろうされた。

　ここはどこだろう。どこへ向かっているのだろう。どこに流れつくのだろう。

疲つかれ果てて道みち端ばたに座りこんだ。あたりを見まわすと、ルーシーみたいに地べたに腰こしを下ろしている人が何人もいた。寝ねそべっている人さえいる。生きているのだろうか。確かめる度胸はなかった。

起きあがって、また歩きだした。すぐに雑ざつ踏とうにのみこまれた。目が回ってきた。なんだかもう自分が誰なのかもよくわからない。そんなはずがない。でも、歩いているこの足は自分のものなのだろうか。バケツの穴から見える街並みは、現実ではなくて、誰かの空想や夢を描えがいた絵みたいだ。

だいぶ日が傾かたむいている。

エルデンについたのは昼すぎだ。あれからどれくらいたったのだろう。

このあたりは妙みようにごちゃごちゃしている。道は細かったり太かったりして一定ではなく、やたらと入り組んでいて、迷路のようだ。びっしりと建ち並んでいる新しい建物と古い建物は、場所とり合戦でもしているのだろうか。道があって、建物があるのではない。建物のない場所を、人々が道として利用している。そんな印象だ。

それにしても、けばけばしい外装の建物が目立つ。看板らしきものも多い。何かの店なのだろうか。もっとも、商店街という雰ふん囲い気きではない。さっきまで、と言っても、さっきとはいつのことなのか定さだかではないが、いっときと比べれば、人通りは少ない気がする。

ただ、変わった服装の人、とくに女性が目につく。

具体的に言えば、たとえばある女性は、毛皮のコートを羽織っているのだが、その下にちゃんと服を着ていない。下着姿だ。

他ほかにも、黒いてかてかした布地の非常に短い短パンとぴたぴたの胸当てを着けて、すけすけの上着を肩にかけている女性がいた。彼女は黒い編み上げ靴を履はいて、黒くろ眼鏡めがねをかけ、黒い帽ぼう子しをかぶって、腰に鞭むちを提さげていた。ちょっと怖こわかった。

ふわふわした髪かみの毛の、やはり思いきり肌を露ろ出しゆつし

ている女性は、通りすがりにルーシーのバケツを人差し指で弾はじいていった。びっくりして、あふ、と声を出すと、彼女は甲かん高だかい声をあげて笑った。

　たまらなくなって、人のいないほうへ、いないほうへと歩いてゆくと、悲鳴のようなものが聞こえた。この先の路地からだ。悲鳴は女性のものらしい。何やら男の声もする。

　そこまで行って、のぞきこんでみた。

　息をのんで、一いつ瞬しゅんのうちに硬こう直ちょくしてしまった身体を無理やり引っこめた。

　大変だ。大変な場面を目もく撃げきしてしまった。息が。胸が。どうしよう。どうすれば。女の人が。また悲鳴が。やめて。お願い。助けて。男の人がいた。何人もいた。うるせえぞ。やめて。いいかげん観念しろよ。そうそう。あきらめが肝かん心じんだぜ。楽しめよ。そのほうが楽だぜ。俺らだってなあ。いやそうとも言えねえけどな。やめて。いや。やめて。どうしよう。息ができない。膝ひざが震ふるえている。歯の根があわない。どうしよう。

　もう一度、顔を出してみた。

　男の人は三人だ。女の人は一人。たった一人の女の人を、男の人が三人がかりで押さえつけて、衣服を剝ぎとり、のしかかって、何か乱暴なことを、とてもひどいことをしようとしている。男の人たちはルーシーに気づかない。夢中なのだろうか。そうかもしれない。どうしよう。ああ、どうしよう。あの人。あの男の人。三人のうちの一人だ。

　麻あさ袋ぶくろだ。

　ルーシーの麻袋を背負っている。

　どうして。どこかで拾ったのだろうか。それとも、ルーシーを突き飛ばした人たちの中に、あの男の人がいたのか。どさくさにまぎれて、あの男の人がルーシーから麻袋を奪うばったのかもしれない。そうして、今はあの女の人を乱暴しようとしている。悪い人だ。なんて悪い人だろう。でも、だけど、どうすれば。

　ポケットに手を突っこんで、フォークを握にぎりしめた。ダメだ。こんなものでは。それに、手に力が入らない。

「やめて、お金、払うから、ぜんぶ、あげるから、やめて」

「アホウ。金なんか、もちろんぜんぶいただくに決まってんだろうが。それとこれとはなあ、まったく別問題なんだよ」

「おら、しゃぶれ」

「バーカやめとけって噛かみちぎられちまうぞゲヘヘヘヘ」

「経験者は語るってか」

「おうよ、つなげてもらうのにぼったくられて──って何言わせんだよグァハハハ」

　動けない。以前、一度だけ金かな縛しばりにあったことがある。あのときと一いつ緒しよだ。いくら動けと念じても、身体からだが言うことを聞かない。ぴくりともしない。

　女の人が顔を上げて、こちらを見た。

　助けを求めようとしたのかもしれない。

　その前に、一人の男の人が笑いながら女の人の頭を地面に押しつけた。とても痛そうな音がした。ルーシーは目をつぶった。すぐに開けた。目をつぶったり開けたりできるということは、身体だって動くはずだ。女の人の代わりに、誰だれかに助けを求めようとして首をめぐらせた。愕がく然ぜんとした。

　ルーシーのそばを、つまり、路地の入口の前を行き交かう人はいるのだ。必ずしも、彼らが男の人たちの凶きよう行こうに気づいていないわけでもない。通りすがりに、ちらりと路地のほうへ目をやる者もいた。何が行われているか、行われつつあるか知っていて、無視している。誰も女の人に救いの手をさしのべようとしないのだ。

　都会の人は心がつめたい、と聞いたことがある。本当だった。

　でも、果たして、心がつめたいのは都会の人だけなのだろうか。

　シー・シリーでも、アシェローンはブラーニーに差別されていた。母やルーシーがいくら困っていても、同情してくれたり、援えん助じよしてくれたりするブラーニーは一人もいなかった。

同じ人間なのに。

違う。そうではないのだ。

ブラーニーはアシェローンを自分たちと同じ人間だとは見なしていなかった。病気持ちの、忌いまわしい、呪のろわれた者たち。不幸だが、自じ業ごう自得だ。強ごう欲よくで、頑がん迷めいで、偏へん狭きようだから、死病にとりつかれた。そして、ついに滅ほろびた。ブラーニーはほくそ笑んでいるだろう。呪われた村の半分は一度焼き払われて、ブラーニーたちが耕しなおすだろう。

行き交う人々はブラーニーだ。

あの女の人はアシェローンだ。

油断しているからさ。襲おそわれて、あんなざまに。しょうがないね。関かかわらないほうがいい。とばっちりを食いたくないしね。知らんぷりだ。そうだね。それが一番だよ。

ルーシーはうつむいた。

立ち去ろうとした。

そのほうがいい。

どうせ自分にできることはない。

一歩あとずさった。

泣きたくなった。

父が旅立つ間ま際ぎわに、泣いてしまったことがある。

父はルーシーの頰ほおに熱い唇くちびるで口づけをして、涙を吸ってくれた。

ルーシー。愛いとしいお前の涙はぜんぶ俺のものだよ。お前が止めどもなく星の雫しずくみたいな涙を流すのなら、俺がすべて飲み干してやろう。でもね。俺がいないところで泣いちゃいけない。愛らしいお前の涙を誰にも見せては駄だ目めだ。泣くなら俺の胸で泣くがいいよ、ルーシー。一人では泣いちゃいけない。だって、狂くるおしいほど愛おしいお前のことを、この俺が慰なぐさめてやれな

いだろう？

　そうだ。一人で泣いてはいけない。

　あの女の人はアシェローンだ。

　ルーシーは？

　ブラーニーではない。アシェローンだ。

　見捨てることはできない。でも、いったいどうすれば。

　突とつ然ぜん、空気が変わった。

　声だろうか。物音か。雰ふん囲い気きだろうか。とにかく、空気が変わったのだ。一変した。最初は漠ばく然ぜんとそう感じられただけだった。すぐにもっとはっきりした形でそれは現れた。

「番人」

「番人だ」

「──銀の軍団ザ・シルバリイ」

「死神！」

「総長直々だぞ、おい……！」

　もともとルーシーが歩いてきた方向だ。

　傾かたむきかけた陽ひの光を浴びて、彼らは橙だいだい色いろに輝かがやいていた。

　立派な鎧よろいを身につけて、剣けんを佩はき、先頭の一人だけは素す顔がおをさらしていたが、他の二人は兜かぶとをかぶっている。

　たった三人だ。それなのに、王様か偉えらい将軍に率いられた軍隊のように、威い風ふう堂々あたりを圧している。

　誰も彼もが彼らに道を譲ゆずった。

　彼らの姿を目にした瞬しゅん間かん、脱だつ兎とのごとく走り去

る者さえいた。

　ざわめいているのに、不思議と静かだ。

　彼らの足どりは悠ゆう然ぜんとしている。それでいて、やけに速い。

　あっという間だった。気がつくと、彼らはルーシーの目の前にいた。

　素顔をさらしている男の人は、何というか、恐おそろしい。背せ丈たけはルーシーの父よりも低いし、恰かつ幅ぷくがいいわけでもないのだが、ものすごい威い圧あつ感かんだ。目も髪の毛も黒くて、顔には傷きず跡あとがある。右頰と、左の眉まゆ尻じり、それから顎だ。左手に持っている長い、長大な物は、いわゆるモトロール刀だろう。こんなに長い刀を持ち歩いている人を見たのは初めてだ。そのうえ、もう一本、腰に提さげているのだ。とてつもなく鋭するどい目は、その刀の斬きれ味を想像させる。まるで獲え物ものを狙ねらう鷹たかのようだ。

　死神。

　誰だれかが言っていた。この人が死神に違ちがいない。

　死神はルーシーをにらみつけて震えあがらせてから、路地に目を転じた。

　男の人たちは、そのときになってようやく気づいたらしい。もう遅おそかった。

　一人が振ふり向いて、何か呻うめき声のようなものをもらしながら、両眼を見開いた。死神が抜ぬき放った刀は、頭頂部からその右眼と左眼の間に達して、まだ止まらなかった。顎あごの下までやすやすと斬り裂さき、そこで死神は刀を手て許もとに引きよせた。そうかと思ったら、別の男の人の首が宙に舞まった。間かん髪はつを容いれず、最後の男の人の身体からだが、右みぎ肩かたと左の脇わき腹ばらを結ぶ直線でまっぷたつになった。

　死神も、男の人たちに乱暴されかけていた女の人も、路地も、血みどろだ。

　もちろん、男の人たちは息絶えている。いや、身体を二つにされ

た男の人だけはかろうじて息があるようだが、時間の問題だろう。指先や目や唇や鼻をぴくぴくさせて、もう動かなくなってしまった。死んだ。殺されたのだ。

「総長」

　鎧兜を身にまとった人が死神に駆かけより、なかばひざまずいて白い布を差しだした。

　死神はうなずきもせずに受けとった布で刀をぬぐい、鞘さやに収めた。

「女」

　低い、押し殺したような声だった。獣けものが獣を威い嚇かくするときの唸うなり声にも似ていた。

　女の人はびくっとして、返事をしようとしたようだが、声は出なかった。

　死神はかまわず言い放った。

「悪なれば即すなわちこれを斬り、根絶やしにする。それが我らの義だが、腐くさったこの街には蛆うじのごとく悪が湧わく。己おのが身は己おのれで守れ。一いつ矢しを報むくいんとする心構えなくば、悪は貴様を蝕むしばまんとするだろう。決して悪を赦ゆるすな。悪は必ず滅びねばならんのだ」

　か、

　か──、

　かっこいい。

　ちょっぴり難しい言い回しが多くて、少し意味がわかりづらい箇か所しよもあったが、ようするに、死神は悪いやつらをやっつける正義の味方なのだろう。

　この国には、王様はいるのに、法律もなく、悪事を取り締しまる役人もいない。それでも、正義があるのだ。少なくとも、正義を実現するために活動している人がいる。

遠くにかすかな希望の灯ひが見えた。そんな気分だった。

こちらに向きなおった死神に、せめて、ありがとう、の一言くらいは伝えたかった。ルーシーは口を開こうとした。声が出なかった。女の人と同じだった。ダメだ。無理だ。とても声なんて出せっこない。

眼だ。

死神の両眼は底のない井い戸どのようだった。おそらくその先は、闇やみしかない世界に通じているのだ。死んでしまった者たちはその世界に導かれて、闇そのものとなる。

そうして生まれた闇の世界は、いわば死のかたまりだ。死神自体が死につながっている。きっと異名なのだろうが、大おお袈げ裟さではない。死神はまさしく死神なのだ。

ルーシーが凍こおりついている間に、死神は二人の仲間を従えて去っていった。女の人も、破れた衣類をかき集めてなんとか胸や腰を隠かくし、走っていってしまった。いくらかいた野や次じ馬うまの姿も見えなくなった。

あとには、ルーシーと、男の人たちの死体と、おびただしい血だけが残された。

我に返ると、ひどくなまぐさいし、あまりにも凄せい惨さんすぎる光景だ。

ルーシーはできるだけ目をそむけ、鼻で息をしないようにしながら、首がない男の人の死体から麻あさ袋ぶくろを回収した。血で汚よごれているどころの騒さわぎではない。ぐちょぐちょになっている。中の状態を想像してやるせなくなったが、路地を離はなれて確かめてみると、思ったより被ひ害がいは小さかった。肌着が赤黒く汚れているだけで、他ほかの物は平気そうだ。ただ、この麻袋を持って歩く気にはなれないし、金も入っていなかった。男の人が自分の懐ふところに入れたのだろうか。

気乗りしなかったが、金がないと困る。ルーシーは汚れの少ない肌着で小箱と日記をくるみ、小こ脇わきに抱かかえた。そうして自分を叱しつ咤た激げき励れいしつつ路地に戻もどってみたところ、どういうわけか、死体はぜんぶ素す裸はだかになっていた。血肉に

たかっている黒っぽい虫は、たぶん脂羽蟲ゴキだろう。餌えさが豊富なのか、ずいぶん大きい。吐はき気を催もよおしたが、どうにかこらえて踵きびすを返した。

　歩きだしてはみたものの、あてがあるわけでもない。旅の疲つかれもある。それに、今け朝さから何も食べていない。そうだ。

　ルーシーはすってんてんなのだ。どれだけ空腹でも、食べ物を買うことができない。

　日暮れが迫せまりつつあった。

　ルーシーは我知らず道みち端ばたに座りこんでいた。

　こんなときは母の日記を読めば元気が出る。そう思いはしても、日記を手にとるのも億おつ劫くうだ。とっくに慣れたはずのバケツがやけに重く感じられて、邪じや魔まくさい。いい。もういらない。とってしまえ。

　バケツを脱ぬいで地面に置き、ぼうっとしていた。

　うつらうつらしていると、何か硬かたいものが硬いものにぶつかる音がした。

　バケツの中をのぞきこむと、一ダラー硬こう貨かが一枚入っていた。あれは硬貨がバケツの中に落ちたときの音だったのだろう。それはわかるが、どうして硬貨が。

　考えこんでいたら、身なりのいい通りがかりの男の人が、さりげない仕し種ぐさで一ダラー硬貨をバケツの中に投げこんでいった。ようやく合点がいった。

　いわゆる、施ほどこし、というやつだ。ルーシーは見も知らない人に金を恵めぐんでもらったのだ。大きな街では、襤ボ褸ロをまとった老ろう若にやく男なん女によが街頭に立ったり座ったり、あるいは通行人に駆けよっていったりして金品をせびっている光景をよく見かける。貧しく、仕事も見つからず、自力で金を稼かせぐことができなければ、そのように物もの乞ごいをして食いつなぐしかないのだ。それはそれで仕方のないことだ。自分だって、にっちもさっちもゆかなくなったら、そうするだろう。父に会うため、それまで生き抜くためには、手段を選ばないだろう。

　覚かく悟ごはしていたはずなのに、悲しくなってきた。同時に、捨て鉢ばちになりかけている自分にも気づいていた。

　もういい。それなら、ここでバケツを置いたままじっとしていよう。お金がたまったら、ご飯を食べよう。お腹なかがいっぱいになったら、父を捜さがそう。お金がなくなったら、またバケツを置いて座っていればいい。

　バケツの底だけを見つめていた。

　誰だれか恵んでください。お願いです。一ダラーでいいからください。

　お金をください。

「よお」

　顔を上げると、ルーシーの目の前で二人連れの男の人が腰こしを屈かがめていた。

　一人は、寒くもないのに、赤と黒のマフラーを首に巻いている。黒い髪かみの毛はだいぶ長くて、頭の後ろで一本に束ねられていた。左目の下に逆三角形の刺青いれずみがある。もう一人のほうも、同じ刺青をしていた。こちらは禿とく頭とうで、かなり太っているだけでなく、上背もある。額と頰に挟はさまれて埋うまりかけている細い眼まなこが、妙みようにつめたい光をたたえているのが印象的だった。

　マフラーの人が顎を撫なでながら色の悪い唇の両りよう端たんをつりあげた。

「うぅぅ～ん。やっぱ俺っちの勘かんバァーッチリ。ンだべ？」

「まあまあやな」

　太った人がずるずる洟はなをすすった。

「まあ悪うはないな」

「だべよ。いやでもかなりアレだべ。実際、磨みがけば光る的な？　要素あんじゃね？　あんべよ。おめえ、がっつりガン見してみ」

「たしかに悪うはないけどな。そんなゆうほどのもんでもあらへんやろ」

「おめえはあれだべよ。俺っちが上玉みっけたもんでそったらこと言うんだべよ。そういう根こん性じよう直せや。おめえ俺っちとコンビだべ。ペアだべや。俺っちの手て柄がらは半分おめえの手柄にもなるんだで。おめえのも半分俺っちのだけどな」

「どぉーも納なつ得とくでけへんけど、まあええわ。今回は認めたってもええ。悪ないな」

　ずいぶん訛なまっているが、意味はだいたいわかる。ただ、悪くないとか、上玉だとか、手柄とか、この人たちは何について話しているのだろう。そこのところがどうもよくわからない。

「あの──」

　わからなければ、訊きけばいい。

　そうしようとしたら、太った人に襟えり首くびをつかまれて、持ちあげられた。

　雨合羽が首の前側に食いこんで、ひどく息苦しい。

　太った人の顔がすぐ近くにある。

　分厚い唇の横に何かついていた。食べかすだろうか。太った人はルーシーの視線でそのことに気づいたのか、食べかすを舌で舐なめとって食べてしまった。

「たしかに、よう見たらほんま悪ないわ」

「んだべ。ヤッパ俺っちの目に狂いはねえべよ。この餓が鬼き、めかしこませたら、かンなりめんこいで」

「なんや、だんだんやりたぁなってきたわ」

「おめ、こんなとこでおっ勃たたせんなや。つーか傷物にしちまったら意味ねえべよ」

「わかってるわ。そないなことくらい、わしかてな。生理現象や。しゃあないやろ」

「まあ、我が慢まんできてるうちに行くべか」

「せやな」

　太った人はまたずるずる洟はなをすすると、ルーシーをひょいと肩かたにかつぎあげた。まるで荷物になったような気分だ。言うまでもなくルーシーは荷物ではない。これは不当な扱あつかいだ。

　抗こう議ぎしようとしたら、喉のど元もとに何かつめたいものがふれた。見ると、マフラーの人が右手に持っている何かを突つきつけていた。

　刃は物ものだ。

「やかましいからよ。騒ぐんじゃねえぞ。ちょっとじっとしてろ。悪いようにはしねえからな。つーか、どうなっても死ぬよりはマシだべや」

「し、死ぬ……？」

「喋しやべんなって」

　刃物が、ぴし、と皮ひ膚ふを破る感かん触しよくがあった。傷は浅いだろう。血もたいして出ていないに違いないが、身体からだが硬こう直ちよくしてしまった。

　太った人はルーシーをかついだまま歩きだした。刃物は首にあてられたままだ。ルーシーはどこかへ運ばれようとしている。

　当然、自分の意志ではない。いやだ。逃にげたい。でも、抵てい抗こうしたら。ダメだ。声をあげることすらできない。それに、助けを求めても、どうせ無む駄だだ。通りすがりの人たちは、何が起きているかちゃんとわかっている。そっぽを向いている人や、さっと目をそらす人もいるが、そうではない人もいるのだ。こちらを見て、あーあ、という顔をする人もいるし、気の毒そうな表情を浮うかべる人もいる。何がおもしろいのか、くすりと笑う人もいる。ただ、それだけだ。誰も、何もしようとしない。みんな関かかわりたくないのだ。

　しょうがないことなのかもしれない。考えてみれば、ルーシーも同じだ。

　ルーシーだって、あの女の人を助けたいと思いはしても、結局、何もできなかった。たまたま死神たちが現れなければ、女の人はあのまま男の人たちに乱暴されて、殺されてしまっていたかもしれない。ルーシーは、どうにかしたい、しなきゃ、と心の中で唱えながら、最後まで見ていることしかできなかったかもしれない。いや、おそらくそうだろう。

　死神がまたきてくれれば。

　果たして、そんな幸運があるだろうか。

　ない。

　少なくとも、信じる気にはなれない。

　己おのが身は己おのれで守れ、と死神は女の人に言った。自分でなんとかするしかないのだ。

　でも、動いたら、声を出したら、この刃物が皮膚を斬きり裂いて、血管を傷つけ、たくさん血が出て、ルーシーは死ぬかもしれない。死んでしまう。自分はここで死ぬのだろうか。いやだ。死ぬなんて。死にたくない。まだ死ぬわけにはゆかないのだ。父に会いたい。父に。お父さん。お母さんのことを報しらせないと。会いたい。会いたいよう。やだ。死にたくない死にたくない死にたくない。そのためには、どうすれば？　死なないためには。そのためには。

　簡単だ。

　殺せばいい。

　殺してしまえ。

　殺やれ。

　心臓が飛び跳はねるように大きな脈を打った。ルーシーは乾かわいた唇くちびるを舌先で舐めた。手をのばそうとした。

「ねえ、そこのクモソウ野フ郎オ約二名」

　太った人の声ではなかった。マフラーの人の声でもない。

二人は足を止めて振り向いた。

もちろん、太った人の肩の上にいるルーシーも後ろを見ることができた。

その人は鮮あざやかな赤と黒のぴったりした服を着て、同じ意い匠しようの外がい套とうを羽織っていた。

背は大きくないだろう。太った人はもちろん、マフラーの人よりも背せ丈たけが低い。上背だけではなく、横よこ幅はばもない。華きや奢しやといってもいいくらいだ。

外套に付いたフードをかぶっているので、顔はよくわからないが、女の人だろうか。

そういえば、声も男の人のものではなかったような気がする。

「何だ、おめえ」

マフラーの人が首をひねった。苛いら立だちに、戸と惑まどいが混じっている。太った人は無言だ。何を考えているのか、その細い眼めからうかがい知ることはできない。

「あー……」

赤と黒の人は右手で額を押さえてため息をついた。

「声かけちゃった。放ほっとこうと思ってたのに。見て見ぬふりするつもりだったのに。関係ないし。ああ、でも、しょうがないよね。こうなったら、もう……」

「何ぶつぶつ言ってんだ、おめ。つーか、そっちから呼び止めといて何なんだよ、その態度。もっとこう、あるべよ。普ふ通つう。つーかだいたい、クモソウ野フ郎オとか呼ばなかったか、おめ」

「呼んだよ」

赤と黒の人はすっと手を下ろした。その行く先をまるで想像させない、なめらかで自然な手つきだった。

「だって、きみたちってば、どこからどう見てもクモソウ野フ郎オ以外の何者でもないじゃないか。他ほかにふさわしい呼び方がある

なら、是ぜ非ひ教えてもらいたいね。無理だろうけど。いかにもボキャブラリーが貧ひん困こんに喘あえいでそうだし。あ、こんな言い方してもちょっとわからないかな。ようするに、頭が悪そうで、人として生きてく上で必要最低限の知識もなさそうってことね」

「おめえ、この……！」

　マフラーの人が赤と黒の人に突っこんでゆこうとした。必然的に、ルーシーを脅おびやかしていた刃物はなくなったわけだが、身動きがとれなかった。それどころではなかった。

　赤と黒の人は、美しい声で毒をふくんだ言葉の数々を紡つむぎながら、右手を左ひだり腰ごしに、左手を右腰に回していたのだ。

　マフラーの人が踏ふみだした途と端たん、赤と黒の人は腰から剣けんを抜きはなった。ほぼ同時だったが、右手のほうがわずかに早かっただろうか。

　その右手には刃は渡わたり五、六十サンチ程度の小こ振ぶりな剣が握にぎられていた。

　左手の剣はもっと短い。たぶん三十サンチくらいだろう。短剣と呼ぶべきかもしれない。

　赤と黒の人は、右手の剣でマフラーの人の右手首をすぱっと斬って、左ひだり斜ななめ前に踏みこんだ。そのときにはもう、マフラーの人の脇腹に短剣が突き刺さっていた。しかも、それで終わりではなかった。赤と黒の人は短剣を抜きながらさらに前進して、前のめりになったマフラーの人の後頭部と首の境目に右足の後ろ蹴げりを叩たたきこんだ。マフラーの人はつんのめった。

　次の瞬しゅん間かん、かしゃんかしゃん、と硬いものが地面に落ちる音がした。

　剣だ。

　赤と黒の人は剣を二本とも手放していた。

　かわりに、腰から抜いた棒状の物体を両手で持って、その先せん端たんを太った人の左眼に突きつけていた。

　あれは何だろう。最初は棒のような形だと思ったが、よく見ると

真ん中あたりが少しふくらんでいて、それより後ろの部分が下方に曲がっている。赤と黒の人はふくらんでいる部分を左手で支えて、曲がっている部分を右手で握っていた。

　左手がふくらんでいる部分を回転させながら引き下げると、かちゃ、と何かが噛かみあうような音がした。

　曲がっている部分の根元から突きだした金具に、右手の人差し指がかかっている。

　物体の先からは、何か鋭するどく尖とがった金属製のものがのぞいていた。

「一応、きみが天下一の大おお間ま抜ぬけでもわかってもらえるように説明しておくと」

　赤と黒の人は、すっと目をすぼめた。

　見たこともないような、美しい、色いろ鮮あざやかな橙だいだい色いろの瞳ひとみだ。

「あいにく、見たとおり怪かい力りき無む双そうって柄がらじゃないからさ。きみみたいなでかい野や郎ろうをさくっとしとめるのは、それなりに大変なんだよ。脂し肪ぼうもかなり多そうだしね。でも、これなら絶対に外さない。けっこう高かったしね。小さいけど、威い力りよくはあるよ。眼球を貫つらぬいて確実に脳みそまで届くから。つまり、死ぬってことね。ここまではわかった？」

　太った人が顎あごの肉を揺ゆらしてうなずくと、赤と黒の人は軽く首を傾かたむけてみせた。

「じゃあ、その子を下ろして。さあ。早く。のろのろしたら撃うつよ。きみが生きようと死のうと、こっちにとってはどうでもいいんだ。それだけは忘れないほうがいいよ。他ほかの誰だれでもない。きみ自身のためにね」

　太った人は慌あわてた様子でルーシーを地面に下ろした。

　その間もずっと、赤と黒の人は太った人の左眼に狙ねらいをつけていた。太った人の動きにあわせて例の物体を動かし、まばたきさえしなかった。

　太った人がゆっくりあとずさりすると、マフラーの人が低く唸うなりながら起きあがろうとして、また倒たおれ伏ふした。

　赤と黒の人は顎をしゃくってマフラーの人を示した。

「仲間なんでしょ。連れてってあげたら？　急いで治ち療りようすれば、死ぬような傷じゃないよ」

　もはや太った人は赤と黒の人の下僕同然だった。言われるままにマフラーの人をかつぎあげ、いつの間にか周りにできていた人ひと垣がきを押しわけてゆこうとしたが、突とつ然ぜん、忘れ物でもしたかのように足を止めて振ふり向いた。

「じ、じ、じ、お前ジブン……」

　太った人の顔は、赤いとも青いとも言いがたい色に変わっていた。その中間、紫むらさき色いろが一番近いかもしれない。

「お、覚えとれよ。こ、こ、ここないなことしてなあ。た、た、ただですむと思たら、お、おお、大おお間ま違ちがいやで」

　震ふるえる声で、脅きよう迫はくのつもりなのだろうか。

　赤と黒の人は平然としている。まだ例の物体の先端を太った人に向けているが、何かしようとする気配はない。それで調子に乗ったのだろう。

「わ、わ、忘れへんからなあ、お前ジブンのツラ。後こう悔かいするで。わしら脅威のメナス・三角デルタっちゅうたらなあ、その筋ではちょっとしたもんなんやからなあ」

　太った人は、へっ、へっ、へっ、と笑った。

　赤と黒の人が右手の人差し指を一度、金具から外して、そっとそえなおした。表情は同じだが、何かが変わった。何か、としか言えない。太った人は気づいていないのか。

「よう見たら、えらいかわいいやんかお前ジブン、げっへへへへ。いつかお前ジブンの×××にわしの×××突っこんでやなあ、ついでに×××にもなあ、××××してなあ、げっへへへへへへ、ほんでなあ、そのかわいらしいツラァええかんじでゆがむまで──」

赤と黒の人がとうとう人差し指に力をこめようとした。その寸前だった。

太った人が凍こおりついたように口を閉じた。

その人はいつ現れたのだろう。わからない。過程はまったく見えなかった。気がついたら、そこにいた。太った人の前に立って、右手に持った短たん剣けんの先をその喉のど元もとに突き立てていた。ほんの少しだけだが、間違いなく剣先が太った人の喉に刺さって、血も出ていた。

「聞くに堪たえない、汚けがれを知らないボクのマリアに聞かせるわけにはゆかない、醜しゆう悪あくきわまりない言葉をそれ以上垂れ流すつもりなら、今すぐ喋ることも聞くことも動くこともできないようにしてやろう。黙だまって二度とボクの前に、そしてボクのマリアの前に姿を現さないと誓ちかうなら、命まではとらない。キミのような汚らわしい下げ衆すでも、すぐには殺さなかったマリアの寛かん大だいさと慈じ悲ひに免めんじてネ」

その人は黒ずくめだった。髪の毛は漆しつ黒こくだった。着ている服も真っ黒だった。

背はそれほど高くないし、ほっそりしているのに、この圧あつ倒とう的な存在感は何だろう。

ルーシーの肌はだを凍いてつかせているのは、月のない完全な闇やみに閉とざされた真冬の夜に吹ふく風だ。それに類するものだ。

人垣のほうから何か聞こえてきた。誰かの、人々の、呆ぼう然ぜんとしながらも恐おそれおののいているような、囁ささやきかわす、あるいは呟つぶやく声だ。

「アジアン」

「アジアンだ」

「虐殺人形カーネイジドール」

「アジアン」

それが黒ずくめの人の名前なのか。

　太った人は細い眼を無理やりというかんじで見開いた。

「た、た、た……助けて」

「ボクはキミごときのために同じことを二度も言わないといけないのかい？」

　アジアンというのが名前らしい黒ずくめの人は、かすかに笑ったようだ。

「即そつ刻こく立ち去れ。もし再会することがあったら、そのときキミの命運は尽つきる。そうならないように祈いのりながら、せいぜい逃げまわって暮らすといいヨ」

「ヒアァッ！」

　太った人は今度こそ人垣を押しのけて駆かけ去っていった。

　アジアンは太った人の後ろ姿が見えなくなると、短剣をしまって視線で人垣を蹴け散ちらしながら振り向いた。

「やあ、マリア」

　笑え顔がおだ。

　さっきまであたりに吹き荒あれていた氷点下の風はどこへ行ってしまったのだろう。晴れやかで、華はなやかで、それでいて凛りんとしている、惚ほれ惚ぼれするような笑顔だ。

　表情のみならず、薄うす青あお色の瞳が宝石のような輝かがやきを発していて、恐ろしく顔立ちが整っている、とてつもない美男子だ。

　でも、マリアとは誰だれのことだろう。そういえば、アジアンは先ほどもその名を口にしていた。マリア。もしかして、赤と黒の人の名前なのだろうか。

　見れば、赤と黒の人は、目を半開きにして唇を波形にゆがめ、例の物体を構えた姿勢のまま身体からだを硬直させていた。

「フッ」

　アジアンは前まえ髪がみをかきあげた。

「奇き遇ぐうだネ、マリア。ボクのマリア。たまたまこの近くを通りかかったら、偶ぐう然ぜんこんなことになっていたものだからネ。何も、この上なく麗うるわしいキミがその清らかな手を汚す必要はないと思って、つい出しゃばってしまったという次し第だいなのサ」

　やはりマリアというのが赤と黒の人の名前なのだろう。

　マリアは大きな、途と方ほうもなく大きなため息をつくと、例の物体を腰こしに戻もどして二本の剣を拾いあげた。

　アジアンはまだ滔とう々とうと、何か酒にでも酔よっているかのような調子で、身み振ぶり手振りを交えつつ喋りつづけている。

「でも、どうか誤解だけはしないでほしい。決してキミのことを陰かげからひっそりと愛ゆえに胸いっぱいの愛をこめて見守っていたわけじゃないヨ、マイスウィーテスト？　これは偶然、言い換かえれば、天の配はい剤ざい、つまりは運命、そう！　何ものかが、人じん智ちを超ちよう越えつした大いなる意志のようなものが、ボクらを結びつけようとしている、その過程でやむなく生じてしまった、これは偶然を装よそおった必然と言うべきなのかもしれないネ？」

　そんなはずはないと思うが、アジアンの台詞せりふはマリアの耳に届いていないのかもしれない。マリアは剣の刃はを布で丁てい寧ねいにぬぐって鞘さやに収め、ルーシーを見た。

「平気？」

「……あ、はい」

「そ。よかったね」

「というわけだからマリア、マリア、マリアマリアマリア、もう理解してくれていると思うけど、あえて言わせてもらいたい！　いや、誰が何と言おうと、ボクは声を大にして言わずにはいられないのサ！」

　アジアンは感極きわまって涙なみださえ流しそうな勢いだ。

　ルーシーは、放ほうっておいていいのでしょうか、という気持ちで、アジアンにちらりと視線を投げかけてみた。

　マリアはアジアンにはーいち瞥べつも与あたえなかった。

「行きがかりっていうか、たまたまっていうか、こういう形になっちゃったけど、生きてるといいことばっかりじゃないからさ。気をつけたほうがいいんじゃない」

「そ、そう……ですよね」

「マリア！　キミに伝えたい！　この愛を！　キミの胸に届いて響ひびき渡わたっているはずだヨ、この愛の旋せん律りつは！」

「じゃ、ばいばい」

「あ、あの」

「何？」

「マリア、ああ、マリア！　真実の愛ゆえに、恥はじることなく声をかぎりに叫さけぼう！　ボクはマリア、キミが欲しい！　キミのすべてをボクのものにしたい！　それが愛！　究極の愛！　極限愛ラヴ・マツクス……！」

　アジアンは絶ぜつ叫きようしながら空を仰あおいで両りよう腕うでを広げた。

　マリアはようやくアジアンを横目で見た。ものすごくいやそうな顔をしている。アジアンは誇ほこらしげだ。

　なんだか頭がごちゃごちゃになっている。ルーシーは自分が何をしようとしていたのか考えないといけなかった。そうだ。礼を言おうとしていたのだ。

　ルーシーは深々と頭を下げた。

「あ、あの！　ありがとうございましたっ！　とっても助かってしまいました！　危ないところだったみたいなので！　じつは、お父さんを捜さがしに、この街にきたばかりで！　田舎いなか者もので、世間知らずで！　お金もなくなってしまって！　怖こわいところだと聞いてましたけど、こ、こ、こんなに──」

何をやっているのだろう。ダメだ。いけない。泣いてどうする。我が慢まんしようとしたが、こらえきれなかった。

「す、すびばせん、ちょ、ちょっと、あの、あ、安心、してしまったみたいで、ご、ごめんなさい……」

雨合羽の袖そでで顔をごしごしこすっていると、逃にげだしたくなってきた。ほんの少しだけとはいえ、泣いてしまった。泣いちゃダメなのに。もう恥ずかしくてたまらない。穴があったら入りたい、という気持ちだ。バケツがあったらかぶりたい。

ルーシーは実際そうしようとした。男の人の二人組みに連れ去られかけて、運ばれた距きょ離りは十メーテルか二十メーテルだ。駆け戻って、バケツを回収して、かぶって走ろう。ルーシーは踵きびすを返した。

「待って」

振り向くと、マリアがフードをとって、真っ赤な髪かみの毛を引っかきまわしていた。

なんてきれいな、目の覚めるような赤だろう。

シー・シリーを出て以来、赤毛は何度か見かけたが、こんな真しん紅くの頭とう髪はつは初めてだ。

それ以上に、不ふ機き嫌げんというか、不本意そうな表情を浮うかべているのが、目もくらむばかりの美び貌ぼうだった。

ほっそりとした儚はかなげな顎と、ふっくらしていつつも意志の強そうな形のいい唇は、ばらばらに見ればちぐはぐだが、見事に調和している。染しみ一つない白はく皙せきの頬ほおはやわらかそうだ。柔にゅう和わさと繊せん細さいさが同居している。鼻は小さめだが、ほどよい高さで、何ものも邪じゃ魔ましない。そして、あの両りよう眼めだ。長く細い無数の睫まつ毛げに囲まれた橙色の瞳は、激しさと憂うれいと慈悲をたたえた泉に落日が映りこんでいるかのようで、一度見たら目を離はなすことはとうていできない。

フードをかぶっていたし、だいぶ暗くなってきていたので、今までよくわからなかった。

わかってしまったらもう、凝ぎよう視ししつづけるしかない。

「そういうこと聞いちゃったら、さすがに寝ね覚ざめが悪そうだし」

　マリアは柳りゆう眉びをひそめて、綿わた菓が子しのように甘そうなため息をついた。

「お金がないんじゃ、泊とまるとこだってないんでしょ。さいわい部屋数は多いから、寝る場所くらいはなんとかなるしさ」

「……ねる、ばしょ？」

「乗りかかった船っていうしね」

　マリアは背中を向けて歩きだした。

　もしかしたら、ついてこい、ということなのかもしれない。でも、違ちがったらどうしよう。まごまごしていると、マリアが立ち止まって振り返った。

「どうしたの？　こないの？　きたくないなら、べつにいいけど」

「もちろん行くヨ」

　ルーシーよりも先に、勇ゆう躍やくして反応したのはアジアンだった。アジアンは蜜みつの香かおりに吸いよせられる蜂はちのようにマリアに近づこうとしたが、つめたい声に制止された。

「きみはいいから。てゆうか、くるな」

「そんな……！」

「嫌きらいなんだよね。誰だれとは言わないけど、関係ないのにいつまでもつきまとってくるような、うざいやつって。反へ吐どが出るくらい。二度と顔も見たくないって気分になっちゃってさ。逆に、用がすんだらさっと立ち去っちゃうような、立つ鳥跡あとを濁にごさずっていうの？　そういう人って、やけにその後ろ姿が心に残ったりすることもあるんだけど」

「フッ」

　アジアンは急に足を止めて指先で前髪を払はらった。

「今日のところはこれで失礼するヨ。用事はすんだのでネ。じゃあ、マリア。名残なごり惜おしいけど、今日のところはこれで失礼するヨ。名残惜しいけど、あくまで今日のところはこれで」

「同じこと何回も言ってるんだけど」



「それはつまり、身も心も引き裂さかれんばかりに名残惜しいからサ！」

「うざっ……」

「と思われてしまう前に、ボクは行く！　真実の愛を証明するために……！」

　アジアンの全身が一いつ瞬しゅん、ぶれたように見えた。あまりに速すぎるのだ。次の瞬間にはもう、その場にアジアンの姿はなかった。どこだろう。上だ。アジアンは左側の建物の屋上にいた。建物の外がい壁へきを何度か蹴けって、屋上に達したらしい。そのままどこかへ行ってしまうのかと思いきや、アジアンはどこからかとりだした何かを空中に放った。

　それはゆっくりと落ちてきて、やがて地面に落ちた。

　一輪の赤い薔ば薇らだった。

　マリアは身を屈かがめて薔薇を拾い、また大きなため息をついた。

「──で」

　これほどまでに薔薇の似合う人が他ほかにいるだろうか。

　あとで知ることになる。

　マリアは正しい名ではなかった。

「どうするの？　くるの？　こないの？　さっさと決めてくれない？」

　その名に冠かんされた薔薇の花をくるくる回しながら、薔マ薇リのアマロリーアズは少しだけ首を傾けた。

Omenage 899 4th revolution 24th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.2

街に聖女が舞い降りて

いったいこの街は何なのだろう。

歩いていると、景色がくるくる変わる。

ファー・セルジナの街は、木々と、土と、淡あわい色の塗と料りようで彩いろどられた石材で出来ていた。ハッツフォー独立軍領の街は、漆うるし塗ぬりの木造建築と、質実剛ごう健けんな石造建築で埋うめつくされているといった印象を受けた。トレイン公国の街は全体的に白っぽくて、飾かざりは金色か銀色が多かった。キングダム・イズルハにも迷いこんだことがある。あの国の街は、何でもかんでも大きめで、人がやけに小さく見えた。

いずれにしても、どの国、どの地方にも、その街独特の雰ふん囲い気きがあった。建物にしても、それから自然にしても、あるいは食べ物、もちろんそこに住む人々にしてもそうだ。一言で説明するのは難しいが、いくらかでも滞たい在ざいしたことのある街は、これこれ、こういう感じ、と頭の中に思い浮かべることができた。

このエルデンという街は違ちがう。

なんというか、ごちゃごちゃだ。節操がないと言ってもいいかもしれない。いろいろなものがとけあって、一つのものを形づくっているのではなく、雑然と入り混じっている。区画ごとに変化があるのではない。隣となりあった建物同士が、まるで異なる個性を主張しあって喧けん嘩かしている。ちぐはぐで、目にやさしくない。やさしくないどころか、目が回ってくる。からいものと、甘いものと、しょっぱいものと、すっぱいものを一度に口に放ほうりこんで、咀そ嚼しやくしているようなものだ。何がなんだかわからない。

マリアローズが教えてくれたところによると、最初、ルーシーが足を踏ふみ入れたのは、第九区という地区らしい。その大部分は、クァラナド歓かん楽らく街と呼ばれている、ようするに、盛さかり場なのだという。

ルーシーはマリアローズに導かれるまま第九区を抜ぬけだして、環かん状じよう通という太い通りに出た。エルデンは円い形をしていて、環状通は街の中心と外壁を結ぶ直線の真ん中あたりを走っている。名前のとおり、環わのような形をしているのだ。その環状通

をいくらか北上したところで、マリアローズは西へと向かった。その先は第十二区とのことだった。

　第十二区は静かだった。第九区や環状通に比べると、人通りがずいぶん少なかったし、道みち幅はばが広く、植え込みなどもあって、とても奇き妙みようで閑かん静せいな屋や敷しき町といったたたずまいだった。その屋敷が、あらゆる意味でめちゃくちゃでさえなければ、わざわざ「奇妙な」という修しゆう飾しよく語ごをつけくわえずにすんだはずだ。

　ある屋敷は、屋根から二本の角のように突つきだした斜ななめの尖せん塔とうが、交差して×を描えがいていた。巨きよ大だいな風車を備えた屋敷もあった。視界の向こうに硝子ガラスの箱が出現して、近づいてみると巨大な水すい槽そうだった。四角い建物が二つそびえ立っていて、その間に橋が渡されているのだが、橋の下にブランコが吊つるされていて、身なりのいいきれいな金きん髪ぱつの男の子が腰こしかけていた。それはいいのだが、ブランコは地上五メーテル以上の高さにある。どうやって降りるのだろうか。不思議に思っていると、青い球体と黄色い立方体と赤い四し角かく錐すいを組みあわせた建造物が見えてきた。黄色い立方体には丸窓があって、そこから立派な髭ひげを生やした男性が顔を出していた。男性は葡ぶ萄どう酒しゆを片手に物思いにふけっているようだった。
物々しい砦とりでのような屋敷は珍めずらしくなかった。攻せめ滅ほろぼされたあとのような屋敷も見かけた。血染めの館やかたもあった。土地がやたらと盛りあがっていて、その上には何もなかった。あれは空き地なのだろうか。それとも、上ではなく、下に何かあるのか。

　すべてひっくるめて、これがエルデンなのかもしれない。

　そう思うことができるようになるまでには、多少時間がかかりそうだ。

　マリアローズはそんな屋敷町の一角で足を止めた。

　見たところ、五、六メーテルはあるだろうか。灰色の壁かべがそそり立っていて、その上に頑がん丈じようそうな鋲びようつきの塀へいまで巡めぐらせている。道に迫せりだした階段は壁の上じよう端たんまでつづいていて、その先に門があるようだ。

「あの……ここは？」

「家うち」

　マリアローズはそっけなく答えて階段を上っていった。ルーシーとしては、大事なものを入れたバケツを抱かかえてついてゆくしかない。

「大きな……おうち、ですね」

「持ち家なら、たしかにすごいけどね。間借りしてるだけだから」

　マリアローズは門の前で立ち止まり、鍵かぎでもとりだすのかと思ったら、違った。門の上に目をやった。

「きゅー、開けて」

「くう」

　返事があった。

　門の上から、何かが顔を出していたらしいのだ。

　それはすぐに引っこんでしまったから、よくわからなかった。白くて、毛むくじゃらで、小さくはなかった。けっこう大きかった。ずっと北のほうには真っ白い熊くまがいるという。もしかしたら、そんな感じだろうか。ただ、シー・シリーでも、熊が出しゆつ没ぼつして騒さわぎになることがたまにあった。とても臆おく病びようらしいが、頭がよく、力持ちで、足も速い、恐おそろしい動物だ。熊があんなかわいらしい声で返事をするとは思えない。そもそも、こんな都会に、しかも屋敷の敷地内に、熊がいるものだろうか。

　そうこうしているうちに門が開いた。門の向こうにそれはいた。

　あたりはもうかなり暗いが、夜目にも鮮あざやかな真っ白い毛だった。

　背が高い。マリアローズはルーシーより少し大きいくらいだろうか。それよりも遥はるかに上背がある。頭一つぶん、いや、それ以上だ。おそらく一・メーテルを超こえているだろう。

　二本足で直立しているものの、四つ足で歩行する生き物が後あと肢あしで立っているようにも見える。尻尾しつぽもあるようだ。

　目はつぶらで、黒くて、大きい。耳は三角だし、鼻の頭が黒くて、髭もあり、ちょっと猫ねこっぽいが、犬のようでもあり、熊と言われれば熊のような気もするし、やっぱりそのどれでもない、という結論が妥だ当とうかもしれない。

「きゅう？」

　その生き物は、ルーシーをちらりと見てからマリアローズに向きなおり、何か尋たずねるように首を傾かしげてみせた。

　マリアローズは、ああ、とルーシーを親指で示した。

「この子はお客さんだから、大だい丈じよう夫ぶ」

「くう」

　生き物は、わかった、というふうにうなずいた。まさかとは思うが、会話が成立しているのだろうか。

「……人の言葉が、わかるんですか？」

「くう」

「話すのは無理だけどね。名前はきゅー。前はかなり人見知りが激しかったみたいだけど、最近は慣れてきたのかな？」

「きゅう。くう」

「だってさ」

「……マリアローズさんも、その、きゅーさんの言葉が……？」

「なんとなくこんなこと言ってるのかな、くらいはね。慣れればすぐわかるようになるよ。あ、きゅー、この子は──って、あれ、名前、何だっけ。そういえば、まだ訊きいてないのかな」

「あ、はい、ルーシーです。ルーシー・アッシュカバード」

「ルーシー、ね」

「くう」

　きゅーが、よろしく、という感じで頭を下げた。その仕し種ぐさ

がとても愛らしかった。ルーシーは感動しながら頭を下げた。

「よ、よろしく、です。きゅーさん」

「きゅう」

　じゃあ、ついておいで。

　きゅーは背中を向けて、尻尾をぴょいぴょい振ふりながら歩きだした。

　その行く手にそそり立っているのが、見たこともないような建築様式ではあるものの、本当にお屋や敷しき然ぜんとしたお屋敷だった。

　きっと貴族はこんな邸てい宅たくに住んでいるに違いない。お父さんとお母さんに、子供が三人、お祖じ父いちゃん、お祖ば母あちゃん、そんな家族が一つどころか二つ、もしかしたら三つくらい暮らせそうだ。広いだけではなく、造りがしっかりしていそうで、すっきり、さっぱりしているのに、豪ごう華かに感じる。建物のみならず、庭もきれいだった。一定の長さに整えられた芝しば生ふは寝ねそべったら気持ちよさそうだし、夏にすっとした立ち姿の樹木が作る日ひ陰かげは涼すずしそうだ。隅すみのほうには小さな花園があって、人工の池まである。

　きゅーとマリアローズに導かれて、ルーシーはそんな屋敷の中に足を踏ふみ入れることになってしまった。

　正直、かなり緊きん張ちょうした。

「靴くつ、脱ぬいでね。この家、土足禁止だから」

　玄げん関かんでマリアローズにそう言われて、靴底が剝はがれかけた靴を慌あわてて脱いだのだが、ということは裸足はだしで上がらないといけないのだ。屋敷の廊ろう下かはぴかぴかだ。いや、上がり口のところにそろえてあるスリッパを履はけばいいのか。どちらにしても、ルーシーの足は汚よごれている。ほとんど真っ黒だ。足だけではない。全身だ。すっかり慣れてしまっているので、自分ではよくわからないが、たぶんにおうだろう。

　ためらっていると、マリアローズが、あ、そっか、と呟つぶやいた。

「きゅー、悪いけど、雑ぞう巾きん持ってきてくれる？」

「くう」

　きゅーは奥へ行って、すぐに戻もどってきた。マリアローズは手て袋ぶくろを脱いできゅーが持ってきた雑巾を受けとり、ルーシーを上がり口に座らせた。

「きったないなぁ」

「え、え、え」

　あの、とか、それは、とか、自分で、とか、言いたいのに言えなかった。恥はずかしくて、申し訳なくて、頭も胸もいっぱいで、顔が熱くて、身体からだ中から汗あせが噴ふきだしてきて、ちゃんとした言葉が出てこなかった。

　雑巾といっても、真っ白いタオル地の布だ。それがみるみるうちに黒く汚れていった。そんなことよりも、マリアローズだ。マリアローズがしゃがんでルーシーの足をふいてくれている。ぞんざいな手つきではない。丁てい寧ねいだ。ごしごしと、それでいてやさしく、足の裏を重点的にぬぐってくれている。どうしてだろう。なぜそんなことを。

　鼻の奥がつんとした。

　泣いてしまいそうになって、必死に我が慢まんした。

　母が死んでから、誰かにここまで親切にしてもらったことはない。

「うーん。半はん端ぱじゃないね。汚れ方が」

　その半端じゃなく汚れている足を、いやがるそぶりも見せずに、素す手ででさわっているのだ。きれいにしようとしてくれているのだ。母もやさしい人だったが、もしかしたらその上を行っているかもしれない。

　聖女だ。

「もう、お風ふ呂ろ入ってもらったほうが手っ取り早いかな。うん。そのほうがよさそうだね。きゅー、連れてってあげて」

「くう」

「床ゆかは汚れても気にしなくていいよ。掃そう除じするから。着き替がえは……持ってなさそうだね。サイズはあいそうだし、ま、なんとかなるかな。脱だつ衣い所に何か置いとくから、それを着て」

　ルーシーは無言で何度もうなずいた。声など出そうものなら、確実に涙なみだがあふれてしまう。俺がいないところで泣いちゃいけない。父にそう言われたのだ。もう泣かない。絶対に。次に泣くときは父の胸だ。父に抱だきしめてもらったときに、いくらでも泣けばいい。

　きゅーが風呂場まで案内してくれた。豪ごう勢せいで、それでいてごてごてしていない、すてきな浴室だった。シャワーなどの使い方は、きゅーが身み振ぶりで教えてくれた。身体をこするタオルも、きゅーが脱衣所のクローゼットから出してくれた。一枚では足りないと判断したのだろう。二枚もくれた。バスタオルも用意してもらった。

　洗せん髪ぱつ剤ざいは、すがすがしい程度に甘くてとても豊かな、やたらといいにおいがした。父が母への土産みやげとして買ってきてくれたシャンプーが思いだされた。故郷では洗髪剤を使ったあとの髪かみをやわらかくするために、薄うすめた酢すになじませていたが、この浴室にはそれ専用の液体もあった。これがまたうっとりするような香りだった。洗いあがりの髪の毛は絹糸みたいな手ざわりで、自分のものではないかのようだった。

　液体の石せつ鹸けんなんて、生まれて初めて使った。最初は泡あわ立だたなかったので、こういうものなのだろうと思っていたが、ルーシーの身体が汚れすぎていたせいだった。タオルの感かん触しょくが気持ちよくて、何度も何度もこすっていると、そのうちおもしろいように泡が発生した。泡はあっという間にルーシーの全身を覆おおい隠かくした。それでも飽あきたらず、浴室のそこかしこに飛んでゆき、すごいことになった。

　夢中だったから、どれくらいの時間、浴室にいたのかわからない。

　シャワーで泡を流して脱衣所に戻ると、バスタオルの脇わきに、丸まる襟えりの長なが袖そでシャツとショートパンツ、それから薄

手のズボンがたたんで置かれていた。ルーシーが脱いだ雨合羽と肌はだ着ぎは見あたらない。まったく気づかなかったが、マリアローズかきゅーが着替えを置いていったときに、持ち去ったのだろう。

　ふかふかのバスタオルで身体をふきながら、大きな鏡に映っている自分の姿を横目で見た。ルーシーはまだ子供だから仕方ないのだろうが、父と母の裸ら体たいが思い浮うかんで、自分の貧ひん相そうさにため息が出た。父は母を抱きしめて、お前だってすぐこうなるさ、とよく言ってくれた。何しろ、ルーシー、お前は俺とハドリエラの子なんだからね。お前だってそう思うだろう、ハドリエラ？

　恋こいしさをまぎらすために、バスタオルでごしごし頭をこすった。それでも完全に水気を切ることはできそうにない。ルーシーはバスタオルを首に巻いて、シャツとズボンに目を落とした。でも、いったいこれをどうすればいいのだろう。

　少し考えてみたのだが、ルーシーは結局、シャツとショートパンツとズボンを小脇に抱えて脱衣所をあとにした。

　道順は覚えている。広い家だが、複雑ではない。廊下を進んで突きあたりを左に曲がり、その先をまっすぐ行けば、玄関にたどりつくはずだ。

　ルーシーが床につけた足あし跡あとは残らず消えていた。マリアローズときゅー、どちらが掃除したのだろう。そんなことを考えながら突きあたりを曲がり、しばらく行くと、後ろのほうでドアが開く音がした。この廊下にはいくつもドアがある。そのうちの一つを、誰だれかが内側から開けたのだろう。予期していなかったので少々驚おどろいたが、マリアローズかきゅーに違ちがいない。

　振り向くと、果たしてマリアローズがドアから顔を出したところだった。

　そこで固まっていた。

　半分くらい笑え顔がおになりかけて、目だけ見開いている。不思議な表情だ。

　ルーシーは首をひねった。

「どうしたんですか？」

「え、や」

「あの……マリアローズさん？」

「て」

　どうやら、何か言おうとしているのだが、言うことができないでいるようだ。

　マリアローズは何度かまばたきをして、視線を下のほうへ移動させた。

　一いつ瞬しゆんのうちに、顔が真っ赤になった。

「なっ──」

「はい？」

「な、な、な、なな」

「え……？」

「ななな、なな、なななんで」

「はい」

「それ」

　マリアローズは右手で顔を覆って口をぱくぱくさせながら、左手の人差し指でルーシーの下半身を示した。

「そ、それ！　それ！」

「それ……？」

「つ、つ、つ……ついて……る、わけ？」

「ついてる？　何がですか？」

「だ、だから、その、や、いいから、まず、その、ズボン、てゆうか、着て、服！　あっただろ！　置いてきたじゃないか！　てゆうか、なんで持ってるんだよ！　着るだろ、普ふ通つう！」

「え、着るんですか」

「着ないでどうするんだよ！　服なんだからさ！　そのためにあるものだし！」



「そうなんですか！」

「そうだよ！　当然じゃないか！」

「ごめんなさい。そういう習慣がなくて。裸はだかが一番クールだというのが父のポリシーで、家の中では、寒いとき以外、裸でいることが多かったんです」

「ど、ど、どどど、どういうお父さんだよ！　いいけど！　ひとんちのことだし！　でも、ここはきみの家じゃないんだから、とりあえず着て！　人前では服を着るのがポリシー以前の社会的な常識だから！」

「あ、はい」

　ルーシーはまずズボンを穿はいて、それから首に巻いていたタオルを手に持ってシャツを着た。残るはショートパンツだ。これはどうすればいいのだろう。

　迷ったあげくに、ズボンの上に重ねて穿くことにした。なんだか変だ。ひょっとしたら、下着代わりだったのかもしれない。ルーシーは着なおすために脱ぬごうとしたが、マリアローズに止められた。

「い、いいよ！　そのままで！　暫ざん定てい的な処置として！　てゆうか、人前で着替えるのもおかしいから！　脱ぐとか着るとか、そういうのはつつしみっていうか自主規制っていうか自じ粛しゅくっていうか自重っていうか、とにかく人目をはばかるのがあたりまえなんだよ！　いいけど！　よくないけど！　あーもう、こっちきて！　ここで立ち話っていうのもあれだし！　お風ふ呂ろ上あがりなんだし風か邪ぜでもひかれたらあれだし！」

　そんなわけで、ルーシーはずいぶん広い部屋のソファに腰こしかけている。

　もしかすると、この部屋は居間なのかもしれない。それにしても広すぎる。ここまで広々していると、少し落ちつかない。

　ルーシーはソファにあう高さのテーブルに置かれていたカップを両手で持ちあげた。中身はあたたかいミルクだ。ちょっと前にきゅーが持ってきてくれた。そのきゅーは、ルーシーの隣となりにちょこんと、いや、どでんと座っている。

　マリアローズはきゅーの隣に腰を下ろしているはずだが、ルー

シーの位置からはあまり見えない。きゅーが壁かべになっているのだ。ルーシーを真ん中にして、その両りよう脇わきにマリアローズときゅーが座ることもできた。マリアローズはあえてそうしなかった。

　あまりルーシーに近づきたくない、と思っているのかもしれない。

　慣れているので、べつに平気だ。故郷では、病気がうつる、近づくな、と石を投げられるのが普通だった。ただ、さっきはルーシーの汚よごれた足をふいてくれた。それがいきなりこうなったのだ。どうしてなのか、理由くらいは知りたい。

「あの」

「……もうちょっと待って。いま頭の中を整理してるから」

「あ、はい」

「てゆうか、まさかね……」

　深々とため息をつく音がした。

　ルーシーはミルクを飲んだ。もうなくなってしまった。きゅーが空になったカップを見て、ルーシーに顔を向けた。

「くう？」

　たぶん、お代わりはいるか、と訊きいているのだろう。ルーシーは首を横に振った。あたたかい飲み物は久しぶりだった。ありがたかったが、これ以上は喉のどを通りそうにない。おなかもすいているはずなのに、何か食べたいとも思わなかった。

　きゅーがだいぶ中和してくれているが、それでもかなり重苦しい雰ふん囲い気きだ。

　原因はわからない。でも、ルーシーのせいだろう。何かマリアローズの機き嫌げんをそこねることをしたのだ。

　そういえば、服を着るように強く言われた。あれがまずかったのかもしれない。

　父も母もそうだったので、真冬以外、屋内では裸でいるのがあたりまえだと思っていた。だって、裸が一番クールなのだ。クールというのは、かっこいいという意味らしい。たしかに、父の身体からだは逞たくましくて、強そうで、それでいて、野生の獣けものみたいに無む駄だがなく、研とぎ澄すました刃は物もののようでもあった。母も、胸やおしりは大きくて、腰はきゅっと締しまり、熟して間もない果実みたいに美しかった。こんなにすばらしい肉体を生まれ持った人間が、何か身にまとう必要はない。父の言葉にはいつも理があった。ルーシーと母は父を信じた。疑ったことは一度もなかった。その必要性も感じなかった。今まではそうだった。

「裸は、いけないんですね」

「や……そういう問題でもないんだけどね」

　マリアローズはすぐに訂てい正せいした。

「なくもないけど。あるけどさ」

「どうしてか、訊いてもいいですか」

「そ──れは、その……恥ずかしいから、じゃないの。やっぱり」

「恥ずかしいんですか。裸は」

「普ふ通つうはね。きみは普通じゃないのかもしれないけど」

「そうなんですか……」

「てゆうか、そういうことじゃなくてさ」

　マリアローズは声を低めた。

「──まさか、男の子だとは思わなかったから」

「そうだったんですか……」

　ルーシーは顔をしかめた。

「え!?」

　猛もう然ぜんと立ちあがってすぐに座りなおし、マリアローズの表情をうかがおうとしたが、きゅーがいるので叶かなわなかった。

「……お、男の子、ですよ？　ぼく。生まれてこのかた、ずっと男の子です。それは……背は小さいですし、瘦やせていますけど……」

「体格よりも、顔とか声がね……」

「かっ、顔は！　実際、お母さん似ですけど……声も、低くはないですけど……高め、かもしれないですけど……そうですか。女の子だと思われていたんですね……」

「こっちが勝手に勘かん違ちがいしただけなんで、きみが悪いわけじゃないんだけどさ」

　マリアローズはそう言うが、やはりルーシーにも責任はあるだろう。少なくとも、原因はルーシーの容姿や声なのだ。

「すみません」

「謝られてもね」

「ぼくのせいです」

「べつに、実害はこうむってないし。ちょっと、その──びっくりしただけで」

「いいえ。ぼくのせいです。考えてみたら、同じ年とし頃ごろの子と比べると小さかったですし。あまり意識してきませんでしたけど、男にしては貧ひん弱じやくですよね。やせっぽちですし。ちんちくりんですもん」

「あの、きみっていくつなの？」

「十六歳です。見えないでしょう」

「……うん、まあ」

「やっぱり」

　ルーシーも薄うす々うすす勘づいてはいたのだ。

　ブラーニーの子供たちを見ても、男の子はどんどん背がのびて、肩かた幅はばが広くなっていった。女の子は肉がついて、丸みを帯

びた身体つきになってゆくのがあたりまえだった。それなのに、ルーシーだけは違っていた。

　大人になれば、自然と父のようになれるだろうと思ってはいた。一方で、本当にそうなのか、という疑いも抱いていた。

　もしかしたら、自分は父のようにはなれないかもしれない。かといって、性別が異なる母のようにもなれないだろう。だとしたら、ルーシーはどんなふうに成長するのか。どんな大人になるのか。

　知らぬ間にソファの上で正座していた。

　今すぐこの家から出たほうがいいのかもしれない。なんとなくそう思った。

「ええと」「ねえ」

　同時だった。

　気まずい。ルーシーはうつむいて膝ひざに両手を押しつけた。

「ど、どうぞ。お先に」

「あ、そう？　じゃあ……てゆうか、そんなふうに言われると、なんか話しづらいんだけど、きみ、お父さんを捜さがしてるって言ってたよね？」

「はい。エルデンに行くと言い残して、家を出たので」

「家出したの？」

「いえ。そうではなく。父は旅をしていて、たまに家に帰ってくる人だったので」

「ふうん。で、それっていつの話？」

「三年くらい前でしょうか」

「もうけっこうたってるんだね」

「そう……ですね。言われてみれば……」

「この街で人捜しするのは簡単じゃないよ」

「……はい」

「はっきり言って、無む謀ぼうだと思う。きみみたいな子がおもしろおかしく暮らしていけるような環かん境きようでもないしね。帰ったほうがいいんじゃないの」

「シー・シリーに、ですか」

「知らないけど。それ、故郷か何か？」

「はい。でも――」

　ルーシーは唇くちびるを引き結んで天てん井じようを見上げた。

　視線を落とすと、バケツが目に入った。遺い髪はつをおさめた箱と母の日記はテーブルの上だ。

「帰れないです」

「なんでさ」

「誰だれもいませんし。何もないので」

「お父さんを捜してて、お母さんは――」

　マリアローズは言いかけて、途と中ちゆうで口をつぐんだ。

　不意にきゅーが立ちあがって、きゅう、くう、くう、きゅう、と小さな声で歌いながらどこかへ行ってしまった。

　マリアローズは立てた片かた膝ひざを両りよう腕うでで抱かかえて座っていた。

　橙だいだい色いろの瞳ひとみがちらりとルーシーを見た。

「そっか」

　どうやら事情を察してくれたようだ。

「だけど、現実的じゃないね。お金がありあまってるなら話は別だけど、そうじゃないでしょ。それに、何をするにしても、まず生きてかないといけないんだよ。衣食住。最低、食べるものくらいは食べないと、野垂れ死にするしかないんだから」

「生きて……」

「そこから考えないと」

　重みのある言葉だった。ルーシーはその重量に押し潰つぶされてしまいそうだった。

　じつのところ、考えたこともなかったのだ。エルデンにくればなんとかなると思っていたわけではない。ただ、何かあるだろう。そんな漠ばく然ぜんとした予感みたいなものはあった。自分の歩く道はエルデンにつながっている。そこに父がいるはずだから。でも、いなかったらどうするのか。わからない。今もわからない。何も浮かんでこない。

　生きてかないといけないんだよ。まったくそのとおりだ。それで、どうすれば？

　金は奪うばわれた。この服は借り物だ。ここは他人の家だ。それで、どうすれば？

　悲しいほど何も思いつかない。

　マリアローズの横顔をそっとうかがった。訊ききたかった。よければ、教えてくれないでしょうか。ぼくはどうすればいいでしょう。生きていくために、何をすればいいでしょう。いい方法はありますか。何度も口に出しかけた質問を、そのたびに引っこめた。

　ドアが開いた。

　驚いてドアのほうを見ると、浅黒い肌はだをした背の高い男の人が居間に入ってきた。

　眠ねむそうな顔だ。黒っぽい髪かみの毛には寝ね癖ぐせがついている。半開きの目は黄玉トパーズのようだ。

「おはよう」

　マリアローズが振ふり返りもせずに呆あきれたような声で挨あい拶さつをすると、男の人は、むう、と唸うなりながら爪つめを立てて後頭部をボリボリ掻かいた。

「客か」

「まあね」

「ふむ」

　男の人はゆっくりと大おお股またで近づいてきて、ソファの五メーテルくらい手前で足を止めた。

　いったいどうしたのだろう。怒おこっているのだろうか。その黄色い目に映っているのは、おそらくルーシーだ。鼻び梁りように皺しわが寄り、片方の眉まゆがものすごい角度につりあがっている。男の人は、くんくん、とにおいを嗅かぐような仕し種ぐさをして、首を傾かしげた。

　心臓をわしづかみにされているみたいだ。

　息がつまる。

　汗あせが噴ふきだした。

　怖こわい。

　マリアローズはやっと振り向いて怪け訝げんそうな顔をした。

「なに？　どうかした？」

「ん。いや」

　男の人は口をへの字に曲げて、胸のところをゴリゴリ掻いた。

「気のせいだろう。妙みような夢を見たあとだしな」

「どんな夢？」

「忘れた」

　男の人は大きなあくびをしながら歩いてきて、マリアローズの隣にでんと腰を下ろした。

「で、どこで拾ったんだ。見たところ、まだ子供みたいだが」

「拾ったって言い方はどうかと思うけどね。闇やみ市いちの帰りにクァラナドで、ちょっと」

「ほう」

　男の人はテーブルの上のカップに手をのばして、ぐいっと飲んだ。

　マリアローズが口を尖とがらせた。

「それ、僕のなんだけど」

「む。ぬるいな」

　男の人はカップを置いて顎あごをゴシゴシこすった。

「それで、どうするんだ。飼うのか」

「あのね……犬や猫ねこじゃないんだから」

「それもそうだな」

　男の人は、ヒヒヒ、と笑った。なんだか外見にそぐわない、やけに下げ卑びた笑い声だった。

　マリアローズはルーシーに向きなおって、手て振ぶりで男の人を示した。

「この人はトマトクン。僕はトマトって呼んでるけどね。トマトクンでもトマトサンでも野菜王国でも、好きなように呼んでいいよ。この家の持ち主」

「あっ、あの」

　ルーシーはソファから降りて、男の人に向かって頭を下げた。土ど下げ座ざするような恰かつ好こうになってしまった。

「る、ルーシー・アッシュカバードといいます。田舎いなか者もので、不調法者ですが、これでも十六歳です。よ、よろしくお願いします」

「ああ」

　トマトクンは鷹おう揚ようにうなずいた。さっきの恐おそろしさはどこへ飛んでいってしまったのだろう。もしかしたら、何かの間ま違ちがいだったのかもしれない。きっとルーシーの勘かん違ちが

いだったのだ。

　ルーシーは立ちあがって、ソファに腰こしを下ろそうとした。

　トマト。

　トマトクン。

　トマトくん、だろうか。

　野菜の、あの赤いトマト？

「……トマト……と、トマト……？」

「いい名前だろう」

　トマトクンは得意げな顔をしてみせた。

「お気に入りだ」

「……は、はあ……え、はい。そ、そう……ですね」

「無理しなくていいよ。どう考えても変な名前だから。でもまあ、いいかげん慣れちゃったけどね」

「俺は最初から、かなりいいと思ってたんだがなあ」

「きみのセンスはね……微び妙みようっていうか、突とつ拍ぴよう子しもないし」

「そうか？」

「そうだよ」

「ふむ」

　トマトクンはポキポキと首の骨を鳴らした。

「それで、ルーシーだったか。どこの部屋を使わせるんだ？」

「え？　や、そんなの、まだ──」

「どこでもいいか。あいてる部屋はだいぶあるしな」

「だから、べつにそういう話はしてないんだけど」

「なんでだ？」

「なんでっていうか、あるでしょ。人それぞれ、事情ってものが」

「そりゃあ事情はあるだろうな。ないやつなんて、そうはいないんじゃないか」

「なんか、お父さんを捜しに、エルデンにきたらしいんだけどね。かなり厳しいでしょ。お金もないっていうか、すっからかんみたいだし」

「それだと、どのみちどこにも行けんだろうな」

「う」

　マリアローズは言葉をつまらせると、ルーシーをちらっと見てため息をついた。

「……まあ、ね」

　トマトクンはにんまり笑って、マリアローズの肩かたを叩たたいた。

「とりあえず、しばらく置いてやればいいさ。何のかの言って、どうせお前もそのつもりだったんだろう」

　すかさず、違うから、と声を荒あららげて反論したマリアローズの顔は、やたらと赤かった。

　やっぱり聖女だ。

Omenage 899 4th revolution 25th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.3

ラッキー半魚人

　トマトクンの家には、他ほかにもピンパーネルという男の人が住んでいて、彼には昨日きのうの夜のうちに挨あい拶さつをさせてもらった。とても物静かな人で、砂色の目は穏おだやかだった。髪の毛も目と同じ色だった。差しだされた手を握にぎると、なぜだかほっとしてしまった。

　トマトクンと、マリアローズと、ピンパーネルと、きゅー。四人（？）がどういう関係なのか、かなり気になったが、尋たずねる機会をうかがっているうちに眠くなった。マリアローズときゅーが用意してくれた食事で満腹だったせいもあるだろう。疲ひ労ろうもあった。あくびを噛かみ殺していると、空き部屋に連れてゆかれた。やわらかいベッドで寝ねた。夢も見なかった。気がつくと、朝だった。

「ちょっと不安もなくはないけど、会議しよっか」

　朝食の席で、マリアローズがそんなことを言いだした。ルーシーには意味がわからなかったが、トマトクンやピンパーネルには通じたようだ。

「いいんじゃないか。カタリなんかは、あれでなかなか世よ渡わたり上手だったりするからな」

「はイ」

「まあ、マリアはともかく、俺とピンプが何か意見を出したとしても、参考にはならんだろう。自分で言うのもなんだが」

「へえ。自覚はあるんだね。一応」

「うむ。俺も年をとったのかもしれん」

「てゆうか、どれだけ年とれば気がすむんだよって話だけどね」

「そのへんの細かい話はいいだろう」

「たいして細かくはないと思うよ？」

「そうか？」

「うん」

　彼らの会話は謎なぞに満ちていた。ルーシーはまったくついてゆけなかった。

　もっとも、ルーシーがぽかんとしていると、どこからともなく現れたきゅーに頭を撫でられたり、マリアローズが、あ、ごめん、と気づかってくれたりして、胸があたたかくなった。

　とくに、マリアローズのすまなそうな表情を見ると、胸ばかりか顔まで熱くなってしまう。

　何歳なのだろう。なんとなく、二十歳にはなっていないような気がする。きれいで、美人で、きりっとしていながら、可か憐れん、というのだろうか。ふとしたときの表情や仕し種ぐさに、えも言われぬ愛らしさがある。非の打ちどころがない美人なのに、かわいいタイプでもあるのだ。

　強い人だということは知っている。ルーシーはマリアローズに助けてもらったのだ。

　情けない、貧ひん弱じやくな自分がこんなことを思うのはおかしい。その資格がない。でも、自然とわきあがってくるのだ。

　守りたい。

　どこか翳かげがあるせいだろうか。あの敏びん捷しようさ、流れるような身のこなし、判断力、どれも目を瞠みはるものだったが、身体からだつきは華きや奢しやだ。かなりほっそりしていて、儚はかなげにすら見える。そのせいだろうか。

　その身をかばう盾たてになりたい。

　ならなければ、と思う。強く思う。

「じゃ、ご飯が終わって少ししたら、事務所に行こっか」

「ああ」

「はイ」

「ルーシー。きみもだよ。てゆうか、きみを連れてかないと、何の

意味もないし」

「はい」

　返事をしてから気づいた。

　何も聞いていなかった。マリアローズの顔ばかり見ていた。見とれていた。

「きみ、聞いてなかったでしょ」

　しかも、ばっちり見み抜ぬかれている。

　マリアローズは顔をしかめてため息をついた。その表情のゆがめ方がまた、何とも言えずかわいらしいのだ。

「何もかもいきなりどっきりって感じだろうし、混乱してるかもしれないけどね。きみがこれからどうするか、どうしたらいいか、集まって話しあうつもりなんだからさ。どっちにしても、決めるのはきみ自身なんだし。しっかりしないと、困るのは自分だよ」

「あっ。はっ、はい。そ、そうですよね。しっかりしないと、いけないですよね」

　気を引きしめよう。そうしたいのは山々なのだが、顔を上げると、マリアローズがルーシーをにらみつけている。ダメだ。これ以上、そんな目で見つめられていたら、心臓が破は裂れつしてしまう。何度か死を覚かく悟ごした。どうにか生きのびて、なんとか食事を終えると、外出の用意を命じられた。

　外へ行くといったら、まず着る物だ。ルーシーがずっと愛用していた雨合羽は、洗せん濯たくしてもらったのだが、とても着られる状態ではなかった。他に着き替がえを持っているわけでもないので、本来なら困り果てるところだ。その心配はいらなかった。マリアローズがいろいろと服を出してくれて、好きなものを身につけるように言ってくれたからだ。

　もっとも、ルーシーは内心、別の意味で困り抜く羽目になった。マリアローズがわざわざルーシーの部屋まで持ってきてくれた服は、すべてマリアローズの私物だった。もう着ないものらしいが、どれもこれもなんとなくマリアローズの香かおりがした。こんなものを自分が着て、本当にいいのだろうか。そんなことをして、バチ

があたったりしないだろうか。

「あの、いいんでしょうか」

「何が？」

「ぼくなんかが、マリアローズさんの服を着たりして」

「ダメなら持ってこないでしょ」

「そ、そう……ですよね」

　マリアローズはてきぱきと物事をこなす人だ。ぐずぐずしていたら嫌きらわれてしまうかもしれない。ルーシーは黒っぽいフードつきの上着と、薄うすい色の半ズボン、それから厚手の靴くつ下したを選んで、手早く着替えようとしたら、マリアローズに叱しかられた。

「いきなり脱ぬがない！　き、きみは人前で裸はだかになっても平気なのかもしれないけど、みんながみんなそうじゃないから！」

「あ、すみません。でも、ちゃんと下着をつけていますよ」

「そうだけど！　もう……」

　マリアローズは部屋から出ていってしまった。怒おこらせてしまったのだろうか。気がかりだったが、着替えを終えて外に出ると、腹を立てている様子はなかったので、安心した。

「今日着なかった服も、きみにあげるから。何着か持ってないと困るでしょ」

「ええっ。いただけるんですか」

「もういらない服だからね。安いのばっかりだし」

「ぼくが着ているこれも、安いんですか。かわいいのに」

「服なんかはよりどりみどりだよ。この街は。探せばどんなものでもたいてい見つかるしね。数少ない長所の一つかな」

「じゃあ、かわいいスカートもあるかなぁ」

「すかーと……？」

　マリアローズはなぜか一いつ瞬しゅん、怪訝そうな顔をした。たしかにそう見えたのだが、とくに何も言ってこなかったので、気のせいかもしれない。

　護身用のフォークは一応、上着のポケットに入れておくことにした。兜かぶと代がわりのバケツも持った。遺い髪はつと日記はベッドの下に隠かくしておいた。靴くつはマリアローズのお古だと小さかったので、自分の靴を履はいた。剝はがれかけた靴底を、マリアローズがテープで固定してくれたので、だいぶ歩きやすくなった。

　きゅーは門のところまで送ってくれたが、留守番をするようだ。ルーシーは、トマトクン、マリアローズ、ピンパーネルに連れられて家を出た。

　第十二区を出て環状通を左回りに進むと、左手にやたらと高い建物だらけの一帯が見えてきた。第十三区、またの名を彷徨Ｒえる S 魂区Ｗという地区らしい。背の高い建物は大半が高層寺院なのだとマリアローズが教えてくれた。何のことか、ルーシーにはさっぱりわからなかった。

　第十三区を左に見ながら環状通をさらに歩くと、やがて馬ば鹿かみたいに太い通りに出くわした。なんでも、エルデンの中心から北に向かってのびている、マキシマムＡＭドラゴン・ストリートとかいう長い名前の大通りなのだという。

　その通りをいくらか北上して、東へ入ったところにある第二王立銀行が、どうやら目的地らしい。

　立派な建物だ。頑がん丈じようそうだし、うろうろしていたり、そこかしこに立っていたりする鎧よろい兜かぶとに身を包んだ人たちは、きっとあの建物を守っているのだろう。トマトクン、マリアローズ、ピンパーネルの三人はかまわず近づいてゆこうとしているが、大だい丈じよう夫ぶなのだろうか。大丈夫のようだ。トマトクンが金属製の大きな門を開け放っても、その両りよう脇わきにいる完全武装の人たちはぴくりともしなかった。

　三人につづいて、ルーシーも銀行の中に入った。造りも、内装も、途と方ほうもなく豪ごう華かだが、これくらいではもう驚おどろかない。それとも、感覚が麻ま痺ひしてしまっているだけなの

か。

　ただ、ホールの脇にある階段が動きはじめたのには、さすがに仰ぎよう天てんした。階段がひとりでに動くなんて。こんなことがあっていいのだろうか。いいも悪いも、実際、動いている。この街では何が起こっても不思議ではないのかもしれない。

「ところで、ギンコーって何なんでしょう？」

「……え」

　マリアローズは顔を引きつらせて、ピンパーネルと目を見あわせた。トマトクンは眠ねむそうな表情で頭を掻かいている。何かまずいことを訊きいてしまったのだろうか。

「まあ……そのへんはあとで説明するよ。口座も作っといたほうがいいだろうし、実際やってみるのが一番手っ取り早いと思うから」

「やってみる……」

　何をやるのだろう。わからないが、しつこく尋ねてマリアローズに嫌われたくない。今は黙だまって言うことに従っていたほうがよさそうだ。

　動く階段で二階に上がったルーシーたちは、広々とした廊ろう下かをまっすぐ進んで突つきあたりの左側にあるドアの前で足を止めた。ドアの上には、木製の札が釘くぎで打ちつけられている。札には荒あら々あらしい個性的な筆ひつ跡せきで何か書かれていた。

　ZOO'S OFFICE

「ＺＯＯの……事務所？」

「その字は俺が書いたんだぞ」

　トマトクンがちょっと自じ慢まんげに札を顎あごで示してみせた。そういえば、マリアローズが事務所に行くと言っていた。この部屋がその事務所に違ちがいない。

「ようこそ、動物園事務所へ」

　マリアローズが微び笑しようとも苦笑いともつかない笑えみを浮

うかべてドアを開け、中に入るようルーシーをうながした。

　ルーシーは三人を見まわして、一つ息をついてから事務所に足を踏ふみ入れた。

　予想はしていたが、やはりそうとう広い部屋だ。

　壁かべの一面に大きな窓が並んでいて、かなり明るい。

「むを？」

　奇き妙みような声をあげたのは、事務所の真ん中に鎮ちん座ざしている巨きょ大だいな円いテーブルを囲む椅い子すの一つに陣じんどっていた男の人だ。

「をををを……？」

　男の人は椅子にふんぞり返って薄うすい本を読んでいたらしいが、ルーシーに気づいて驚いているのか、あやしんでいるのか。とにかく、離はなれ気味の目を丸くしている。

　ルーシーは少し怖こわくなって振ふり返った。頼たのみの綱つなのマリアローズは、それからトマトクンも、ピンパーネルも、なぜか事務所に入ってこようとしない。

「をるをるをるをるをるをるをる……？」

　男の人は本をテーブルに置いて椅子から立ちあがり、奇き声せいを発しながらゆっくりと近づいてくる。ルーシーはあとずさりかけた。どうしていいかわからず事務所の中を見み渡わたすと、他ほかにも人がいた。一人はルーシーよりもずっと小さな金きん髪ぱつの女の子で、もう一人は銀ぎん髪ぱつの女の人だ。二人とも戸と棚だなのところで何かしていたのだが、ドアが開いたので手を止めて入口を見た、という感じだろうか。何にしても、すごい。女の子はとてつもなくかわいいし、女の人は途方もなくきれいだ。ただ、残念ながら、二人の美び貌ぼうをゆっくり鑑かん賞しようしている場合ではなかった。

「をろろろをろをろををろろをるをるをろろろおるるるる……？」

　男の人が首を左右に振りつつ猛もう然ぜんと迫せまってくる。あの舌の回転速度は尋じん常じようではない。血走った離れ気味の目

も恐おそろしかった。人間の姿をしているが、別の生き物のようだ。ダメだ。逃にげられない。足あし腰こしに力が入らない。

「はゃっ……！」

　ルーシーは思わずしゃがみこんでしまった。

「をるるをるをるをるるるをるるをるをるをるをるをるをるをるをるをるをるをる」

　男の人はもうすぐそこにいる。死ぬ。きっと殺される。

「をるをるをるるるるるるるうっ……！」

　飛びかかってきた。

　ルーシーは目をつぶりそうになった。その寸前だった。

「いいかげんに──」

　後ろからだ。

　誰だれかがすっと進みでてきて、無む駄だのない、それだけに華か麗れいな回し蹴げりを男の人の横っ面つらに炸さく裂れつさせた。

「しろっての！」

「へぎぼっ……！」

　男の人は勢いよく横向きに倒たおれて床ゆかに叩たたきつけられた。そこにピンパーネルが近づいてゆき、どこからかとりだした縄なわで手て際ぎわよくぐるぐる巻きにしてしまった。

「──な、何すんねん！　痛っ、手、手えが、手首があ、足が、首があああ……！　痛いやないかあ、ほどけっ、ほどけっちゅうとんのや！　何さらしとんのじゃダァホ！　わしがいったい何をしたあっ！　ゆうてみい、このわしが何をしたっちゅうんやっ……！」

　男の人はさかんに身をよじってわめいているが、前進の仕方を忘れた芋いも虫むしみたいな有様だ。あれでは襲おそいかかってくることはできないだろう。助かった。大きなため息が出た。立ちあが

ろうとしてみたのだが、まだ膝ひざが笑っている。座ったまま半分放心していると、マリアローズが手をさしのべてきた。慌あわててその手をつかむと、一気に引っぱり起こしてくれた。

「びっくりしたでしょ。ごめんね。まさかこんな反応を示すとは思ってもみなかったからさ。ほんと、うちの半魚人ときたら、毎度毎度こっちの予想を超こえてくるっていうか、裏切ってくれるっていうか。もちろん、悪い方向にだけど」

「あ……はあ。半魚……人？」

「あいつ」

　マリアローズは芋虫男を視線で示した。

「似てるでしょ。顔が。魚に」

「あ。言われてみれば」

「だっ！　れっ！　がっ！　魚じゃァァァァァァァーッ！　わしはれっきとした人間やっちゅうねん！　なんでそないなベーシックなこと力説せなあかんのや！　ちゅうか見たらわかるやろ！　そら多少の共通点はあるかもわからんけどな！　いやッ！　ないない！　いっこもあらへん！　あってたまるかい！」

「ま、あれの言うことには耳貸さなくていいよ。どうせ七割くらい魚言語だから、ほとんど意味不明だし」

「ぱっちゅっぺっぴょっぶっぽぅ？」

「ほらね」

「やってみただけやっ。わしとしては、人一倍ノリのええ我が身を呪のろうしかないなっ」

　にぎやかな人だ。まだ少々怖いが、悪い人には見えない。マリアローズの言動からも、なんというか、けなしながらも心底から嫌ってはいない、わざとやっている、こうしたやりとりが日常化している、といった様子がうかがえる。

　ともかく危機は去ったらしい。ほっと胸を撫で下ろしていると、女の子と女の人が近づいてきた。トマトクンも事務所に入ってき

て、ルーシーは、マリアローズとピンパーネル、それから女の子と女の人の、あわせて五人に囲まれる形になった。

「こんにちは」

　まず女の子が声をかけてきてくれた。赤いラインが入った白い服を着て、同じ意い匠しようの帽ぼう子しをかぶっている。そういえば、旅の間も何度か似たような服装の男女を見かけた。流行している服なのだろうか。服しか見ることができない。顔は無理だ。

　明らかに年下だが、猛もう烈れつに恥はずかしくて直視できない。

　こんな可か憐れんな少女に会ったのは生まれて初めてだ。

「あ……ええと、あの、こ、こんにちは」

「どういうお知り合い？」

　顔を見ていないのでわからないが、女の子はたぶんマリアローズに尋たずねたのだろう。

「うーん、一言では説明しづらいんだけど、今のところは──そうだね、お客さん、みたいな感じかな？」

「クァラナドに捨てられてたのを、マリアが拾ったみたいだぞ」

「トマト、そういう誤解を生みそうな言い方はやめて」

「む。誤解なのか。俺はそう思ってたんだが」

「違ちがうって、昨日、訂てい正せいしたでしょ？」

「おお。そういえば」

　トマトクンは片方の眉まゆをつりあげて、ボリボリと後頭部を掻いた。

「まったく記き憶おくにない」

「もう」

　マリアローズは眉根を寄せてトマトクンの腰こしのあたりを拳こ

ぶしで軽く突つついた。もっとも、本気で怒おこっているわけではなさそうだ。同じ屋根の下に住んでいるだけあって、二人はかなり仲がいいらしい。それだけに、あらためて考えてしまう。

　二人はどういう関係なのか。

　トマトクンは少しとぼけているが、長身だし、野性的なのにどこか品があるような独特の風ふう貌ぼうをしている。一言でいえば、かっこいい男の人だ。マリアローズは言うまでもなく、美貌の聖女だ。ようするに、美男美女だ。そして、ピンパーネルやきゅーもーいつ緒しよとはいえ、同じ家で寝ね起おきしている。

　もしかして、ルーシーの父と母のような間あいだ柄がらなのだろうか。でも、昨日、第九区にいた黒ずくめの男の人も、マリアローズに対して、愛がどうしたとか何だとか言っていたような。もう何がなんだかわからない。

　そんな気持ちを知ってか知らずか、マリアローズはルーシーの背中に手をそえた。女の子と女の人のほうへ押しだそうとしただけなのだろうが、それでもマリアローズにふれられると緊きん張ちようした。女の子と女の人の視線にまともにさらされて、よりいっそう身体からだが固まってしまい、棒のように突っ立っていることしかできなくなった。

「この子はルーシー・アッシュカバード。お父さんを捜さがしに、ファー・セルジナのシー・シリーっていう村から、はるばるエルデンまできたんだって」

「お父しゃんを……」

　相変わらず顔を見られないが、女の子の声こわ音ねだけで哀あわれんでくれていることが伝わってきた。心やさしい女の子なのだ。女の人のため息らしき小さな音も聞こえたような気がする。もう母の死は乗り越こえたつもりだが、同情してもらえると、やはりちょっとだけ嬉うれしいというか、心強い気持ちになる。

「しょう。でも、人ひと捜しやがしとなると、しょんなに簡単にはいかないわね。大変だわ」

「……そう……ですね……」

　囁ささやくような、呟つぶやくような、こう言ってはなんだが、

かなり暗い声は、銀髪の女の人のものだろうか。ちらっと見てみた。どうやらそうらしい。

「でも……そういった仕事をされている方も、探せばいると思うので……専門家に頼たのめば……あるいは……」

「よっぽど評判のいい業者を選ばないと、ぼったくられたあげく、成果もゼロってのがオチだと思うけどね」

「エルデン……ですしね……」

「しょうねえ。しょのあたりは慎しん重ちようにならないといけないわ」

「ま、どっちにしても、先立つものがないとなんともなりようがないし」

「しゃしゅがマリア。現げん実じちゆ的ね」

「てゆうか、僕の感覚はむしろ、いたって普ふ通つうだと思うんだけど。はっきり言って、みんなが浮き世離ばなれしてるだけだからね？」

「あまり……現実的すぎて、ゆとりがなさすぎるのも……」

「うっさいなあ。サフィニアの魔ま術じゆつだって経費がかかるんだからさ。余よ裕ゆうこいてて、気がついたら、あれ、貯金がなくなっちゃってた、みたいなことになっても知らないよ？」

「……じつは……最近、新しい魔術の研究で高価な触しよく媒ばいを使いすぎて……残高が、ちょっと心こころ許もとなくなっていたり……」

「ほら。言わんこっちゃない。稼かせぐときは稼がないと。無む駄だはできるだけ省かないと」

「しょこらへんはマリアに任しぇておけばいいんじゃない？」

「……というか、もう……任せっきりに近いかも……」

「いいんだけどさ。こういうのは意識の問題も大きいんだからね。僕がサポートしても、本人の心構えがしっかりしてないと、ぜんぜ

ん意味がないんだから」

　べつにいいのだが、ものすごい会話のラッシュだ。もちろん激しく言いあっているわけではない。わきあいあいとしているのだが、おかげで余計に入りこむ隙すき間まがまるでない。ルーシーだけではなく、トマトクンも、ピンパーネルも、それから芋いも虫むし男も、さすがにぽかんとはしていないものの、女性陣じん三名による楽しげなおしゃべりを黙ってぼんやりと聞いている。年の差はいくらかありそうだが、そうとう仲のいい友だち同士なのだろう。

　ちょっぴり、いや、だいぶうらやましい。

　ルーシーには友だちがいなかった。アシェローンは母とルーシーの二人だけだったので、当然だ。幼いころはよく、川の向こうでブラーニーたちが遊んでいるところを、指をくわえて眺ながめていたものだ。そうしていると、たいてい石ころが飛んできて、大おお慌あわてで走って逃げる羽目になった。ルーシーは一人でもいいから友だちが欲しかった。

「わたしはユリカ」

　女の子が右手をさしだしてきた。

「ユリカ・白雪しゆノーホワイトよ」

「あ」

　ルーシーはユリカの手を握にぎった。なんて小さな手だろう。思いきり握りしめたら壊こわれてしまいそうだ。怖くなって、ついすぐに離してしまい、いたく後こう悔かいした。

「……えと、ルーシーです。あ、マリアローズさんがさっき言いましたよね。えと、よ、よろしくお願いします」

「よろしくね、ルーシーしゃん」

　ユリカは首を少し傾かたむけて、にっこり笑ってみせた。まるで小さめの、だが、燦さん々さんと降りそそぐ太陽の光をいっぱいに浴びて、元気いっぱいに咲さいている向日葵ひまわりみたいだ。
ルーシーは感激してさえいた。さっきから思っていたのだが、舌足らずというのだろうか、ちょっと独特の喋しやべり方が、また筆ひつ舌ぜつに尽つくしがたいほどかわいらしいのだ。甲こう乙おつつ

けがたい三人だが、愛らしさという点ではユリカが一番かもしれない。雰ふん囲い気きは沈しずんでいるものの、たおやかさ、それから儚はかなげな清せい楚そさでは、彼女だろうか。

「わたしは……サフィニアです」

　今度はちゃんと握あく手しゅをした。きめ細かい肌はだの、つめたい手だった。

「ど、どうも」

「よろしく……お願いします……」

　サフィニアは雪山に一輪だけ狂くるい咲いて散りゆく花のような笑えみを浮かべた。一いつ瞬しゅん、この手を離してはいけないのではないかと思ったくらいだ。がっちりつかまえていないと、消えてしまうのではないか。実際にはそんなことはなかったので安心したが、いきなり耳みみ許もとで叫さけばれてびっくりした。

「そしてェェッ！」

「ひっ」

　いつの間にか、すぐそばに芋虫男が立っていた。縄でがんじがらめにされたままだ。いったいどうやって起きあがったのだろう。

「わしがカタリやっ！　人呼んで史上最高最強の稀少物レア・蒐集家ハンター、カタリ・ザ・グレエェェェェトッ！　とは！　誰あろう、このわしのことやで！　覚えとって損はないからな！　バチコーンちゅう具合に、バッチシ記き憶おくしといたってや！」

「忘れようにも忘れられないと思うけどね……」

　マリアローズが半眼の横目でカタリを見た。ルーシーもまったくもって同感だった。カタリと名乗った芋虫男は胸を反り返らせて、ふっ、ふっ、ふっ、と笑った。

「記録にも記憶にも残りまくる漢おとこになるッ。それが漢の浪ろう漫まんや。わしが歩んどる漢道やで」

「はいはい」

「そもそもインパクトがちゃうやろ。段だん違ちがいやろが」

「きみ自体がレアものだしね」

「せやろせやろ。わしなんかもうな。生まれつきアレやからな。存在自体が激レアな人間と魚のハーフで──って、誰だれが半魚人じゃァァァァァァァッ！　わしはごく普通の一いつ般ぱん的で標準的な人間や……！」

「あくまでそう信じたいんだ」

「わしが信じんかったら、誰も信じてくれへんからなッ！」

「まあ、そんなに気を落とさないで」

「落とすわっ！　ええかげん泣いてまうで！　ええんか！　泣いてええんやな！　びえええええええええええええええええええええん」

　カタリは床ゆかに倒たおれこんで号ごう泣きゆうしはじめた。いや、泣いているふりか。涙なみだは出ていない。いったい何なのだろう、この男の人は。ルーシーは呆あつ気けにとられていた。マリアローズに肩かたを叩かれなかったら、いつまでもぼうっとしていたかもしれない。

「クランっていってもわからないかな。そのへんはあとで説明してあげるけど、みんな仲間なんだ。変なのもいるけどね。ああ見えて最悪ってほどじゃないから、心配しなくてもいいよ。とりあえず、座って」

　ぼんやりとうなずくと、ユリカとサフィニアが椅い子すのところまで連れていってくれた。クラン。仲間。わからないことだらけだ。混乱してさえいたが、不安はなかった。それどころか、うきうきしていた。ユリカがかわいくて、サフィニアはきれいで、マリアローズは聖女だからだ。正直、彼女たちに囲まれているだけで気分がよかった。父にはなかなか会えそうにないが、マリアローズに命を救ってもらった。さらに、ユリカとサフィニアに引きあわせてもらうことができた。ぼくはなんて運がいいんだろう。

Omenage 899 4th revolution 25th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.4

やせ我慢することと見つけたり

小一時間かけていろいろなことを教えてもらってから、みんなで事務所を出た。第五区の鉄てつ鎖さの憩いこい場ばという場所で、今後の生活に必要なものを見みつ繕くろってもらうことになったのだ。

ルーシーは無一文なので、お金はマリアローズとカタリに貸してもらい、出世払ばらいする約束をした。心苦しかったが、とにかくカタリが張りきっていて、ルーシーをあっちこっちの店に引っぱりまわし、あれがええ、いやこっちのほうがええな、それともこっちやろか、ううむ、悩なやみどころやな、と大車輪の大だい活かつ躍やくだった。

途と中ちゆうまではそうだったのだ。

「やっぱしアレやな。専門店に行ったほうがええかもしらんな。安物買いの銭失いっちゅう言葉もあることやしな。なあに、心配することあらへん。このわしに任しとき。どおーんとな。ん？　なんや？　ああ、銭のことなら気にせんでええわ。今日はわしがな。ばしーんと奢おごったるさかい。バチコーンやで。ヌワッハッハッハッ」

カタリはそんなことを言いだして市場から離はなれ、道沿いの立派できらびやかな建物にルーシーを引っぱりこんだ。他の面々はもう、ただゆっくりと追いかけてくるといった感じで、どうもカタリに苦手意識を抱いだきつつあるルーシーはやや心こころ許もとなかったが、親切な人ではあるのだろう。それに、マリアローズが止めないのだから、おかしなことにはならないはずだ。

「よっしゃ。これとこれ、それから、これやな。まずはええやろ。なッ。ほんなら、店員はん、この子に試着させたってや。ちなみに、わしはな。カタリやで。もちろん知っとんのやろ。なんべんもこの店で買わせてもろうとるからな。お得意さんや。ほれ、ルーシーちゃん、試着室はそこや。そんな顔するなて。のぞいたりせえへんがな。大だい丈じよう夫ぶや。わしは漢で、なおかつ紳しん士しやさかい」

背中を押されて試着室とかいう小さな部屋に入らされ、服を何着も持たされた。ドアが閉められると、ルーシーは一人きりだった。この部屋の壁かべは鏡張りになっている。どうやら、渡わたされた

服を着てみせろ、ということらしい。

　ルーシーは着ていたマリアローズのお下がりを脱ぬいで、新しい服を身につけてみた。チュニックというのだろうか。腰くらいまでの丈たけの上衣と、それからスカートを穿はいたのだが、少々短すぎる。膝ひざ上うえ約十五サンチだ。これだとさすがにすーすーする。

「終わりよったかー」

「あ、はい」

「ほんなら開けるで」

　カタリがドアを開けて、たぶんルーシーの全身を視界に収めるためだろう、ぴょんと跳とびさがって距きょ離りをとり、離れ気味の目を細めた。

「ほうほうほう。ええやないか。なあ。店員はんもそう思うやろ」

「ええ。よくお似合いですよ」

　女性の店員は、マリアローズやサフィニアほどではないが、それなりにこぎれいな人だった。ルーシーはあらわになっている脚あしを手で隠かくそうとしたが、隠しきれるものではない。

「でも、スカートが短くて……」

「お客様はおみあしが細くてらっしゃって、形も大変おきれいですから、短ければ短いほどいいくらいですよ。今は短めのソックスをお履はきになってらっしゃいますが、長めのものをあわせてもよろしいですし、肌はだをお出しになるのが気になるのでしたら、エッグスターＳという極ごく薄うすの複合強化繊せん維いでできたタイツもございます。ブーツをお履きになってもよろしいのではないでしょうか」

「ああ……ええと、そういうもの、なんですか」

「はい」

　店員はにっこり笑うと、ルーシーに近づいてきてスカートの裾すそを引っぱったり衿えりや袖そでを整えたりした。

「サイズもよろしいようですね」

「あの、スカートが、ちょっときついみたいなんですが」

「かなりタイトなデザインなので」

　店員の視線がルーシーの股こ間かんのあたりで静止した。

「かなり、タイトな……」

　首をひねっている。どうしたのだろう。よくわからないが、それにしてもこのスカートはやはりきつい。ルーシーは幼いころからよく母に作ってもらったスカートを穿いていたが、もっとゆったりしたものばかりだったのだ。

「あの、もっと大きめのはありませんか。これだと動きにくいかもしれないです」

「あ、ええ、試着室にお持ちになったものの中には、ロングスカートもあるはずですが」

「そうでしたっけ」

　ルーシーは振ふり向いて、脱いだ服の下から長いスカートを探さぐりあてた。これなら大丈夫だろう。嬉しくなって、思わずドアを閉めずにスカートを脱ぎはじめてしまった。いけない。人前で裸はだかになってはいけないと、昨日、マリアローズに注意されたのだった。とはいえ、下着はつけているので大丈夫だろう。

「ご、ごめんなさい」

　ルーシーはいちおう謝りながらドアを閉めようとしたのだが、店員が両眼をいっぱいに見開いて全身を硬こう直ちよくさせている。店員だけではない。カタリも同じだ。いや、カタリに至っては目玉が飛びだしかけていた。

「……ど、どうかしました？」

「え、あ、う、あ」

　店員は短い声を立てつづけにもらしてから、引きつった笑えみを浮うかべた。

「す、すみません、その、わ、私、てっきり……」

「はい？」

「おっ！」

　いきなり叫さけんだのはカタリだった。

「お！　お！　お！　おっ！　お、お、お！　おおおおおおおおおおおお……！」

「お……？」

「ＯＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨＨ……！　□□と、ちょい待ってな、うんしょっと」

　カタリは完全に飛びだした眼球を両手で引っこめ、胸に手をあてて一呼吸ついてから、あらためて絶ぜつ叫きようした。

「──男やてエ
エェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェエ
エ……ッ!?」

「え？　ぼくですか？」

「お前じぶん以外誰だれがおるんやああああこの状じよう況きよう下かでえええええどう考えたかてお前じぶんやろおおお」

「ぼくは男ですけど」

「ほんならなんでスカアアァァァツッ否いなッ！　スキャットッ！　ノオォォウッ！　もとい、いわゆる一つのスカアァァァトをおおおおおおおおおう」

「だって、これを着ろとカタリさんが」

「せやかてお前じぶんえらいフツーに穿はいとったやろっ」

「スカートはお母さんが作ってくれて、お父さんもかわいいと言ってくれたので、よく穿いていたんです。何かおかしいんでしょうか」

「いやおかしいっちゅうかなんちゅうかな、べつにええんやけども

そうやなくて、ようするにわしの言いたいことはやで？　さくっとゆわしてもらうけどな？　包み隠さずな？　ええか？　心の準備は？　ホンマにええんやな？」

「は、はい」

「違い和わ感かんゼロやった……ッ！　よう似に合おとった……ッ！　誤解を恐おそれずにゆうわ！　はっきりゆうて、わりとタイプやった……ッ！　年がちょっとアレかもわからんけど、ゆうてもかわいいやん？　それが何より一番大事なことやん？　みたいに思うとったッ！　そんだのにお前じぶん、男なんかいッ！　つくモンしっかりついとんのかァァァい……！」

「ご、ごめんなさい。ぼく、生まれてからずっと男の子です。つくものも、たぶんちゃんとついています」

「がっふーん」

　カタリは顔面から床ゆかに倒たおれこんだ。とても痛そうだ。大だい丈じよう夫ぶなのだろうか。助け起こそうとしたら、拒こばまれた。

「……わしのことはそっとしといてくれ。今しばらくはな。こほほほほ……」

　どうやらルーシーは、カタリの心に痛手を負わせてしまったようだ。慰なぐさめることはできそうにない。途と方ほうに暮れていると、店員が別の衣類を持ってきてくれた。その服に着き替がえて試着室を出たら、ちょうどマリアローズたちが店に入ってきたところだった。

「あ、いいんじゃない？」

　マリアローズはまだ倒れているカタリには見向きもせず、ルーシーの全身をざっと見てうなずいた。

「うん。丈の短いパンツに長なが袖そでのシャツをあわせて、ジャケットは七分袖で身み頃ごろも短めだから、バランスがいいよね」

「靴くつは……ブーツでしょうね……これだと……」

　サフィニアがマリアローズの横から顔を出した。ユリカもその隣

となりにいてルーシーをしげしげと眺めているが、かわいらしく眉まゆをひそめて無言だ。不満があるというよりも、いったいこれは何だろう、と頭をひねっているように見える。

「まあ、頑がん丈じようそうだし、悪くないんじゃないか」

　彼女たちの後ろで、眠ねむそうな目をして頭を掻かいているトマトクンは、いかにも興味がなさそうだ。ピンパーネルはそのかたわらでぼんやりと天てん井じようを見ていた。

「そりゃあ、頑丈さは折り紙付きだと思うけどさ……」

　マリアローズはトマトクンを一いち瞥べつして肩かたをすくめた。

「何しろここ、ドラッグスター・タイクンの直営店だからね。ちょっと値が張るけど、それに見あうくらい品質もいいし。ここ数年、ずっと流行の最さい先せん端たんに近いところを突つっ走ってるブランドなんだよ」

「ありがとうございます」

　店員がマリアローズに向かって会え釈しやくした。固有名詞についてはまったくわからないが、どうやらルーシーは今、かなり高価な服を身につけているようだ。店の雰ふん囲い気きといい、置かれている品物といい、なんとなく自分にはそぐわないと感じていた。そのとおりだったわけだ。

「あの、やっぱり、ぼく、これは……」

　ルーシーは上うわ目め遣づかいでマリアローズたちや店員を見まわしてから、頭を下げた。

「ごめんなさい。着き心ごこ地ちがいいし、とても気に入ったんですけど、なんていうか……」

「気に入ったんなら、それに決めたら？　高いものはやっぱり長持ちするしね。そうはいっても、もう一着くらい買っといたほうがいいんじゃないかと思うけど」

「で、でも……」

「ああ、値段？」

　目の錯さつ覚かくだろうか。橙だいだい色いろの瞳ひとみが、きらん、と鋭するどい輝かがやきを宿したように見えた。

「おねえさん、ちょっと」

　マリアローズは店員を手招きした。その手つきと笑顔がなぜだか妙みように恐ろしかった。

　最初、マリアローズはにこやかに店員と話していたが、だんだんと不満そうな表情や厳しい口調が交じるようになった。店員は徐じよ々じよにたじたじとなって、そこに、こんなものはないか、あんなものは、というマリアローズの声が飛んだ。店員は店の中を駆かけずりまわって、次々と品物を持ってきた。ルーシーはマリアローズの命令でそれらを試着しては脱ぬぎ、また別のものを試着した。その間もマリアローズは店員を質しつ問もん攻ぜめにし、あるいは他ほかの店を引きあいに出して欠点や短所を指し摘てきした。店員は真しん剣けんな顔で聞き入ったり、弱々しく反論したり、平謝りに謝ったりで、一いつ瞬しゆんたりとも気の休まる時間がなさそうだった。そうしてとうとう店員が困り果てたように黙だまりこんでしまうと、マリアローズは急に態度を軟なん化かさせた。攻せめて、攻めたてて、いきなり譲じよう歩ほに転じたときのマリアローズは、途方もなく心優やさしい女性に見えた。ひょっとしたら、店員の目にもそう映っていたかもしれない。

「わかりました」

　店員は額に光る汗あせをぬぐって、ほっとしたような笑えみを浮かべた。

「それでは、あちらとこちらをあわせて、できるかぎりお値引きさせていただきます。店長と相談してまいらねばなりませんが、おそらくなんとかなるでしょう。なんとかいたします」

「なんか、いろいろ無理言っちゃってごめんね」

「とんでもありません」

　店員は誇ほこらしげですがすがしい表情をしていた。マリアローズも満足げだった。二人は見つめあい、握あく手しゆでもしそうな様子だったが、さすがにそれはなかった。ただ、お互たがいの間に

ある種の信しん頼らい関係が築かれたことは間ま違ちがいなさそうだ。

「ありがと」

「こちらこそ、とても勉強になりました。そのぶん、勉強させていただきます」

　店員は一礼していったんどこかに引っこみ、すぐに戻もどってきた。

「それでは、お会計を」

「だってさ」

　マリアローズはカタリの尻しりを蹴け飛とばした。死んだ魚のように倒たおれていたカタリは、魚ぎよんっ、と謎なぞの悲鳴をあげて跳びあがり、左右を見まわした。

「ほろ？　ほろろろろ……？」

「そんなホロホロ鳥みたいな鳴き声出してないで、さっさと会計すましてよ。ホロホロ鳥って何って話だけど」

「あろ？　へ？」

　カタリは自分を指さして魚眼をいっぱいに見開いた。

「わ、わし……？」

「あたりまえでしょ」

「な、なんでやねん」

「なんでも何も」

　マリアローズはサフィニア、ユリカと視線を交かわして、かすかに笑った。二人も笑いを嚙かみ殺そうとして、嚙み殺しきれずにいる。ルーシーにはまったく事情がのみこめないが、何か通じあっているものがあるようだ。

「きみ、いっつも言ってるよね？　漢おとこに二言はないって」

「ふぇ？　あ、おお、それは……」

「だったら、ここはきみが払はらわないと」

「せ、せやからなんで──」

　カタリの顔色が急変して、顔面の筋肉が一いつ斉せいに引きつった。

　マリアローズが、やれやれ、という感じで両手を広げてみせた。

「念のために再現してあげよっか？　ああ、銭のことなら気にせんでええわ。今日はわしがな。ばしーんと奢おごったるさかい。バチコーンやで。たぶん一言一句間違ってないと思うけどね」

「……いや、それはな？　アレやで？　ほれ、わしもな？　なんちゅうの？　勘かん違ちがいっちゅうか早とちりっちゅうかな？」

「どういう勘違いしてたんだか」

「ゆわすなや！　思いだしてまうやんか！　グサッときたのに、またグサグサッとくるやろ！　情け心っちゅうもんがないんかい！　ええわ！　ほんだらな！　ゆうわ！　おお、ゆうたるがな！　せや！　ご想像のとおりや！　ルーシーのことをな！　女の子だと思っとったッ！　思いまくっとったッ！　ほんで、ええとこ見せたろ思てな！　そないなわけであないなことをついポロッと出来心でな！」

「だから前言をひるがえすの？」

「ぜ、前言っちゅうか、前提が……」

「ルーシーが女の子じゃなきゃダメとか、そういう条件はとくにつけてなかったように記き憶おくしてるんだけど」

「まさか男とは思とらんかったし……」

「女の子だなんて一言も言わなかったはずだけどね」

「見た目が……それに、名前も……」

「だからって前言をひるがえすんだ？」

「……そ、そういうことやなくてやな……」

「じゃあどういうことなの？」

「そのあたりは、そのう……」

「ま、どっちにしても、物の見事に二言があったわけだから、きみは漢なんかじゃないってことだよね」

「んぐっ」

　カタリは矢でも突き刺さったように両手で胸を押さえてうつむいた。

「──く、く、く、くうぅぅぅぅ……わ、わしは……わしはああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

「あーあ。なーんかがっかりだよ。日ごろから偉えらそうな口たたいてるわりには、いざとなるとこうだもん」

「わ、わしはあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

「結局、見たまんまってことだよね。かっこわるっ」

「わしはッ！」

　カタリは右の拳こぶしを天に突きあげて叫さけんだ。

「漢やああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！　漢に二に言ごんはないッ！　それこそがッ！　まさしくわしの座右の銘めいッ！　ゆえに！　ゆえにゆえにゆえにやでェェッ！　支払いはあぁぁぁぁ！　わしがするッ！　ぜんぶわしがッ！　すなわちッ！　わしの奢りっちゅうことやアァァハアァァァッ……ッ！」

「いいから、さっさと支払いすませて？」

「バチコーンやっ」

　カタリはワシャシャシャ呵か々か大たい笑しようしたかと思うと、いきなりがっくりと肩かたを落とした。それでもすぐにまた胸を張りなおして、店員と一いつ緒しよに店の奥のほうへと向かって

ゆく姿はたしかに雄おゝおしかった。

　ルーシーたちはこのあとも数すう軒けんの店を回り、肌はだ着ぎや背負い袋ぶくろ、それからナイフと剣けん、盾たてを買い入れた。金はすべて気前よくカタリが出してくれた。ルーシーが礼を言うたびに、ええんや、気にせんでええ、と笑ってみせるカタリの目め尻じりには、決まって涙なみだがにじんでいた。もしかしたら、漢の道とはやせ我が慢まんすることなのかもしれない。

Omenage 899 4th revolution 25th day

サンランド無統治王国首都エルデンアンダーグラウンドD13上層テトルアープ

chapter.5

打ちのめす残酷な真実

広いなんてものじゃない。

乱雑に建ちならんでいる石造りの粗そ末まつな家屋は、ものすごい数だ。

お天てん道と様さまは影かげも形も見えないが、あちこちに篝かがり火びが焚たかれているので、暗くはない。

声が聞こえる。人間のものではない。鳴き声というべきだろうか。

たくさんの生き物がいて、息をして、動いているのだ。

目をつぶって耳をふさいでも、彼らの気配を感じる。

ここが地下だなんて信じられない。あれだけたくさんの人々が住んでいる巨きょ大だいな街の下に、こんな空間が広がっているなんて。

いや、マリアローズやカタリの説明によると、ここはもともと地下ではなかったのだという。現在、エルデンがある場所には、かつてすり鉢ばち状の途と方ほうもなく大きな窪くぼ地ちがあった。その窪地は、メガボロス、と呼ばれていた。古い言葉で、大きな穴、という意味らしい。

メガボロスの各所には、どういうわけか異界への扉とびらが点在していた。そこから人間の世界に入りこんできた異界生物フリークスたちが、激しく相争いながらも、永遠エターナル大陸コンチネント・輝けるルミナスアルファの北西部を我が物顔でのし歩いていたのだ。

つまり、その昔、サンランド無統治王国の領土は人間のものではなかった。異界生物フリークスに支配されていて、人間たちはあまり立ち入ることができなかった。この地方が、混エ沌ルとデ恐エ怖イの二巷オ、というおどろおどろしい名で呼ばれていたのは、そういう理由からだった。

そこで、いつまでもあいつらをのさばらせておけるか、とばかりに立ちあがったのが、魔ま導どう王〝原子のアトミック・極大マキシマム・魔術師ドレッドスター〟キング・グッダーだ。

キング・グッダーは九く頭ず竜りゅうノ・インと魔導兵団を従えて、異界生物フリークスの大軍団と戦った。この戦いの模様は明らかになっていないのだが、結果はわかっている。サンランド無統治王国ができ、エルデンがあるということは、キング・グッダーが勝利したのだ。

激戦で命を落としたというノ・インの骨は、メガボロスを封ふうじこめる蓋ふたとして築かれたエルデンの土台となった。キング・グッダーは、九頭竜レガシオス・大骨格ノ・インを触しよく媒ばいとして大いなる古代呪じゅ式しき〝古代九頭竜の呪のろい〟を施ほどこし、異界生物フリークスたちが二度と地上に出てこられないようにした。

この呪式は今も機能している。歴代のキング・グッダーが呪式を維い持じしつづけているのだ。この国の王様が人前に姿を現すことがないのは、ずっと魔力をそそいでいないと、呪式が破れてしまうからではないか。そんなふうにも言われているらしい。とにかく、人間が地下に入りこまないかぎり、異界生物フリークスと顔をあわせることはないのだ。

もちろんルーシーなら、得体の知れない異界生物フリークスがうようよしている場所なんかに、わざわざ足を踏ふみ入れようとは思わない。臆おく病びようなのだろうか。冒ぼう険けん心しんや探求心がないと言われれば、たしかにそうかもしれない。地面に穴をあけて、九頭竜レガシオス・大骨格ノ・インの隙すき間まを探して掘ほり進め、封ふう印いんされた地下空間にどうにかして到とう達たつしようとした人たちの気持ちは、ルーシーの想像を超こえている。

ただ、異界生物フリークスたちが財宝を隠かくし持っていることを初めから知っていたとしたら、どうだろうか。

イディオット・デイモンという昔の偉えらい人が、アンダーグラウンド、と名づけたこの地下空間は、地上のどこにも存在しないような宝の山だったのだ。

探たん索さく者たちが異界生物フリークスからぶんどったお宝を持ち帰ると、人々はこぞってアンダーグラウンドを目指した。

欲に目がくらんだ人間たちは、かつて侵しん略りやく者だった異界生物フリークスの領土を傍ぼう若じやく無人に踏み荒あらす侵入

者クラツカーとなった。

「簡単にゆうと、やな」

　カタリがこんなふうに解説してくれた。

「エルデンの中心産業は略りやく奪だつなんや。相手は異界生物フリークスやけどな。侵入者クラツカーのなり手はいくらでもおるから、労働量が不足するっちゅうことはまずない。アンダーグラウンド産のお宝は、世界中からそれ目当てで集まってくる大金持ち小金持ちが手当たり次し第だいに買っていきよる。人がぎょうさんおれば、自然といろんな需じゆ要ようが発生するやろ。需要があれば、ほんならわしが供給したろっちゅうやつも現れる。運さえよければ、一いつ攫かく千金も夢やないからな。これ以上あらへんっちゅうくらい金回りがええ街やし、高級品もさばける。あれも、これも、それも売れる。そないにして、どんどん広がりと深さを増していきよって、もうわッけわからんくらいごっちゃになってもうてるんが、今のエルデンなんや」

　とにかく今日は、適性があるかどうか確かめるだけだから、自分の身を守ることだけに集中して、とマリアローズにアドバイスされた。

　選んでもらった両りよう刃ばの剣は、がっしりしているわりに軽い。剣けん身しんが短めだからだろうか。ルーシーは、もっと長くてすらっとした片刃の剣、モトロール刀と呼ばれている種類のものがよさそうだと思ったのだが、却きやつ下かされた。なんでもモトロール刀は、斬きれ味こそいいものの、扱あつかい方が悪いとすぐ刃はこぼれするし、基本的な刀かたな捌さばきくらい覚えていないと、ろくに使えないのだという。

　盾は丸い形で、せいぜい直径三十五サンチくらいだろう。これも、身体からだが半分くらい隠れるほど大きくて、反りのある長方形の盾をルーシーが手にとろうとしたら、バカじゃないの、と怒おこられてしまった。

「そんなでっかいの、きみの体格で使えるわけないでしょ」

　たしかにそうかもしれないが、いくらなんでも小さすぎるのではないか。不安だったので、がんばって抗こう弁べんしてみると、小さくていい、というのがマリアローズの答えだった。

「最初は少し手に余っても、使ってるうちにだんだん慣れていって、いつか使いこなせるようになる。それも一つのやり方だし、否定はしないけどね。でも、慣れる前に取り返しのつかないことになっちゃったらどうするの？　しょうがない、これも運命だって受け容いれる？　いいよ。それならそれで。個人的に行きあたりばったりは性しようにあわないけど、慎しん重ちように立ちまわってれば危ない目に遭あわないですむってわけでもないしね。リスクは減らせても、ゼロにはできないから」

「まあ、あまりでかいと邪じや魔まだしな」

「トマトきみの剣もかなり邪魔そうだけどね……」

「むう。言われてみれば、たまに邪魔くさいな」

「いざってときに持てあますわけじゃないから、べつにいいんだけどさ。あとは、向き不向きもあるからね。盾だって、ないほうがいい人もいるし。武器にしても、剣だけじゃなくて、鎚つちとか棍こん棒ぼうなんかの鈍どん器きとか、長すぎるとアンダーグラウンドでは不便だけど槍やりとか、弓矢とか、何が自分にあってるか見きわめるのも大事だよ」

「しょうね。わたしは剣なんて使ちゆかえないもの」

　ユリカはルーシーよりも年下で、しかも女の子なのに、長くてまっすぐな棒を持ち歩いている。とはいえ、服や帽ぼう子しと同じように白地に赤い線が入っていて、見た目はきれいだが、所しよ詮せん、棒だ。おそらく、護身用として一応、持ち歩いているだけなのだろう。

「……わたしは……武器は一いつ切さいダメで……魔ま術じゆつのみですし……」

　サフィニアの雰ふん囲い気きや、芸術品のようにきらびやかで美しい杖つえをついて歩いている姿を見て、もしやと思っていたが、本当に魔術士らしい。話に聞いたことがあるだけで、本物の魔術士と会うのはこれが初めてだ。

「ゆうても、好きこそものの上手なれ、ちゅう言葉もあるからな」

　カタリはちょっと変わった形の手て斧おのを二本、腰こしにぶらさげている。あれがカタリの武器に違ちがいない。

「これっちゅうモンをガッツガツ使つこたらええんや。好きになられへんモンやと、いつまでたってもしっくりこうへんかったりするからな。あるやん？　こう、こないな武器使て、あないな技わざバビッと決めたら、どんなに気持ちええやろなあ、とかな。大事やで。そういうのんはな。モチベーションになるさかい。のう、ピンパーネル。わしにはヴァリエーションの面で若じやつ干かん、いやいや遠く及およばんかもしれへんけど、お前じぶんも必ひつ殺さつ技わざぎょうさん持っとる身ぃや。そのへんはわかるやろ」

「わかりまセン」

　きっぱり否定してみせたピンパーネルも、ちゃんと腰の両側に短い剣を一本ずつ吊つるしているのだが、まったく物々しさを感じさせない。無口で飄ひよう々ひようとしているからだろうか。足音を立てずに歩き、身体のどこにも力が入っていないかのように見える、こういう人が意外と強かったりするのかもしれない。もしそのとおりなら、なんだかすごくかっこいいが、ルーシーとしてはカタリの言うことも理解できる。

　必殺技。バビッと決めて、スパッと敵を倒たおす。

　それではいったいどんな技を、と考えてみても、にわかには思いつかないが、たとえばモトロール刀でババッ、ズサッという具合に敵を斬り倒すことができたら、かなり気持ちよさそうだ。こんな短い剣と小さな盾では、自分の身を守るだけで精せいーいつ杯ぱいだろう。まさにそのために適当な武具として、マリアローズが選んでくれたのだ。それはわかっている。わかってはいても、カタリが口にしたモチベーションの問題だ。やるぞ、やってやるぞ、という気持ちになることができない。いまいち盛りあがらないのだ。

　侵入者クラッカーという仕事をこれからやってゆくかどうかはわからないが、どうせなら女性陣じんにいいところを見せたい。マリアローズに、ぜんぜん期待してなかったのに、けっこうやるじゃないか、と言われたい。ユリカに、しゅごいわ、と舌足らずのかわいい声で褒ほめてもらいたい。サフィニアにもいい印象を与あたえたい。

　それなのに、これでは無理だ。わずかな可能性もない。

　こんなことなら、マリアローズに逆らってでもモトロール刀を選ぶべきだった。虎こ視し眈たん々たんと活かつ躍やくの機会をうか

がい、ここぞというときに颯さつ爽そうと前へ出て、ばったばったと敵を薙なぎ倒すのだ。もちろん、それほどうまくはゆかないかもしれないが、絶対に不可能だとは言いきれないだろう。自分では気づいていなかっただけで、じつはルーシーには特別な才能が備わっていた。まだ人知れず眠ねむっている状態で、今日こそが目覚めのときだった。我ながらちょっと馬ば鹿か馬ば鹿かしいと思わなくもないが、ひそかにそんな夢を見るくらいのことは許されるはずだ。

「そろそろやばいエリアに入るよ。気を引きしめて」

　先頭のマリアローズが足を止めて振ふり返った。マリアローズからやや遅おくれて長身のトマトクン、その右みぎ斜ななめ後ろにユリカ、左斜め後ろにカタリがついて、三人が作っている三角形の真ん中にサフィニアがいる。ルーシーはサフィニアの後ろだ。ピンパーネルは最さい後こう尾びから後方をふくめた全周囲に目を光らせている、といった感じだろうか。

　気分は一向に昂こう揚ようしないが、それでも緊きん張ちようしてきた。いや、緊張はずっと前からしている。だんだんひどくなってきたのだ。

　マリアローズは右側の石造りの建物に背中をつけ、すすっと滑すべるように前進した。その先は曲がり角だ。トマトクンたちが静かにマリアローズの後ろについたので、ルーシーも慌あわてて従った。このままみんなで進むのかと思いきや、トマトクンたちは止まって、マリアローズだけが曲がり角の向こうに姿を消した。一人で様子を見てくるつもりなのか。そういうことはカタリあたりがやればいいのに。何もマリアローズがやることはない。気がかりだが、マリアローズもルーシーごときに心配されたくはないだろう。マリアローズは間もなく戻もどってきた。

「この先五メーテルで左、その十メーテルくらい向こうが開けてて、群れがいるよ。数はたぶん十一」

「余よ裕ゆうだな」

　トマトクンが大剣の柄つかに手をかけて鼻を鳴らした。十一ということは、こっちよりもずっと数が多いのに、余裕なのだろうか。

「だが、まあ」

「うん。今日はルーシーがいるからね。きっちりいこう」

「しょうね」

「よっしゃ」

「……はい……」

「わかりまシタ」

「あの」

　ルーシーはおずおず手をあげた。途と端たんに全員の視線がルーシーに集中した。しりごみしてしまいそうになったが、どうにか踏んばった。

「……ぼくがいるから、きっちりって、どういう意味なのかな、と」

「ああ」

　他ほかの人たちは首をひねっているが、マリアローズだけはわかってくれたようだ。見み透すかされたことが、恥はずかしかった。尋たずねなければよかった。ふてくされているのがばれてしまうじゃないか。それとも、もうばれてしまっただろうか。

「うちの連中って、いいかげんなところがあるからさ。出たとこ勝負っていうか。仲間内では呼吸とかタイミングもわかってるから、なんとかなっちゃうんだけどね。もっとこう、変則的じゃない、ベーシックな動き方のほうが、見てて、ああ、こういうものなんだ、みたいに理解できると思うんだ。きっちりやるっていうのは、そういうことだよ」

「あ、なるほど」

「というわけなんで、しっかり見ててね」

「はい」

　マリアローズは嘘うそをついたわけではないだろう。ただ、同時に、ルーシーを傷つけまいとして言葉を選んでくれたに違いない。そのやさしさは涙なみだが出そうになるくらい嬉うれしいが、情け

なさは募つのる一方だ。

　ぼくは見ているだけ。見ていればいい。見ていることしかできない。

　仕方ないんだ。経験がないんだし。

　きっと、誰だれだってそうだ。

「じゃ、いいね」

　マリアローズが全員を見まわして、ルーシーをのぞいた皆みながうなずいた。よし、やるぞ、という雰囲気だったのに、ルーシーはまた手をあげてしまった。

「あの」

「ん？」

　まだ何かあるの、とでも言いたげな表情では決してなかった。マリアローズはむしろ、気づかわしげな顔つきでルーシーを見た。

「なに？」

「え……あの……」

　口ごもってしまったが、今さら、何でもない、とごまかしたら、かえって心配されてしまうかもしれない。

「ま、マリアローズさんは……侵入者クラツカー、なんですよね？」

「そうだね。職業は何って訊きかれたら、そう答えるしかないんじゃないかな」

「え、と……い、いつから、その、侵入者クラツカーをやっていたのかな、と……」

「うーん」

　マリアローズはほどよく尖とがっている顎あごをつまんだ。

「十四歳だったかな。そのころは一人だったけど」

「じゅっ──」

　十四歳。

　なんてことだろう。

　ルーシーはこれでも十六歳なのだ。十四歳。しかも、女の子なのに。十四歳の女の子が、たった一人で侵入者クラツカーをやっていたというのか。それに比べて、ルーシーは男なのに、十六歳なのに、大勢に守られて、後ろから見ているだけ。本当にそれでいいのだろうか。

「……そ、そう……ですか」

「人それぞれだからね。誰にだって初めてのときはあるんだし、それがいつかなんて、必ずしも自分で決められるわけでもないんだから、気にしないほうがいいよ」

　なんとか首を縦に振りはしたが、橙だいだい色いろの瞳ひとみを直視することはできなかった。

　マリアローズはもう一度、全員に準備ができているか確かく認にんしてから、ピンパーネルにルーシーをカバーするように言い添そえた。考えすぎかもしれないが、さっきのやりとりで、不安だからピンパーネルにお守りをしてもらおう、と思わせてしまったのではないだろうか。しゃんとしないといけない。気合を入れて、見返してやれ。どうやって？　できっこない。そんな機会は与あたえられないのだ。

　だからといって、やれ、と言われたこともできないのでは、あまりにもかっこわるい。見る。よく見るのだ。観察する。それくらいならルーシーにもできる。

　先頭はトマトクンに代わった。その右斜め後ろにマリアローズ、左斜め後ろにカタリがつき、三人のあとにユリカ、サフィニア、ルーシーの順に並んだ。ピンパーネルは最さい後こう尾びのままだ。

「行くぞ」

　トマトクンが歩きだした。体勢を低くして、何というか、人間というよりも四つ足の猛もう獣じゅうを思わせる足どりだ。足音もほ

とんどしない。それはトマトクンだけではなかった。マリアローズたちも一いつ緒しよだ。ルーシーも音を立てないように気をつけて歩いた。こういうことはわりと得意なのだ。

　角を曲がって少し進むと、トマトクンが急に加速した。すぐ先を左だ。飛びこんでいった。マリアローズとカタリも遅おくれずにトマトクンについてゆく。ユリカとサフィニアはやや距きょ離りを開けて三人を追いかけるつもりのようだ。ようだ、じゃない。ルーシーも動かないといけない。慌あわてて走りだし、左へ九十度方向転てん換かんする直前か同時か直後に大きな声が聞こえてきた。

「ぬうううううううあああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁ……！」

　すさまじい咆ほう吼こうだった。思わず足がすくんでしまいそうになった。次の瞬しゅん間かん、目に飛びこんできた光景はもっと恐おそろしかった。

　トマトクンは右みぎ肩かたにかつぐように構えていた大たい剣けんを、左ひだり斜ななめ下に向かって振りおろした。もちろん、大剣は空を斬きったのではない。そこには全身を鱗うろこに覆おおわれた人間型の生き物たちがいた。そう。たち、だ。一人（？）ではなかった。何人もいた。彼らは突とつ然ぜん襲おそいかかってきた人間たち、つまり、トマトクン以下、一応ルーシーをふくめて七名に驚おどろいて、逃にげ腰ごしになった。そこにトマトクンが突進していって、三人の鱗人間たちを一挙に、大剣のたった一振りで、じつにたやすく、簡単に、ズッパーンと真っ二つにしてしまったのだ。

　もっとも、真っ二つというのは印象でしかなく、正確には、彼らの身体からだは左右の下か膊はくと上半身と下半身、左腕と上半身と下半身、右足と左足とそれ以外の部分などに分断されて、大量の血液を撒まき散らしながら飛び散り、ばしゃ、ぶしゅ、ぐりゅ、どさっ、という感じのとても不気味で不快な音を立てて床ゆかに落ちた。

　血の気が引いた。

　目が眩くらみそうになったというか、完全に眩んだ。

　当然、走るどころか歩くのも無理で、立ち止まるどころか倒れそ

うになった。

「──トマト、やりすぎ……！」

　マリアローズがトマトクンの脇わきを走り抜ぬけざま、口早に注意した。

「おお、すまん」

　トマトクンは謝りながらもまたもや大剣を振るって、さらに二人の鱗人間をバラバラ死体に変えた。

　我が慢まんしようとしたが、呻うめいてしまった。ダメだ。何かがせりあがってくる。身体の中からだ。胃から食べたものが逆流してくる。吐はきそうだ。だって、ひどい眺ながめだし、すごいにおいなのだ。血とか、内臓とか、そういった物のなまぐさささだけではない。たぶん、排はい泄せつ物ぶつの悪あく臭しゅうも混じっている。生き物があんなふうにされたら、こんなにおいがするのだ。なまじ、どこか人間に似ているので、余計にきつい。でも、人間ではない。そうだ。銀色の鎧よろいを身にまとった死神と呼ばれる男が悪人たちを斬きり殺す場面を、ルーシーは間近に見た。そうして死体から麻あさ袋ぶくろを回収したのだ。あのときに比べれば、これくらい。そのはずなのに、どうしてもダメだ。やはり、このにおいのせいか。だったら、においなんて嗅かがなければいい。見なければいい。そうだ。息を止めて、目をつぶればいいのだ。それですべて解決だ。というよりも、そうしなければ今すぐ嘔おう吐としてしまう。それはいやだ。みっともないし、恥はずかしい。

　ルーシーなりに必死だった。懸けん命めいに吐き気けをこらえていた。

　呼吸ができないので苦しいわ、膝ひざが震ふるえるわ、身体中から脂あぶら汗あせがにじみだすわで、それはもう大変だったのだ。

　おかげで、何も見ることができなかった。物音や声もほとんど聞いていなかった。

　肩を叩たたかれて、もう終わったよ、と言われた。

　びっくりして目を開けると、すぐそこにマリアローズがいて、つい息を吸ってしまい、空気と一緒にあのにおいが鼻び腔こうへと押しよせてきた。ふむう、というような変な声が出て、肋あばら骨ぼ

ねの裏側あたりがぴくぴくしているのがわかった。マリアローズの肩かた越ごしに惨さん劇げきの現場をちらりと見た瞬間、もうダメかもしれないと思った。いや。ダメじゃない。目の前にマリアローズがいる。ここで吐くわけにはゆかない。がんばれ、ルーシー。負けるな、ルーシー。醜しゆう態たいをさらして呆あきれられたいのか。それはいやだ。絶対にいやだ。

「す、すみません」

　ルーシーはマリアローズに背中を向けてしゃがみこんだ。落ちつけ。そうだ。落ちつくまで待つんだ。大だい丈じよう夫ぶだ。きっとそのうち平気になる。だって、みんな平気そうじゃないか。トマトクンやカタリやピンパーネルはともかく、サフィニアやマリアローズ、それに小さなユリカだって。ぼくに耐たえられないわけがない。耐えられないとしたら、あまりにも情けない。必要なのは時間だ。時間。いつまでこうしていれば……？

　口だけで息をするようにした。このにおいはやっぱり耐えがたい。

　足。手。力は入る。立ちあがれ、ルーシー。よし。立った。

「大丈夫？」

「……は、はい」

　油断すると、鼻呼吸になってしまう。注意して返事をした。振り返ることはできなかった。あの光景を直視して、平然としていられる自信がない。

「まあ、初めてだしね」

　マリアローズの声はやさしかった。

「考えてみたら、こういうのに慣れきってて、何とも思わないほうがおかしいわけで。慣れてたって、べつに気持ちのいいものじゃないし」

「わしはしょっぱなからゼンッゼン平気やったで」

「きみは鈍にぶいからでしょ。魚って、痛いとか苦しいとか感じないとかいうし」

「オゥフッ！　それでやったんかあ！　──ってダァホ！　こんなわしかてなあ、痛みくらい感じるわ！　よってわしは魚やない！　見事ッ！　証明完かん了りよう！　えっへん、おっほん！」

「試ためシテ・みますカ」

「あぃだだだッ！　痛いわァッ！　ちょぴっとっちゅうてもなあ！　そんな剣の先とか突つき刺さされたら痛いに決まっとるやないけ！」

　ルーシーはまだ振り向くことができないでいるが、にぎやかで、楽しそうで、ちょっとだけ元気が出てきた。

「わたしは医い術じゆちゆ士しだから、けっこう平気といえば平気だけど、しょれもやっぱり慣れているからよね」

「……わたしは……あまり……いまだに、得意じゃないかも……」

　この暗い声はサフィニアだ。そうか。そうだったのか。サフィニアも、まったく平気というわけではなくて、我慢しているだけなのだ。我慢だ。我慢すればいいのだ。

　勇気をふりしぼって、一いつ瞬しゆんだけ振り向いてみた。途と端たんにあふれてきそうになり、大おお慌あわてで口を押さえた。涙が出てきた。無理だ。我慢なんてできっこない。

「ゆ、ゆうてもな」

　カタリだ。ばんばん肩を叩かれた。やめてほしい。その振しん動どうがやばい。

「ほれ、あれや、向き不向きっちゅうかな。そういうのんもあるしな。どないしてもダメやったら、そこまで無理せんでも、他ほかの道かてぎょうさんあるわけやし──」

　向き不向き。

　その言葉がルーシーの胸に重たく響ひびいた。

　不向き。そうかもしれない。自分には向いていないのかもしれない。少なくとも、向いているとは思えない。ルーシーが今まで殺したことがあるのは、家の中に入りこんできた虫くらいだ。断りもな

く家に入ってくる、とくにゲジゲジは恐ろしくて、大だい嫌きらいで、憎にくたらしいので、フォークで突き刺して動けないようにし、長い身体からだを刻んで外に捨てた。暖だん炉ろに火が入っている季節は、炎ほのおに放ほうりこんで焼き殺した。母は怖こわがるばかりだったので、ゲジゲジの始末はルーシーの仕事だった。でも、ゲジゲジと鱗うろこ人間ではまったく違ちがう。ゲジゲジは、大きいものでも十五サンチ程度だし、毒を持っている場合もあるが、刺されても死ぬことはまずない。鱗人間は剣や槍やりを持っていた。あんなもので斬きられたり刺されたりしたら死んでしまう。身体も大きい。動きもなかなか素す早ばやかった。無理だ。ゲジゲジならいくらでも殺せるが、鱗人間だとそうはゆかない。

「あの」

「ほえ？」

「他の道って、どういうのがあるんでしょうか」

「ふぇーと、せやなあ、うーん、まあ、稀レ少ア物鑑かん定てい家とか、稀レ少ア物選定人とか、あとは、ええと……稀レ少ア価値判定人とか、まっ、あるわな。いろいろ」

「それ、ぜんぶ稀レ少ア物がらみじゃないか」

　すかさずマリアローズにつっこまれて、カタリがゲハハハッと笑った。なんだかよくわからないが、どれも聞き覚えのない職業だ。カタリはただ、ルーシーを元気づけようとして適当なことを言っただけなのかもしれない。少しだけありがたいが、かなり迷めい惑わくだ。

　もし侵入者クラツカーが向いていなかったら、ぼくはどうすればいいんだろう。

　ちらりとマリアローズの顔を見た。

　マリアローズは、しょうがないなあ、という感じで、それでも笑いかけてくれた。

「……情けない、です」

　思わず口をついて出た。言いだしてしまったら、止まらなくなった。

「ぼく、もう十六歳なのに。マリアローズさんは十四歳からやっているんでしょう。それなのに、ぼくは……ぼく、男なのに。怖おじ気づいて、何もできないどころか、動けなくなってしまって。情けないとか、そんなことを言う権利もないですよね。それ以前の問題です。どうして、ぼくは……かっこわるすぎますよね。女の人のマリアローズさんでも、あんなに――」

「え」

「あんなに……」

「あの、ちょっと」

　マリアローズの顔がわずかに引きつっている。何かまずいことを言ったのだろうか。言ったのだろう。みんなの前で、これ見よがしに弱音を吐はくなんて、それこそかっこわるい。慰なぐさめてもらおうという魂こん胆たんが見え見えだ。最悪だ。

「す、すみません、ぼく……」

「や、わかってくれれば、それでいいんだけど」

「ごめんなさい。ぼくは最低です。最低人間です。人と比べるよりも、自分がどうかっていうことですよね。そうですよね。その自分が問題なんですけど……」

「へ？　あれ？　なんか違くない？　もしかして、わかってない？」

「え？」

「僕」

　マリアローズは自分を指さした。その顔は依い然ぜんとして引きつっている。もしかして、怒おこっているのか。怒いかりをこらえにこらえて、爆ばく発はつする寸前でなんとか踏ふみとどまっている。そんな表情だ。

　というか、僕……？

　今、僕って言いましたか？　なんで、僕？

　その理由はほどなく本人によって明かされた。

「女の子じゃないんだけど」

「は」

　ルーシーは笑おうとしたのかもしれない。顔や喉のどのあたりの筋肉がこわばって、できなかった。結果的にはそれでよかったのかもしれない。周囲を見まわすと、目があったカタリやユリカ、サフィニアが、顔つきと仕し種ぐさで教えてくれた。笑っちゃダメだと。冗じよう談だんでも何でもない。それは紛まぎれもない事実、いや、真実なのだと。

　嘘うそでしょう。

　嘘だと言ってください。

　声なんかとても出せなかった。

　全身の力が抜けて、へたりこんでしまった。

　ルーシーの中で何かが崩くずれた。

　はかなく崩れ去った。

Omenage 899 4th revolution 25th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.6

独立宣言

結局、何かできるような状態ではなかったから、何もしないでトマトクンの家に帰り、ルーシーは自分の部屋へと直行した。なんとなく居い候そうろうさせてもらっているだけなので、自分の部屋というのも図ずう々ずうしいが、それ以外に適切な呼び方があるとも思えない。そんな場所に閉じこもることしかできない自分がみじめだった。マリアローズやユリカやサフィニアやカタリが何度かドアを叩たたいて声をかけてきたが、返事をすることさえできなかった。何を言えばいいかわからなかったし、下手に声を出そうとしたら、おかしなことを口走ってしまいそうで怖くもあった。きゅーがドアの向こうに食事を置いていってくれたことは知っていた。おなかはすいていたが、食べたくなかった。食べたら負けだと思った。

やがて外が真っ暗になり、明かりをつけていない部屋の中も暗くなった。

さらに夜が深まると、別の敵がルーシーの前に立ちはだかった。強大な敵だった。

部屋に閉じこもる前に、トイレに行っておけばよかった。

床ゆかに座りこみ、じっとして、冷や汗あせが出るまで我が慢まんしていたが、むなしい抵てい抗こうだった。とうとう限界に達して、部屋から出てトイレへ行くことを決意した。とてつもなく焦あせっていたのでよく覚えていないが、誰だれとも会わず、気配を感じることすらなく、無事トイレで用をすまして部屋に戻もどってこられた。ほっとしながらも、がっかりしている自分がいた。

途と中ちゆうで誰かと出くわしていたら、それがきっかけになって、この状じよう況きようから解放されたかもしれないのに。

解放？　妙みような考えだ。ぼくは自分がそうしたくて、勝手に部屋に閉じこもっているんじゃないか。それなのに、解放なんて。出たければ、出ればいいんだ。そして、ちゃんとみんなに謝って―謝る？　何をどう謝れば？　ぼくは何か悪いことをしたわけじゃない。いいことも、べつにしていないかもしれないけれど、悪いことはしていないはずだ。

だって、しょうがないじゃないか。ぼくには向いていないんだ。あんな野や蛮ばんな―そうだ、野蛮で、残ざん酷こくで、おぞまし

い仕事、できっこない。

　お母さんが生きていたら、ぼくは瘦やせた土地を必死に耕して、少なくても作物を収しゆう穫かくして、お母さんと分けあって食べて、お父さんの帰りを待って、今でもそんなふうに暮らしていたはずだ。それでよかった。不作だったり、川向こうのブラーニーに嫌いやがらせをされたり、大変なことはそれなりにあったけれど、不満はなかった。お母さんがいて、たまにお父さんもいて、ぼくがいる。ぼくにとってはそれだけが大事なことだった。どうしてお母さんは死んでしまったんだろう。

　病気のせいだ。灰はい死し病びよう。アシェローンにかけられた呪のろいだ。

　お母さんはアシェローンとして生まれついたせいで死んでしまった。ぼくだって、いつかあの呪わしい病に冒おかされて死ぬかもしれない。アシェローンだから、ぼくはこんなにみじめなんだ。どうしてぼくはアシェローンなんだろう。お母さんがアシェローンだったからだ。じゃあ、お母さんのせいなのか。

　そんなことはない。お母さんだって、好きこのんでアシェローンとして生まれてきたわけじゃないはずだ。これは運命なんだ。お母さんがアシェローンで、そのお母さんとお父さんが出会って、ぼくが生まれた。お父さんはたまにしか帰ってこないから、お母さんが死んで、ぼくは一人になった。ぜんぶ運命だ。どうしようもないんだ。何もかも受け容いれるしかない。体格からしてそうだけれど、ぼくはマリアローズさんにも、女の子にも劣おとる。からきし度胸がない。意い気く地じなしの能なしだ。女の子？　違ちがう。マリアローズさんは女じゃなかった。女じゃないなんて。嘘うそだ。そんなわけがない。だって、どう見ても女の人だ。すごくきれいで、かわいらしくもあって、思い浮うかべただけでうっとりしてしまう。でも、女じゃないって、本人が。他ほかの人たちも。嘘だ。嘘だ。嘘だ。

　ぼくは騙だまされているんじゃないだろうか。何のために？　ぼくを騙して、何の得が？　得をすることなんて、ありそうもない。だったら、本当にマリアローズさんは女じゃないのか。あんな男の人がいるのだろうか。信じられない。とても信じられない。無理だ。受け容れるなんて。できない。受け容れたくない。

　ちょっと照れ屋で、あんなにやさしくて、親切で、聖女みたいな

人が、男だなんて。

　どきどきしていたのに。

　そうだ。どきどきしていた。

　いつだったか、お母さんが教えてくれたのだ。お父さまと初めて会った瞬しゆん間かん、わたし、胸がどきどきして、顔が真っ赤になって、ああ、この人だ、と思ったの。この人と出会うために、わたしは生まれてきたに違いないって。あれだ。

　今から思えば、あの気持ちは、お母さんが教えてくれた、恋こい、だった。

　恋をしていたのだ。一ひと目め惚ぼれだった。それなのに、男だった。男に恋をしていたのだ。ぼくは男なのに。男が、男を。不毛だ。子供もできない。お父さんにも、お母さんにもなれない。お父さんとお母さんみたいに、愛しあうこともできないだろう。たぶん、できない。女の人だと思っていたからだ。間違えた。間違えてしまった。大きすぎる間違いだ。

　こうなったら、サフィニアさんでもユリカさんでもいい。サフィニアさんもきれいだし、ユリカさんは年下だろうけれど、かわいいし。いや、そういう問題じゃない。違う。断じて違う。おそらく。もうよくわからない。何がなんだかさっぱりだ。だって、あのマリアローズさんが男なのだ。そんなの、おかしい。そんなことがありうるのだとしたら、この世界はあまりにもめちゃくちゃすぎる。ぼくなんか、とうてい生きてゆけない。生きてゆけるはずがない。そうだ。死んだほうがいい。死んじゃえばいいんだ。死のう。今すぐ死のう。そうすれば、マリアローズさんが男だろうが、世界がはちゃめちゃだろうが、どうでもよくなる。

　ルーシーはベッドマットの下から、隠かくしてあった護身用のフォークをとりだした。部屋の真ん中に立って、右手でフォークを握にぎりしめていると、だんだん気持ちが落ちついてきた。ルーシーは今や奇き妙みようなほど冷静だった。このフォークをどこに突つき刺させば、ぼくは死ぬことができるだろうか。心臓だとしたら、胸？　たしか太い血管があるはずの手首？　それとも、首？　しくじったら、とても痛そうだ。きっと、すごく痛い。いやだな。痛いなんて。怖こわい。でも、それで終わりにできるなら。ぜんぶ片がつくのなら、我が慢まんできるかもしれない。

試ためしに、手首の裏側をフォークの先でつついてみた。この程度ならさして痛くない。ただ、そうとう力を入れないと、皮ひ膚ふを突き破ることはできないだろう。でも、そうだ。考えてみれば、何もフォークを使うことはないのだ。カタリに買ってもらった武器がある。こういう用よう途とだと、剣けんでは少々大きすぎるかもしれない。ナイフがいいだろう。

武器などの装備は、部屋に戻ってすぐ外して隅すみのほうへ放ほうり、そのままにしてあった。ルーシーはナイフを手にとって鞘さやを払はらい、研とぎ澄すまされた刃はの部分を見つめた。カーテンを閉めていないので、窓から射さしこむ月明かりがナイフの刃に反射している。

なんだか、とてもおいしそうだ。

ルーシーは刃を舐なめてみた。途と端たんに唾だ液えきがあふれてきて、胸がきゅんとした。金属の味しかしないのに、すごくおいしい。もっと舐めたい。我慢できず刃に舌を這はわせると、動どう悸きがして、呼吸が乱れた。頭がぼうっとする。ダメだ。このままだと、おかしくなってしまう。そう思うのに、止やめられない。

舌の先に鋭するどい痛みが走った。

慌あわててナイフを口くち許もとから離はなし、指で舌にふれてみると、また痛みを感じた。

すっかり闇やみに慣れた目で、指先を見つめた。

唾液ではない、色のある液体でぬれている。

血だ。

ほら。

このナイフなら、たやすい。

ルーシーは洟はなをすすって、一人、ふふっ、と笑った。もっと大笑いしたい気分だったが、そこはこらえた。さあ、どこにしようか。心臓。手首。首。どこでもいい。このナイフなら、確実に命を絶つことができる。ナイフの刃を見ると舐めたくて仕方なくなるので、できるだけ目を向けないようにした。とりあえず、手首にしようか。それなら、なんとなく場所もわかる。うまくゆかなかった

ら、他のところを試せばいい。ちゃんと決着がつくまで、何度でもやればいいのだ。

　目をつぶって、手首の裏側にナイフの刃をあてた。

　深呼吸をした。

　ばいばい、お母さん。

　そう呟つぶやきかけて、苦く笑しようした。違う。さよならじゃない。ぼくはこれからお母さんに会いにゆくんだ。

　母の顔が脳のう裏りに浮かんだ。

　母の声も。

　母の感かん触しよくも。

　母のにおいも。

　そして、母の言葉も。

　お母さんが三分の一だったから、あなたはきっと三分の二だわ。

「……あ」

　わっとすごい勢いでこみあげてきた。抑おさえられない。両りよう眼めからだ。

　これは涙なみだだ。

　でも、我が慢まんしなくちゃ。だって、お母さんに言われた。泣いてはいけないわ、ルーシー。泣かないで。お母さんは嬉うれしいの。お父さまに会えて、あなたを授さずかった。お父さまに会えたからこそ、あなたに会うことができた。ルーシー。すべてお父さまのおかげよ。お父さまは強い人だわ。お父さまの血を引いているあなたは、絶対に三分の二よ、と。

　あなたは生きるの。

　生きるのよ、ルーシー。

　愛しているわ。

愛しているわ。

愛しているわ。

「ぼくは……」

手が激しく震ふるえだして、ナイフを落としてしまった。

何をやっているんだろう。ぼくは、いったい何を。こんなことをして。死にたい、だなんて。お母さんに会いに行くなんて。お母さんが喜んで迎むかえてくれるとでも……？

そんなはずがない。

お母さんは生きろと言った。あなたは生きて、と。

アシェローンの三分の一は灰死病で死ぬ。お母さんはその三分の一だった。でも、ぼくは違ちがうとお母さんは信じていた。

ぼくはお母さんだけの子供じゃない。お父さんの子供でもある。お父さんは逞たくましくて強くてかっこいい、すごい人だ。ぼくはあのお父さんの子供でもあるんだ。だから、ぼくは三分の二なんだ。そうじゃないといけないんだ。

生きないと。生き抜ぬかないと。そうして、お父さんに会うんだ。

ぼくがシー・シリーを出てエルデンまでやってきたのはそのためじゃないか。

涙や鼻水でどろどろになった顔をシーツでふいた。手首に薄うすい傷がついていて、血がにじんでいたので、それもふきとった。汚よごれたシーツはどうしよう。洗わないといけない。とりあえず丸めておいてドアを開けると、すぐ脇わきの床ゆかにトレイが置いてあった。きゅーが持ってきてくれた夕食だ。トイレへ行ったときは気にもとめなかったが、今はトレイの上の料理を目にした途と端たん、ぐう、とお腹なかが鳴った。

ルーシーはトレイを持って部屋に引き返し、夕食をむさぼり食った。もちろんとっくにさめていたが、とてもおいしかった。腹がいっぱいになると、眠ねむ気けに襲おそわれた。でも、シーツをこのままにはしておけない。もし誰だれかに出くわしたら、ちゃんと

挨あい拶さつをしよう。部屋を訪ねてきてくれたのに、返事もしなかったことを詫わびよう。そう決心して、丸めたシーツを持って洗面所へ向かった。洗面台で顔と手を洗ってから、石せつ鹼けんでシーツをもみ洗いして、何度もすすいだ。結局、誰にも会うことなく部屋に戻ってきてしまったが、考えてみれば、この家にはバスルームやトイレがいくつもある。その気になれば、誰ともすれ違わずに生活することだって可能かもしれないくらい、大きな家なのだ。

こんな豪ごう邸ていの一室に、どうして自分みたいな者がいるのだろう。

椅い子すや脇わき机づくえを利用してシーツを干しながら、ルーシーはあらためて現状の不思議さを嚙かみしめていた。

トレイを台所に持っていって、食器を洗っておいたほうがいいかもしれない。そんなことも考えたが、もうだいぶ、いや、かなり疲つかれていた。ルーシーは部屋を片づけてから全ぜん裸らになり、シーツのないベッドにもぐりこんだ。明日からどうしようか。侵入者クラツカー。ぼくには向いていないかも。マリアローズさん。男の人なんだ。男。あれで。信じられない。ナイフ。おいしかった。変なの。お母さん。会いたい。お父さん。──お父さん。

お父さんの広い胸に抱だかれる夢を見た。お母さんもいた。ルーシーは二人の間に挟はさまれていた。お父さんの肌はだはいつもどおりとてもつめたくて、お母さんの身体からだはあたたかかった。

カーテンを閉めずに寝ねたので、窓から射さしこむ朝日で目が覚めた。この部屋には時計がないので、時刻はわからない。外の明るさからすると、まだ七時前だろう。結局、どれくらい眠ねむったのか。そう長い時間、熟じゆく睡すいしたわけではないと思うが、頭も身体もすっきりしている。二度寝する必要はなさそうだ。

シーツはまだ乾かわいていなかった。マリアローズからもらった服を着ると、ちょっぴり複雑な気持ちになった。マリアローズのことをどう思えばいいのか、依い然ぜんとしてさっぱりわからない。ただ、間違いなく親切な人だ。恩人でもある。たとえ女の人でなくても、男の人だろうと、恩義を受けたことに変わりはない。そこは分けて考えるべきだろう。

ルーシーはトレイを持って台所へ向かった。台所は広大な居間の

隣となりにあって、戸で仕切ることもできるが、ふだんは開け放されているようだ。どちらにしても、台所へ行くには居間を通ることになる。もしすでに誰か起きていて、顔をあわせる羽目になったらどうしよう。懸け念ねんはあった。そのとおりになった。

　最初は白くてもふもふした大きな身体しか見えなかったので、居間のソファにきゅーが一人で座っているのだと思った。他ほかの誰かならともかく、きゅーだけは平気だ。ルーシーはこっちを向いたきゅーに微笑ほほえみながら会え釈しやくして、台所へ向かおうとした。

　きゅーに膝ひざ枕まくらしてもらっていたのだろうか。

　もっふりした白い毛の中から、真っ赤な毛がむっくり現れたのはそのときだった。

「あ」

　鮮あざやかな橙だいだい色いろの目はややしょぼしょぼしている。たぶん、起きて間もないのだろう。おそらく、目が覚めて、居間にやってきたらきゅーがいた。それで、きゅーを枕まくら代がわりにしてぼーっとしていた。きゅーは見るからにふかふかしている。あの毛に埋うずもれたい気持ちは、かなりよくわかる。ただ、そこに邪じや魔ま者ものが現れるとは予想していなかったのだろう。

　マリアローズは跳とび起きてソファの上に正座し、寝ね癖ぐせのついた髪かみの毛を両手で撫なでつけた。たいした寝癖ではなかったが、さすがに手で押さえつけたくらいでは直らない。そこで、パーカーのフードをかぶって寝癖を隠かくすことにしたみたいだ。ただフードをかぶるだけでなく、紐ひもをぎゅっと引っぱってフードを縮める念の入れようだった。

「……お、おはよ」

　きっちりそろえた膝に両手を押しつけて、うつむけた顔が真っ赤だ。

　か。

　か──、

かわいい。

いや。

待て。待つんだ、ルーシー。ルーシー・アッシュカバード。忘れちゃダメだ。マリアローズさんは男の人なんだ。かわいいなんて。それは、べつにかわいい男の人だっていてもいい。お父さんとお母さんは、ぼくのことをよく、かわいい、かわいい、と言ってくれた。嬉しかった。でも、そういうのとは違う。まったく、まるで違う。



　そうじゃなくて、マリアローズさんは本当にかわいいんだ。

　なんというか、どう言えばいいのか、とにかく、男の人のかわいらしさじゃない。だけど、男の人なんだ。そうだ。間ま違ちがっちゃいけない。マリアローズさんに対しても失礼だろう。

「お、おはようございます」

「うん。おはよう。あ、二度目だね。あはは……」

「に、二度目ですね」

　見ちゃダメだ。マリアローズさんを見ないほうがいい。だって、見てしまうと、やっぱり見とれてしまうから。だって、かわいいし。うん、とか。あのうなずき方がまたなんとも言えなくて。でも、だけど、男の人なんだ。納なつ得とくするんだ、ルーシー。

「きっ、昨日は」

「あ、うん」

　だから、うん、はやめてください……！　お願いですから！　それには弱いので！　ルーシーは叫さけびたい気持ちを必死に抑おさえて、頭を下げた。

「すみませんでしたっ。なんか、無視したりして。みなさんが、声をかけてくださってたのに。とんでもないですよね。ひどい態度だったと思います。自分でも。その、混乱していて。それで。でも、こんなの言い訳ですよね。あの、みなさんに謝らなきゃですけど、まずは、ま、まま、ままま、まままままマリアローズさんに、ごめんなさい！」

「や、そんな、いいけど。たいしたことじゃないし」

「よくないですっ！　ぜんぜんっ！　みなさんのご厚意を、裏切るというか、無にするというか、恩を仇あだで返すというか──」

「それはちょっと大おお袈げ裟さなんじゃない？」

「いいえ！　本当に、ああいうことをするのはまずいと思います！　反省しています。すごく。ごめんなさいでしたっ」

「あー……まあ、何であれ、反省するっていうのは悪いことじゃないし、それはいいんだけどね。ただ」

「た、ただ……？」

　思わず直視してしまった。

　気が遠くなりそうになった。

　何ですか、その表情は。満面の笑えみじゃない。かすかな笑顔。ほんのり笑顔。やれやれ、みたいな雰ふん囲い気きも若じやつ干かんあって、しょうがないなあ、と思っているようでもある。年上風味の、お姉さん的な。もちろん、年上だったらお姉さんに決まっている。違う。お姉さんじゃないんだ。お兄さんなんだ。お兄さん。嘘うそだ。とてもそうは見えない。思えない。考えられない。信じられない。信じたくない。

　マリアローズはルーシーの手て許もとを指さした。

「それ」

「これ？」

　トレイだ。

　マリアローズは顎あごを動かして台所のほうを示してみせた。

「置いてきたら？」

「そっ、そうですよねっ！　おっしゃるとおりだと思います！　今すぐ置いてきます！」

　もともとトレイを置きにきた。トレイを持ったまま、こんなところに突つっ立って話しているのも変だ。それ以上に一息つきたかった。自分を落ちつかせたい。そうしないと、言いたいことも言えない。ちゃんと話そうと心に決めていることが、ルーシーにはあるのだ。

　台所の流しにトレイを置いて、食器を洗おうとしたら、きゅーがぴとぴと歩いてきて、くう、とルーシーの手から皿をひったくった。どうやら、自分がやる、と言っているらしい。いやここはぼくが、と皿を奪うばい返そうとしたら、きゅーはシャーッと歯を剝むきだした。ちびるかと思った。怖こわかった。ルーシーがおとなしく引き下がると、きゅーは楽しそうに食器を洗いはじめた。洗い物が好きらしい。

　ぼくも嫌きらいじゃないんだけどな、と思いながら居間に戻もどって、マリアローズの隣となりに腰こしを下ろした。

隣といっても、二メーテルくらい離れている。

ちょっと距きよ離りを開けすぎただろうか。なんだかこれでは敬遠しているみたいだ。そんなつもりはないのに。ただなんとなくだ。だいたい、この家のソファは大きすぎる。こんなに大きなソファがあるから悪い。八つ当たりだ。わかっている。

マリアローズは両りよう腕うでで右みぎ膝ひざを抱かかえてうつむき、左足の踵かかとで床ゆかを軽く蹴けっている。フードをかぶったままなので、顔がよく見えない。見えないのが惜おしいような、おかげで助かっているような、微び妙みような気分だ。その姿勢、仕し種ぐさ、それだけでも十分かわいいのだが、こういうことを考えているからよくないのだ。そうだ。考えちゃダメだ。話だ。話をする。話さないと。

「あ、あの」

「うん」

だから、うん、はやめてくださいとあれほど──言ってないけど。勝手に思っているだけで。いけない。取り乱すな。落ちつくんだ。冷静に。

「ぼ、ぼく、いろいろ考えたんですけど」

「何を？」

「えっと、つまり、これからどうするか、ということを、ですね。いえ、本当は、そんなに考えたわけじゃないんですけど。ぱっと思いついたというか」

「ま、意外とそんなものだったりするね。決断するときって」

マリアローズがちらっとこちらを見たので、ルーシーは慌てて目をそらした。

あの眼まな差ざしは心臓に悪すぎる。

ほとんど凶きよう器きだ。

「それで？　何を思いついたの？」

「あ、はい」

　ルーシーは胸に両手をあてて深呼吸をしてから、一つうなずいた。

　よし。言える。言えるはずだ。言うんだ。

　マリアローズのほうは見なかった。目があったら、きっと何も言えなくなってしまう。

　ルーシーはもう一度うなずいた。

　大だい丈じよう夫ぶだ。

「ぼく、一人で仕事を探してみようと思うんです。じゃなくて、探します。今日から。自分の力で、やれるだけやってみたいんです」

Omenage 899 4th revolution 26th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.7

ちょっとだけ甘い話

　べつに、猛もう反はん対たいされることを予想していたわけではない。ただ、ルーシーとしてはそれなりに勇気のいる決断だったのに、みんなやけにあっさりしていて、正直、少々拍ひよう子し抜ぬけした。

「ふうん。それもいいかもね」（反応その①マリアローズ）

「いいんじゃないか」（反応その②トマトクン・朝食の席にて）

「はイ」（反応その③ピンパーネル・同じく朝食の席にて）

「きゅう」（反応その④きゅー）

　もっとも、ちゃんと昼食代を持たせてくれて、夜にはトマトクンの家に帰ってくることを約束させられた。家を出る前に、マリアローズが持ち物や装備を点検してくれた。それから、求人広告がたくさん貼はりだされているらしいベンテン・カフェという店の場所を丁てい寧ねいに教えてもらい、そのうえ地図まで描かいてもらって、エルデンで行動する際の注意点について言いふくめられた。

　なんだか、初めて一人で橋を渡わたってブラーニーの店へお使いに行ったときみたいだ。ぼくはもう子供じゃないのに。そんなに心配してくれなくても、ちゃんとできる。そう思う一方で、いろいろと世話を焼いてもらえることがありがたくもあり、自分のために真しん剣けんになってくれているマリアローズを見ていると、不覚にもどきどきした。あらためて不思議でもあった。トマトクンやピンパーネルは、マリアローズにつきあっている、つきあわされている、という印象を受ける。彼らは仲間で、同居人でもあるのだから、そうするだけの義理はあるのだろう。でも、マリアローズはどうなのか。どうしてルーシーを気にかけてくれるのか。

　もしかして、ぼくのことを好きだったりして。ぼくに一ひと目め惚ぼれしたとか。まさか。そんなわけがない。いや、そもそも、男の人だし。ぼくも男だし。男同士なんだ。好きだとか、一目惚れとか、馬ば鹿かげている。それこそありえない。ありえるはずがないんだ。

　それよりも、今日のこと、明日のこと、未来のことを考えないといけない。

もう決めたのだ。

マリアローズも、トマトクンも、ピンパーネルも、たぶんきゅーも賛成してくれた。きっと、カタリやユリカやサフィニアも同じだろう。あの人たちは仲間同士だし、違ちがう意見が出てくるとは思えない。ようするに、関係者の全員が同意してくれたということだ。

後こう顧この憂うれいはない。

やれるだけのことをやろう。

自分一人で。

決意を固めたはずなのに、マリアローズときゅーに見送られてトマトクンの家をあとにした途と端たん、とてつもなく心細くなった。エルデン入りした当初はほとんど何も知らなかったので、ある意味、怖こわいもの知らずでいられたが──いや、初しょっ端ぱなからかなり恐おそろしい目に遭あったが、おかげでここがとんでもなく危険な街だということを骨の髄ずいまで思い知らされた。昨日はとくに意識していなかった。一人ではなかったからだ。みんながいたから、平然と街を歩くことができた。

今日は一人きりだ。何かあったら、たとえばおっかない人たちに襲おそわれたら、自分でどうにかしないといけない。誰だれも助けてくれないのだ。

いつなんどき、何があるかわからない。何が起こってもおかしくない。そう思うと、道の先に人の姿を見かけるたびに、びくっとしてしまう。誰かとすれ違うときなんて、顔が引きつって、つい剣けんの柄つかに手をかけてしまいそうになり、そんなことをしたらかえってまずい、攻こう撃げきの意思ありと見なされるかもしれない、と考えなおし、なんとか自重する。そんなことの繰くり返しで、第五区にたどりつくころにはもう、ルーシーはすっかり疲つかれ果てていた。

まだ何もしていないのに。

こんなことで、ちゃんと生きてゆけるのだろうか。

あたりを見まわしても、ルーシーみたいにきょろきょろおどおどしている人はどこにもいない。ルーシーだけだ。ただ一人、ルー

シーだけが目をぎょろぎょろさせて、こそこそと、おっかなびっくり、絶えず何かの陰かげに隠かくれるようにして、抜ぬき足差し足忍しのび足で歩いている。

　ひょっとしたら、警けい戒かいしすぎなのかもしれない。怖い、恐ろしい、やばい、と思っているから怯おびえてしまう。ゆったりと落ちついて構えていればいい。そのほうがかえって目立たないし、人目につかなければ、おっかない人たちに狙ねらわれることもないだろう。

　ルーシーはあえて胸を張り、ゆっくりと大おお股またで歩いてみた。

　この大きな通りには、トワイライト・ドレッドスターズ・ストリートという長い名前がついている。略してＴＤＳとかＴＤストリートと呼ばれることもあるらしい。エルデンは円形の街で、その中心に王様が住んでいるシャイニンググローリーパレスという立派なお城があり、そこから四方に大通りがのびている。ＴＤＳはそのうちの一つで、お城と西門を結んでいる幹線道路だ。馬車がたくさん行き来しているが、もちろん人通りも多い。どうやら、馬車は道の真ん中を、人は道の両りよう脇わきを通行するのが暗あん黙もくの了りよう解かいになっているようだ。この国には法律がなく、悪いことをしたら罰ばつする役人もいないとのことだが、ちゃんとルールはあるのだ。人々はそれに従ってこの街で生きている。もし従わなければ、たとえば今、歩行者のルーシーが馬車の通り道に突っこんだりしたら、馬車に撥はねられるか轢ひかれるかして死んでしまうだろう。

　そういえば、エルデンに入って馬車から降りたあと、別の馬車に轢かれそうになったり、行き交かう人に蹴けられたり突き飛ばされたりして、なんて恐ろしいところだろうと思った。でも、馬車から降りたら、すぐさま道の脇わきに移動しないといけなかったのだ。通行人の邪じや魔まをすれば、実力で排はい除じよされてしまうのがこの街の常識なのだから、人の流れに逆らわないようにして、ただちに歩きださないといけなかった。

　すべてはルーシーがルールを理解していなかったせいだ。自分が悪いのだ。この街でちゃんと生きてゆくためには、この街のルールを、やり方を、流りゆう儀ぎを学ばないといけない。

　そのためには、どうすれば？

誰かに教えてもらう。それもいいだろう。ただ、他ほかにも方法はある。見て覚えればいい。手本は大勢いるのだ。この街で生きている人たちは、こういう場合どうしているか、あんなときはどうするのか、じっくり観察して、そのとおりにする。

女性がおっかない人たちに襲われていた。あのとき、他の人たちはどうしていた？　見て見ぬふりをしていた。銀色の鎧よろいを着た死神みたいに強い人なら、女性を助けるのもいいだろう。でも、大多数の人はそうではないのだ。だったら、巻きこまれないように知らんぷりをして、さっさとその場を離はなれる。それが最善だ。だから、みんなそうしていた。

死神みたいに強ければ、知らんぷりなんかしなくてもいいのだろうけれど。

マリアローズはルーシーを救ってくれた。トマトクンだってものすごく強い。困っている人がいたら、彼らは助けようとするだろう。少なくとも、マリアローズは間違いなくそうする。ルーシーだって、強ければ見捨てたりしない。強くないから、アンダーグラウンドに行っても何もできない弱虫だから、この街のやり方を学んで、それに従って生きるしかない。

ようするに、そういうことだったんだ。

ぼくはあの人たちとは違う。

たぶん、あの人たちみたいには生きられない。

悪者にやられそうになっている意い気く地じなしの臆おく病びよう者ものを、間かん一いつ髪ぱつ、救いだして、保護して、あれこれ手助けしてあげる。そんなかっこいいことはできない。できっこない。ちっぽけで、どうでもいい、その他大勢みたいな、どこにでもいるような、たとえばあのときのぼくみたいな人を見殺しにしても、しょうがないよ、だって危ないし、とばっちりを食いたくないし、そんなふうに思って、すぐ忘れてしまう。そんな生き方しかおそらくできない。

だから、いやだったんだ。

いろいろ手を尽つくしてもらって、その結果、なーんだ、この程度か、みたいに思われたら目も当てられない。それくらいなら、最

初から一人でなんとかしたほうがいい。たいして成果があがらなくても、手がかかっていないぶん、失望されることもそれほどないだろう。ぎりぎりでも、どうにか生きてゆける目め途どがつきさえすれば、じゃあ、大変だろうけど、がんばって。マリアローズなら、きっとそんなふうに言ってくれるはずだ。

　もともと偶ぐう然ぜん、知りあっただけだ。たまたま知りあってしまっただけで、人間としての格というか、ランクというか、レベルというか、階級、階層、そういったものが違ちがう。あまりにも違いすぎる。

　トマトクンの家に帰ると約束してしまった。約束は守らないといけない。ルーシーは帰るだろう。

　いろいろと世話を焼いてくれるのはとてもありがたい。いくら感謝してもしたりないくらいだ。でも、いつまでも面めん倒どうを見てもらうわけにはゆかない。

　そのうち、できるだけ近いうちに、きちんと自分の気持ちを説明して独り立ちしよう。そのためにも、仕事だ。仕事を見つけないといけない。

　鉄鎖の憩い場のそばを通りすぎたところで、ルーシーは一度、マリアローズが描かいてくれた地図を確かく認にんした。極きよく端たんに省略されているのに、なぜかわかりやすい。目印もたくさん書きこまれている。この地図があれば、そうとうなうっかり者でも目的地にたどりつくことができるだろう。マリアローズさんがぼくのために描いてくれたんだ。

　テーブルに向かって鉛えん筆ぴつを動かしながら真っ赤な髪かみを耳にかける仕し種ぐさが思い浮うかんで、胸がちくっとした。

　ルーシーは一つため息をついて、地図を丁てい寧ねいに折おり畳たたんでポケットにしまい、ベンテン・カフェを目指した。自然に。挙動不ふ審しんにならないように。目立たないように。やってみれば、それほど難しいことではない。シー・シリーでは灰色の髪に赤い眼めのアシェローンは希少種だったが、この街には白い肌はだの人も黄色っぽい肌の人も黒い肌の人も黒髪の人も金きん髪ぱつの人も髪の毛を極ごく彩さい色しきに染めた人もいる。その他大勢。実際、ルーシーはその他大勢なのだ。両親のようにルーシーを特別扱あつかいしてくれて、ルーシーはこの世界でたった一人の存

在で、ルーシーのことを一番愛していると言ってくれる人は誰だれもいない。同時に、ルーシーがアシェローンだからという理由で差別しようとする人もいない。エルデンの街角を歩いているルーシー・アッシュカバードは、その他大勢、ただのルーシーだ。

なんだかちょっと気が楽になった。

行く手にベンテン・カフェらしき店が見えてきた途と端たん、一気に重くなった。

そのやけに頑がん丈じようそうな外観の建物は、ＴＤＳから少し北に入ったあたりの角地にあった。

出入口はない。というよりも、ドアのたぐいがそもそもない。一階の東と南に面している壁かべがすっかりぶち抜ぬかれていて、鉄骨だけで支えられているので、そこから自由に出入りできるのだ。

たくさんの、じつに多種多様な人々がひっきりなしに出たり入ったりしていて、店内はかなり混みあっている。カフェという名前から連想される雰ふん囲い気きではない。混雑していて活気があるところなどは、鉄鎖の憩い場の市場にやや近いだろうか。ただ、市場よりも、なんというか、全体的に柄がらが悪い。全員ではないが、盗とう賊ぞくとか、山賊とか、無ぶ頼らい漢かんとか、ならず者、ごろつき、悪漢、強ごう盗とう、殺人者、そうした呼び名がぴったりな人ばかりだ。人相が悪いのは本人のせいばかりではないだろうし、仕方ないかもしれないが、やはり恰かつ好こうや立ち姿、歩き方などは、もう少し他人に好感を持たれるように気をつけたほうがいいのではないだろうか。

いま何人か殺バラしてきた。これから何人か殺ヤろうと思う。正直、今日という日まで何人殺してきたかなんて見当もつかない。多すぎて。

どう考えてもそんなふうにしか見えないのは、あまりよくないと思う。

だって、ものすごく怖こわいじゃないですか。

そういう人たちばかりがたむろしている場所に足を踏ふみ入れようとしている、こっちの身にもなってほしい。

足がすくんだが、よく見れば、普ふ通つうっぽい、冒ぼう険けん

者しや風とでもいうのだろうか、武装はしているものの、凶きよう暴ぼう、凶悪そうな面つら構がまえではない男女もいる。男の人も、女の人もいるのだ。年ねん齢れい層もバラバラで、けっこう年配の人もいれば、若者、少年、少女さえ見受けられる。彼らもとくにびくびくしているわけではない。ということは、この状じよう況きようはごく普ふ通つうなのだ。恐おそれることはない。むしろ、恐れたりしてはダメだ。

ルーシーは一度、深呼吸をしてから、ベンテン・カフェに入っていった。入ってしまえば、何ということもない。もう何年も通いつめているので、勝手知ったる我が家みたいなものだ。そんなふりも、その気になればできなくはなさそうだ。とにかく人が多いから、体たい臭しゆうやら香こう料りようやら何やらが入り混じった独特の臭気がしたが、鼻をつまむほどではない。じきに慣れるだろう。人にぶつかりそうになって、舌打ちをされたり、にらまれたりしたときは、謝らずに無視してその人からさっと遠ざかった。みんなだいたいそうしているからだ。きっとこの街ではそれが普通のやり方なのだろう。

用があるのは、広い店内の北と西の壁を埋うめつくしている無数の紙切れだ。

大きさも色も形もさまざまな紙切れには、千差万ばん別べつの筆ひつ跡せきで募ぼ集しゆう、求人の内容が記されている。ルーシーだけではない。この店を訪おとずれる人たちの目的は、だいたいそれらの紙切れに目を通すことらしい。マリアローズがそう教えてくれたのだ。実際、壁にびっしり貼はられている紙切れを、誰も彼もが真剣な眼まな差ざしで、あるいは少々気け怠だるそうだったり投げやり気味だったりする目つきでチェックしている。

なかには、こんな人が字を読むことができるのだろうか、と思ってしまうような風ふう体ていの者もいるが、読み書きができないとこの街では生きてゆけない。これもまたマリアローズの受け売りで、とくに共通語の文章を読めないと、仕事探しにも苦労する。それで、どんなに貧しい者でも、読み書きだけは幼いころからどうにかして必死に学ぶのだという。

さいわいルーシーは、母に助けてもらいながら、家にあった本をぜんぶ読んで字を覚えた。おかげで、こうして紙切れの内容を読むことができる。一人で仕事を探せる。ぼくも捨てたものじゃない。あの人たちとは格が違うけど、違いすぎるけど、最低限この街で生

きてゆくための資格は備えている。特別じゃないかもしれないけど、とりあえずそこについてはちゃんと普通レベルなんだ。たしかに読むことはできるものの、どうもちんぷんかんぷんだ。

　たとえば、Ｄ11フリアウ逆密林熟練者のみ募集委細面談〝赤い手〟レズリー・ブーイング、と書かれた紙切れがある。Ｄ11は、たしかアンダーグラウンドの区画の名前だ。エルデンの地上部分でいえば、第十一区、みたいなものだろう。でも、ふりあう、って？　逆密林？　変な名前だ。赤い手？　このレズリー・ブーイングという人は手が赤いのだろうか。

　Ｄいくつ、何人、誰々、という内容はかなり多いのだが、Ｄいくつ、が行く先で、何人、がたぶん募集人数、誰々、が募集主だということはわかる。ただ、それって誰？　という話だ。名前だけ書かれても、わかりっこない。もちろん、名前の他ほかに、たとえば、カウンター奥で、とか、裏口脇で、とか、場所が書き添そえてある場合もある。きっと、そこで待っている、という意味なのだろうが、そのカウンター奥、裏口脇、等々の指定がまた理解不能だ。

　ルーシーにはわからなくても、そういった紙切れを引っ剝ぱがして、どこかへ向かう人もいる。彼らは知っているのだ。ということは、暗号みたいなものなのか。ベンテン・カフェをよく利用している人には通じる表現で、初心者のルーシーにはさっぱり見当がつかない。だとしたら、ルーシーはどうすればいいのか。誰だれにでも最初の日はあったはずだ。その日、彼らはどうしたのだろう。

　誰か教えてほしい。

　ぼくはどうすればいいんですか。

　訊きけばいいのだろうか。親切そうな人を見つけて、あれは何だとか、これはどうだとか、尋たずねればいいのか。みんなそうしたのだろうか。そうやって乗り越こえていったのか。わからないことがあれば、誰かに教えてもらいつつ、問題を一つ一つ解決していったのだろうか。一人では無理だと思う。自分ではどうしようもない。だって、裏口って。この店は半分壁がなくて、ほとんど通り抜け自由だ。裏口もくそもないじゃないか。考えたってわからない。わかるはずがない。そうだ。訊こう。訊けばいい。

「あの」

　たまたま右みぎ隣どなりで紙切れを見ていたのが、だいたい二十歳くらいで、そんなに感じの悪くない男の人だった。あまり年長の人だと、ちょっと緊きん張ちようしてしまうというか、しりごみしてしまう。ちょうどいい。これは絶好の機会だ。天の配はい剤ざいだ。そう思い、勇気を振ふり絞しぼって声をかけてみたのに、返事はなかった。もしかして、聞こえなかったのか。

「あ、あのう」

　さっきよりもちょっと大きな声を出してみたのだが、ダメだ。こっちを見てもくれない。つい、何だよ、と小声で呟つぶやいてしまったら、突とつ然ぜんだった。男の人がルーシーに顔を向けて、眼球が飛びだしてしまいそうなくらい目を剝むき、歯をガジガジ嚙かみあわせながら「ああん？」と凄すごみをきかせてきた。

「ご、ごめんなさいっ」

　ルーシーはとっさに謝って、そそくさとその場を離れた。わりと親切そうな人だと思ったのに、ぜんぜん違った。人を見た目で判断してはいけないのだ。だったら、何を基準にして判断すればいいのか。わからない。まったくわからない。わかっているのは、誰も信用できないということだ。少なくとも、信じたことを後こう悔かいしないという保証はない。頼たよれそうな人なんかいない。何か尋ねても、大多数は答えてくれないだろうし、よしんば答えてくれたとしても、それが本当かどうか。嘘うそかもしれない。嘘を教えられて、大変な目に遭うかもしれない。そうだ。この街ではそれくらいのことは想定しておくべきだろう。

　ルーシーはさっきの男の人から十分な距きよ離りをとって、壁の紙切れをチェックする作業に戻もどった。これも暗号。あれも暗号。これもだ。あれも。これはどうだろう。Ｄ５メリクル第二迷宮十時～未経験者可、と書かれている。メリクル何たらというのは不明だが、Ｄ５という場所のことを指しているのかもしれない。十時から。未経験者でもいい。店内東南角青緑髪のブーマン・マンデンドローまで、か。これなら探せそうだ。

　指定の場所へ行ってみると、ブーマン・マンデンドローらしき人物はすぐに見つかった。髪が青緑色なので、すごく目立つ。いや、彼が人目を引いている理由は他ほかにあった。

　ブーマン・マンデンドローはとんでもない巨きよ漢かんだった。

　というか、激げき烈れつに肥満していて、人間というよりも巨大なおまんじゅうみたいだ。

　ルーシーは壁かべのほうへと引き返した。人を見た目で判断してはいけない。それはたしかにそうかもしれないが、さすがにあれは例外だ。あんな体格で侵入者クラツカーなんて。アンダーグラウンドに入りこんで、化物と戦うなんて無理だ。できたとしても、すぐに息切れしてしまうだろう。立っているだけで苦しそうだったし、ものすごく息が荒あらかった。もしあの人が転んで下した敷じきにされでもしたら、きっと窒ちつ息そくして死んでしまう。その場面を想像しただけで、息苦しくてたまらない。

　なんだか暗あん澹たんとした気分になってきた。だいたい、紙切れの文面もおかしなものがけっこう多いのだ。女の子募ぼ集しゆう巨乳かつ容姿端たん麗れいであれば性格問わず。これなんか、ただの恋こい人びと募集じゃないのか。至急イレブン送れ。意味不明だし。一いつ緒しよにビル破は砕さいしませう字余り。何だ、これ。明後日の夕方幸せの黄色い鳥をつかまえにいきます。勝手に行けばいいじゃないか。

　これは──バーテン急募。バーテン？　新しん店てん舗ぽオープンにつき料理人三名募集試験あり。料理？　きみも朝から晩まで洗せん濯たくしないか！　ただし、洗濯の鉄人のみ！　洗濯？　ホールスタッフ急きゆう遽きよ大募集経験者のみルックス重視ボーナスあり。集まれスタッフーッ！　ホールスタッフ……？　仕事の募集といっても、侵入者クラツカーだけじゃないんだ。

　西壁の真ん中あたりだろうか。見れば、この一帯に貼はられている紙切れは、侵入者クラツカーとは直接関係なさそうな仕事の募集が多いようだ。ただ、経験者のみ、とか、熟練者、とか、鉄人、とか、達人、とか、だいたいどれも条件が書き添そえられている。ルーシーはもちろん、何の仕事もしたことがない。やっぱりダメか。

　いや。

　これなら、ひょっとして。

　皿洗い募集。定員五十名。業務は皿洗いのみ。昇しよう格かくによる業務内容変へん更こうあり。日給三千ダラー。年齢資格等不問。大食小路グラトン・アレイ万ばん国こく食くい倒だおれ屋や台

たい横よこ丁ちよう。裏面に地図あり。

　同じ紙切れがたくさん貼られている。ルーシーはそのうちの一枚を剝はがして、裏を見てみた。マリアローズ手製の地図にはかなわないが、それなりに恰好がついている。この地図を頼りに向かえばなんとかなりそうだ。

　皿洗い、か。皿を洗うのが仕事になるなんて。しかも、日給は三千ダラーだ。エルデンならでは、なのだろうか。よくわからないが、食器を洗ったり洗濯をしたりするのは好きだ。得意でもある。カタリが、人には向き不向きがある、と言っていた。侵入者クラッカーがダメなら、他の道もたくさんあると。これか。ぼくに向いている仕事。皿洗い。ピンとこない。でも、侵入者クラッカーよりはいいかもしれない。毎日、皿を洗ってすごす。そしていつか皿洗いの達人になる。

　あまりかっこよくない。

　というか、どちらかと言えば、かっこわるい。

　でも、待て。紙切れには、昇格による業務内容変更あり、と書かれている。これはつまり、一生懸けん命めい皿洗いをして、認められれば、他のこともさせてもらえる、ということではないのか。昇格。偉えらくなれるのだ。偉くなれば、皿洗いよりもかっこいい仕事を任せてもらえるかもしれない。

　ルーシーはベンテン・カフェをあとにして、大食小路グラトン・アレイという場所にあるらしい万国食い倒れ屋台横丁とやらに行ってみることにした。

　紙切れを握にぎりしめて、足どりも軽かろやかに、期待に胸を躍おどらせて、と言いたいところだが、正直、不安のほうが大きかった。

　それでも、希望を抱いだいていなかったわけではない。

　すぐに思い知らされることになった。

　ちっぽけな希望は、いつだって絶望するためだけに生まれる悲しい宿命さだめなのだということを。

Omenage 899 4th revolution 26th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.8

世間知らずサーガ

「──なぁぁぁぁぁぁぁぁにをボヤボヤしてやがるのだこのゴクツブシのコンチクショウめ！　貴き様さまなんぞはカスのゴミのクズなのだぞ！　それを雇やとってやっているのだ、少しはありがたいと思ってテキパキ働きやがれこの腐くされチ●カス野や郎ろうが……！」

　怒ど号ごうを浴びせられて手を止めたりしたら、今度は鉄てつ拳けんが飛んでくる。叱しかられたときは、とにかく闇やみ雲くもでも何でも、ひたすら身体からだを動かしたほうがいい。最初はわからなかったのだが、ようやく気づいた。監督が怒ど鳴なり散らすのは、皿洗い人たちがヘマをしたりサボったりしたときだけではない。というか、皿洗い人たちにはほとんど関係ない。監かん督とくはいつもむしゃくしゃしていて、我が慢まんできなくなると、大声を出したり暴れたりしないと気がすまなくなる。ただ、皿を割ってしまったり、手を抜ぬいたりしても平気かといえば、そんなことはない。監督はちゃんと見ている。皿なんか割ったら大変だ。ぶん殴なぐられて、蹴け飛とばされ、床ゆかに倒たおれたところを何度も踏ふみつけられる。当然、あたりは血の海だ。それを掃そう除じさせられたあと、クビを言い渡わたされ、外に放ほうりだされる。他ほかの皿洗い人たちは震ふるえあがって、自分は決してあんな目に遭あいたくないと思う。それでキビキビ仕事をしようとするのだが、監督の癇かん癪しやくがいつ爆ばく発はつするかわからないので、そっちも気になる。おかげでうっかり皿を落としてしまい、ボコボコにされて、クビ。こうして皿洗い人の数はどんどん減ってゆく。

「よし、十五分間休きゆう憩けい！」

　監督が皿洗い場全体に轟とどろきわたる大声でそう叫さけんだ瞬しゆん間かん、一気に身体中から力が抜けてしゃがみこんでしまいそうになった。

　いったいどれくらいの間、気を張りつめて皿を洗いつづけていたのだろう。もうよくわからない。必死だったからだ。休憩ということで、いったん皿洗い場を出て、トイレに行ったり、地べたに座って休んだりしたはずだが、よく覚えていない。気がつくと、また皿洗い場で水と泡あわにまみれて皿を洗っていた。

「ドゥゥゥゥァァアアアホウッ！　何度言ったらわかるのだこの痰

たん壺つぼ野や郎ろう！　皿は洗うつもりで洗うのではない！　磨みがくつもりで洗え！　洗い残しでもあろうものならお客様に申し訳が立たんだろうが！　誰だれが責任をとるのだ！　貴様か糞くそ壺つぼ野郎！　違ちがうだろうが！　たとえば俺だろうが！　この監督様だろうが！　この監督様の高貴な顔に泥どろを塗ぬろうというのか！　いい度胸だ！　貴様なんぞこうだッ！　おらッ！　痛いかッ！　痛いと言ってみろッ！　アホゥッ！　マジで言うヤツがあるかオオボケ野郎ッ！　そういうときはまったく痛くないです申し訳ありません私が悪うございました監督様だろうがッ……！」

　いつあの怒ど声せいと暴力が自分に向けられるかわからないのだ。失敗したら、失敗しなくても、監督の気の向くまま、その場の雰ふん囲い気き、流れのようなもので、制裁の対象に選ばれてしまうかもしれない。ルーシーにできることは多くなかった。ひたすら皿を洗う。丁てい重ちように、だが、迅じん速そくに、しくじらないように、息をつく間もなく次々と皿を洗いながら、祈いのる。どうか監督がこっちを見ませんように。監督の注意を引いてしまいませんように。

　でも、いったいぜんたい、なんでこんなことになってしまったのか。

　地図のおかげでなんとかたどりつくことができた万国食い倒れ屋台横丁は、昼前なのに客がいて、けっこう賑にぎわっていた。はちまきを巻いて前まえ掛かけをつけ、声を張りあげて客引きをしている人がいたので、皿洗いについて尋ねると、裏手に案内された。応対してくれたのは、身なりのいい四十年配の男性だった。男性は、私は事務長のドワイト・トーヘンボンです、と丁てい寧ねいに名乗り、万国食い倒れ屋台横丁は世界中の料理を集めた屋台村として先年オープンして以来、ずっと千客万ばん来らいの状態で、とても評判が高く、今年の初めにはさる国の王族も訪おとずれ、大変満足して帰られた、というような話をしてくれた。あなたが当店のスタッフの一員として、誇ほこりを持って精せい一いつ杯ぱい尽じん力りよくしてくだされば、私たちはその働きに全力で報むくいる所存です。そう言ってルーシーと固い握あく手しゆを交かわしたトーヘンボンは、実直そうで、誠実そうで、信しん頼らいできそうで、立派な人に見えた。よし、ここでがんばろう、という気持ちになれた。連れてゆかれた更こう衣い室で、手て渡わたされた白い制服に着き替がえてロッカーに自分の服をしまうと、さらにやる気が高まった。皿洗い場に連行されて監督に紹しよう介かいされた瞬間、早

まったかもしれない、と思った。

　皿洗い場の監督係は、ドン・バーナード・シュタインウォルフ13世という名の、雲を衝つくような大男だった。背せ丈たけは間ま違ちがいなく二メーテルを超こえているだろう。つるっとした禿とく頭とうなので、髪の毛で水増しされているようなこともない、正真正しよう銘めいの二メーテル以上だ。分厚い筋肉の鎧よろいを身にまとい、その上に白い制服を着ているのだが、ぴったぴたのぴっちぴちで、今にもはちきれんばかりだった。顔の下半分は硬かたそうなもじゃもじゃ髭ひげに覆おおわれていて、唇くちびるが妙みように赤い。そのまん丸ギョロ目に見下ろされると、これから料理される食材の気分がよくわかった。すなわち、何もできない。なすすべがない。どうかせめて、あまり痛くしないでください。ひと思いに、ささっと素す早ばやくやっちゃってください。そのほうがきっと楽なので。

　ドン・バーナード・シュタインウォルフ13世は、残念ながら慈じ悲ひ深い料理人ではなかった。当然だ。彼は調理場ではなく、皿洗い場の監督係なのだ。その仕事は何十人もの皿洗い人を休みなく働かせることで、ひと思いに楽にしてやることではなかった。むしろ、皿洗い人たちをずっと苦しませつづけることこそが、監督の任務に違いなかった。

　貴様の代わりはいくらでもいるんだぞ、蛆うじ虫むし。それが監督の口くち癖ぐせだった。だったら、ぼく、辞やめます。誰か他の人に代わってもらいたいです。そう言いたかった。何度も言おうとした。できなかった。実際、そんなふうに申し出た人がいて、その人が受けた仕打ちを目もく撃げきしてしまったからだ。

　監督は一いつ瞬しゆんで爆発した。その人を後ろから羽は交がい締じめにして、持ちあげ、丸太みたいな両りよう腕うでで首を絞しめて、失神させてから、この根こん性じようなしが、気合を入れなおしてやる、と叫びつつ床に叩たたきつけ、蹴けって蹴って蹴りまくった。もちろん、相手は気を失っているので、根性も気合もへったくれもない。でも、監かん督とくはそんなことなんかお構いなしだった。最後は監督の命令で数人の皿洗い人がその人を外へ連れだしたのだが、動いていなかった。ぴくりともしていなかった。息があったのだろうか。わからない。ひょっとしたら、もう生きていなかったかもしれない。とにかく、それが監督に辞めたいと言った正直者の末路だった。

つまり、逃にげられないのだ。

少なくとも、今日の仕事が終わるまでは、死ぬ気になって皿を洗っているしかない。

死にたくなければ、死ぬ気にならないといけないのだ。不条理だ。

不条理といえば、朝ご飯以来、何も食べていないのに空腹を感じなかった。真水を使っているので、とてもつめたくて手が痛かったのだが、だんだん気にならなくなってきた。というか、皿と泡と水と指と掌てのひらの区別がつかなくなってきた。

どこからどこまでが皿で、どこからどこまでが自分の身体からだなのか。これは水なのか泡なのか皿なのか指なのか。ぼくはお皿を洗っているのか、お皿に洗わされているのか、洗っているのは、ぼくじゃなくてお皿じゃないのか。そうか。ぼくはお皿だったんだ。だから、こんなにお皿ばかり洗っていて、そのお皿はぼくなんだから、ぼくはぼくを一生懸命洗っているんだ。あたりまえのことなんだ──。

「よし、終しゅう了りよう！　遅おそ番ばんに交代だ！　ただちに皿洗い場から出ろ！　帰る前に給料を受けとるのを忘れるな！　ただ働きしたいなら別だがな！」



　監督が大声でそう告げた途と端たん、皿洗い場全体でわあっと歓かん声せいがあがった。ルーシーも思わず跳とびあがって意味不明の叫びを発していた。ほっとしたとか、嬉うれしいとか、そんなものじゃない。脳みそがパーンと弾はじけてしまって、それがなぜかとてつもなく気持ちよくて、あとはもう何がどうなってもかまわない。だって、このために生きてきたのだ。この快感を味わうため

に。見まわすと、踊おどっている皿洗い人もいたし、泣きじゃくっている皿洗い人もいた。しかも、一人や二人じゃなかった。大勢いた。おかしな光景だとはちっとも思わなかった。泣いて当然だ。ぼくらはやりとげたんだ。すごいことをやった。みんなでなしとげた。ルーシーは口をきいたこともない仲間たちと肩かたを組んで、スキップしながら皿洗い場を出た。年ねん齢れいも性別も何もかもがバラバラだったが、全員が同志だ。一緒にあの戦場をくぐり抜けた戦友なのだ。肩や背中を叩いて、声をかけあい、互たがいに労をねぎらって、喜びをわかちあうのはあたりまえだ。やあ、きつかったなあ。本当に、本当に。大変だったけど、終わったんだよな。終わった。でも、あいつ、やばかったな。あの、終わるちょっと前に倒れたやつ。死んだかねえ。死んではないんじゃない。そっかそっか。けど、もう少し我慢すれば終わりだったのに。惜おしかったよね。まあ、運だよな、運！　そうだ！　俺らは運がよかったってことだよな！　運も実力のうちだって言うしね！　そうだよな！　あははは！　ハハハハハ！　わっははははは……！

　更衣室で自分の服に着替えると、制服はロッカーに置きっぱなしでいいと瘦そう身しんの若い同志に教えられた。ロッカーの鍵かぎはこのあと給料をもらうときに返へん却きやくし、明日、また出勤した際に受けとる仕組みになっているのだという。

「おまえ、新入りだろ」

「はい、そうです」

「俺はベクター。一応、この屋台横丁ができたときからいるし、古株っていえば古株かな」

「できたときから、ですか。でしたら、文句なしの古株ですね」

「まあ、そうなるかね。おまえ、名前は？」

「あ、はい、ぼくはルーシー・アッシュカバードといいます」

「女みたいなツラしてるけど、ここにいるってことは男なんだよな」

　ベクターはさっきすぐ近くで着き替がえをしていたので、ルーシーの裸はだかを見たのかもしれない。それ以前に更衣室は男女別なので、ベクターの言うとおり、ここには男しかいないのだ。男同

士なのに、気のせいだろうか。ベクターの目つきは妙にねちっこくて、舐なめまわすようにルーシーを見ている。つるっとした顔もなんだか蜥蜴とかげなどの爬は虫ちゆう類るいに似ていて、少し気持ち悪いが、勘かん違ちがいかもしれないし、何しろ同どう僚りようだ。同志だ。先せん輩ぱいだ。

「でも、すごいですね。去年からずっとあの皿洗い場で働いているなんて」

「そうだよな。我ながらすごいと思うよ。やっぱり、入れ替かわりが激しいしな。かなり」

「……でしょうね」

　いきなり興奮がさめた。振り返ってみると、あの熱ねつ狂きようはいったい何だったのか。更こう衣い室の中も徐じよ々じよに静かになってきている。ルーシーだけではないのだ。みんな我に返って、疑問に思っているのだろう。どうして自分はあんなに喜んでいたのか。一緒にあの戦場をくぐり抜けた？　一緒に？　どこが。手をとりあい、一いつ致ち団結して何かをしたわけじゃない。みんな自分のために、一人で、別々に戦っていただけだ。戦友なんかじゃない。ぜんぶ錯さつ覚かくだ。

「あの、つかぬことをうかがいますが」

「何？」

「どれくらい、その……残るものなんでしょうか」

「新入りがどれくらいつづくかってこと？」

「はい」

「さあね。ぜんぶ把は握あくしてるわけじゃないし。人数が多いからな。でも、まあ、一日二日で辞やめるか、わりと長続きするか、どっちかだよ」

　ベクターはニタリと笑った。

「癖くせになるんだよな。あの、終わったときの感覚が。あれがないと、生きてる感じがしなくなるんだよ。金だって、いいときはちゃんと三千もらえるしな。一日三千って悪くないだろ。監督の機

き嫌げん次し第だいではあるけどさ。あと、先輩として教えとくけど、この仕事、一回か二回ばっくれても、またやれるから」

「ばっくれる……？」

「無断で辞めるってこと。誰だれかがある日こなくなったら、ああ、あいつ辞めたのかなと思うだろ。ところが、しばらくしたらまた出てきてさ。食いつめて、またやりたいって事務長に頼たのんだら、あっさりオッケーもらったとか。そんな話、よく聞くんだよ。俺はまだ、ばっくれたことはないけどな。具合が悪くて休んだりしても平気だし。日給だからな。出てきてちゃんと働けば、金はもらえるんだよ。ロッカーは二日でなくなっちまうけどな。新しいロッカー用意してもらえるし。どんどん空くからな」

　休んでもいい。ばっくれても、また働ける。そう聞かされてちょっぴり気が楽になったが、更衣室を出てすぐの場所にある監かん督とく室に立ちよって給料を受けとると、この仕事をつづけてゆく自信が崩ほう壊かい寸前にまで追いこまれた。

「おう、新入りのルーシー・アッシュカバードだったな。この監督様が蛆うじ虫むし同然の貴様に今日の働きに応じた給金を恵めぐんでやるから、ありがたく受けとれ」

　ドン・バーナード・シュタインウォルフ13世は、紙かみ袋ぶくろから一枚の硬こう貨かをとりだして、指でピンッと弾はじいた。硬貨は放物線を描えがいて壁かべにあたり、床に落ちた。ルーシーはしゃがんで硬貨を拾った。

　これは。

　この黄色みを帯びた銅赤色の硬貨は。

　紛まぎれもなく、百ダラー真しん鍮ちゆう貨かだ。

「……これ、だけ？」

「何か文句があるのか」

　見上げると、監督のこめかみに青筋が浮うきあがっていた。

　ルーシーは首を横に振ふるしかなかった。

「い、いいえ、も、文句なんて、と、とんでも……」

「貴き様さまは新入りなのだ。新入りには新入りの待たい遇ぐうというものがある。もっと金が欲しければ、働けいッ！　鬼き神じんのごとく働いてみせろッ！　自分が蛆虫ではないことを証明してみせるがいいッ！　監督様はすべて見ているぞ。千里眼の監督様を認めさせてみろッ。それができぬのなら、貴様は蛆虫のままだ。否いなッ！　蛆虫以下のみみっちいこちゃこちゃしたわけのわからん変な虫だッ……！」

　そうか。そうなんだ。認めさせないといけないんだ。もっと手早く、矢や継つぎ早に、大量の皿を超ちよう高こう速そくで洗わないといけないんだ。血のにじむような努力をして、がんばって、がんばって、がんばりまくって、皿洗い界で知らぬ者とていない皿洗いの革命児、皿洗いマスター、ゆくゆくは皿洗いの神さまと呼ばれるくらいの皿洗い人になるんだ。そうすれば、監督だって認めてくれる。認めざるをえないはずだ。

　無理です。

　できっこないです。

　というか、そこまでがんばりたくないです。

　外に出ると、とっぷり日が暮れていた。

　すごい虚きよ脱だつ感かんだ。

　こんなに疲つかれているのに、疲れ果てるまで働いたのに、百ダラー。あの重労働の対価が、たったの百ダラー。なんだか自分の価値が百ダラーだと言われているみたいで、やりきれない。

　明日のことなんて考えられなかった。思い浮かぶことはいろいろあっても、何かを考える力は残っていなかった。今まで気づかなかったが、とてつもなく腹がすいていた。日が落ちたエルデンの闇に怯おびえる余よ裕ゆうすらなかった。ルーシーはすきっ腹を抱かかえて帰り道を急いだ。

　ようやくトマトクンの家に帰りつくと、門の上からきゅーがにゅっと顔を出した。

「あ……ただいま」

「くう」

　きゅーに門を開けてもらい、たどりついた玄げん関かんでは、マリアローズが出で迎むかえてくれた。

「おかえり」

「た、ただいまです」

　まともに顔を見られない。こんなはずではなかった。ちゃんとした仕事を見つけて、しっかり働いて、きっちり稼かせいで、堂々と胸を張って帰ってくる。そこまで考えていたわけではないが、こんな気持ちでマリアローズと顔をあわせたくはなかった。

「おなか、すいてるんじゃないの。夕ご飯、ぼくとトマトときゅーは先にすましちゃったけど、きみのぶんもあるよ。食べたら？」

「は、はい。そう……ですね。いただきます。ごめんなさい」

「なんで謝るんだよ」

「いえ。とくに意味は。ごめんなさい」

　ついまた謝ってしまった。

　マリアローズはため息をついた。怒おこらせてしまっただろうか。上うわ目め遣づかいでちらりとうかがうと、でも、マリアローズは、例の、やれやれ、みたいな雰ふん囲い気きも若じゃっ干かんあり、しょうがないなあ、と思っているようでもある、年上風味の、お姉さん的な、ほんのり笑え顔がおだった。

　じーんとしてしまった。

　泣いていいですか。

　ダメですよね。はい。わかってます。泣きません。ぼくは所しょ詮せん、百ダラーの男ですけど、百ダラーぽっちの男だからこそ、マリアローズさんの前で泣く資格なんかないわけで。まったくつりあわないわけで。それ以前に、男同士なわけだから、つりあうも何もないわけで。

　居間へ行くと、トマトクンがソファで寝ねていた。ピンパーネル

は食事中だ。ルーシーもマリアローズにうながされてダイニングテーブルの席についた。ご飯はきゅーが持ってきてくれた。マリアローズはピンパーネルの隣となりの席に腰こしを下ろした。

「今日はトマトの当番だったから、カレー。トマトはカレーしか作れないから」

「カレー……」

　料理の名前だろうか。聞いたことがない。白い米に黄色っぽいシチューのようなものがかけてあって、香こう辛しん料りようのにおいがする。見かけも奇き妙みようだし、辛からそうだ。トマトクンが作ったものだという点も、ちょっと不安だった。なんとなくだが、炊すい事じ洗せん濯たくなどは苦手そうに見える。マリアローズもこれを食べたのか。ピンパーネルも順調にスプーンを動かしている。ということは、きっと大だい丈じよう夫ぶなのだろう。

　食べてみると、辛いことは辛いのだが、意外といけた。食べれば食べるほど癖になる味だ。刺し激げきが強いぶん、食欲もそそられる。あっという間に一皿平らげると、きゅーがお代わりを持ってきてくれて、結局、四皿も食べてしまった。すっかり満腹になった。

「あっ。もしかしてこれ、辛いからカレーっていうんですか……？」

「さあ。どうなのかな。それはちょっとわからないけど」

　マリアローズは椅い子すの上で膝ひざを抱えて微び苦く笑しようを浮かべた。

「ずいぶんきつかったみたいだね。初仕事」

「えっ。いや、そんなことは……」

「お昼、食べる暇ひまもなかった？」

「いっ、いただいた昼食代はお返しします」

「そんなのはいいけど」

　でも、きちっとしてるのは、悪いことじゃないかな。マリアローズはそんなことを呟つぶやいて、ちらりと隣のピンパーネルに目を

やった。二人が視線を交かわしあう姿が、なんだか意味ありげに見えた。そういえば、マリアローズとトマトクン、きゅーは先に夕飯をすませたと言っていた。ピンパーネルは何か用事があって外出でもしていたのだろうか。

「ま、若いうちの苦労は買ってでもしろって言うしね」

　マリアローズは軽く肩をすくめてみせた。

「たまには無理をするのもいいと思うよ。個人的にはね。無理しなきゃダメなときだってあるし。それに、いろんなことを体験しておくのは大事だから。身をもって経験しないとわからないことっていうのは、やっぱりあるしさ。考え方次し第だいだけど、どんなことも無む駄だにはならないんだ。意外と何かに活かせたりするしね」

　無駄にはならない。本当にそうなのだろうか。百ダラーの男として皿洗いをするという経験が、いつか何かの役に立つなんてとうてい思えない。皿洗いは皿洗いで、それ以上でもそれ以下でもないのだ。それでも、適正な賃金が支し払はらわれるなら、生活のためにお金を稼ぐという面で意味はあるだろうが、いくらがんばったところで、あの監かん督とくがまともに評価してくれるとは思えない。正直、二度と監督の顔を見たくない。高こう慢まんちきで居い丈たけ高だかで頭ごなしで怖こわくて、とにかくああいう人は大だい嫌きらいだ。もういやだ。あんな仕事、つづけられるわけがない。

「とりあえず、お風ふ呂ろにでも入ってさっぱりしたら？」

「……はい」

　マリアローズのすすめに従って入浴すると、途と端たんに眠ねむ気けが襲おそってきた。耐たえきれなくなって、自室のベッドに倒たおれこんだ。あっという間に意識がなくなった。目覚めは爽そう快かいとしか言いようがなかった。どういうわけか、今日もがんばろうという気分になっていた。まさか、万国食い倒れ屋台横丁に行くつもりなのか。そのまさかだった。皿洗いはきっと何の役にも立たないけれど、百ダラーの男で終わりたくはないし、一度始めた仕事を途中で放りだすのもかっこわるい。それに、辞やめるのはいつでもできる。難しく考えることはない。無理だと思ったら、ばっくれてしまえばいいのだ。もう一日だけやってみよう。

　屋台横丁に到とう着ちゃくしたのは十時十五分前だった。更こう

衣い室でーいつ緒しよになったベクターは、ニタリと笑ってルーシーの肩を叩たたいた。気のせいかもしれないが、やっぱりねちっこい視線と手つきだった。いったい何なのだろう。疑問に思いながら皿洗い場へと向かった。監督の姿を目にしただけで心臓がばくばくして、うろたえてしまいそうになった。仕事が始まってすぐ後こう悔かいした。深い、とても深い後悔の念が次から次へと押しよせてきた。ばっくれればよかった。

　監督の怒ど号ごうと暴力は昨日よりも恐おそろしく感じられた。どういうわけか、一日の経験がプラスどころかマイナスに働いているかのように、昨日よりも皿洗いが下手になっていた。洗っている最中の皿を泡あわだらけの流し台に落としてしまったり、洗い終わった皿を重ねようとして手が滑すべりかけたり、自分でも、あ、しくじった、と思う瞬しゆん間かんが何度もあった。たまたま監督が見ていなかったので助かった。見られていたら半殺しにされていたはずだ。昨日のように皿洗いに没ぼつ頭とうすることもできなかった。洗っても洗っても時間が進まず、休きゆう憩けいまでがやたらと長かった。それでいて休憩は即そく座ざに終わってしまい、そこからは一秒一秒が苦痛以外の何ものでもなかった。まず手がつめたくて痛かった。立ち仕事なので足も疲れた。泡が目に入ると涙なみだが出た。監督は休みなく皿洗い場を巡じゆん回かいしていて、そのコースは一定ではなく、かなりめちゃくちゃなので、一瞬たりとも気が抜ぬけなかった。ルーシーにできることは、心の中で泣き言を並べながら、一刻も早く仕事が終わることを祈いのりつつ、ひたすら丁てい寧ねいに、可能なかぎり素す早ばやく、皿を洗いつづける。それだけだった。何度か、もうどうなってもいいから逃げだそうと本気で考えたが、なんとか自分を抑おさえた。なぜ我が慢まんしないといけないのか。わけがわからない。

「よし、終了！　遅番に交代だ！　ただちに皿洗い場から出ろ！　帰る前に給料を受けとるのを忘れるな！　ただ働きしたいなら別だがな！」

　そして、とうとう待ちに待った瞬間が訪おとずれた。皿洗い場全体が異様な歓かん喜きに包まれ、それはまたたく間に爆ばく発はつして、すべてを巻きこむ大いなるうねりとなった。ルーシーは泣いた。号ごう泣きゆうした。だって、つらかったのだ。昨日よりもずっと苦しかった。何回もう限界だと思ったことか。でも、やった。やったのだ。みんな、やったな、よくやった、がんばった、と言ってくれた。ありがとうございます。本当に、ありがとうござい

ます。みんなのおかげです。みんながいてくれたから。ルーシーは心の底からそう感じていたし、そう言った。更衣室に行って着き替がえていると、徐じよ々じよに気持ちが落ちついてきた。冷静を通り越こして、白けてきた。あんなことで泣いたりして、恥はずかしい。バカみたいだ。大バカだ。

　どうせまた今日も百ダラーなんだ。たった百ダラーの給料を受けとってロッカーの鍵を返却するために、監督室の前にできた行列の最さい後こう尾びに並んだ。順番がきて監督室に入ると、満面に笑えみをたたえた監督に、バシーンと背中を叩かれた。いきなりだったし、とんでもない力だったので、思わず咳せきこんでしまった。

「よかったぞッ！　二日目にしては見事な働きだった！　素晴らしかったぞ、ルーシー・アッシュカバード！　貴様は万国食い倒れ屋台横丁皿洗い場の期待の星といっても過言ではない！　この調子で精しよう進じんすれば、今まで誰だれもなしえていない昇しよう格かくすら夢ではなかろう！　貴様には是ぜ非ひともその夢を果たしてもらいたいッ……！」

　さかんに褒ほめられたあげく、監督から手て渡わたされた硬貨は、千ダラー金貨一枚だった。

　昨日は百ダラーだったのに、千ダラー。自分としては、今日のほうが昨日よりも出来が悪かったように感じているのに、一気に十倍だ。どうして。監督はどこを評価したのか。疑問はあれど、やはり嬉しかった。帰り道の途中に思いついた。ひょっとしたら、昨日よりも慣れたぶん、自分の不ふ手て際ぎわに気がつくようになったのかもしれない。昨日はとにかく無我夢中だったので、うまくできているとかできていないとか、そんなことを考える余裕もなかった。振り返れば、今日はほんの少しゆとりがあった。そのせいで、思考が皿洗いの技術論にまで踏ふみこんでしまったのではないか。皿洗いも、しごく単純な仕事のようで、効率よく、ミスなくこなすためには、いろいろなテクニックがたぶん必要なのだ。そのことに気づきはじめて、まだずぶの素人しろうとでしかない自分の不ふ甲が斐いなさに打ちのめされたのが、今日のルーシーだったのではないか。監督はそのことを見み抜ぬいて、ようやくおまえは長くつづく皿洗い人の道のスタートラインに立った、これからがんばれ、と励はげましてくれたのではないか──。

「昨日よりは元気だね」

家に帰ると、マリアローズにそう言われた。トマトクンはまたソファで寝ていて、ピンパーネルと一緒に、きゅーが作ってくれたらしい焼きそばという料理を食べた。ルーシーの焼きそばは超ちよう大盛りだった。きゅーが料理までできるなんて驚おどろきだったが、ぜんぶおいしくいただいた。入浴すると眠ねむくなったので、余計なことは考えずに寝ることにした。明日も仕事だ。百ダラーの男から、千ダラーの男になった。明日はもっと稼いでやる。

夢を見た。

夢の中では、マリアローズは女の子で、ルーシーはもっと背が高く、筋肉もついていて、父のように逞たくましかった。他ほかにも誰かが出てきたが、よく覚えていない。ルーシーはマリアローズと何をしていたのか。わからない。ただ、楽しかった。うっとりしてしまうくらい、とても楽しかった。

目が覚めると、ちょっと寂さびしかった。内容はあやふやだが、ひたすら楽しかったあの夢が実現することは絶対にないのだ。

出勤前の朝食の席では、マリアローズの顔を見ることができなかった。マリアローズの声を聞くだけで胸が苦しくなった。とはいえ、仕事のつらさに比べれば、正直、たいしたことはなかった。三日目は初日、二日目よりもきつかった。この日、ルーシーは初めて監かん督とくの鉄てつ拳けん制裁を受けたのだ。

気を抜いていたわけではない。何かの加減で手が滑って、洗っていた皿を流し台の泡の中に落としてしまった。今までも何度かあったことだし、床ゆかに落として皿が割れたわけではない。重大なミスになりかけた、小さなミスだ。あ、やっちゃった。いけない、いけない。気をつけないと。それくらいの認にん識しきだったのだが、甘かった。

「見ぃぃぃぃぃたぁぁぁぁぞぉぉぉッ！　きッさまぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

ものすごい形相で監督がすっ飛んできて、次の瞬間、自分が吹ふっ飛んでいた。

床に叩きつけられて、おなかに何か重いものが叩きこまれた。息ができなくなった。

「甘い顔をした途と端たん、つけあがりやがってこの糞くそ蛆うじ虫むしがッ！　油断大敵という言葉を知らんのかアホアホカンカン日照り虫ッ！　一つの不注意が十の人災を招くのだ！　ゆえに人は一つたりともミスを犯おかしてはならんのだ！　この監督様のように無む謬びゅう、無敵でなくてはならんッ！　それができんから貴様らはいつまでたってもクズなのだ！　さあ立てッ！　さっさと立つのだ、こぉぉぉぉのチン●ス野や郎ろうッ……！」

　ガッツガツ蹴けったくられ、無理やり蹴り起こされて、やむなく皿洗いを再開したが、痛いし苦しいし情けないし恥はずかしいしで、しばらくは皿を洗うどころの騒さわぎではなかった。皿を洗っているふりをするだけで精せいーいつ杯ぱいだった。ちゃんと皿を洗うことができないので、また監督に殴なぐられ、蹴られるのではないかと気が気でなかった。顎あごがガクガクして、頭もぐらぐらしていた。結局、本調子に戻もどる前に仕事が終わった。戻るどころか、とくに腹部の痛みは増していて、終業時の歓喜は訪おとずれず、一人取り残されたようなみじめな気分で着替えていると、ベクターに背中をさわられた。

「おめでとさん。おまえもこれで仲間入りだな」

「仲間……？」

「監督にぶん殴られるのは、ここでは通過儀ぎ礼れいみてえなもんなのさ」

「じゃあ、皆みなさん殴られたんですか？」

「もちろん。一度もぶん殴られてねえやつなんていねえよ。でも、あの程度ですんだってことは、監督、おまえのことを見み込こみありだって思ってるな、きっと」

　そんなことを言われても、まったく嬉うれしくなかった。監督室に立ちよるのも、いやでいやで仕方なかった。でも、せっかく終業まで耐えたのだ。あんなことがあったから、また百ダラーに逆ぎやく戻もどりかもしれないが、ルーシーはこの仕事は今日で終わりだと心に決めていた。最後がただ働きというのも腹立たしい。一ダラーでも二ダラーでもいいから、金をもらって帰らないと気がすまない。よし、と自分に気合を入れて監督室に入ると、監督は神しん妙みような顔つきで腕うで組ぐみをしていた。

「ルーシー。ルーシー・アッシュカバード。まずは貴様に一つ言っておきたい。人の集中力には限界というものがあるのだ。ずっと緊きん張ちようを維い持じすることはできない。だが、業務中にミスを犯してはならん。我々はそのせめぎあいの中で生きている。否いな。これは戦いなのである。我々はこの戦いから逃にげてはならんのだッ。わかるか、ルーシー。俺は貴様にそのことを理解してほしかった。つまり、俺の鞭むちは愛の鞭であるッ。痛みを通して貴様に気づいてほしいことがある。それゆえに、ためらいつつも、心を痛めつつも振ふるう、愛の鞭であるッ。ルーシー・アッシュカバード……ッ！」

「は、はいっ！」

　両りよう肩かたをつかまれて、激しく揺ゆさぶられた。身体からだだけではなく、ルーシーの心も揺れていた。監督の、ドン・バーナード・シュタインウォルフ13世のまん丸い両眼が、真っ赤になって光っていた。ぬれている。涙なみだだ。監督は泣いていた。

「貴様には期待している。さあ、受けとってくれたまえ。今日の報ほう酬しゆうだ」

　予想に反して、三日目の給料は千ダラー金貨一枚と五百ダラー銀貨一枚だった。喜ぶべきかどうか、ルーシーには判断がつかなかった。ただ、監督が言っていたとおり、今日のルーシーにはどこか気のゆるみのようなものがあった。三日目ということで、ちょっとした慣れからくる油断だったのかもしれない。甘い顔をした途端、つけあがりやがって、と言われたような覚えがある。たしかに、二日目に褒められて、監督に対する恐きよう怖ふ心しんも若じやつ干かん薄うすれていた。ぴりっとしていなかったのかもしれない。監督はお見通しだったのか。愛の鞭と言っていた。監督は、ぼくのことを思って。ぼくのために──。

　四日目の給料は、三日目と同じく千五百ダラーだった。

　五日目は千ダラーだった。帰り際ぎわ、監督室で、たるんでいる、と注意された。実際、千五百、千五百とつづいて、がっかりしていた部分もあったから、少々気が抜けていたかもしれない。皿洗い人は常時五十人近くもいるのに、監督はよく見ている。それが監督の仕事なのだろうが、それにしてもたいしたものだ。

　六日目は千五百ダラーに戻った。

　七日目も千五百ダラー。

　八日目は千ダラーだった。帰り際、監督室で、たるんでいる、と注意された。いつだったか、どこかで同じような台詞せりふを聞いたような。気のせいだろうか。

　だいぶ仕事に慣れてきて、身体は楽になってきた。ゆとりがあるぶん、皿を洗っている間に腹がすいて仕方なく、十五分の短い休憩の間に肉入りパンなどを買って食べるようになった。ベクターが安い屋台を教えてくれた。親切だが、着替え中に身体をさわってきたり、気がつくと変な目つきでこっちをじっと見つめていたり、どうもおかしなところがある。そんなわけで、なんとなく警けい戒かいしてしまうのだが、今日は帰り道まで一緒になった。二人きりではなく、皿洗い場で働きはじめてまだ五日目のジョージという少年も同じ方向だったので、助かった。新米同士だし、年も同じくらいだから、ルーシーはできるだけジョージに話しかけた。ジョージとばかり話していると、ベクターは不ふ機き嫌げんになったが、気にしないことにした。

「そういえば、ジョージは──」

　ルーシーに安い屋台を教えてくれたのはベクターだが、その店をジョージに教えたのはルーシーなのだ。休憩中にすきっ腹を抱かかえてため息をついていたジョージを見て、ルーシーが声をかけた。それで親しくなった。

「今日、お給料はいくらだったの？」

「ええと、今日は」

　ジョージはきれいな青い眼をした十五歳の少年で、背はルーシーよりずっと高いが、いつもおどおどしている。エルデン育ちらしいが、絶えず何かに怯えている小動物みたいなところがあって、ルーシーは親近感を抱いだいていた。

「千ダラーだったよ。監かん督とくに、たるんでる、と怒おこられた」

「そっか。たるんで──」

　いつだったか、どこかで同じような台詞を聞いたような。

「あれ？　待って、えっと……じゃあ、昨日は？」

「昨日は、千五百ダラーだったんだ。その前も千五百ダラーで。そのときは、でも、監督に初めて殴られたから、なんでかなって思ったんだけど」

　いつだったか、自分もそんなことを思ったような。

「……ひょっとして、最初の日は百ダラーで、二日目は千ダラーだった？」

「うん。どうして知っているの？」

「どうして、だろうね……」

「プッ」

　吹きだしたのは後ろを歩いているベクターだった。

　ベクターはルーシーとジョージの間に割って入ってくると、二人の肩かたを両りよう脇わきにかかえこむようにして抱だいた。

「そりゃ知ってるよな？　だって、ルーシー、おまえも同じだっただろ。ひゃくせんせんごせんご、せんせんごせんごせん、せんごせんごせんせん──ってな」

「あの……何ですか、その、歌みたいなのは？」

「皿洗い人の給料。だいたい決まってるんだよ、パターンが。よっぽど使えねえやつ以外はな。監督が監督室で言うこともほとんど一緒。三日目に泣かれただろ？　俺の鞭は愛の鞭であるッ、とか言って」

　ルーシーとジョージが一いつ斉せいにうなずくと、ベクターは愉ゆ快かいそうに腹を震ふるわせて笑った。

「ついその気になっちまうんだよな。そのへんがうまいんだよ、我らが監督様は。まあ、三十日目に初めて三千もらってからが勝負だな。そこから先はマジで監督の気分次し第だいだし。反はん抗こう的なやつとか、さぼるやつとかはいびり倒されたりするしね。目をつけられたら厄やつ介かいだな。気に入られちまえばどうってことねえけど。それにもちゃんとコツがあるんだけどな」

　ジョージがベクターにそのコツについて尋たずねた。ベクターは何か答えていたが、ルーシーは聞いていなかった。

　裏切られた気分だった。たしかに、なんだかちょっと変だと感じていた。でも、まさか監督の涙が演技だったなんて。監督は大勢の皿洗い人すべてに気を配って、それぞれに適切な処置を施ほどこしているのだとばかり思っていた。横暴なところはあるが、監督には監督なりの理り屈くつがあって、筋を通している。あまり好きにはなれない。どちらかと言えば苦手なタイプだが、ちょっとだけ尊敬しはじめていた。

「やっぱり、三日目がヤマなんだよな」

　ベクターはいつの間にかルーシーから離はなれて、ジョージの肩だけを抱いていた。ルーシーは内心、ベクターにふれられるのがいやで仕方ないのだが、ジョージは違ちがうのだろうか。見たところ、満まん更ざらでもなさそうだ。

「あそこでぶん殴られて、その日、終業まで我慢して仕事するかどうか。そこが第一の関門なわけよ」

「へー。そうなんだ」

「そうなんだよ。次は十五日目か。給料が初めて二千に上がるんだ。そして次の日、五百になっちまう。そこで耐えられるかだな」

「知っていれば、なんてことはないね」

「だろ？　そのためにいるんだよ。俺らみたいな古株は。後こう輩はいに経験を伝えるっていうの？」

「じゃあ、ベクターさんのこと、先輩って呼んでもいい？」

「ああ、いいよ。あたりまえじゃねえか。だって俺、おまえの先輩だもん」

「先輩」

「へへ。なんか照れるな」

「これからもいろいろ教えてくれる？」

「何でも教えてやるよ。俺が言うとおりにすれば、監督にも気に入られる。三千もらえる率ってのがあってな。満額率っていうんだけど。計算得意なやつが集計して出してるんだよ。俺はかなりいい線いってるんだ」

「すごいんだね、先輩」

「そうでもねえけど。いや、まあ、でも、俺のやり方に従ってればまず間違いねえよ」

「先輩と仲よくなれてよかった」

　満更でもない、どころではない。ジョージはもう、自分のほうからベクターにべたべたしている。まるで恋こい仲なかの男女みたいだ。ベクターも鼻の下をのばしまくっているし、いったい何なんだろう、この人たちは。とうていつきあいきれない。ベクターもジョージも、さっきからルーシーのことは無視しているし、無理をしてつきあう必要もなさそうだ。二人で勝手にやっていればいいんだ。

　ルーシーは二人に短く別れを告げ、別の道を通って帰ることにした。地面を蹴けりつけるようにして歩きながら、裏切られたんじゃない、と思いなおした。そうじゃなくて、目が覚めたのだ。監かん督とくは最初からルーシーをうまく騙だまして、いい気にさせて、こき使おうとしていた。ルーシーはそのことに気づいていなかった。バカだったのだ。世間知らずで未熟者のガキだから、いいように踊おどらされていた。俺の鞭は愛の鞭、か。よく言う。それよりも、監督は、ぼくのことを思って。ぼくのために。あんなことを考えてしまった自分が情けないし、恥ずかしい。きっと監督はほくそ笑んでいただろう。素す直なおなガキは、ちょっと泣いてみせればころっと騙されてくれるから助かる。そんなふうに思っていたに違いないのだ。

　ばっくれよう。

　家に帰りつくころには、ルーシーは決心していた。

　昼食の肉入りパンを買ったぶんをのぞいて、八日間で稼かせいだ八千三百ダラーが手て許もとにある。トマトクンの家に厄介になっているので、生活費がかからないのだ。これでいいのか。よくはないと思うが、何も言われないし、今しばらく厚意に甘えさせてもら

おう。その間に、ちゃんとした仕事を見つけるのだ。明日から新しい気分で、新しい仕事を探そう。

Omenage 899 5th revolution 4th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.9

じつは再来

ベンテン・カフェで紙切れをチェックしている人々は、誰だれも彼も多かれ少なかれ苛いら々いらしている。壁かべを叩たたいたり、床を蹴ったりしている人も珍めずらしくない。いきなり何か叫さけびながら紙切れを破りはじめ、誰かに止められて、抵てい抗こうし、喧けん嘩かが始まる。そんな場面にも出くわした。落ちついて、焦あせらず、一枚一枚にじっくり目を通して、よく検討し、しっかり判断して、という具合にはなかなかゆかない。そうかと思うと、ふらっと現れ、ぱぱっと紙切れを剝はいで、さっとどこかへ行ってしまう人もけっこういる。ああいう人は要領がいいのだろうか。何かコツでもあるのか。ルーシーが知らないだけなのかもしれない。勘かん所どころを知らないせいで、無む駄だに時間を費ついやして損をしているのだとしたら、やりきれない。

マリアローズたちも、かつてはこんなふうに仕事を探していたのだろうか。だとしたら、何か教えてくれてもいいはずだ。いい仕事を見つけるための秘技を伝授してくれたってバチはあたらない。無理だ。できっこない。それはそうだ。

だって、皿洗いをやめて今日から別の仕事を探すことは、誰にも話していない。皿洗いについても、なんだか体てい裁さいが悪い気がして、何をしていたかまでは教えなかったが、仕事やめることにしました、また職探しです、とは言えなかった。言ってしまえば、きっと楽になるだろう。本当は言いたかった。昨夜も今朝も言おうとした。結局、言いだせなかった。いいのだ。言う必要なんてない。前の仕事の内容を明かしていないのだから、職を変えたとしても、黙だまっていればわからないはずだ。新しい仕事が見つかりさえすれば。

それが問題だ。難問だ。超ちよう難関だ。

とりあえず、皿洗いはもういやだ。思い返せば、あの仕事はきつかった。業務中は本当につらくてつらくてたまらなかった。早く終わって。頼たのむから早く終わってほしい。考えることはそればかりだった。思いだすだけで、動どう悸きがして、頭や胃が痛くなってくる。終業時の解放感は、ようするにその反動だった。あの快感はものすごかったが、それを味わうためにはとことんまでつらい目に遭あわなければいけない。冗じよう談だんじゃない。

うまい話には裏があるということだ。まんまと三千ダラーに釣つ

られてしまった。よすぎる報酬、簡単そうな仕事内容は危険だ。ところが、こうして見ていると、そうした募ぼ集しゆうはかなり多い。資格や条件がない募集は、たいがい給料がわりとよくて、誰にでもできる仕事です、などと書いてある。ぜんぶあやしい。さりとて、あやしい募集を片かたっ端ぱしから無視すると、経験者優ゆう遇ぐう、即そく戦せん力りよく歓かん迎げい、天気予報が得意な人、ラハン語堪たん能のうな方、上古ハイロ高位語メオンを書き写すだけの単純作業です、暗殺の依い頼らいです、等々、ルーシーには無理そうな仕事しか残らない。

　やっぱり、あれしかないか。

　でも、ぼくにはたぶん、向いてない。

　一いつ緒しよにアンダーグラウンドにもぐる同行者を募つのる紙切れは、無数に、と言ってもいいほどたくさん貼はられている。ルーシーはあえて見ないようにしていたのだ。正直、侵入者クラッカー関係の募集は、その他の業種よりも判断が難しい。専門用語が多すぎるし、募集主を信用しても大だい丈じよう夫ぶか、という問題もある。信しん頼らいできる人物なのかどうか、きっと自力で見抜かないといけないのだろう。その自信が今のルーシーにはない。

　何しろ、あの監かん督とくにすっかり騙されていた。いい子そうで、ちょっと自分に似ていると思っていたジョージは、あのベクターにすり寄ってゆくような男の子だった。ぼくには人を見る目がないんだ。ぼくみたいに浅はかなガキは、海千山千の侵入者クラッカーにたやすく丸めこまれてしまうだろう。そんなことを考えていると、際限なく落ちこんでしまいそうになる。

　ルーシーはいったん壁かべ際ぎわから離れることにした。気分を切りかえたい。ベンテン・カフェの中には大勢の物売りがいる。何かつめたい飲み物でも買おうか。あたりを見まわすと、知っている顔が目に入った。相手も柱から顔だけ出してこっちを見ていたようだ。目があった。

　ルーシーが会え釈しやくすると、相手も軽く頭を下げた。なんだかばつが悪そうにしている。もっと言えば、しまった、失敗した、しくじった、とでも思っていそうな表情だ。

　不思議に思いながら近づいてゆくと、相手はきょろきょろして、いったん背を向けようとしたが、結局、その場から動かずにルー

シーを待った。

「こんにちは、カタリさん」

「お、おう。一別以来やな。げ、元気そうやないか」

「そうでもないんですけど」

　うつむいて、つい苦く笑しようしてしまった。その苦笑いさえ凍こおりついた。

　カタリはマリアローズからどこまで聞いているだろう。ルーシーが何か仕事をしているらしい、ということくらいは知っているかもしれない。それなのに、どうしてベンテン・カフェで仕事探しをしているのか。ひょっとして、疑問に思われているのではないか。

　ルーシーはおそるおそるカタリの顔色をうかがった。マリアローズがさかんに魚、半魚人呼ばわりしていたせいだろう。どうしてもお魚にしか見えない。いや、そんなことはどうでもいいのだ。カタリはなぜ柱の陰かげに隠かくれて、そこから顔だけ出してルーシーを見ていたのか。どうして逃にげようとしたのか。事情を知っていて、なんとなく気まずかったからではないのか。わからない。読みとることができなかった。カタリは顔を斜ななめ後ろに向けてルーシーの視線を拒きよ絶ぜつし、手を振った。

「お、おあああ、わし、な、そのう、用事があってな。すまんのう。地味にわりとけっこう急いどんねん」

「あ、そうなんですか」

「せや。ほんならな。またな」

「はい」

　カタリはせわしなくどこかへ行ってしまった。でも、本当に用事があったのだろうか。ルーシーと話をしたくなくて、逃げだしたのではないか。

　あの人は最初、ルーシーを女の子だと勘かん違ちがいしていた。それはマリアローズも同じだが、カタリの場合、きっと下心があってやたらと親切にしてくれたのだろう。だから、ルーシーが男だと知った途と端たん、態度が急変した。なんて、人のことは言えない

か。ルーシーもマリアローズが男だとわかって、とてつもなく驚おどろき、身勝手ではあるが、ものすごく傷ついたのだ。

　マリアローズのことを考えると、息がつまる。胸が締しめつけられ、鼻の奥がつんとして、目め頭がしらが熱くなり、何かがこみあげてきそうになる。それでも二度と会えないのなら、忘れることもできるだろう。ところが、家に帰れば、マリアローズはいるのだ。顔をあわせるたびに、マリアローズは笑いかけてくれる。その笑え顔がおを見るたびに思う。どうしても信じられない。こんな男の人なんているはずがない。いてたまるか。きっと何かの間違いだ。ぼくは騙されているんだ。これは引っかけ問題なんだ。ぼくがその問題を解けないでいるだけなんだ。

　いつか父が教えてくれた。もし、ルーシー、お前が心から愛することのできる人を見つけたら、迷わず強く抱きしめて、唇くちびるを奪うばい、組み伏ふせて、逃げられないようにして、決して離さない、離れないと誓ちかうんだよ。まだお前にはわからないかもしれないが、本当の愛は激しいものだからね。その激しさから目をそらしちゃいけない。恐おそれては駄だ目めだ。怯ひるまずに自分の愛をさらけだして、ぶつけあうんだよ、ルーシー。壊こわすことも、壊されることも、怖こわがっちゃいけない。もしそれが本物ならば、愛は死すらも乗り越こえられるものなんだからね。

　でも、お父さん、ぼくの愛は無残に破れてしまいました。

　ぼくの胸も破れてしまいそうです。

　マリアローズさんとはもう会わないほうがいい。あの家を出るべきだ。そう思うのに、出たくない気持ちもある。二度とマリアローズさんと会えないなんて、考えるだに恐ろしい。

　仕事だ。仕事を探そう。お金を稼がないと。それに、ぼくは強くなりたい。そうだ。強くなりたいんだ。一人の男として、強く。そのためには何だってする。皿洗い。あの仕事も無駄じゃなかった。マリアローズさんの言うとおりだ。あの仕事をしている間に、エルデンの街を普ふ通つうに歩けるようになった。仕事がいやだったり、疲つかれ果てていたり、すごく空腹だったりして、周りのことを気にしている余よ裕ゆうがなかっただけだけど、気がついたら平気になっていた。しがない皿洗いとして、ありふれたちんけな労働者として、この街にとけこむことができるようになった。今は、強こわ面もての侵入者クラッカーがひしめきあっているベンテン・カ

フェにいても、恐きよう怖ふ感かんはそれほどない。これだって進歩だ。プラス思考だ。いいほうに考えるんだ。そして、強くなるんだ。悲しい思い出をぜんぶ胸の奥にしまいこんでおけるほど強くなって、いつか必ずお父さんを捜さがしあてて、お母さんのことを伝えて、立派になったぼくの姿を見てもらうんだ。

　やっぱり侵入者クラツカーだ。

　ルーシーは決意をあらたにして壁かべ際ぎわへ向かおうとした。足が止まった。

「みんな！　聞いてっか……！　ていうか耳の穴かっぽじってよォォーく聞いてくれッ！　そうだッ！　そうなんだッ！　オレ、まんまと参上しちゃいましたッ……！」

　声のほうを見たのはルーシーだけではなかった。何しろ、すごい大声だった。その男はベンテン・カフェのちょうど真ん中くらいの場所に仁に王おう立だちして、声を張りあげていた。

「正直、久しぶりなんだッ！　この地上！　エルデン！　どこにいたかって？　そんなの決まってる！　モチ、アンダーグラウンドだッ！　なに？　アンダーグラウンドでいったい何してたかって？　わからないのか!?　この甘ちゃんめ！　モチ、修しゆ行ぎようだ！　アンダーグラウンドにこもってやることっていったら、そりゃもう修行しかないじゃないか……ッ！」

　ただならぬ雰ふん囲い気きを感じたのか、男の周りからはどんどん人がいなくなった。とはいえ、皆みな、興味はあるようだ。それとも、好こう奇き心しんだろうか。たくさんの人が男を遠巻きにして、その話に耳を傾かたむけている。もちろんルーシーもその中の一人だった。

「今回は二巡じゆん月げつ！　二巡月にわたる修行の旅でしたッ！　自分にお疲れさまと言いたいっす！　ついでにオレ、正直一いつ徹てつ者ものなんで、否定しませんッ！　二巡月ぶりにお日様の光をいっぱいに浴びて、さすがにちょっとハイになってます、ハイッ！　はっきり言って、激げき烈れつ過か酷こくな修行でしたッ！　なんべんも死にかけたけど、こうして生きてる！　生きてるって素す晴ばらしいッ！　みんなもそう思わないかァーッ！　思うよな！　思わないと嘘うそだッ！　思わないヤツは嘘をついてる！　嘘つきは泥どろ棒ぼうの始まりだッ！　嘘つきは全員泥棒に

なっちまえ！　オレは違う！　オレは！　そう、オレは！　オレの名は……！」

　男は握にぎり拳こぶしを突つきあげた。ルーシーはごくりと唾つばをのみこんだ。少なくとも男の話に聞き入っている人々は、男の次の言葉を待って静まりかえっている。

　それにしても、男の身なりは汚きたない。フード付きのマントも、服も、ブーツも、足あし許もとに置いてある巨きよ大だいな背負い袋ぶくろも、汚よごれているだけでなくぼろぼろだ。二巡月もの間、アンダーグラウンドにいて、地上に戻もどってきたばかりだというが、着き替がえもしていないのか。フードをかぶっているのでちゃんとは見えないものの、顔が真っ黒だ。フードからはみだしている髪かみの毛もごわごわに固まってる。あの様子だと、当然、入浴もしていないだろう。近づいたら、かなりくさそうだ。本当にひどい有様だが、それにもかかわらず、何か惹ひきつけられるものが男にはある。とにかく声が大きいせいか。あるいは、男が左手で柄つかを握にぎって床ゆかに突き立てている、あの大きな、トマトクンの大たい剣けんにも負けないくらい大きな、斬きるよりも木こっ端ぱ微み塵じんに叩き壊してしまいそうな剣のせいだろうか。異様なまでの迫はく力りよくだ。

「──オレの名はリュー……！　人呼んで竜りゆう殺ごろしリューとは何を隠そうオレのことだッ！　ちなみに、最初に竜殺しリューって名乗りはじめたのは嬉うれし恥はずかしこのオレで、正直、自じ称しようだった！　でも、そんな細かいことはどうだっていいッ！　肝かん心じんなのはッ！　オレが竜殺しリューだってこと！　そしてこのオレが今、この瞬しゆん間かん、この場所で、竜殺し仲間、同志、パートナー、フレンズ、等々を大だい募ぼ集しゆうしてるってことだッ！　ターゲットは竜！　条件はとくにナァーシッ！　未経験者でもオケッ！　そりゃあそうだぜ、竜を殺したことのあるヤツなんてそうそういるはずがないからなッ！　そんなわけで、誰だれかッ！　オレと一緒にバリバリ竜を狩かっちゃいませんか……ッ！」

　世間知らずのルーシーでさえ知っている。

　竜はずいぶん大きな生き物らしい。牛や馬なんて問題にならないくらいの巨きよ体たいで、それなのに羽があって、飛べるらしい。火を吐はくらしい。昔は地上にも竜がいて、ときおり人間の街を襲おそったりしたらしい。それを退治して、家来にしてしまった偉え

らい王様もいたらしい。竜が登場する物語はたくさんある。ルーシーの家にも何冊か竜が出てくる本があった。竜は強大な悪で、立ち向かわないといけない敵だ。竜を殺した勇ゆう敢かんな騎き士しは英えい雄ゆうになり、お姫ひめ様さまと結けつ婚こんしたり、王様になったりして、名めい誉よと巨万の富をえる。竜が宝物を隠し持っていて、それを手に入れようとする冒ぼう険けん者しやの物語も読んだ。竜は頭がよく、自分の棲すみ家かにたくさんの罠わなをしかけている。それらをすべて突とつ破ぱした冒険者が宝物に手をかけようとしたとき、竜の火に焼かれてしまう。冒険者と一緒に、宝物も灰になってしまうのだ。その残ざん酷こくな終わり方がルーシーの心に残っている。昔、父に尋たずねたことがあった。竜って本当にいるの？　もちろんいるさ、と父は答えた。竜界ドラガンドという世界があってね。そこに行けば竜だらけだ。竜しかいないんだよ。

　やっぱり、竜は本当にいるんだ。

　リューという人は、その竜を狩りに行く仲間を募つのっているのだという。

　竜殺しリュー。異名からすると、竜を殺したことがあるのだろう。だとしたら、すごい。すごいなんてものじゃない。雲の上の人だ。それなのに、条件はとくにないという。変な迫力はあるが、なんというか、親しみやすさみたいなものを感じなくもない。どこか気軽に声をかけてしまえそうな雰囲気がある。でも、竜なんて。そうだ。無理だ。竜はきっと強い。恐おそろしい生き物に決まっている。竜に挑いどむなんて無む謀ぼうだ。ルーシーには無理だ。

「さあッ！」

　リューが右を向いて叫んだ。

「さあッ！　さあッ！」

　次は左だった。

「さあさあさあ……ッ！」

　今度は後ろだ。

「さあッ！　どうしたッ！」

　それから前に向きなおった。

「誰かいないのかよ！　このオレと夢をガッチリつかみたい漢おとこの中の漢はッ！　それとも腰こし抜ぬけばかりなのか!?　なーんだ口だけかよッ！　そのポケットの中には何が入ってるんだ！　幼いころ胸の奥に芽生えた夢のかけらじゃないのか!?　漢なら誰だって夢のために突っ走るもんじゃないのかよ……!?」

　なんだかだんだん意味がわからなくなってきたが、どういうわけか聞いていると胸が熱くなる言葉だ。ところがなぜか、リューを遠巻きにしていた人々は続々とその場を離はなれてゆく。リューの目の前をすっと横切ってゆく人もいる。そのうちリューのそばを大勢が行き交かいはじめた。またたく間にリューの声は喧けん噪そうの一部になってしまった。もはや誰もリューの言うことには耳を貸していない。それでもリューはしばらく叫びつづけていたが、とうとうがっくりと肩かたを落とした。

「……そうかよ。そうなのかよ。そういうことかーい。所しよ詮せん、この世に漢なんていやしねえ。そういうことなんだな……？　オレは道なき荒こう野やを往く寂さびしき一いつ匹ぴき狼おおかみ。とどのつまりはそういうことなんだよな。へっ。いいさ。問題ないぜ。だって、オレは漢だ。一人だってッ！　オレは、やれる……。やれる……はずだ……？　なぜなら、そう、オレは漢だから……？」

　あからさまに声に元気がなかった。しかも、語ご尾びが上がって疑問形になっていた。

「漢ォ～だァ～からァァ～……」

　リューは漢の歌を口ずさみながらふらふらと歩きだした。大剣を杖つえ代がわりにしているものの、あまり役に立っているようには見えない、まるで酔よっぱらいのような千鳥足だ。

　ベンテン・カフェは混雑している。リューは何度も誰かにぶつかって、そのたびに突き倒たおされそうになったり、脛すねを蹴けられたりした。それでも、生き物というより物体のようによろめくだけで、痛みを感じている様子はない。仲間の募集が不ふ首しゅ尾びに終わったことが、そんなにもこたえているのか。ちょっと気の毒だが、一人も手をあげなかったということは、それなりのわけがあるのだろう。ルーシーも、じんわり胸が熱くなっただけで、踏ふ

みだす気にはなれなかった。竜なんて自分の手に余る。それが一番大きな理由だが、周りの空気がやばかった。たぶん、最初は興味本位で人が集まっていただけなのだ。見世物としてはおもしろいが、関かかわりたくはない。そう感じて、皆、さっと引きあげたのだろう。ルーシーも勢いで応募しなくてよかった。人波にのまれかけているリューの後ろ姿は寂しげで、哀あい愁しゆうが漂ただよっていて、目を離すことができない。でも、それとこれとは別だ。そう。これはまったく別の問題だ。

　巨大な背負い袋ぶくろが、ぽつんと、いや、どでーんと床ゆかに鎮ちん座ざしている。

　あそこにはリューがいた。リューの足あし許もとに置かれていたのだ。まず間ま違ちがいなくリューの持ち物だろう。あんなに大きなものを忘れてゆくなんて、信じられない。それだけ打ちひしがれていたということか。誰だれも見向きもしていないようだし、ルーシーも無視して、仕事探しを再開したほうがいい。わかっているのだが、ダメだ。気になってしょうがない。気にならないほうがおかしい。

　駆かけよって、背負い袋の吊つり紐ひもに手をかけた。持ちあげてみると、びっくりするほど重かった。片手では無理だ。両手じゃないと。半ば引きずってリューを追った。酔いどれ同然のリューはまだ遠くまで行っていないはずだ。案の定だった。とうとう誰かに張り倒されたのかもしれない。リューは大たい剣けんを抱だいて床にうずくまっていた。

「あの！」

「……むぁ？」

　リューは振ふり向いてカッと目を見開いた。その目が急接近してくる。目だけではない。身体からだごとだ。飛びかかってくる。ルーシーは慌あわてて背負い袋の吊り紐から手を離し、踵きびすを返そうとした。逃げないと、まずいことになる。本能がそう告げていた。ちょっとだけ遅おそかった。リューはルーシーの手を猛もう然ぜんと、ひったくるように握って、ぶんぶん上下に振った。

「そうかァッ！　そうかそうかそうかッ！　そうなんだな！　よしッ！　わかった！　ぜーんぶオレに任せといてくれッ！」

「え？　え？　え？　えええぇぇっ!?」

「何も言うなッ！　言葉はいらないッ！　言葉はいつだって無力だ！　それにしても、きみのような可か憐れんな女の子でも漢になりたいと思ったりするんだなッ！　それともオレの漢っぷりに魅みせられちゃったかッ!?　なーんて、いくらか自信過か剰じよう気味だぜ、今日のオレッ！」

「い、いえ……あの、ぼく……」

「ぼく!?　なんてこった！　もしかして噂うわさのぼくっ娘こってヤツ!?　初めて見た！　惚ほれたぜ！　惚れちまったッ！　このオレと！　結けつ婚こんを前提に交際してくれませんかッ！」

「いや、だから、そうじゃなくて、ぼく、女の子じゃなくて、男……」

「なななななななななななななななあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁにぃぃぃぃぃぃぃ……ッ!?」

　リューの目玉が飛びだして、こぼれ落ちそうになった。その全身が石と化したかのようにも見えたが、リューは天を仰あおいで瞑めい目もくし、静かにため息をついてから一つうなずいた。手は握られたままだ。

「……そうか。そうかそうか。そうっすか。そういうことね。なーるほど」

　リューはニカッと笑ってみせた。若じやつ干かん暑苦しいが、わりとさわやかな笑え顔がおだった。

「腑ふに落ちたぜ。それで、か。それで漢になりたいッ。そういうわけなんだな？　漢の中の漢に……！　だったら、オレは自信を持ってこう言えるッ！　その選せん択たくは正しいぜ。オレに任せておいてくれ。オレと一いつ緒しよに突き進めば、絶対に漢の中の漢になれるッ。間違いないッ」

「え？　あ……え？」

「さあッ！　そうと決まったらグズグズしてる暇ひまなんかないッ！　きみ、名前は？」

「あ、る、ルーシーです。ルーシー・アッシュカバード」

「よォォーし、ルーシー！　さっそく走るぞ！　ここから先はもう漢おとこの道だッ！　オレが連れてってやるぜ、どこまでも！　見たとおり、オレは漢の中の漢ッ！　オレを信じろ……！」

「え？　え、え、え、え、うわあああああああぁぁぁぁぁぁ……！」

　リューはあの重い背負い袋を軽々と背負って、右手で持った大剣を肩にかつぎ、左手でルーシーの右手をガッチリ握りしめた。駆けだして、あっという間にベンテン・カフェを飛びだしてしまった。なんて強ごう引いんなんだろう。素す早ばやいし、かなり力持ちで、これほどの大荷物にもかかわらず、快調に飛ばしている。驚きよう異い的な脚きやく力りよくだ。ルーシーはついてゆくのがやっとだった。でも、なんでついてゆかないといけないのか。そうだ。ついてゆかないほうがいい。だって、何がなんだかわからない。リューは何をするつもりなのか。何をさせられるのか。ルーシーはリューの手を振りほどこうとしたが、ダメだった。すごい力だ。思いきって足を止めてみたら、かまわず引きずられた。かえって危ないので、走るしかなかった。

「ど、どこへ……!?」

　かろうじてそれだけ訊きくことができた。

　リューは振り返らずに笑った。

「ハハハハハハーッ！　いかに竜殺しリューといえども！　さすがに二人っきりじゃあ戦力不足ッ！　でも大だい丈じよう夫ぶッ！　心当たりがあるんだ！　このオレに任せとけッ！」

　リューとルーシーは環状通を突っ切って、古びたり崩くずれかけたりしている建物や、廃はい材ざいの掘ほっ立て小屋がひしめいている地区に入った。もはや二人とも息があがっていたが、リューは足をゆるめようとしない。ルーシーはとにかく必死だった。なんで必死にならないといけないのかわからないが、無我夢中で駆けつづけた。その先に何かあるような気がしていた。きっといつか何かが見えてくる。ぼくはそこにたどりつきたい。

　汗あせみずくになった二人は、一いつ軒けんのバラックに突っこんだ。

比ひ喩ゆではなく、薄うすっぺらい合板のドアに体当たりしてぶっ壊し、本当に突っこんだのだ。

バラックの中は狭せまかった。窓はなく、たったいま破られたドアから射さしこむ光だけが、踏ふみにじるように室内を照らしていた。このバラックには床すらなかった。剝むきだしの地面の上に椅い子すや藁わら布ぶ団とんなどの粗そ末まつな家具が投げだされているだけで、ただ一人の住人らしい老いた男がその椅子に腰こしかけて昼間っから安酒とおぼしき液体を呷あおっていた。

「ロォォォォォォォォォォォォォォベル
トォォォォォォォォォォォォォォォォォツ……！」

リューが叫さけぶと、老いた男はどんよりと濁にごった目をこちらに向けた。どこからどう見ても、老人としか言いようがない。年老いている。ただそれだけが男の特とく徴ちょうだった。

「ロベルト」

リューは荒あらい息を整えながら、大剣を地面にガツッと突き刺さした。

「いや──ロビー・〝ゾディアック〟・バランタイン」

「何の用じゃ、小童こわっぱ」

老いた男は目を伏ふせて酒を一口飲んだ。

「ふん……訊くのも野や暮ぼじゃな。おまえさんがわざわざわしを訪ねてきたとなったら、用件は一つじゃろうて」

「そのとおりだッ！」

「待っとれ。いま支し度たくする」

「五分は待たないぜ。三分だッ！」

「馬ば鹿か者ものが。急せかすな、年寄りを。それで、今回は何人入り用じゃ？」

「あんたをふくめて三人でいい」

「そうか。なら、オギーじいさんとボブのやつを連れてくか」

「あれ？　オギーはだいぶ前に死んだんじゃなかったっけ？」

「ふむ……そうじゃったな。じじいめ、先走りおって。どんどん勝手にくたばっていきよる。まあ、だったら、バリーじいさんでええじゃろ。どれ。よっこらせの、どっこいせっと」

　ロビー・〝ゾディアック〟・バランタインは、片手で腰を押さえながら大たい儀ぎそうに立ちあがり、部屋の隅すみに転がっていたガラクタを手にとった。いや、ガラクタではない。あれはもしかして、鎧よろいか。金属製の鎧だ。ロビーはぷるぷる震ふるえる手で胴どう鎧よろいと籠こ手てと脛すね当あてを装着して、薄うす汚よごれた手て拭ぬぐいを頭に巻くと、今度は壁かべに立てかけてあった棒きれをつかんだ。いや、棒きれではない。あれはひょっとして、武器か。鞘さやに収められている。長ちよう剣けんだ。でも、腰が曲がっているロビーにかかると、長剣もまるで杖みたいだ。

「どうじゃ。三分くらいじゃったろ」

「いいや。たぶん十五秒くらいオーバーしたぜ、ロビー」

　リューがニヤリと笑うと、ロビーもしわくちゃの顔で笑えみを返した。

　ルーシーは呆あっ気けにとられていた。

　何なんだろう、この人たち。

「行くぞッ、ルーシー！」

　リューに背中を叩たたかれて、何がなんだかわからないままバラックを出た。どういうことなのかさっぱりだが、ロビーとリューが近くのバラック二軒けんに相次いで押し入ってゆき、中から住人を引っぱりだしてきた。二人とも老人だった。一人はロビーと同どう年ねん輩ぱいで、もう一人は少し若いだろうか。どちらもロビーのように武装している。どうやら、年かさのほうはバリー・〝オンザロック〟・フラミング、いくらか若いほうはボブ・〝エンドレス〟・キュービーという名前らしい。リューがそう呼んでいた。ちなみに、彼らの年ねん齢れいは、あくまでルーシーの推測でしかないが、ロビーとバリーは七十代、ボブは六十代ではないかと思われる。

「ほいで」

　隻せき眼がんで黒い肌はだのバリーは、二振りの剣を佩はいていた。ロビーのように腰こしは曲がっていないが、枯かれ木のごとく瘦やせている。木枯らしみたいな声も、かなり聞きとりづらい。

「ワシらどこ行くんじゃ」

「俺はべつにどこでもいいがな」

　ボブはやけに髪かみの毛の量が多く、そのすべてがきれいな白はく髪はつだった。染しみだらけの肌も真っ白なので、なんだか人間の形をした別の生き物みたいだ。それでも、身体からだつきや表情から活力が若じやつ干かんにじみでていて、そのせいでロビーやバリーよりも若く見える。手にしている武器も大おお振ぶりのハンマーだ。あの大ハンマーを自在に振りまわすことができるのだとしたら、見かけよりもっと若いのかもしれない。おそらく、そんなことはないだろうが。

「アンダーグラウンドは久しぶりだ。血が騒さわぐ」

「気張りすぎて、脳卒中だの心しん筋きん梗こう塞そくだので倒れんようにの」

　ロビーがアヒャヒャヒャ笑った。バラックの中は暗かったので気づかなかったが、前歯が一本もない。なんだか楽しそうだし、どうでもいいか。いいのだろうか。ロビーはひとしきり笑ってから、リューに向きなおった。

「それで、バリーも言っとったが、どこへ行くつもりなんじゃ。竜殺しリューだけに、狙ねらいはやっぱり竜か」

「いやッ！　今日は肩かた慣ならしだ！」

　リューはいきなりルーシーの肩をガシッと抱いた。

「紹しよう介かいするッ！　こいつはルーシー・アッシュカバード！　オレと一緒に漢おとこの道を歩きたがってる、こう見えてれっきとした漢なんだぜッ！」

「なんじゃ、やっぱりおなごじゃなかったのか」

　ロビーは地面に、ぺっ、と唾つばを吐はいてから、ニヤニヤというよりもニシャニシャした。

「かわゆい顔しとるが、おかしいと思ったんじゃ。リュー、おまえさんがおなごを連れて歩いとるわきゃあないからの」

「ムムッ。聞き捨てならないッ。なんでオレが女を連れて歩いているわけがないんだッ」

「おまえさんはおなごにゃあもてん」

「なななななななななな何をぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ……!?」

「おなごにもてたいんじゃったら、もうちっとかっこつけにゃあな」

「そんなのはッ！　漢のすることじゃないッ！　断じてッ！」

「そんなことをゆっとるから、おなごにもてんのじゃ」

「こっちから願い下げだッ！　オレはこのまま漢道のど真ん中を突つっ走ぱしるッ！　女なんか、女なんか、女なんか女なんか女なんか女なんか女なんかァァァァァ……ッ！」

　リューは突とつ然ぜん、フハハハハッと哄こう笑しようして、斜ななめ上の方向を指さした。

「よォォォォォし行くぞッ！　竜殺しの前の肩慣らし！　まずは練習だッ！　みんな！　オレについてこいッ……！」

　どうしてぼくは力強く歩きだしたリューについてゆこうとしているんだろう。一緒に漢の道を歩きたがっている？　いつぼくがそんなことを？　言った覚えはない。もちろん、そんなつもりは微み塵じんもない。これからどこへ行って何をするのか知らないが、リューは自分勝手で意味不明なことばかり言っているし、老人たちはボブをのぞいて歩くのもつらそうだし、なんだか悪い予感がする。きっとろくなことにならない。正直、逃にげだしたい。逃げたほうがいいと思う。今のうちだ。それなのに、なぜか気力がわいてこない。だんだんと、逃げたい、という気持ちも薄うすれてきた。頭がぼうっとしている。夢うつつだ。ここはどこだろう。

　アンダーグラウンドか。

地上で、大きくて立派というか、奇き抜ばつな城を見た。あそこは第一区だった。どうやらここは、アンダーグラウンドの、Ｄ１、と呼ばれている場所らしい。

最初はたしか、石の天てん井じようと壁かべに囲まれた暗い通路といった感じの風景だった。すぐ十字路に出て、そこを右に曲がったのだったか。しばらく行くと、壁がなくなった。その先は底知れぬ谷だった。地下に谷があった。谷には橋が架かけられていた。細い橋だった。いや、幅はばは二メーテルくらいあったので、そこまで細くはないのかもしれないが、手すりもなく、とにかく深い、深すぎる谷なので、実際以上に細く感じられたのだろう。ルーシーはとくに高いところが苦手というわけではないから、落ちなければどうということはない、くらいのぼんやりした気分だった。リューや老人たちも平気そうだった。橋の向こうには、穴だらけの巨きよ大だいすぎる岩山がそびえ立っていた。橋はその無数にあいている穴の一つにルーシーたちを導いた。

穴から入った岩山の内部は、かなり入り組んでいるようだった。たぶん、岩山の中には縦横無む尽じんにトンネルが掘られているのだろう。たくさんの穴はトンネルの出口なのだ。

松明たいまつを手に先頭を行くリューは、下りながらぐねぐね曲がる坂道をずんずん進んでゆく。

老人たちも無言だ。ロビーとバリーはそうとう息が荒い。喋しゃべる余よ裕ゆうがそもそもないのかもしれない。

きー、とか、がー、とか、ぎゃわー、とか、何かの叫び声、あるいは鳴き声のようなものが聞こえる。

ルーシーは、あれって何の声なのかな、みたいなことを考えながら、足あし許もとばかり見て歩いていた。

どうしてこんなことになっちゃったのかな。ぼく、何か悪いことしたっけ。

「しっ」

不意にリューが足を止めて振ふり返り、松明を持ったままの左手の人差し指を唇くちびるにあててみせた。静かにしろ、という意味なのだろうが、もともとみんな静かにしている。ルーシーは白け

きっていた。でも、関心があろうとなかろうと、ここはアンダーグラウンドで、異界生物フリークスの巣そう窟くつなのだ。

「いいか、ルーシー。この先に分かれ道がある。オレたちは絶対的に左へ進む。それがズバリ漢の道だからだッ。その漢の道がどこにつづいてるかっていうと、竜モドキって呼ばれてる悪あく魔まの巣だ。オレたちは竜りゅうを狩かる。ズバッと狩る。それが漢の浪ろう漫まんだからだッ。だけどな。いきなりってのは無茶だ。竜はそんな甘い相手じゃない。だから、今回はレッスンワンッ。まず竜モドキと戦う。漢らしく竜モドキをいい感じで撃げき破はして、勢いをつけて竜狩りにゴーって寸法だッ。何か質問は？」

「あ……じゃあ、あの──」

「モチ、質問なんか受けつけないッ！　漢なら黙だまってオレについてこいッ！」

「え」

「みんなッ！　準備はいいなッ！」

　リューは声を張りあげて老人たちを見まわした。静かにしろ、というあのポーズはいったい何だったのか。苛いら々いらしてきた。慌あわてててもいた。悪魔。悪魔って、あの悪魔？　よく本に出てくる。どこか荘そう厳ごんなイメージのある竜とは違ちがい、とにかく悪くて、残ざん忍にんで、恐おそろしい、地じ獄ごくに棲すんでいるという生き物だ。その悪魔？　ということは、ここは、このＤ１という場所は、悪魔の棲せい息そく地ちなのだろうか。そんなところに、深く考えもせず、のこのことついてきてしまったのか。ぼくはなんて迂う闊かつなんだ。

「よォォォォしッ！　行っくぜえええええええええェェェェェェェットッ……！」

　というか、なんでゼット？　そんなことはどうでもいい。行かないで。おじーちゃんたちも、そんなバカな人についてかないで。ぼくを置いてかないで。だって、悪魔がいるんでしょ？　こんなところに置き去りにされたら、怖こわい。めちゃくちゃ怖い。あの鳴き声。あれは悪魔の声だったんだ。たしかに、なんだかやたらと邪じゃ悪あくな声だった。悪魔がいるんだ。きっと、たくさんいるんだ。いやだ。一人はいやだ。走るしかない。追いかけるしかない。

これ以上、あんなバカな人と関かかわりあいになりたくないけど、こうなったらもうしょうがない。ルーシーは駆かけた。必死に駆けて、すぐ老人たちに追いついた。リューは老人たちの十メーテルくらい前方を走っている。その背中が遠い。遠いままでいいような気もする。老人たちの全力疾しつ走そうはせいぜいルーシーの駆け足程度だから、このくらいならたいして疲つかれもしない。リューはうおおおおおぉぉぉぉと叫んでいる。老人たちはうひゃひゃひゃ笑っている。ルーシーはすっかり嫌いや気けが差している。リューが突とつ如じよ、片手で大たい剣けんを振りまわした。横合いから何かが飛びだしてきて、リューの大剣にグジャッとぶつかり、吹ふっ飛んだ。けっこう大きかった。生き物っぽかった。でっかい蝙蝠こうもりみたいな。たぶん、悪魔だ。悪魔に違いない。見れば、トンネルの壁や天井だ。穴があいている。あの蝙蝠みたいな悪魔は、おそらくそこから出てきたのだろう。

「雑ざ魚こは漢おとこらしく無視するんだッ……！」

　リューが大剣をかつぎなおしてさらに足を速めると、老人たちもいくらか加速した。ルーシーも従うしかないが、本当にいいのか。だって、あの蝙蝠みたいなやつが、きーきーぎゃーぎゃー鳴きながら、出てくるわ出てくるわ出てくるわ。ルーシーは悲鳴をあげてのけぞった。斜め上から蝙蝠みたいなやつが襲おそいかかってきたので、とっさによけたのだ。足は止めなかった。置いてゆかれたらたまらない。老人たちは相変わらずうひゃひゃひゃ笑っている。笑いながら、意外と器用にひょいひょい蝙蝠みたいなやつをかわしている。ルーシーはもちろん、笑うことなんてできない。笑えるはずがない。必死だ。蝙蝠。なのに、顔はちょっと人間っぽい。怖い。気持ち悪い。唯ゆい一いつの救いは、やつらは羽みたいな腕うでをしているくせに、飛べないらしいことだ。なので、穴からルーシーたちめがけて飛びかかってきて、こっちがなんとか身をかわすと、あとは走って追いかけてくる。ルーシーは振り返らなかった。振り返ったら、そこには蝙蝠みたいなやつの大群がいるだろう。そんな光景を目にしてしまったら、まず間違いなく心が折れる。それに、振り返る暇もない。蝙蝠はあとからあとから飛びかかってくる。休まずかわしつづけないといけない。もうやだ。助けて。誰か。お願い。ルーシーは目をつぶってしまいたかった。できなかった。あたりまえだ。そんなことをしたら危ない。危なくてもいい。どうなってもいい。いっそのこと、早く楽になってしまいたい。もう限界だ。これ以上は無理だ。そう思った瞬しゆん間かんだった。

前方が開けている。先頭のリューがそこに飛びこんでいった。

蝙蝠みたいなやつらの声が一気に遠ざかってゆく。

老人たちとルーシーも間もなくたどりついた。

リューは足を止めていた。

「フハハハハーッ！　ついたぞッ！　ここから先が竜モドキの巣だッ……！」

そこはトンネルというよりも広間だった。ただ、壁かべも天てん井じようも地面もえらくごつごつしている。高く盛りあがったり、張りだしたりしている箇か所しよもあって、そうとう奥行きがありそうだが、見通しはよくない。壁や天井に無数の裂さけ目があって、そこから赤い光がもれでているので、暗くはなかった。リューは手にしていた松明たいまつを、地面の出っぱりを利用して斜めになるように置いてから、こちらを向いて人差し指を唇にあててみせた。

「しーっ」

いや、あなた自身がフハハハ笑っていたし、大声を出していたし、今さら静かにしても遅おそいと思うんですけど。ほら。

やっぱり。

まるで地鳴りみたいだ。あれは唸うなり声か。

十メーテルほど先の、地面からぐっと盛りあがっているところだ。目を凝こらして見ると、穴がある。そこから何かがのっそりと這はいだしてこようとしていた。

「へっ。おいでなすったな」

リューは前に向きなおって大剣を両手持ちした。

「ロビー、バリー、ボブッ！　ルーシーを頼たのんだ。オレは突っこむ……ッ！」

「まかしとけ」

　ロビーが肩かたで息をしながら震える手で腰こしから剣を抜ぬいた。短めの剣を一本ずつ左右の手に握にぎっているバリーも、はぁふぅはぁふぅいっている。ボブだけは大ハンマーをよっこらせっとかついで不敵な笑えみを浮うかべているが、はっきり言って、ぜんぜん頼もしくない。ダメだ。おじーちゃんたちをあてにしちゃいけない。自分の身は自分で守らないと。ルーシーは背中にくくりつけてあった盾たてを左手に持ち、右手で剣を抜いた。なんでこんなことになっちゃったんだろう。言うまでもない。あの人のせいだ。

　竜殺しリューは駆けだした。

　穴から出てきた生き物は、第一印象、とにかく大きかった。はっきりとはわからないけれど、人間の倍くらいはあるはずだ。黒っぽい身体からだの表面がぬらぬらと光っている。目は黄色だ。とんでもなく大きなヤモリとでも言えばいいか。たしかに、本の挿さし絵えに描えがかれていた竜りゅうと似ていなくもない。あれが竜モドキなのか。

「オレのオオオオォォォォォォ！　漢の剣をオオオオォォォォォォォォ……！」

　リューは大剣を引きずりながら走っているので、その切っ先が地面をガガガガ削けずって火花が散っている。竜モドキが口を開けてぐおおおおおおおおおぉぉぉぉんと吼ほえた。

「くうううううううううううぅぅぅぅぅぅぅぅるうううあああええええええいッ……！」

　リューが大剣をかつぎあげた。

「見とれ、リューシー」

　ロビーが低く呟つぶやいた。

「あれが竜殺しリューじゃ……！」

　微び妙みように名前を間違えないでほしいんですけど。しかも、なんかいやな間違え方だし。

「ふうううううあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁッ……！」

　リューが大剣を振りおろそうとした。振りおろす前に、竜モドキが飛び跳はねながらくるんと背中を向けて、尻尾しっぽをぶん回した。

「──ごぼあッ……！」

　左半身を強きよう烈れつに殴おう打だされて、リューはあっさり吹っ飛ばされてしまった。

　竜モドキはすかさず地面に倒たおれこんだリューに飛びかかった。後あと肢あしで踏ふみつけて、前肢で踏みにじった。竜モドキはリューの上でぴょんぴょん跳ねた。そのたびに、ぐあッ、ぶへッ、じょひッ、という感じの悲鳴が聞こえた。竜モドキはとうとう勝ち誇ほこったように頭と尻尾をもたげて、うおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉんと咆ほう吼こうした。



「……あれが……竜殺しリュー……？」

　というか、もう元竜殺しリューなんじゃ。

　死んでませんか？

「そうじゃ」

　ロビーはふっと笑ってうなずいた。

「だいたい考えなしなんじゃが、そもそもすこぶる頭が悪い」

「自己流っちゅうよりめたくそで、剣けん術じゆつもへったくれもないしのお」

　バリーがかすれた声で付け加えると、ボブが喉のどを鳴らして笑った。

「素養もなければ、センスもない。一言でいえば、才能がないな。だが──」

「うむ」

　ロビーがもう一度うなずいたときだった。

　竜モドキが訝いぶかしげに首をひねって自分の足あし許もとに目を落とした。

「……ふ……ふふ……フハハハハー……」

　まさか。

「これで……この程度で終わりかよ……？　これでお終しまいかい？　やれやれだぜ……とんだ茶番だったな……オレはおまえを買いかぶってた……そういうことなんだな……？」

　リューはペッと竜モドキの顔に何かを吐きかけた。血か。それから、きっと折れた歯だ。竜モドキがふおっと怯ひるんだ隙すきに、リューは素す早ばやく巨きょ体たいの下から転がり出て、大剣を構えた。

　ルーシーとしても、べつに死んでほしいとか、そこまで思っていたわけではないから、それはいいとしても、全身血ち塗まみれなんですけど。大だい丈じよう夫ぶなのかな……？

　大丈夫なわけがない。どう見ても重傷だ。

　瀕ひん死しの重傷を負っているようにしか見えない。

「竜殺しリュー」

　ロビーがカッと目を見開いて、唇の両りよう端たんをつりあげた。

「やつぁとんでもなくタフなんじゃ。信じられんほど打たれ強い。まさに、それだけがやつの取り柄え！　そして、唯一にして最大の武器……！　ゆけい、リューッ！　漢おとこヂカラで竜モドキを倒してみせよ……！」

「おうよッ……！　ふんなあああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁッ……！」

　リューはロビーにけしかけられて竜モドキに大剣を叩たたきつけようとした。

　竜モドキは大剣を前肢で簡単に払はらいのけて、尻尾でリューをぶっ飛ばした。

「うぐぼッ──つあッ……！　まだまだああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ……！」

　リューはすぐさま跳とび起きて、大剣で、今度は突きを放った。

　竜モドキは華か麗れいに身をかわし、リューの胸に後肢でジャンピングキックをお見み舞まいした。

　地面に叩きつけられ、ごろごろ転がって起きあがったリューは、性しよう懲こりもなく斬ざん撃げきを繰くりだそうとしたが、これは竜モドキに届かなかった。

「──逃げるのかよッ！　卑ひ怯きよう者ものが……！」

　これは竜りゆうモドキの名めい誉よのために言っておかなければならないが、竜モドキは決して逃げてなんかいない。リューの足許がおぼつかず、たぶん目測も狂くるっていた。おかげでリューの大剣は竜モドキにかすりもしなかった。それだけだ。実際、竜モドキはリューが空から振ぶりしたあと、すっと前進して距きよ離りをつめた。リューは竜モドキの前肢で豪ごう快かいに張り飛ばされた。

「ほげッ」

かなりいやな音がした。

リューは地面の出っぱりに後頭部を打ちつけたようだ。

「むう……！　こいつぁいかん！　バリー、ボブ！」

「ふむ！」

「よしきた！」

ロビー・〝ゾディアック〟・バランタインの号令に、二人の老人は驚おどろくほど素早く反応した。反応するまでは早かったが、やはり動きはそこまで鋭するどくはなかった。

「エンドレエエエ
エェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェェスッ
……！」

ボブ・〝エンドレス〟・キュービーが大ハンマーをかついでドタドタと竜モドキに突つっこんでゆく。竜モドキは、やれやれ、今度は何だ、みたいな感じでボブのほうへゆっくりと顔を向けた。ルーシーは目を瞠みはった。ボブと竜モドキとの間にはまだ五メーテル以上の距離がある。それなのに、ボブは大ハンマーを振りあげて、叩きつけた。

「どっせえええええええええええええええええええ
えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇいッ……！」

当然、竜モドキにはあたらなかった。地面だ。ボブの大ハンマーは地面をぶっ叩いた。衝しょう撃げきでボブの身体からだが浮きあがり、勢いあまって前方宙返りするような恰かつ好こうになった。危ない！　ルーシーは悲鳴をあげてしまった。目を疑った。ボブは両足でちゃんと着地して、しかも、それだけではなかった。一度、地面を叩いた大ハンマーをふたたび振りかぶって、また地面に叩きつけた。

「老兵はァァァァァァァァァッ！　死
なァァァァァァァァァァァァァァァァずッ……！」

そうして、さらに前方宙返りだ。次に着地したときには、ボブは竜モドキの目と鼻の先に迫せまっていた。竜モドキはあとずさろうとしたが、間に合わなかった。ボブの大ハンマーが竜モドキの首と

肩の境目あたりにめりこんで、打ち砕くだく音がした。ボブは大ハンマーを手放して、後ろにでんぐり返しをした。入れ違いに前へ出たのは、バリー・〝オンザロック〟・フラミングだった。

「──ふっしゅ……！」

　バリーはしゃがむようにして竜モドキの顎あご下したに入りこむと、膝ひざをのばしながら竜モドキの顎下に双そう剣けんを突き刺さした。竜モドキがおらず、剣がなかったら、老人がゆったりと屈くつ伸しん運動をしたようにしか見えなかったかもしれない。それくらい緊きん張ちよう感かんのない動作だったが、その結果がこれだった。竜モドキは苦く悶もんして首を振りまわすことさえできない。バリーは双剣をがっちりと握りしめたまま、しっかりと両足で踏んばっている。竜モドキの動きが止まった。

　とどめを刺したのは、ロビー・〝ゾディアック〟・バランタインだった。

　竜モドキの真ん前まで進みでたロビーは、足を止めて両手持ちした長ちよう剣けんを振りかぶり、一いつ瞬しゆん、息をつめた。

「破はッ……！」

　あの老いさらばえた身体のどこからあんな声が出るのか。そして、あんな力が。

　ロビーがまっすぐ振りおろした長剣は、竜モドキの額を物の見事に断たち割った。

「わしらはッ！　この身が朽くち果てるまで戦いつづけるッ……！」

　竜モドキは全身を震ふるわせて、のたうちまわろうとしているが、もはやそれは断だん末まつ魔までしかないのだろう。

「老いたりとはいえ、くたばるまでわしらは漢じゃからの」

　ロビーは静かに笑って竜モドキに背を向け、長剣を鞘さやに収めた。

　いったん下がったボブが駆け戻もどり、大ハンマーを回収しがてら、竜モドキの下した敷じきになりかけていたバリーを引っぱりだ

した。

　感動してしまった。

　おじーちゃんはおじーちゃんでも、ただのおじーちゃんたちじゃなかったんだ。たしかに、腰が曲がっている。老木みたいに痩やせている。よぼよぼしている。それなのに、あんなことができるなんて。若いリューはまったく歯が立たなかった竜モドキを、三人がかりとはいえ、あっさり倒してしまった。すごい。ぼくも年をとったらあんな老人になりたい。それは言いすぎか。でも、かっこいい。少なくとも、リューよりはずっと。

　ルーシーはロビーに駆けよった。何かしようという考えがあったわけではない。自然とそうしてしまった。ロビーはルーシーを一いち瞥べつしてから、腰をさすりながら後ろを見た。

「ぬう……。ちっとばかし、はしゃぎすぎたようじゃな」

「え？」

　ロビーの視線の先に目をやるまでもなかった。声が聞こえる。唸り声だ。それも、たくさん。奥のほうだ。ここから先が竜モドキの巣だ、とリューが言っていた。巣、ということは、竜モドキが棲んでいるのだろう。一頭ではなく、いっぱいいるのかもしれない。というか、いるのだ。出っぱった岩、張りだした岩にあいた穴の中で、炎ほのおみたいに赤く爛らん々らんと輝かがやいている、目、目、目。出てきた。竜モドキだ。ロビーが怒ど鳴なった。

「リュー！　いつまで寝ねとるんじゃ！　わしらじゃあ二匹ひきか三匹が限度じゃからの！　さっさと逃にげるぞ！」

「──ぐむッ！　はッ！　オレは……気を失って……!?」

　リューはすぐに跳び起きて、あたりを見まわした。

「くっそう！　また勝てなかったのかよッ！　なんて情けないんだッ……！」

「今日勝てなんだら、明日勝てばよい。おまえさんは生き残ったんじゃ。勝利に近づくための敗北を繰り返す以外、真の竜殺しになるすべはないと、いつも言っとるじゃろうが」

「そうだった……そうだったなッ！　すっかり忘れてたぜ！　よォォォォし！　そうと決まったら、明日の勝利のために、戦略的撤てつ退たいだッ……！」

　リューは松明たいまつを引っつかんで、もときたトンネルへと駆かけていった。竜りゅうモドキが続々と穴から這いだしてきて、こっちへ向かってくる。ボブに、どうした、死にたいのか、とどやされて、ルーシーも走りだした。トンネルに入ってしばらくすると、あのでっかい蝙蝠こうもりみたいなやつらがキーキーギャーギャーわめきながら襲おそいかかってきた。ヒャーとかウワーとか言いつつ次々と飛びかかってくる蝙蝠をかわし、なおかつ足を動かしつづけた。何か考える余よ裕ゆうなんてあるはずがない。死ぬ。冗じよう談だん抜ぬきで、本当に死んでしまう。死にたくない。その一心だった。いや、それもどうだか。何もなかった。頭の中は完全に真っ白で、からっぽだった。

　その証しよう拠こに、いつの間にかルーシーは地上にいた。

　アンダーグラウンドＤ１の出入口のすぐ前だ。ルーシーは地べたに座りこんで、夕日に染め抜かれた空を見上げていた。

　カラスが、かあ、かあ、と鳴きながら飛んでいる。

　自分の髪かみの毛をつかんで、目の前に持ってきてみた。すごく怖こわい思いをして、白はく髪はつになってしまった人の話を本で読んだことがある。ルーシーの髪は灰色だ。夕暮れどきだということもあって、白くなっているかどうか、ちょっとわからない。どうでもいいか。

　ほんとに、何もかも、どうでもいい。

「はあああああぁぁぁぁぁぁ……」

　ルーシーの隣となりで、巨きよ大だいな背負い袋ぶくろを背もたれ代わりにして、両足を投げだすようにして座っているリューが、深々とため息をついた。

「まァーたかよ。また負けちまった。いつか勝利するための敗北……わかってはいても、やっぱへこむよなァ……」

　そうかと思ったら、いきなり笑いだした。

「フハハハハーッ！　でもッ！　オレがやらなきゃいけないことは、これではっきりしたぜ、そうだろ、ロビー、バリー、ボブ⁉　あんたら結局、オレにそのことを教えたかったんだな⁉それがもう四十年以上も侵入者クラツカーをやってるあんたらからの、オレへのアドバイスだったッ！　そういうことなんだな⁉」

　返事はなかった。

　三人の老人はどうにか生せい還かんした。とはいえ、彼らは走った。戦った。そしてまた走った。リュー曰いわく、侵入者クラツカーとして四十年以上の経験があるらしいし、どうやらただのおじーちゃんたちではないようだが、寄る年波には勝てないということか。

　三人は思い思いの体勢で鼾いびきをかいて寝ている。

　リューはおかまいなしだった。

「オレはやるぜ。やってみせるぜ……！」

　そう叫さけぶなり猛もう然ぜんと立ちあがって、ずおおおおおおおおおおおおおおと吼えた。

「修しゆ行ぎようだッ！　もっともっと修行して！　オレはいつかこの手で竜を殺す！　絶対の絶対の絶対に！　オレは誓ちかう！　太陽に！　あの空にッ……！」

「その前に、竜モドキを倒せるようにならないと」

　つい口を滑すべらせてしまった。

　リューは気分を害した様子もなく、白い歯を見せてハハハッとほがらかに笑った。

「ああ！　そうだよな！　竜の前に竜モドキ！　おまえの言うとおりだぜ、ルーシー！　物事には順序ってものがあるッ！　一歩一歩だッ！　着実に、オレは漢の道を歩んでいく！　打だ倒とう、竜モドキッ……！　よォォォォォし燃えてきたァァァァァァッ……！」

「……せいぜい、がんばってください」

「おうッ！　オレに任せとけ！」

　リューは自分の胸をドンッと叩いてみせると、背負い袋を下ろして中を漁あさりだした。何をやっているのだろう。どうでもいいか。興味がない。カラスの鳴き声を聞きながらぼうっとしていたら、リューがルーシーの鼻先に何かを突きつけてきた。見ると、剣けんのようだった。黒い鞘に収まっていて、反りがある。もしかして、モトロール刀だろうか。

「おまえにやる！」

「……え」

「友情の証あかしだッ！」

「いや、でも……」

「いいから！　遠えん慮りよなんかするな！　オレとおまえの仲じゃないかッ！」

　リューは強ごう引いんにモトロール刀をルーシーに握にぎらせると、背負い袋を背負いなおした。ルーシーとしては、いろいろと言いたいことはあるのだが、なんだかもうめんどくさかった。

　ただ一つだけ、どうしても訊きいておきたいことがあった。

「あの、これ、どうしたんですか」

「うん!?　ああ、そのモトロール刀のことか。それは、アンダーグラウンドで拾ったッ！　オレには、でも、この伝説の大剣〝ドラゴンバスター〟がある！　聞いて驚くなよ!?　伝説の大剣が、たまたま市場で安売りしてたんだ！　とんだ掘ほり出し物だぜ！　だから、モトロール刀なんて、俺にはさっぱりいらないんだッ！」

「……そうですか」

「じゃあなッ！　ルーシー！　立派な漢おとこになれよッ！　オレも修行して、修行して、修行しまくって、もっとどでかい漢になるッ！　絶対的になってみせるぜッ……！」

　リューは拾い物で不用品のモトロール刀とおじーちゃんたちを置き土産みやげに、どこかへ行ってしまった。

　ぼくには漢の道は歩めそうにない。

というか、歩きたくない。

Omenage 899 5th revolution 4th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.10

胸に届かぬ愛の詩

よっぽどひどい顔をしていたのだろう。

「大丈夫？」

家に帰ると、マリアローズが気づかわしげに眉まゆをひそめてそう訊いてきた。

ルーシーは笑え顔がおで、え、何がですか、と訊き返してみたつもりだが、ちゃんと笑うことができただろうか。自信がない。というよりも、十中八九、失敗したに違ちがいない。

「大丈夫ならいいけどね」

マリアローズはごまかされてくれた。きっと、大丈夫でもなさそうだと見み抜ぬいた上で、それでも強がりを言えるくらいならまだ限界ではないのだろうと判断して、ルーシーの返事を真に受けたふりをしてくれたのだ。そのおかげで、なんとか踏ふみとどまることができているのかもしれない。ルーシーにだって、プライドはある。一度、見み栄えを張ってしまった以上、貫つらぬきとおすしかない。

今日はカタリやユリカ、サフィニアも家にきていて、みんなで一いつ緒しよに夕食のテーブルを囲んだ。カタリはともかく、女性陣じんがいると雰ふん囲い気きが華はなやぐ。やっぱり、ユリカは格別にかわいらしい。サフィニアもせつないほどに儚はかなげで、すごくきれいな人だ。本当に目の保養になる。誰だれもルーシーの仕事について尋たずねてこなかったので、楽しい気分に水を差されることもなかった。カタリがベンテン・カフェで会ったことを言いださないか、内心ひやひやしていたが、それもなかった。

一時は最悪にかぎりなく近いくらい落ちこんでいたのだが、この調子だと明日もがんばれるかもしれない。

ユリカたちが帰って、自分の部屋で一人になった途と端たん、大きなため息が出た。

明日。明日、か。

明日のことを考えるだけで、憂ゆう鬱うつになる。明日になったら、ぼくはどうするのかな。何をすればいいのかな。だいたい、何

かしないといけないのかな。どうして何かしないといけないのかな。なんで寝て起きたら明日になるのかな。明日。明日って何だろう。明日。明日。明日。明日はずっとつづくのかな。今日みたいな、情けない、何の足しにもならない、無意味な明日が。この先もずっとそうなのかな。

　竜殺しリュー。竜りゆうどころか、竜モドキさえ殺したことがないのに、そんなふうに名乗っているあの人と出会ってしまったのが運のつきだった。あの人のせいで、ひどい目に遭あった。それでいて、何もえるものはなかった。

　そうだ。今日は運が悪かった。リューは修しゆ行ぎようすると言っていたし、もう会うことはないだろう。明日はたぶん、今日よりはマシだ。いくらかマシなはずだ。これより下はない。本当に？　わからない。もっと悪いことだって起こりうるかもしれない。今日だって、下手をしたら死んでいた。最悪じゃなかった。それなのに、こんなに最低な気分だ。

　いっそ、皿洗い場に戻ろうか。それもいやだ。いやすぎる。明日は侵入者クラツカー以外の仕事を探そうか。やっぱり侵入者クラツカーだって、せっかく決めたのに。すぐにあきらめてしまう。だから、ぼくはダメなんだ。どうせダメなんだ。

　入浴しても、さっぱりなんてしなかった。けっこう疲つかれているはずなのに、眠ねむ気けも感じない。ベッドに寝ね転ころがって、シーツにくるまり、どうして自分がダメなのか、どこがダメなのか、どこまでダメなのか、そんなことばかり考えている。しょうがないよ。どうせダメなんだもの。行きつく結論はいつもそこだ。

　それで？　ダメだから、しょうがなくて、だから何もしないの？　したくないの？

　マリアローズの声と顔が思い浮うかんだ。もちろん、実物がここにいるわけではない。ルーシーの空想、いや、妄もう想そうだ。それだけに、正直になれる。

　そうですよ。はっきり言って、もう何もしたくないんです。だって、こんなぼくが何をしたって無む駄だじゃないですか。何をやったって、うまくいかないし。才能がないんですよ。すぐ騙だまされるし。流されやすいし。いいところなんて、ないじゃないですか。毎日は、自分がいいところなしだってことを思い知るためにあるん

ですか。だったら、いらない。いらないよ。そんな毎日。だいたい、今日の夕飯だって、何ですか、あれ。誰もぼくが何やってるかとか訊きかないで。たしかにありがたかったけど、ようするに興味がないってことでしょう？　どうでもいいんでしょう？　マリアローズさんだって、本当はそうなんでしょう？　厄やつ介かい者ものを拾っちゃったなあ、と思ってるんでしょう？　そうに決まってるんだ。

面と向かってそんなふうに言ったら、マリアローズはどんな顔をするだろう。違うよ、と言ってくれるだろうか。慰なぐさめてくれるだろうか。

ルーシーは部屋を出て、居間へ向かった。なんとなく、誰かがいるような気がした。いなかった。無人だった。誰かがいるような気がしたんじゃない。ぼくは誰かに会いたかったんだ。話を聞いてもらって、やさしい言葉をかけてほしかった。できたら、マリアローズさんに。女の人じゃないけど、聖女みたいなあの人に。そう悟さとって、一人赤面している自分をめちゃくちゃに引き裂さいてしまいたかった。そんなことはできないと知っていた。結局のところ、そんなつもりもないんだ。

夜風にでもあたって、少し頭を冷やそう。

外に出ると、庭のほうで物音がした。

何の音だろう。何か硬かたいもの同士がぶつかるような音。それから、生き物が芝しば生ふの上を動きまわっている音。さらには、声というよりも、息づかい。今日は曇くもっていて、月が見えない。暗いのでよくわからないが、人がいるようだ。もしかして、泥どろ棒ぼう……？

ルーシーは息を殺して足音をしのばせ、家の外がい壁へきにそって音がするほうへと移動した。

トマトクン邸ていの庭はえらく広い。芝生はきれいに手入れされていて、木もたくさん植えられている。そこかしこにある丸い形の茂しげみは、人の手によって作られたものだろう。ちょっとした木立もあるし、屋根付きのベンチが置かれていたりもするので、まるで公園みたいだ。

ルーシーはしゃがんで茂みの陰かげに隠かくれ、目を凝こらし

た。

　いる。人だ。二人。動どう悸きがする。いや、もう一人いるみたいだ。ぜんぶで三人。最初、二人だと思ったのは、残りの一人が芝生の上に座っているからだ。あとの二人は激しく動きまわっている。剣。剣だ。剣を持っている。打ちあっているのか。どうやら、そうらしい。二人とも、両手に剣を持っている。一人は、右手に小こ振ぶりな剣、左手にはもっと短い剣を。もう一人は、まっすぐな短剣と、反りのある短剣。短剣二本のほうは、黒いぴったりした服を身にまとい、頭とう髪はつを頭の後ろでまとめている。小振りな剣と短剣のほうは、やはりぴったりした赤い服だ。髪の毛も赤い。

　ピンパーネルとマリアローズだ。

　座っているのはトマトクンか。

　ピンパーネルが矢や継つぎ早に双そう剣けんを繰くりだして、マリアローズは必死によけている。たまに左手の剣で弾はじいたりもしているが、ほとんど身をかわすだけだ。それも、ぎりぎりだ。どう見ても、マリアローズはいっぱいいっぱいだ。まさか真しん剣けん勝負をしているわけではないだろう。たぶん、練習だと思う。きっとそうに違ちがいないが、ピンパーネルの迫はく力りよく、あの緊きん迫ぱく感かんは何なのか。マリアローズが右に身体からだを捌さばけば、そっちからピンパーネルの短剣が襲いかかる。マリアローズはかろうじて上半身をひねってこれをかわしたが、ピンパーネルは容よう赦しゃしない。突つく。突いて、薙なぐ。マリアローズは下がるしかない。下がっても、追われる。もう見ているだけで苦しい。マリアローズは地面に転がって、逃げる。逃のがれようとしたマリアローズの足首を、ピンパーネルの足が払はらう。マリアローズが転てん倒とうして、ピンパーネルが襲いかかり、マリアローズは二本の剣を振ふりまわしてなんとか追い払おうとしたが、無理だ。ピンパーネルの双剣はあっさりマリアローズの剣を叩たたき落としてしまった。ピンパーネルはすかさずマリアローズに覆おおいかぶさって組み伏ふせた。ルーシーは思わず目をつぶった。ピンパーネルが無む慈じ悲ひな双剣をマリアローズめがけて突きおろしたからだ。

「そこまで」

　トマトクンの声だった。ルーシーはおそるおそる目を開けた。ピンパーネルの双剣は地面に突き立てられているようだった。あたり

まえだ。ピンパーネルがマリアローズを傷つけたりするわけがない。でも、そのわりには厳しい攻こう撃げきだった。暴漢たちを鮮あざやかな手並みで撃退してルーシーを救ってくれた、あのマリアローズが防戦一方だった。それなのに、ピンパーネルは息を乱してさえいない。どこまでも冷静だった。

「考えテばかり。だから遅おそくナル。考えルより身体動かス。考えるワ余計。邪じや魔まになりマス」

「……はい」

「あナタ今・死んでタ。遅おくれたラ死ぬ。あナタの身体・まだソレわかってナイ。あナタ頭ワいい。でも身体ワ弱イ」

「はい」

「頭で補おうとしてル。いつもソレできると考えないデ。補えるの・限界あル。いつも頭でなんとかしようとすル。ソレ・甘えデス」

「はい」

「身体も鍛きたえル。身体に教えこム。身体でわかル。わからナイと・死ヌ」

「はい」

　荒あらい息をしながら神しん妙みように、はい、はい、と答えているのはマリアローズか。そうらしい。声がマリアローズのものだ。

　ピンパーネルが立ちあがると、マリアローズも起きあがった。なかなか呼吸が整わない。ぜいぜい喘あえいでいる。だいぶつらそうだ。

「ちょっと休むか」

　トマトクンにそう訊かれると、マリアローズは即そく座ざに首を横に振った。

「次、お願い」

「よし。ピンプ、交代だ」

「はイ」

　ピンパーネルが下がって、入れ違いにトマトクンがのっそりと立った。ジーンズにシャツというラフな恰かつ好こうだが、その手にはあの琥こ珀はく色いろの剣けん身しん波打つ大剣が握られている。竜殺しリューが持っていた伝説の大剣〝ドラゴンバスター〟とやらとはぜんぜん違う。似ているのは大きさだけだ。あの大剣はやばい。怖い。もちろん、そんな大剣を軽々と扱あつかっているトマトクンも恐おそろしい。もしルーシーが、トマトクンにあの大剣の切っ先を突きつけられたら。いや、あの大剣を手にしたトマトクンの前に立っただけで、きっと身じろぎ一つできないだろう。

「あたらんぞ」

　トマトクンは大剣をかつぐように構えた。

　マリアローズはうなずいて、肩かた幅はばくらいに両足を開いた。

　何をするつもりなのか。

「ぬん……！」

　トマトクンは踏みこんで大剣を振りおろした。ルーシーは、やめて、と叫んでしまいそうになった。でも、遅い。すでに大剣は振りおろされた。全身から汗あせが噴ふきだした。心臓が止まるかと思った。大だい丈じよう夫ぶ。大丈夫だ。マリアローズは半歩くらいあとずさって、ちゃんと立っている。よけたのか。だから斬きられずにすんだのか。いや。違う。あたりの空気がビリビリ震ふるえるような声でトマトクンが吼ほえた。

「なんでよけた……！　あたらんと言ったろうが！」

「ごめんなさい！」

「お前、目をつぶったな！　見ないから、びびって腰こしが引けるんだ！　目を開けて、しっかり見ろ！」

「はい！」

「同じことを二度言わせるなよ！　あたらんからな！」

「はい！」

「ぬん……！」

　二度目の斬ざん撃げきは一度目よりも鋭するどかったが、マリアローズは下がらなかった。というよりも、下がれなかった。ルーシーの目にはそんなふうに見えた。マリアローズの身体からだはすっかり硬こう直ちよくしていたからだ。トマトクンはまた怒ど鳴なった。

「ただ見ればいいってものじゃない！　俺はいつでもお前を殺せるんだぞ！　馬ば鹿かみたいに突っ立ってるだけで訓練になるか！」

「ごめんなさい！」

「もう一度！」

「はい！」

「ぬん……！」

　三度、四度、五度、六度。トマトクンが大剣を振りおろすたびに、マリアローズの身体から余分な力が抜ぬけてゆくようだった。今はもう、腰が低くなり、膝ひざが曲がって、肩かたも落ち、すぐにでも飛んだり跳はねたりできそうな体勢だ。そんな姿勢で、斬撃の圧力をまともに浴びながら、しっかりと大剣の動きを見きわめているのか。信じられない。怖こわくないのだろうか。いや、怖いのだ。怖いから、最初は逃にげてしまった。我が慢まんしているのだ。懸けん命めいに、耐たえている。何のために？　訓練。そう。これも何かの訓練なのだ。不意にトマトクンが距きょ離りをとった。

「次はあてるぞ」

　震えがきた。身体というよりも内臓がちぢみあがった。ルーシーは息ができなくなった。ああ。トマトクンは本気だ。本当に、次はあてるつもりなんだ。マリアローズさんを、仲間を斬きり殺すつもりだ。ぼくは知っている。これは、殺気。一点の曇りもない。本物の殺意だ。

「むうううううううううううううううあああああああああああああぁぁぁぁぁ……！」

　トマトクンは猛もう獣じゆうのごとき咆ほう吼こうをあげてマリアローズに飛びかかっていった。その大剣の一ひと振ふりは、トマトクンに比べたら小動物みたいなマリアローズなんて簡単に木こっ端ぱ微み塵じんにしてしまうだろう。今のトマトクンなら、ためらわずにそうするだろう。終わりだ。マリアローズは殺される。受け止めるしかない。それはもう確定的な未来だからだ。否定しがたい一いつ瞬しゆん後だからだ。そのはずだった。的中確実と思われた予想は、だが、見事に裏切られた。

　マリアローズは下がらなかった。身を低くして突っこんだ。ちょっとだけ左ひだり斜ななめ前だ。すり抜けた。違う。そんなわけがない。あの凶きよう猛もうな斬撃をしっかりと見て、見切ったのだ。そうしてトマトクンの横に出て、長いほうの剣を突きだした。トマトクンは間かん一いつ髪ぱつ、これを転がってよけ、すぐさま起きあがった。

「よし！　引きつづき二対一！　いいな、マリア！」

「はい！」

「ピンプ！」

「はイ」

　一休みしていたピンパーネルが後ろから、トマトクンは前から、二人いっぺんにマリアローズに攻せめかかってゆくなんて、ひどすぎる。練習とはいえ、トマトクンもピンパーネルもそれなりに手加減しているに違いないとはいえ、二人がかりは無茶だ。そこまでいったら、単なるいじめだ。ほら。一方的どころじゃない。マリアローズは必死で逃げまわっているだけだ。逃げ惑まどっているようにさえ見える。あんなことをして、いったい何の意味があるのか。もう見ていられない。ルーシーは目をそむけた。

「やれやれ」

　声がした。囁ささやき声程度の大きさだった。すぐ近くだ。というか、近すぎる。

「およそ効率的とは言いがたい、原始的なまでに野や蛮ばんな訓練

だヨ、まったく」

　顔を横に向けると、黒衣を身にまとった男がルーシーの隣となりにいた。しゃがんでいる、という表現は適切ではなさそうだ。たしかに身を低くしているのだが、上半身を斜めに倒たおしていながら、背筋はぴんとのびているし、左ひだり膝ひざを立てて、地面に右膝をついている男の姿は、妙みように絵になっていた。額に落ちかかった前まえ髪がみを指先で払いのける気き障ざな仕し種ぐさも、男にはよく似合っている。その白はく皙せきは闇やみを照らす灯火のようで、薄うす青あお色の瞳ひとみは澄すみきって凍いてついた冬空のように美しい。

　知っている人だ。

　マリアローズに助けてもらったとき、颯さつ爽そうと現れて、なんだかよくわからないことをべらべら喋しやべりまくっていたが、その後、立ち去ったというか、追い払われた。

　たしか、アジアンと呼ばれていた。でも―、

「な、なんで、こんなところに」

「静かに」

　アジアンはルーシーには目もくれず、マリアローズたちを一心に見つめている。

「ボクのマリアが清らかな汗を流している勇ましくも可か憐れんな姿をこの目に焼きつけているんだ。邪魔しないでくれたまえ」

「……い、いつから、いたんですか。気づかなかったです。ぜんぜん」

「ああ、マリア。マリア、マリア、マリア。こうして物もの陰かげからキミを見守っていることしかできないボクを、どうか許しておくれ。でも、本当にキミが危険にさらされたときは、このボクが必ず救うことを誓ちかうヨ。当然サ。ボクはキミに我が剣けんのみならず身も心も、何もかもすべてを捧ささげた愛の騎き士しなんだからネ。さあ、今こ宵よいもボクはキミのために千篇ぺんの詩を吟ぎんじよう。愛。それは突とつ然ぜん。愛。そしてそれは必然。愛。それでいてそれは偶ぐう然ぜん。愛。ボクはこの愛を透とう明めいな硝子ガラスの容器に詰つめて海に流そう。明後日あさつてまでに

はキミに届くはずサ。なぜならボクの愛は海流をも──」

　アジアンは胸に手をあてて陶とう然ぜんと目を細めている。ルーシーの声なんて、まるっきり耳に入らないようだが、本当に聞こえていないのだろうか。

「へたくそな詩ですね」

「フッ」

　アジアンは鼻先で笑って哀あわれむようにルーシーを一いち瞥べつした。

「真実の愛を知らないお子様には、いくぶん高こう尚しようすぎたかな？」

「聞こえてるじゃないですか……」

「この家には優ゆう秀しゆうな見張りがいるのでネ。ただ、羨うらやましいことに、この家で、ボクのマリアと同じ屋根の下で暮らしているらしいキミのそばならば、多少はごまかせるかもしれない」

「見張り？　あの……」

「何だい、灰被りアツシユカバード」

「え？　なんでぼくの名前を」

「キミの名なんてボクは知らない。髪かみが灰色だろう」

「ああ、それで。でも、そうなんです。ぼくはルーシー・アッシュカバードといいます」

「そう。まあ、どうでもいいけどネ。ン？　ぼく……？」

　アジアンはもう一度、今度はさっきよりも長い時間、ルーシーを見た。しかし、男なのに、とんでもなくきれいな人だ。ボクのマリア、と言っていた。何度も、何度も。マリアローズとは、どういう関係なのだろう。

「なるほど。キミは男の子か」

　ひやりとした。何だろう。この冷気は。

　薄青色の瞳が不ふ穏おんな輝かがやきを宿している。刺さすような、斬きりつけるような、あるいは射すくめるような眼光だ。

　アジアンは唇くちびるの端はしをほんの少しだけつりあげて微笑ほほえんでみせたが、ルーシーは死を覚かく悟ごしていた。トマトクンの殺気が猛たける炎ほのおだとしたら、アジアンのそれは氷の刃やいばだ。その刃の尖せん端たんはルーシーの心臓に達しようとしている。もう逃げられない。黙だまって命を差しだすしかない。ルーシーは観念した。アジアンが目を細めた。どこまでもつめたく恐ろしい慈悲の笑えみだった。一瞬、そう見えたが、違う。細い眉まゆがひそめられた。信じられなかった。

　突とつ如じょとしてアジアンの姿が消えた。速い。速すぎる。ルーシーは振り返った。そこにアジアンはいた。上を見ている。ルーシーはアジアンの視線の先へと目を向けた。あんぐりと口を開けてしまった。降ってくる。もしくは、落ちてくるのか。とにかくそれは金色に輝いている。被ひ毛もう。生き物だ。大きい。見覚えがある。というか、知っている。まさか。でも。ぼやぼやしている間に、きゅーは、いつもは真っ白い被毛が黄金のきらめきを帯びているし、牙きばを剝むいて、爪つめを立てて、おっかない顔つきになっているが、たぶん間ま違ちがいないと思う、きゅーは、ルーシーのすぐそばに、落下ではない、それほど大きな音を立てずに着地するなり、跳とんだ。すごい。五メーテル以上、もしかしたら十メーテル近くの距離を、助走もつけずに一っ飛びだった。アジアンだ。きゅーはアジアンに襲おそいかかろうとした。

「――チィッ……！」

　アジアンは舌打ちをして、また消えた。なんて速いんだ。今度は横か。きゅーは一瞬前までアジアンがいた場所に前まえ肢あしをついて、後肢でさらに跳ちょう躍やくしつつ野や獣じゅうの咆吼を発した。ＧＨＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨ……！

「待て、ボクは……！」

　アジアンはかろうじてきゅーの突とつ撃げきをかわして、何か言い訳でもしようとしたのかもしれない。きゅーは、だが、問答無用、とばかりにアジアンを追撃した。

「ただマリアを――くっ……！」

　ＧＵＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨ……！

「わかった！　わかったヨ！　仕方ない、今日のところは──」

　ＧＨＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨ……！

「わかったと言っているのに……！」

　ＧＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨ……！

　あっという間だった。きゅーはアジアンを塀へいまで追いこんだ。アジアンはひょいと塀に跳び乗って、名残なごり惜おしそうにマリアローズたちがいるほうへ視線を送ったが、別れを告げる時間は与あたえられなかった。猛もう然ぜんと跳びあがったきゅーに追い立てられて、アジアンは塀の向こうへと姿を消した。

　きゅーは塀の上からまだ唸うなり声をあげている。

　この家には優秀な見張りがいる、とアジアンが言っていた。きゅーのことだったのだ。なぜアジアンがそのことを知っているのか。

　考えるまでもない。アジアンは以前にもこの家に侵しん入にゅうしようとしたことがあり、そのときもああしてきゅーに追い払われたのだろう。

　マリアローズと面識はあるようだった。それだけでなく、おそらく一方的に思いを寄せているらしい。初めて会ったとき、アジアンの名前を口にしていたのは、周りの野や次じ馬うまたちだった。有名人なのか。そうだとしても、べつに不思議ではない。あの殺気は尋じん常じようではなかった。それに、絶世と言ってもいいほどの美形でもある。どういう人なのだろう。とりあえず、変な人というか、変態であることは間違いなさそうだ。

　マリアローズたちに目を転じると、きゅーのほうを見て何か話していたようだが、訓練を再開するつもりらしい。まだやるのか。どうやらルーシーには気づいていないようなので、きゅーが塀から降りてきてしまう前に、ここから離はなれて家に入ることにした。

部屋に戻もどって、一度、ベッドに身体を横たえてみたが、寝ねつけそうな気がしなかった。じっとしていたり、寝返りを打ってみたり、布ふ団とんを蹴けっ飛ばしたり、枕まくらに顔を押しつけたりしてみても、眠ねむ気けは一向に襲ってこない。

たまりかねて、ベッドから降りた。

ルーシーはリューからもらったモトロール刀の鞘さやを払って両手で柄つかを握にぎりしめ、ゆっくりと振ってみた。次は、鋭するどく。もっと速く。もっとだ。もっと。こんなものか。ぼくの力はこの程度なのか。そうだ。この程度なんだ。

ため息が出た。

Omenage 899 5th revolution 5th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.II

泥船

よく見ると、朝っぱらからベンテン・カフェにきているのに、ぼんやりした顔つきで壁かべの紙切れをチェックしているのかしていないのか、いったい何のためにここにいるのかわからない、そんな人種が少なからずいることに気づいた。

ああいうふうになりたくない、と思う反面、彼らの気持ちもなんとなく理解できる。きっと、どうにかしたい、と考えてはいるのだ。仕事を探さないと。お金を稼かせがないと。だから、ベンテン・カフェにくる。紙切れを眺ながめる。でも、いい仕事なんてどうせない。あったとしても、自分にはできない。うまくやれる自信がない。だって、自分には才能がない。つらさを我慢して、やりとおす忍にん耐たい力や根気もない。こんな境きよう遇ぐうにあるということは、ツキもない。何もない。何をしたって無む駄だだ。でも、野垂れ死にしたくはないし、どうにかしないと。そう思っている。だから、ベンテン・カフェにくる。仕事を探さないといけない。お金を稼がないといけない。わかっているのだ。ちゃんとわかっている。だから、ここにいるのだ。

ベンテン・カフェに通っている間は、大丈夫だ。たぶん、大丈夫だと思う。そんな気がするから、こないわけにはゆかない。きたところで、いい仕事なんてそうそうあるわけがない。でも、こないと。ここにくるまでが本当に大変で、きてしまうと気が抜ける。一仕事やりとげたような気分だ。今日はがんばった。もういいか。

彼らの気持ちはわからないでもないが、ルーシーは違ちがう。ちゃんと気合を入れて紙切れをチェックしている。目を皿にして、一枚一枚、紙切れに書かれた文面を丹たん念ねんに読んで、うん、うん、とうなずいたり、首を横に振ふったりしている。本気で、熱心に、仕事探しをしている。こんなに一生懸けん命めいやっている。汗をかくくらい、情熱的に仕事を探している。

ふと気づいて愕がく然ぜんとした。いつの間にか、仕事探しが目的になっている。

そうじゃない。違うはずだ。目的は仕事を探すことじゃなくて、仕事を見つけることだ。仕事をして、お金を稼ぐことだ。危ないところだった。仕事探しに熱中して、それだけで満足していた。

そうか。ここがたぶん、第一歩なんだ。いい仕事が見つからなく

て、仕事探しで充じゆう足そくするようになって、いつか仕事探しにも飽あきる。ついにはベンテン・カフェにくるだけで精せい一いつ杯ぱいになる。あとはその繰くり返しだ。あげくの果てに、ベンテン・カフェにもこられなくなったら、どうなるのだろう。考えただけで怖くなってきた。そうはなりたくない。なってたまるか。

　ルーシーは自分のほっぺたをぴしゃんと叩たたいて、壁にかじりついた。仕事探しじゃなくて、仕事を見つける。絶対に見つけてみせる。やってやる。絶対的にやってみせるぜ……！

　なんだかリューみたいだ。それはいやだ。絶対的にいやだ。もっと冷静に。落ちついて。それでいて、ひたむきに。仕事を見つけるための仕事探しを始めようとしたのだが、変だ。

　周りがざわついている。

　ベンテン・カフェはもともと騒さわがしいが、今は違っていて、静かにざわめいていた。

　それだけではない。ルーシーの周囲に人の気配がなかった。時間帯や場所にもよるが、この店の壁かべ際ぎわはたいてい立りつ錐すいの余地もないほどなのに、これはどうしたことなのか。

「やあ」

　声よりも早く冷気を感じた。左を見ると、黒衣の男が壁に顔を向けて立っていた。

「フム……創世の翼ジエネシスウイング。聞き覚えのある名前だ。ひどいネーミングセンスだから、覚えているのかもしれないネ。どうだい、これは？　私見だが、キミにはむしろ、お似合いだと思うヨ」

　アジアンは一枚の紙切れを右手の人差し指と中指で挟はさんでピッと壁から剝はぎとり、ルーシーに差しだしてきた。

「え……と」

　受けとって目を通してみると、ずいぶん達筆だ。我ら創世の翼ジエネシスウイング！　きたれ、若人わこうど！　我々と一いつ緒しよに明るい未来を切り開こうではないか！　熟練の侵入者クラッカーがキャリアアップを目指す貴方あなたを丁てい寧ねいにサポー

トします。まずはお気軽に面談を。敬白。貴方のファニー・〝ゴールデン〟・フランク。追つい伸しん。黄金の鎧よろいを身にまとっていますので、すぐに見つけられるはずです。ほら、気がつけば貴方の後ろにファニー・〝ゴールデン〟・フランク──と書かれている。

　一言でいえば、なんとなく微び妙みようだ。

「気に入らないかい？」

「いや……べつに、そういうわけじゃ」

「フッ」

　アジアンは前髪を指先で払はらった。

「今日はキミに忠告するためにきた」

「忠告、ですか」

「ああ。昨夜、言い忘れたのでネ」

「……きゅーに追い払われて、言いたくても言えなかっただけじゃ」

「何か言ったかな」

「いえ、何も」

「それならいいけどネ」

　ぜんぜんよさそうじゃない。あの目。凍いてついた眼光だ。口は災わざわいの元、という言葉があるらしい。思ったことをつい口に出してしまうこの癖くせは、どうにかしないといけない。なんとか空気をやわらげたくて、愛あい想そ笑わらいを浮うかべてみると、アジアンは氷像のように美しく、それだけに世にも恐おそろしい、総毛立つ笑えみを返してきた。ルーシーは昨晩につづいてふたたび死を覚かく悟ごする羽目になった。そのままあと数秒、薄うす青あお色の瞳ひとみに見すえられていたら、失禁していたかもしれない。助かった。

　アジアンは不意にルーシーから目をそらして別の場所を見た。

ルーシーもつられてそちらに視線を転じたが、何も変わった様子はない。アジアンはまた、フッ、と短く笑って呟つぶやいた。

「ああしてこっそり見守っているわけか。過保護だネ。まあ、彼ららしいといえば、そう言えなくもない」

「……え？」

「忠告しておくヨ、灰被りアツシユカバード」

　アジアンは目をすぼめて唇を舌先でぺろりと舐なめた。ああ、ぼくは今に食べられてしまう。逃にげることなんてできない。ぼくみたいなちっぽけな存在は、結局、強い生き物に捕ほ食しよくされるためだけに生を受けた、単なる餌えさにすぎないんだ。

「ボクはいついかなるときもマリアの決断を尊重して支持する。たとえ、その結果、この身が引ひき裂さかれ、千ち々ぢに砕くだかれようともネ。だが、キミがボクのマリアに手を出すことは許さない。決して認めない。ボクはマリアとの平へい穏おん無事で愛にあふれた生活を望む平和主義者だ。さいわい、ボクらの愛と平和を乱そうとする身の程ほど知らずの愚おろか者は、皆かい無むではないにしろ、めったにいない。キミが愚かじゃないことを祈いのっているヨ。覚えておくといい。ボクは、それがマリア、ああ、マリア、マリア、マリア、比ひ肩けんしうるものとてないほどに美しく、すべての穢けがれを洗い流すくらい清らかで、比類なき気高さを持ちつつも、大おお海うな原ばらよりも天上よりも心広い、この果てのない世界中を探してもたった一輪しか咲さいていないボクの、ボクだけの薔ば薇らのためならば、子供であろうと容よう赦しやはしない」

「……あなたは、マリアローズさんの……何なんですか」

　訊きいてしまってから後こう悔かいした。アジアンは表情を変えていない。身体からだも動かしていない。それなのに、ものすごい圧あつ迫ぱく感かんだ。身体が、心が、魂たましいが戦慄わなないている。目の前にいるアジアン以外の森しん羅ら万ばん象しようが激しく揺ゆれて、崩くずれはじめ、とけはじめたようにさえ感じられた。

「わかちがたく結びついているボクとマリアの運命について、キミごときに話さないといけない理由がどこにある？　ないヨ。そんな

ものありはしない。キミはただボクの忠告を胸に刻みこんで、従えばいいんだ」

「……でも」

　でも、じゃない。何も言うな。黙ってうなずけばいいんだ。怖こわいのに。怖くて仕方ないのに。いつの間にかうつむいていて、顔なんか上げられそうにない。アジアンを見る勇気がない。膝ひざがガクガクしているし、手も、声も震ふるえている。それなのに、どうしてぼくは。

「あ、あなたは……男の人、ですよね。マリアローズさんは、女の人じゃないのに」

「それがどうかしたのかい」

「どうかって……普ふ通つう、やっぱり……」

「普通？　やっぱり？」

「お、男の人が好きになるのは……女の人で、それが、自然で……」

「興味がないネ」

「え？」

「くだらないな。ボクには関係ない。マリアが男であろうと、女であろうと、何だろうと、そんなことは問題じゃない」

「だ、だけど……」

「たとえ話をしよう。キミがある女性を愛したとする。キミが言うには、それは普通で、自然のことだ。ところが、ある日、突とつ然ぜん、愛する女性が男になってしまった」

「そんなこと、ありえないし」

「あくまでたとえ話だヨ。さあ、キミはどうする？　キミが深く、深く愛した相手だ。男になったら、その途と端たん、はい、さようならでお終しまいなのかい？　忘れ去って、なかったことにするのかい？」

「そ、それは……」

「ボクは、そのときどうしなければいけないか、ということを言っているんじゃない。人それぞれだ。勝手にすればいいサ。でもネ。ボクに言わせれば、その程度で、たったそれだけのことでお終いなのだとしたら、壊こわれてしまうのであれば、燃え盛さかった炎ほのおを消してしまえるのだとしたら、愛じゃない」

　アジアンはゆっくりと右手を握りしめた。

「それはそもそも愛なんかじゃない。ボクはマリアに会うべくして会った。マリアを愛するためにボクは生まれた。ボクはマリアがどんな姿をしていようと、どんな存在だろうと、必ず見つけだし、そして愛しただろう」

「で、でも……マリアローズさんがマリアローズさんの姿をしていなかったら、誰だれかわからないんじゃ……」

「いいや、わかる。キミは本当の愛を知らないからそんなことを言うのサ。本物の愛を知るまで、人の目と耳は閉じられている。真実を見ることも、聞くこともできない。そういうものなんだ。愛を知る者は違う。マリアだって、そう、ボクのマリアがこんなふうに言ってくれた。『僕は、きみがどんな姿でも、もしきみの正体が犬でも、猫ねこでも、異界生物フリークスでも、大ゴ脂ツ羽キ蟲ーでも、それでも、僕は、きみを──』おおああああぁぁぁ！　この先は！　この先はダメだ！　思い返しただけで、ボクは歓かん喜きの渦うずの中で果てそうになる！　まったくもって罪作りな人だヨ、マリア！　もちろん、全面的にいい意味でネ！　当然サ！　キミは善！　完かん璧ぺきな善！　この世でただ一つ、完全無欠の存在！　それがキミだ！　キミはすべてを超ちよう越えつする！　世界の理ことわりさえも！　というわけで、灰被りアツシユカバード」

「あ、はい」

「ボクのマリアにちょっかいを出したりしたら、承知しないヨ？ボクからの忠告は以上だ。職探し、せいぜいがんばりたまえ」

　アジアンはそう言い残して行ってしまった。

　混みあっているベンテン・カフェも、あの男にとっては無人の野

に等しい。あの男の行く手を阻はばむ者は誰だれもいないからだ。それどころか、あの男が通るところには道ができる。他ほかの者を押したり突つき倒たおしたりしてでも、誰も彼もがあの男に道を譲ゆずるのだ。

　ルーシーは呆ぼう然ぜんとしていた。

　いろいろな話を一方的に聞かされたような気がする。でも、やっぱりわからない。つかめない。とても理解できそうにない。何なんだろう、あの人。どうでもいいか。

　そうだ。どうでもいい。忠告なんか、されても。ちょっかいを出すな、とか言われても。そんなこと、思ってないし。本当の愛だか何だか知らないけど、やっぱり無理なものは無理だし。ということは、ちょっかいを出す以前の問題なわけで。むしろ、その反対で。ぼくは忘れたくて。この気持ちを、なかったことにしたいくらいで。

　あの人こそ何もわかっていない。ぼくは毎日、顔をあわせるのがつらいんだ。気を抜ぬくと、マリアローズさんに見とれそうになっている、そんな自分に気づかされたくない。ふとしたときに、マリアローズさんの顔を、声を、思いだす。思いだしたくないのに。でも、何のかの言って、あの微笑ほほえみが、やさしい言葉が、ぼくの支えになっている。例の、やれやれ、みたいな雰ふん囲い気きも若じやつ干かんあり、しょうがないなあ、と思っているようでもある、年上風味の、お姉さん的な、ほんのり笑え顔がおが目に浮かぶと、胸が熱くなる。だからぼくはあの家を出ないと。仕事を見つけて、お金を稼いで、独り立ちしないと。早くそうしないと、忘れられなくなってしまう。

　ルーシーは手の中にある紙切れに目を落とした。創世の翼ジエネシスウイング、か。ファニー・〝ゴールデン〟・フランク。黄金の鎧よろいを着ているので、ゴールデン、なのだろうか。だとしたら、かなり派手だから、すぐに見つけられそうだが、べつに見つけたくない。変な人はこりごりだ。一いつ緒しよに仕事をするのなら、普通の、まともそうな人がいい。

　ため息をついて、紙切れを握にぎり潰つぶそうとした手が、止まった。

　何か、今、視界の隅すみを、金ピカの物体が横切ったような。

　思わずそちらへ視線を向けてしまった。

　いた。金ピカだ。黄金色の全身鎧を身にまとい、同じく金色の兜かぶとを小こ脇わきに抱かかえ、腰こしに金細工で飾かざりつけされた赤い鞘さやの剣けんを吊つるして、金糸の刺し繡しゆうが施ほどこされた真しん紅くのマントをつけている。相手がこっちを見て、目があった。装よそおいはド派手だが、顔はそうでもない。若くはないものの整っていて、上品な口くち髭ひげをたくわえており、苦み走ったいい男、という印象を受ける。

　男は軽く目礼してから近づいてきた。今すぐこの場を離はなれたほうがいいのかもしれない。そんな気がして仕方ないが、度を越こして派手だという点をのぞけば、男はきちんとしているように見える。だからといって、まともだとはかぎらない。そのあたりはかなり疑わしい。やっぱり、関かかわりあいにならないほうが。

「やあ、初めまして」

　男は軽く手をあげてそう言うと、少し眉まゆを上げていったん唇くちびるを引き結んだ。声をかけてはみたものの、さて、どうしよう、と考えこんでいるかのようだ。その仕し種ぐさがあまりにも普通っぽくて、ついうっかり返事をしてしまった。

「ど、どうも」

「君は、その……見たところ、まだ年若いようだが、ひょっとして侵入者クラツカーの仕事を探しているのではないかな」

「あ、は、はい。そうです……けど」

「であれば、私が微び力りよくながらお手伝いできるかもしれない。申し遅おくれました。私は創世の翼ジエネシスウイングというこぢんまりとしたクランを率いている、ファニー・フランクと申す者です」

「……それは、まあ、知ってるんですけど」

「おお、どうしてまた？」

　ファニー・フランクはルーシーが持っている紙切れに目をつけ、顎あごをつまんでうなずいた。

「なるほど。私どもの募ぼ集しゆうに興味を持っていただいておったわけですな」

「いや、そういうわけじゃ」

「それでは、ただなんとなく？」

「……そんな感じです」

　説明するのが面めん倒どうなので、適当に答えてしまったが、ファニー・フランクはとくに気を悪くした様子もない。それどころか、余よ裕ゆうを感じさせる大人の笑みを浮かべてみせた。

「でしたら、そのついでに、ただなんとなく私の話を聞いてみる、というのはいかがかな。もちろん、そのあとでどうするかは君の自由だ。しかし、私とてこのエルデンでもう十年以上、侵入者クラッカーとして日々研けん鑽さんを積み、そしてまた、五年以上、小なりといえども固い絆きずなで結ばれたクランを率いてきた者です。僭せん越えつながら私の話は、君の今後にとって何かしら足しになるに相そう違いない。将来有望な若人たちが力強く羽ばたくための手助けをしたいというのが、まさしく私の望みなのです」

　まっとうなことを言っているように聞こえるが、だからこそあやしい。ルーシーがうんともすんとも返事をしないでいると、ファニー・フランクは余裕の笑顔を崩さずに一つ肩かたをすくめてみせた。

「ちょうどこれから数名の若者を招待して、茶会を催もよおすことになっているのでね。私だけでなく、私の盟友にして経験豊かな侵入者クラッカーも同席するので、彼からも興味深い話を聞けることでしょう。これも何かの縁えん、もしよければと思い、誘さそわせていただいたのです。むろん、無理にとは言わないが」

　結局、経験の重みに惹ひかれたのかもしれない。竜殺しリューのことは思いだしたくもないが、あのおじーちゃんたちはすごかった。老いさらばえ、身体からだは衰おとろえても、経験という名の武器は鈍にぶらない。本当に思いだしたくないのだが、リューはたぶん、悪人ではないのだろう。きっと悪気はないのだ。あのおじーちゃんたちがなぜリューと仲よしなのか、ルーシーには知るよしもないが、おそらく何か魅み力りよくがあるのだろう。人間だから、いいところもあるのだろう。ただ、あの人はちょっとバカだ。無む

謀ぼうで、傍はた迷めい惑わくだ。あの人は何度も同じ過あやまちを繰り返して、そのたびに周りを巻きこみ、でも、異常にタフだから、いつも命拾いするのだ。タフすぎるから、失敗から学ぶことをしない。たぶんあの人は、いくら修しゅ行ぎようしても際限なくタフになってゆくだけだ。経験とは無む縁えんの人だ。それはそれでべつにいいのかもしれない。そういう人にはそういう人に向いた道があるのだろう。でも、ルーシーにはあわない。ルーシーはもっと堅けん実じつに、しっかり、じっくりと、慌あわてず、騒さわがずに、落ちついて進んでゆきたいのだ。

　ファニー・フランクは、少なくとも嘘うそはついていなかった。連れてゆかれたのは、大食小路グラトン・アレイの「プレ・ド・マルタン」という名のお店で、地上三メーテルのオープンテラスにはいい具合にやさしいそよ風が吹ふいていた。きらびやかに着き飾かざった女性の客が多い。マリアローズほどではないが、なかなかに美しい女の人もいて、ついじろじろ見てしまう。そんな中で、黄金の鎧よろいを身にまとったファニー・フランクや、いかにも侵入者クラッカー予備軍といった姿のルーシー、それから他三名の若者たちはいかにも場ば違ちがいだ。ただ、ファニー・フランクの盟友だという黒いスーツを着てネクタイを締しめた男の人だけは、この店の雰ふん囲い気きに馴な染じんでいた。

　頬ほおがこけているし、顔色もあまりよくない。落ちくぼんだ目の下には濃こい隈くまもできている。金きん髪ぱつはざっと後ろに撫なでつけただけという感じで、無ぶ精しよう髭ひげを生やしているし、清潔感には欠けるのだが、それでいてかっこいい。無造作に椅い子すに立てかけてあるサーベルがよく似合っている。どこか退たい廃はい的で、野性的な、男くさいかっこよさだ。女性客も、ちらちらと男のほうをうかがっている。彼女たちの目にも魅力的に映っているのだろう。

「失礼」

　男はルーシーたちを一いち瞥べつしてから煙草たばこに火をつけ、紫し煙えんを吐はきだした。その姿がまた様になっていた。それに、かっこいいだけではない。憂うれいを帯びた眼まな差ざしに、独特の暗さと鋭するどさがある。男が椅子を動かそうとして、サーベルの柄つかに手をかけた。その瞬しゆん間かん、ルーシーの身体がこわばった。怯おびえているのだ。この人は怖い、と本能が告げている。きっと強い人だ。

「──というわけで、そもそもクランとは……」

　ファニー・フランクはさっきからクランの成り立ちを滔とう々とうと説明している。

　曰いわく、その昔、北にあるモトローリィという国で威い勢せいを誇ほこっていた残忍公ザ・クリユーエルアザエル・ノーウェンダルクが、政敵の謀ぼう略りやくで失しつ脚きやくしてサンランドに逃げこみ、エルデンを占せん拠きよした。残忍公はその名のとおり血も情けもない人物で、自分に従おうとしない者は無む慈じ悲ひに殺した。もともとクランとは、モトローリィで血族集団のことを指す言葉だ。残忍公とその一族郎ろう党とうは、クラン・クリューエル、ＣＣと自ら称しようしていた。血の時代、とも呼ばれる十年近くにも及およんだＣＣによる支配の間、一説によるとエルデンでは万単位の市民が虐ぎやく殺さつされたという。

　もっとも、市民もただやられっぱなしだったわけではない。抵てい抗こうは最初、散発的で、ＣＣによって各個撃げき破はされたが、復ふく讐しゆう心しんに燃える人々が次し第だいに手を結ぶようになっていった。その中ちゆう核かくはＣＣに家族や恋こい人びと、友人を殺された者たちで、彼らは怨おん敵てきＣＣを壊かい滅めつさせるまでは仲間を身内と思ってこれを守り、身命を賭として敵を打ち倒して、最後の最後まで戦い抜く、と誓ちかいあって血判状を作った。血族集団であるＣＣに対抗するために、血の盟約によって自分たちを縛しばりつけたのだ。

　こうして結成された復讐者クラン・たちアヴエンの血盟ジヤーズ、ＣＡＶにならって、たくさんのクランが生まれた。彼らはＣＡＶを中心として団結し、とうとうＣＣを完かん膚ぷ無なきまで叩たたきのめすことに成功した。見事復讐を遂とげたＣＡＶは誓いのとおり解散したが、存続したクランもあった。あるクランは血の盟約を根こん拠きよとした互ご助じよ組織となって、またあるクランは旅芸人の一座となり、別のクランは押し込み強ごう盗とうや強請ゆすり、たかりを行う無法者集団となった。

　時が流れ、血の盟約は形けい骸がい化、もしくは消失して、形態は多様化していったが、クランという名の徒党は現在まで残っている。エルデンでは、今この瞬間も、新しいクランが生まれては消え、消えては生まれているのだ。

　ルーシーは以前、マリアローズにさわりだけは教えてもらった。

だいたい知っている話なので、あまり真しん剣けんに聞いていなかったが、若者たちはうんうんうなずいたり、ちょっと笑ったり、へえ、と感かん嘆たんの声をもらしたりしていた。ファニー・フランクの話はよく整理されていたし、ときおりジョークや小話なども交じり、聞き飽あきることはない。手慣れているというか、話し慣れているような印象さえあった。

「──とまあ、このような次第で、私が率いている創世の翼ジエネシスウイングもそうしたクランのうちの一つなのだ。残念ながら、我々は血判状を作ったりはしないがね」

　ファニー・フランクが悪戯いたずらっぽくウインクをすると、軽い笑いが起きた。ルーシーも一応、お愛あい想そで笑っておいたが、気になるのはあの男の人だ。べつにルーシーの意を汲くんでくれたわけではないと思うが、ファニー・フランクはようやく男を紹しよう介かいしてくれた。

「さて、クランに関する講義も一段落ついたし、皆みな、私の声にも飽きてきたころだろう。我が盟友アドリアン・ギベールに違ちがう話をしてもらうとしようか。さあ、アドリアン」

「ああ」

　ファニー・フランクにアドリアンと呼ばれた男は、苦笑いのような笑えみを唇の端はしと頬に刻んで、煙草を灰皿に押しつけた。

「そうだな、ファニー・フランク。十分も二十分もお前の長話を聞かされてると、昼間っから酒が欲しくなってくる」

「すまん。お喋しやべりは私の悪い癖くせだ」

「まったくだぜ」

　アドリアンは愉たのしげに薄うすく笑っているが、気のせいだろうか。ファニー・フランクの顔は若じやつ干かん引きつっているような。

「まあ、いいさ」

　アドリアンはテーブルに肘ひじをついて両手を組みあわせ、ルーシーたちを見まわした。

「若いな。お前たち、何歳いくつだ」

　ルーシー以外が少々こわばった声こわ音ねで、十七、とか、十六、とか、十八、と口々に答えた。ルーシーが最後に、十六です、と呟つぶやくように言うと、アドリアンはすっと目を細めた。

「若いってのはいいことだ。生きのびることさえできりゃあ、これまで起きたことよりも、これから起きることのほうがずっと多いってことだからな。つまずいたって、その気になりゃあ、そしてほんのちょっとだけ運がありゃあ挽ばん回かいできる。俺は」

　アドリアンは組んでいた手をほどいて、サーベルの柄つか頭がしらを、ぽん、と叩いた。

「ラフレシア出身だ。こう見えて軍人だった。いろいろあって、軍を辞やめなきゃならなくなってな。どうしようもなくて、この国にきた。恰かつ好こうつけても始まらねぇ。俺は敗残者さ。敵と見りゃあ斬きり殺すしか能がねぇ。人生を楽しむすべなんざ知りもしねぇ。教えられてねぇからな。まさしく軍人向きだ。それなのに、脱だつ落らくしちまった。負け犬だ。だがな。そんな俺に━━そう、希望、とでも言やぁいいのかな。遠くのほうに、見えるか見えねぇかぎりぎりの場所に、道しるべを立ててくれたやつがいる。こいつだ」

　顎で示されたファニー・フランクは、はにかんだ表情で首を振ふってみせた。

「私は何もしていない。ただ、アドリアン、友である君に前を向いてほしかっただけだ」

「謙けん遜そんするんじゃねぇよ、ファニー・フランク。俺はお前のおかげで生きる目的ってやつを見つけた。それは紛まぎれもねぇ事実だ。お前がいなけりゃあ、俺はここにはいねぇ。ひたすら飲んだくれて、とっくにくたばってただろうさ」

「いや、私が何かせずとも、君はいつか立ちなおって歩きだしていただろう。私はそう思っている。君は君が思うよりずっと強い男だ。私は君を信じているのだ、アドリアン」

「お前にそう言われると、えらくこっ恥ぱずかしいが、不思議と悪くねぇ気分だぜ。俺もとうとう焼きが回ったか」

アドリアンは目を伏ふせて軽く笑い、煙草たばこをくわえて火をつけようとしたが、途と中ちゆうでやめた。

「こいつは━俺の友だちのファニー・フランクって男はな。見かけはちょっとアレだし、はっきり言って、けっこういんちきくせぇ。お前らもそんな印象を受けたかもしれねぇ。でもな。こいつには大志ってやつがある。このエルデンに、ちっちゃな光をともそうっていうな。その光めがけて、他ほかに行き場のねぇ蛾がが集まってくる。そいつらを明日って名の未来に導いてやろうって寸法だ。他でもねぇ、このくそったれな街で、それがどれだけ大層な望みか、お前らにも想像くらいはつくんじゃねぇか。及およばずながら、俺はその手伝いをしてる。具体的に言やぁ、お前らみたいな右も左もわからねぇ小こ僧ぞうどもに、軍隊仕じ込こみの戦い方ってやつを教えてやる。もちろん制式訓練も受けたが、俺はラフレシアの東南国境地帯で百二十日、昼も夜もなく戦いつづけて、数えきれねぇほどの人間をぶった斬った。少し荒あらっぽいかもしれねぇが、練習用の木で偶く相手にヤーヤー打ちこんで覚えたのとは違う。実戦で身につけた戦い方だ。敵を殺して、生き抜くための方法だ」

それだ。アドリアンの瞳ひとみに宿っている暗さと鋭するどさの正体は、きっとそれだったのだ。

戦争のことはよくわからないが、アドリアンは実際に戦場で殺しあいをしていた。その体験が、においのようなものが、アドリアンには染しみついている。だから、そのあとアドリアンがしてくれた、どうやって戦い、どのようにして生き残り、そこから何を学んだか、という話には重みがあり、説得力があった。こんなすごい人に、友だち、と呼ばれているファニー・フランクもすごいのかもしれない。なんだかあやしいと感じていたのだが、人は見かけによらない、という言葉もある。それに、ルーシーの人を見る目なんてあてにならない。でも、アドリアンはどうか。これだけの経験をしてきた男の人だ。少なくとも、ルーシーよりはよほど洞どう察さつ力があるだろう。そのアドリアンに高く評価されて、信用されているのだ。クランをまとめているということは、アドリアンだけでなく大勢に信しん頼らいされて、尊敬されてもいるはずだ。恰好は変だが、ファニー・フランクは一ひと角かどの人物に違いない。考えてみれば、トマトクンの鎧よろいだってかなりやばいし、見た目なんてたいした問題ではないのだ。

ルーシーと若者たちは、サンドウィッチやクレープなどの軽い昼食をご馳ち走そうしてもらったあと、ファニー・フランク率いる創

世の翼ジエネシスウイングの人たちと一いつ緒しよにアンダーグラウンドにもぐってみることになった。

　場所はＤ７地中砦とりでアヴァシーで、亜あ人じんボーグという異界生物フリークスの巣そう窟くつらしい。ファニー・フランクとアドリアンに連れられてＤ７出入口の前まで行くと、七人の男女がたむろしていた。どうやら創世の翼ジエネシスウイングの人たちらしい。一人一人紹しよう介かいされたが、名前と顔が一いつ致ちするまでには少し時間がかかりそうだ。アドリアンはそのうちの一人から荷物を受けとって、ネクタイを外して上着を脱ぬぎ、シャツとスラックスの上から赤と緑のツナギみたいな服を着た。サーベルの他に、短い槍やりも持ってゆくようだ。

「それでは、出発するとしよう！」

　ファニー・フランクが先頭に立って、その後ろにアドリアン、他の七人は一列になったルーシーたちの前後左右を囲んでいる。ルーシーは四人いる若者のうちの、前から三番目だ。一番前のレンドリクスが十八歳で、二番目のペートが十七歳、ルーシーが十六歳で、後ろのヘンゼルも十六歳なので、示しあわせたわけではないのだが、偶ぐう然ぜん、年ねん齢れい順になっている。

　一行は半円形の出入口からアンダーグラウンドに入って、わりと急な坂道を十五メーテルほど下り、突つきあたりを右に曲がった。地面は平らに削けずられているが、壁かべや天てん井じようはごつごつしている。創世の翼ジエネシスウイングの人たちが携けい帯たい用の照明器具を持っているので、暗くはない。さらに角をいくつか曲がると、明かりは必要なくなった。

　Ｄ７は、ルーシーが行ったことのあるＤ１やＤ11とはまったく趣おもむきが異なっているようだ。簡単に言えば、Ｄ１は悪あく魔まが巣くっている複雑に入り組んだ地下の洞どう窟くつ、Ｄ11は地下の大洞窟に広がっている石造りの街、といった印象で、どちらも結局、地下の洞窟だった。アンダーグラウンドというのは、ようするにそういう場所なのだろうと思っていたのだが、行く手にそびえ立っている壁の向こうは違う。洞窟というよりも、巨きよ大だいな何かの施し設せつのようだ。

　目測で高さ四メーテルほどの壁も、その壁にうがたれた無数の穴から見える床ゆかも、建物らしきものも、天井も、何もかもが灰色一色に塗ぬりつぶされている。あるいは、石なのか金属なのか知ら

ないが、その素材自体が灰色なのかもしれない。

「あれこそが地中砦アヴァシーだ！」

　ファニー・フランクは足を止めて皆みなを振り返った。

「あの壁の向こうは亜人ボーグの領域であるから、一いつ瞬しゅんの油断も命取りになりかねない。少し前、下層に攻せめこんだ者たちがおり、その影えい響きようか、上層にも手強いボーグ・エリートやボーグ・キャプテン、ボーグ・サージェントらが出現しているとの情報もある。フフッ。怖こわいかね。だが、心配は無用だッ！　若者たちよ、君たちのことは私たちが必ず守る！　今日、私は君たちに学んでほしい！　それは、侵入者クラッカーにとって一番大切なものは何かということッ！　つまり、それは勇気だということを、私は身をもって君たちに伝えたいのだッ！」

　若者たちが息をのんだり、ほう、と感嘆の声をもらしたりした。ルーシーもぎゅっと唇くちびるを引き結んで、モトロール刀の柄つかを握りしめた。

　勇気。そうだ。ぼくには勇気がない。だから、ぼくはダメなんだ。でも、いつまでもダメなぼくのままでいたいわけじゃない。ぼくは変わりたい。勇者。そう。本に出てくるような、恐おそろしい魔物を倒たおして人々を救ってお姫ひめ様さまと結けつ婚こんするような勇者に、なれるものならなりたい。ファニー・フランクやアドリアンはともかく、他の創世の翼ジエネシスウイングの人たちが妙みょうに静かというか、いまいち元気がないのが、多少気にはなる。いや、きっとみんな経験豊かな侵入者クラッカーだから、地中砦アヴァシーを目の前にしても落ちつきはらっているのだ。ファニー・フランクだって、ルーシーたちを鼓こ舞ぶするために熱弁をふるっているだけで、内心では彼らと同じように冷静なのではないか。たぶん、そうだ。そうに決まっている。

「さぁて」

　アドリアンが槍で自分の肩を軽く叩たたいて首を曲げてみせた。

「行くか」

「うむ！」

　ファニー・フランクは力強くうなずいて、小脇に抱えていた金色

の兜をかぶった。そうして勇ましく歩きだすのかと思いきや、一向にその場から動こうとしない。アドリアンは顔をしかめてため息をついた。

「いや、うむ、じゃなくて、行けよ」

「……むッ！　わ、私が先か……？」

「そりゃあそうだろ。頼たのむぜ、マスター」

「お、おう。当然だ。じょ、冗じよう談だんではないか。ちょっとしたファニー・ジョークだ。おもしろすぎてわかりづらかったかな？　ヌハハハッ」

　ファニー・フランクはようやく右足を前に出したが、それと同時に右手も前に出た。次は左足と左足がシンクロした。

　変な歩き方だ。それとも何か意味があるのか。ああいう歩き方をすることで、とっさに反応しやすいとか。ルーシーから見ると後ろ姿なので表情はわからないが、アドリアンが肩かたを揺ゆらしている。何だろう。もしかして、笑っているのか。

「フフッ」

　ファニー・フランクはいきなりピタッと立ち止まって振ふり向き、兜かぶとの面めん頬ぽおをシュタッと撥はね上げてニヤリと笑ってみせた。

「ファニー・ジョーク・アゲェェーィン……？」

　なんで微び妙みように疑問形なのか謎なぞだし、べつにおもしろくも何ともなかったが、そういうことか。友人がまたもやジョークをかましていると知って、アドリアンはウケていたのだろう。創世の翼ジエネシスウイングの人たちもちょっとだけ笑っている。爆ばく笑しようとは程ほど遠とおく、むしろ失笑という感じだが、ファニー・フランクにはつまらないギャグを連発する悪い癖でもあるのかもしれない。誰だれにだって、長所もあれば短所もある。あまり意味がわからないだけで、身も心も凍こおりついてしまうほど寒いわけではないから、これくらいならぜんぜん許容範はん囲い内だ。

「さあッ！　大船に乗ったつもりでこの私についてきたまえ、皆の衆ッ……！」

　ファニー・フランクは兜の面頬を下ろして歩きだした。腿ももが高く上がっている。力強さを感じさせる歩みだ。アドリアンは首や肩をゆっくりと回しながらファニー・フランクの三メーテルほど後方についた。もう少し距きょ離りをつめてもいいような気もするが、元軍人の古ふる強つわ者ものにはおそらく何か考えがあるのだろう。ルーシーをふくめた他の者たちは、一番前のファニー・フランクではなく、むしろアドリアンに従うような形で一団となって進んだ。壁まではすぐだったが、穴をくぐる段になると、当然、慎しん重ちようにならざるをえない。

　ファニー・フランクは兜の面頬を上げて、ひょいと穴の向こうに顔を突っこむと、左右を見て、上を見て、なぜか下を見て、それから正面を見て、後ろを振り返った。それから前に向きなおり、また左右を見た。上を見て、ふたたび下を見た。

「よぉし……い、行くぞ……？」

「だから、さっさと行けっつってんだろうが」

　アドリアンが耳の穴をほじりながらうながすと、ファニー・フランクはとうとう決心したようだ。

「我ッ！　今このとき、地中砦アヴァシーに足そく跡せきを印しるすものなァーりッ……！」

　まずは一歩。そして、二歩目。完全に地中砦アヴァシーの中に入りこんだファニー・フランクは、どうだ、と言わんばかりに振り返って胸を張ってみせた。

「余よ裕ゆう、余裕ぅ。この私にかかれば、このくらい余裕だよ君ィ～？」

　アドリアンが、へっ、と鼻で笑った。

　なんだか変な雰ふん囲い気きだ。

　じつはちょっと前から気づいていたが、かなり微妙な空気が流れている。

　どうやらファニー・フランクはその事実に気づいていないようで、アヴァシーに足を踏ふみ入れる前とは打って変わって、鼻息を荒くして大だい胆たんにずんずん歩いてゆく。アドリアンもあとに

つづいたが、やはり三メーテルくらい間かん隔かくをとっている。ルーシーは左右にいる創世の翼ジエネシスウイングの人たちの顔色をうかがった。なんというか、しょうがないよね、こうなったらもう、行くしかないよね、とでも思っていそうな表情だ。だんだん不安になってきたが、周りの皆もばらばらと歩きだした。ルーシーだけじっとしているわけにもゆかない。

　仕方なく穴をくぐってアヴァシー内に入ると、本当にどこもかしこも灰色だらけだ。何かが身をひそめていそうな暗がりがあるわけではない。建物などの意い匠しようがおどろおどろしいわけでもない。ただひたすら灰色なだけなのだが、そうとう不気味だ。

　先頭のファニー・フランクは鼻歌をうたっている。度胸があるのか。それとも、どこかおかしいのか。わからないが、ルーシーは早くも平常心を失いつつあった。だって、気持ち悪い。灰色一色なんて。妙に静かだし。何か起こりそうな気がして。やばいことが。ぼくが臆おく病びようすぎるのかな。そうかもしれないけど、でも、ほら、アドリアンが足を止めた。

　ファニー・フランクはまだ歩いている。きっとルンルン気分なのだ。後ろ姿がそんなふうに見える。彼一人だけだ。あとはもう、アドリアンが立ち止まった瞬しゆん間かん、全員びくっとして、不景気な行進をやめていた。

　見るに見かねたのか、創世の翼ジエネシスウイングの一人が何か声を出そうとした。ファニー・フランクを呼び止めようとしたのだろうが、寸前のところでアドリアンが手をあげてこれを制した。

　ルーシーはすでに疑っていなかった。何かが起ころうとしている。アドリアンはもちろん、皆、予感している。一人だけだ。ただ一人、ファニー・フランクだけはわかっていない。

　囮おとり。そんな言葉が頭をよぎった。その直後だった。

　道の両りよう脇わきに建ち並んでいる四角い建物のどこかから、それは飛びだしてきたのだろう。建物も灰色で、天てん井じようも灰色で、それも灰色だったので、よく見えなかった。でも、それが何を意図しているのかは明確だった。それは音もなくファニー・フランクに襲おそいかかった。押し倒して、組み敷しいて、剣けんのようなものを振りおろそうとした。剣のようなもの、というか、やはり灰色だが、あれは間ま違ちがいなく剣だ。ファニー・フランク

はとっさにそれの両りよう腕うでをつかんだ。剣が止まった。ぎりぎりだ。不運というか迂う闊かつというか、兜の面頬を上げたままだったので、顔面がほとんど露ろ出しゆつしている。それが力をこめると、剣先が鼻の頭をチクッと刺さして、そうはさせじとファニー・フランクが押し戻もどし、だが押し返しきれずにまた剣先が迫せまってきて、その繰くり返しだが、いつまで耐たえられるか。

「ぐむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむむ……！」

　たまらず創世の翼ジエネシスウイングの何人かが駆かけだしたが、アドリアンが横に向けて槍やりを突きだし、彼らの行く手を遮さえぎった。

「まだだ。動くんじゃねぇ」

「で、でも、マスターが」

「おい、餓が鬼きども」

　アドリアンは創世の翼ジエネシスウイングの人を無視して、ルーシーたちのほうに顔を向けた。

「言ったとおり、お前らに戦いの基本ってやつを教えてやる。基本その一、だ。まずは状じよう況きようを把は握あくしろ。ここがどこか。味方はどこにどれだけいるか。そして、敵はどんなやつで、どこにどれだけいるか。ちゃんと見て、聞いて、感じて、その出来の悪い頭に無理やり叩たたきこめ。死にたくなきゃそうしろ」

　ルーシーは反射的にあたりを見まわした。敵。いる。敵だ。今まさにファニー・フランクを殺そうとしているやつだけじゃない。建物だ。その二階と言っていいのかどうか。とにかく、窓みたいなものがあって、そこから一体、二体。少し先の、向かって右側の細い路地から、やはり二体。逆側の路地からも二体。ぜんぶ灰色だ。腕うでは二本。足も二本。人間に似ている。丸い兜をかぶり、灰色の鎧よろいというか装そう甲こう服ふくのようなものを着ていて、肌はだは露出していない。手にしている武器は剣だ。反りがある。ルーシーが持っているモトロール刀のような形だ。

「ボーグ・エリートってやつだ。あいつら、弱くねぇぞ」

　アドリアンは槍を手て許もとに引きよせて短く息をついた。助走

は一歩だった。槍を投げた。空気を切り裂さく音は一瞬だった。槍は見事に命中した。ファニー・フランクにのしかかっていたボーグ・エリートの、首と胸の境目あたりだった。ボーグ・エリートの身体からだから力が抜ぬけた。ファニー・フランクはすかさずボーグ・エリートを力ずくではねのけて跳とび起きた。

「あ、あ、ああああアドリアンッ！　貴様！　なぜすぐに私を助けなかったのだッ！　怖こわかったではないかッ！　死んでしまうではないかッ！　死んだら元も子もないではないかッ！　死んで花実が咲さくものかッ！」

「次。基本その二」

　アドリアンは腰こしからサーベルを抜いて走りだした。ぎゃーぎゃーわめいているファニー・フランクの脇わきを通り抜け、建物の窓から降りてきたボーグ・エリートに肉にく薄はくするまで、あっという間だった。そんなに無造作に突つっこんでもいいのか。怖くないのか。もっとこう、足あし捌さばきを工夫するとか、タイミングをずらすとか。ただまっすぐ突とつ進しんするなんて。

　ボーグ・エリートも意表を突かれたようだ。動どう揺よう、戸と惑まどい、そうしたものが感じられた。つまり、ボーグ・エリートの動きがほんの一瞬、止まった。致ち命めい的な一瞬だった。アドリアンはサーベルを引きながら、さらに踏みこんだ。ボーグ・エリートの真ん前どころか、ほとんど真横に出た。

「つぁっ……！」

　アドリアンは左足を軸じくにして、横に一回転した。ボーグ・エリートの頭部が兜ごと吹ふっ飛んだ。回転しながらサーベルをボーグ・エリートの首の付け根に叩きこんで、思いっきり、渾こん身しんの力をこめて、豪ごう快かいにぶった斬ぎったのだ。技わざもへったくれもない。単純で、あまりにも力任せだ。ルーシーは啞あ然ぜんとしていた。次の瞬間、鳥とり肌はだが立った。

「どぅぅぅぅううううらあぁぁぁっ……！」

　窓から飛び降りてきたボーグ・エリートは一体ではなかった。二体いた。アドリアンは一体の首を叩き落とすなり、もう一体のボーグ・エリートに詰つめよった。まただ。まっしぐらだった。ボーグ・エリートは身構えようとしたのか。防ぼう御ぎょするため、あ

るいは迎むかえ撃うつために、何かしようとしたのかもしれない。アドリアンは、今度はかまわず体当たりした。身体ごと突進し、土手っ腹にサーベルを突き刺して、突き倒し、抜いてまた胸にぶっ刺した。さらにもう一突き、首の下にねじこむと、ボーグ・エリートは絶命したようだ。

「いいか、餓鬼ども」

　アドリアンは血ち塗まみれのサーベルで肩を叩きながら振ふり返り、首を曲げてみせた。

「人の生き死になんざたいしたことじゃねぇ。くたばったって、失うのはせいぜいてめぇの命だけだ。だから、びびるな。敵は死ぬ気で殺せ」

　熱い。血だ。身体中の血がたぎっている。

　アドリアンはサーベルの切っ先を前方に向けた。

「ちょうどいい具合に、まだいるじゃねぇか。敵だ。獲え物ものだぞ。どうした。殺やれよ。てめぇらが殺らねぇなら、俺がぜんぶ殺っちまうぞ。殺れ！　殺れっつってんだろうが……！」

　左右の路地から出てきたボーグ・エリートたちは、明らかに浮うき足立っていた。当然だ。仲間をほとんど一瞬のうちに二体も殺られたのだ。誰だれだって驚おどろくし、腰が引ける。誰だって。そうだ。同じだ。異界生物フリークスだろうと何だろうと変わらない。あいつらは得体の知れない化物なんかじゃない。敵。ただの敵だ。獲物だ。獲物は殺す。殺せ。殺せ。殺せ殺せ殺せ……！

　ルーシーは鞘さやからモトロール刀を抜いて走った。アドリアンもファニー・フランクも他の味方も目に入らなかった。敵。敵だ。敵を殺す。殺す殺す殺す。一番近くにいるやつ。ボーグ・エリート。あいつでいい。刀を突きだした。前に前に前に。雄お叫たけびをあげた。おおおおおおおおおおお。ルーシーは駆けた。まっすぐだ。小細工なんかいらない。敵は死ぬ気で殺せ。そのつもりだ。殺したい。敵を殺したい。早く殺したい。早く早く早く殺したい。だから最短距離を選んだ。歓かん喜きの瞬しゅん間かんを待ち望むルーシーの脳は、もう興奮がもたらす快感に溺おぼれかけていた。Ｈａｈａ！　Ｈｙａｈａｈａｈａ！　何か出てる！　ぼくの脳から何か出てるよ！　汁しるだ！　脳汁だ！　飛び散ってるよ！　飛び

散りまくってる！　もうビショビショだよ！　最高！　最高に気持ちいいＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！　でも、まだ足りない！　もっとだ！　もっと気持ちよくなりたい！　そのためにぼくは殺す殺す殺す！　おまえだ！　ボーグ・エリート！　おまえを殺す！　この刀で！　ぶっ刺して、かきまわして、ぐちゃぐちゃにして、あふれだす脳汁のプールで、ぼくは泳ぐんだ！　もうすぐだ！　ほら！　もうすぐだよ！　ぼくはおまえを殺すよ！　Ｙｅｅｅｅｅｅｅａａａａａａａａａｈｈｈ……！

　あれ？

　なんでかな。ぼくの体勢、崩くずれてる？　転びそうだよ？

　弾はじかれた？　Ｏｈ！　Ｎｏｏｏｏｏｏｏ！　弾かれちゃった。ぼくの刀。ボーグ・エリートの刀で、バチーンッて、簡単に、呆あっ気けなく、弾かれちゃった。くそ。くそ。くそ。冗じょう談だんじゃない。踏ふんばれ。転ぶな。ルーシー。ルーシー・アッシュカバード。転んじゃったら終わりだ。

　だって、そこにいるんだ。ボーグ・エリートが。敵が。刀。振りかぶってる。やばい。

　やばいなんてものじゃない。

「□□Ｈａｕ……！」

　どうやったのか自分でもよくわからないけれど、刀を振りあげてボーグ・エリートの刀をギャンッと弾き返した。火花。耳みみ障ざわりな音。すっごい手て応ごたえ。こらえきれず、ふらついてしまった。血がサーッと引いた。あんなに熱かったのに。沸ふつ騰とうしそうだったのに。今はつめたい。凍ってしまいそうなほどに。ぼくはこんなに無様に足が開いて身体からだが傾かたむいて腕うでにも力が入っていないのに。敵は違ちがう。もう打ちこんでくる。そんな。ひどい。こっちは準備が。

「Ｎａａａａａａａａａａａａａｈ……！」

　そんなことは言っていられないから、とにかく刀を振りまわした。なんとか敵の刀にあてたが、押された。思いっきり押されて、ルーシーの左手が刀の柄つかから離はなれた。右手はどうにか残した。かろうじてつかんでいるだけだ。敵は違う。すぐに刀を引い

て、鋭するどく打ちおろそうとしている。斜ななめだ。ズバッとくる。ダメだ。もうダメだ。本格的にダメだ。殺すどころの騒さわぎじゃない。

　殺される。

　死ぬ。死んじゃう。

　ルーシーは目をつぶった。

「つぁっ……！」

　この声は。というか、ぼく、死んでない？

　目を開けると、首から上を失ったボーグ・エリートが崩れ落ちるところだった。

「迫はく力りよくだけは悪くねぇ感じだったが」

　アドリアンだ。助けてくれたのか。そういうことだろう。アドリアンは返り血で汚よごれた顔を手の甲こうでぬぐい、ボーグ・エリートの死し骸がいを足あし蹴げにした。

「そのザマじゃあ、技術が追っついてくるまで生き残れそうにねぇな。まぁ、俺の知ったことじゃねぇ。早死には若いやつの特権だしな」

　ルーシーは刀を両手で握にぎりなおしたが、それだけで精せいーいつ杯ぱいだった。若者たちはだいぶ苦戦しているようだが、それでも創世の翼ジエネシスウイングの人たちの支し援えんを受けて、各自けっこうがんばっている。残るボーグ・エリートは二体だ。その二体を、三人の若者と七人の男女が取り囲んで、押しつつみ、圧あつ倒とうしようとしている。いま何もしていないのは、ルーシーと、もう十分以上に仕事をしたアドリアン、それからファニー・フランクだけだ。

「よし、いいぞ！　そこだッ！　うむッ！　ナイス攻こう撃げきッ！　それッ、今だッ！　なァァーにをしておるのだ！　そこでとどめだッ！　そう！　それでよしッ！　ブラーヴォッ！　ブリィーリアントッ！　上出来だぞ！　それでこそ誉ほまれ高い創世の翼ジエネシスウイングの一員だッ！」

　いや、ファニー・フランクは一応、味方に声援を送っているか。見かけ倒だおしで、口だけ達者で、本当はお飾かざりにすぎないのだろう、あの人にはぴったりの役目だ。たぶん、自分ではそんなつもりはなかったに違いないが、囮にもなってくれた。役立たずはルーシーだけだ。

　悔くやしいなんて思えない。そんなふうに思う資格さえ、きっとない。おこがましい。

　なんだか、恥はずかしくなってきた。ここにいることが。生きているのが、恥ずかしい。

「そろそろ次のレッスンだな」

　アドリアンが自分の槍やりを拾ってニヤッと笑った。

「おい、餓が鬼きども！　基本その三だ！」

　ボーグ・エリートはまだ一体残っているが、十人がかりだ。すぐに勝負がつくだろう。この期ごに及およんで、アドリアンは何を教えようというのか。何にせよ、ルーシーには関係ない。教えてもらったって無む駄だだ。アドリアンは声を張りあげた。

「やばくなったら、なんにも考えねぇでさっさと逃にげろ！」

「……え」

　ルーシーはきょとんとしてしまった。アドリアンが走ってゆく。背中を向けて、いったいどこへ行くのか。そっちは戻もどる方向だ。

　戻る？　どうして？

「のおおうッ！」

　ファニー・フランクが跳とびあがった。

「い、いいいいかん！　てててててて撤てつ収しゅう！　全員撤収だッ！　いいか！　私はちゃんと命令したからな！　撤収だぞッ！　こうして念まで押したのだからなッ！　私は悪くないぞッ！　よいなッ！　何があっても私のせいではないからなァァァッ……！」

　というか、なんであなたまで尻尾しつぽを巻いて、脱だつ兎とのごとく逃げだすんですか。逃げだす。そう。アドリアンとファニー・フランクは逃げたのだ。やばくなったら、さっさと逃げろ。アドリアンはそう言い残した。それが戦い方の基本その三だった。

　ルーシーは唾つばをのみこんで、周囲に目を配った。

「ふわっ……」

　変な声が出た。次の瞬しゆん間かん、ルーシーは百八十度方向転てん換かんして駆かけだしていた。逃げて、と叫さけんだような気もする。気のせいかもしれない。とにかく走った。走るしかなかった。まさしくアドリアンの言うとおり、今は何も考えずに逃げるべきだ。だって、あっちの建物の陰かげから、そっちの建物の窓から、ずっと前方から、先の路地から、ぬっ、にゅっ、すっ、と、ものすごい数のボーグが顔を出していた。出そうとしていた。近づいてきつつあった。こっちは十人以上いる。けっこうな人数かもしれない。でも、相手はそんなものじゃなかった。どれくらいそんなものじゃなかったのか、言葉ではちょっと説明できない。とっさには数えられなかった。それは、まあ、創世の翼ジエネシスウイングの人たちや若者たちのことは心配だった。無事だろうか。ちゃんと逃げてきているだろうか。気にはなったが、振ふり返って確かく認にんする勇気はなかった。余よ裕ゆうもなかった。アドリアンやファニー・フランクの姿は見えない。なんて逃げ足が速いんだ。でも、もう少しだ。あと少しで壁かべだ。あの壁の穴をくぐれば、地中砦とりでアヴァシーから出られる。その寸前だった。横合いから灰色のものが飛びだしてきた。ボーグだ。まずい。このままだと、ぶつかる。じゃなくて、やられる。

「──わひゃっ……！」

　右みぎ斜ななめ前方だった。ルーシーは灰色の地面に飛びこんだ。転がって、すぐに起きあがった。それから穴を目指して走った。見なくてもわかる。ボーグは追いかけてくる。やだ。こないで。追いかけてこないで。どうか。お願いします。というか、なんか昨日きのうもこんなことをやってたような。こんなことばっかりしてるような。少しも進歩してないような。ぼくは逃げて、逃げて、逃げるだけで、でも、逃げたって何になるんだろう。

　ルーシーはちらっと振り返ってみた。

　思ったよりずっと近かった。

　ボーグはすぐそこにいる。ボーグ・エリートだ。刀を突つきだしてきた。ルーシーは反射的に首を曲げた。かすった。頬ほおだ。ザクッといった。髪かみも何本か斬きれ飛んだ。

「いやあああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　頭が真っ白になった。

　穴に飛びこんだことは覚えているが、あとのことはよくわからない。

　気がついたら、ルーシーは地上にいた。Ｄ７出入口の前だ。地べたに座りこんで、ぜいぜい息をしていた。ルーシーの周りには似たようなざまの若者や創世の翼ジエネシスウイングの人たちがしゃがんだり転がったりしている。負傷者はいても、息絶えている者はいないようだが、死し屍し累るい々るい、といった光景だ。ルーシーは思わず、ふっ、と笑ってしまった。べつに可お笑かしくなんかないけれど、笑うしかない。昨日とほとんど同じだ。結局、同じ過あやまちを繰くり返してしまった。

「だが、よかったッ！」

　ファニー・フランクは元気そうだ。脱ぬいだ兜かぶとを小こ脇わきに抱かかえて、あらわになっている髭ひげ面づらは腹立たしいほど色いろ艶つやがいい。

「全員、無事とは言わないまでも生せい還かんできたのだ！　これはまったくもって不幸中の幸いと言える！　いや！　よかったッ！　というか、じつはこれも学習だったのだ！　つまり、体験学習だッ！　アンダーグラウンドではこういうこともあるのだよ君ィ～ということを諸君に伝えたかった！　これでわかっただろう！　アンダーグラウンドには危険が一いつ杯ぱいなのだッ！　しかし、そうした危険を乗り越こえて、我々は進まねばならない！　一いつ緒しよに進もうではないかッ！　力をあわせて！　必要なのは団結だッ！　そのことを、私は強く強く言いたい！　そして、人生七しち転てん八ばつ倒とう、ではなく七転び八起き、決してへこたれず、万ばん丈じようの気を吐はいて、明日に向かって突き進むのだッ！　ムハハハハハハッ……！」

　あれが体験学習？　最初からああなることを見み越こしていたってこと？　本当に？　信じられるものか。絶対、嘘うそだ。ルーシーはうつむいてファニー・フランクの不ふ愉ゆ快かいな馬ば鹿か笑わらいを聞きながら、吐き捨てるように呟つぶやいた。

　死ね。

　顔を上げ、壁に背中をもたれさせて煙草たばこを吸っているアドリアンを見た。アドリアンはルーシーの視線に気づくと、ニヤリと笑って目をそらした。騙だまされたそっちが悪いのさ。そんなふうに言われたような感じがして、心底情けなくなった。

「さぁて」

　アドリアンは短くなった煙草を捨てて踏ふみ消した。

「そろそろ俺はお役御ご免めんってとこだな」

「むッ……!?　い、いや、待て、アドリアン。待ってくれ」

「これ以上、俺に何をさせようってんだ、ファニー・フランク」

「な、何、というか、そんな中ちゆう途と半はん端ぱな……」

「茶会だったか。あんな茶番につきあって、その餓が鬼きどもに戦い方も教えてやった。てめぇにもらった端はした金がねのぶんの仕事はしたと思うがな」

「お、おおおおおおい、あ、ああああああアドリアン、そ、そそそそその話は……」

「また俺に何かさせたいんなら、金を出せよ。酒を飲むのにも、女を抱だくのにも、金が要いる。金、金、金の世せ知ち辛がらい世の中だからな。ちゃんと金さえもらえりゃあ、何だってするぜ。ドブさらいでも、人殺しでも、何でもな」

「あ、アドリアン！　私は友人として君にそのような自じ堕だ落らくで投げやりな生き方をしてほしくないと思い、それでだな……」

「友人？　てめぇにしては、珍めずらしくおもしれぇ冗じよう談だんだ」

「わ、私は！」

「いいぜ」

　アドリアンは薄うす笑わらいを浮うかべて、上に向けた掌てのひらを差しだしてみせた。

「金を出せよ。そうしたら、また友だちのふりをしてやる。それくらいお安いご用だ」

「アドリアンッ……！　貴様ッ……！」

「交こう渉しよう決けつ裂れつか。しょうがねぇな。まぁ、また何かあったら声をかけてくれ。俺としては金さえもらえりゃあ文句はねぇ。ただし、前まえ払ばらいだ。てめぇは前科がたっぷりあるからな。稼かせぎを折半、なんて話は御免だ。うまくいきっこねぇ」

「むむむむむむッ！　ぶ、無礼な！　私を愚ぐ弄ろうするのかッ……！」

「そうさ。俺はてめぇを小こ馬ば鹿かにしてるんだ。今ごろ気づいたのかよ」

　アドリアンは新しい煙草に火をつけると、肩かたを揺ゆらして笑いながら悠ゆう然ぜんと立ち去った。ファニー・フランクは顔を真っ赤にして、だが、ぐうの音も出ないといった様子だ。呆あつ気けにとられている若者たちとは違ちがい、創世の翼ジエネシスウイングの人たちは誰だれも彼も、どうしようもない、やれやれ、またか、みたいな顔をしている。それはそれで不思議だ。なぜ彼らはファニー・フランクと行動をともにしているのだろう。もしかして、彼らも金で雇やとわれているのか。だとしたら、お金を稼ぐ才覚がありそうには見えないが、ファニー・フランクはなかなかの資産家なのかもしれない。世知辛いこの世の中には、いろいろな人がいる、ということだろう。だから、どうした。それが何だっていうんだ。どうでもいい。ぼくにはまったく、徹てつ底てい的に、関係ない。

　ルーシーは立ちあがってファニー・フランクの前に進みでた。頭をがばっと下げて、すぐに背筋をのばすと、ファニー・フランクは鼻白んでいた。

「ものすごく短い間でしたけど、お世話になりました」

「お、む、あ、いや、ま、待ちたまえ、ルーシー・アイウィッシュガバメント」

「ぼくはルーシー・アッシュカバードです。べつにいいですけど。ぼくのことは忘れてください。ぼくもあなたのことは忘れます」

「き、君ィ～。そ、そんなつれないことを。せっかくこうして出会ったのにだね」

「なかったことにしましょう。問題ないですよね。どうせぼくは役立たずだし」

「そ、そォ～んなふうに自分を卑ひ下げしてはいかんよ。いかんいかんいかん。前ぜん途とある若者がだねぇ～。それはまずいよ。もっとこう、ポォ～ジティヴに、オプティミスティックに、前向きにだねぇ～」

「残念ながら、あなたみたいに前向きにはなれっこないです」

　ルーシーはファニー・フランクに背中を向けた。

「それに、こんなぼくでも、死にたくはないし」

「ま、まままま待ちたまえマッチ！　マッチ……!?　ヌッ!?　マッチとは誰のことだッ！」

「知りませんよ……」

　つきあいきれない。ルーシーは歩きだした。ファニー・フランクに何度も何度も名を呼ばれたが、一度も振ふり返らなかった。今日は曇くもり空で、今にも雨が落ちてきそうだ。降るなら早く降ればいいのに。そういうのが一番むかつくんだ。空模様にまで八つ当たりする、こんなぼくなんて消えてしまえばいい。

Omenage 899 5th revolution 5th day

サンランド無統治王国首都エルデン第十二区

chapter.12

雨のおかげ

　日暮れまでにはまだ間がある。家に帰るには早い時間だ。もし家に誰かいたら、何もかもうまくいってません、と教えるようなものだろう。それがどうしたっていうんだ。どうでもいい。どうなったっていい。誰にどう思われようと、知るもんか。

　門はいつものようにきゅーが開けてくれた。

　マリアローズが玄げん関かんポーチの下に片かた膝ひざを立てて座っていた。

　近づいてゆくと、マリアローズはかすかな笑えみを浮かべた。

「今日は早いね」

「はい」

「ほっぺた、どうしたの」

「あ、これは」

　ルーシーは袖そでで頬ほおをこすった。見ると、たいした量ではないが、袖に血がついている。

　帰り道の途と中ちゆう、布を押しあてていたので、もう出血は止まったと思っていたのに。

「な、なんでもないです。ちょっとあの、転んでしまって。でも、かすり傷です」

「そっか」

「はい」

　少し迷ったが、ルーシーはマリアローズの隣となりに腰こしを下ろした。何か言おうとした。声が出ない。第一、何も思いつかない。そうじゃない。ぼくは待っているんだ。いつもよりずっと早く帰ってきた。それに、この姿を見れば一目瞭りよう然ぜんのはずだ。目が節穴じゃなければ、何かあったんだってすぐにわかる。事情を察して、慰なぐさめてほしい。やさしくしてほしい。

　ぼくだって、そこまで間ま抜ぬけじゃないんだ。一人で仕事を探しに行った最初の日、ピンパーネルさんだけ夕食が一緒だった。帰りが遅おそかったんだ。ぼくよりちょっと前に帰ってきた。ベンテン・カフェでカタリさんに会った。アジアンが言っていた。ああしてこっそり見守っているわけか、って。過保護だネ。まあ、彼らしいといえば、そう言えなくもない、って。

　わかってるんでしょう。どうせ知ってるんでしょう。見てたんだ。ぼくを見守ってくれていた。見張っていた。だから、ぼくがどういう状じよう況きようにいて、今、どんな気持ちでいるのかも、きっとお見通しなんだ。それなら、声をかけてよ。慰めてよ。ぼくにやさしくしてよ。

「……ここで、何してるんですか」

　とうとう根負けしてしまった。

　マリアローズは、べつに、と肩をすくめた。

「ただぼーっとしてるだけだよ。たまにはね。そういうのも必要なのかなって、最近ようやく思えるようになってきて」

「天気、よくないのに」

「そうだね。でも、雨はまだ降ってないし、寒くもないし」

「ふだんは、訓練をしているんですか」

「え」

「あ、あの、偶ぐう然ぜん、見てしまって。昨夜」

「ああ、そっか」

　マリアローズは下した唇くちびるをきゅっと噛かんで指先で頬を掻かいた。その頬がちょっとだけ赤らんでいる。やっぱりかわいい、と思っている自分がいて、胸むな苦ぐるしくなった。

「いろいろだよ。トマトとかピンパーネルにつきあってもらって、剣けんなんかの練習をしたり。あとは、仕事の下調べっていうか。いまアンダーグラウンドで狙ねらってる場所があるんだけど、そこに行ってちょっと様子を見たり、少しずつ地図を作ったりとか」

「ぼくがいない間も、きちんとお仕事してるんですね」

「稼かせがないと、食べていけないしね。きみだってしてるでしょ」

「ダメです。ぼくは」

　言ってしまった。ずっと胸の奥にわだかまっていたものを、ついに吐はきだしてしまった。もう止まらない。止めようがない。

「ダメですよ。ぜんぜん。何をやってもダメなんです。ダメなりになんとかしようと思って、せっかく見つけた皿洗いの仕事も辞やめちゃったし。侵入者クラッカーなんて無理ですよ。ひどいんです、ぼく。臆おく病びようだし。何もできないんです。何をすればいいかわからないんです。才能ないんです。何をやったって、うまくいきっこないんです。実際、ダメだし。なんでだろ。たぶん、要領が悪いんですよね。致ち命めい的に。頭が悪いんですよ。バカなんだと思います。だから、こうすれば、とか、ああすれば、とか、考えたことがぜんぶ間ま違ちがっていて。もうダメじゃないですか。何をやったって、うまくいくわけないじゃないですか。最初から間違ってるんだもの。教えてほしいです。どうすればいいんですかね。あるじゃないですか。最低限、これだけはやっておけ、みたいな。とりあえずこうすればいい、みたいな。あれをしちゃいけないとか、これはダメだとか。どうして誰だれも教えてくれないんですか。結局、見み込こみがないからでしょう。ぼくがダメだからですよね。わかってますけど。あーあ。いやになっちゃうな。親を恨うらんじゃいますよ。お母さんには悪いけど。お父さんにも。本当に、悪いけど。こんなこと、思いたくないけど。なんでこんな出で来き損そこないを産んだんですかね。どうせなら、もっと頭がよくて、勇気があって、何でもできる、そんなふうに生まれたかったな。だって、楽しくないですよ。生きてて、まったく、さっぱりおもしろくないし。もうめんどくさいだけですよ。いったい何のために生きてるんですかね。こんなのだったら、死んじゃったほうがいいや。ずっとこのまんまなら、生きてる価値ないですよ。意味がないです。きっと、そういう人がたくさんいるんですよね。そういう人は脱だつ落らくしていくんだ。失敗したり、何もかも放ほうり投げたりして、死んじゃうんだ。そういえば、たまに死体が転がってますよね。行き倒だおれですかね。慣れたのかな。いつの間にか気にならなくなってたけど、あれがぼくの末路なのかな。だとしても、ちっともおかしくないですよね。きっとそうなんですよ。あーあ。あんなふうにくたばって終わりか。やってられないな。じたば

たしたって、どうせ無む駄だなんだ。みっともないだけですよ。獣けものって、死ぬときは黙だまって死ぬんですよね。むやみに暴れたりしないんだ。悪あがきしないで潔いさぎよく死んだほうが、まだちょっとかっこいいかな。だけど、死ぬ気で一暴れするっていう手もありますよね。それもいいかな。どっちみち同じだし。そんなふうに考えたら、なんだか気が楽になってきたな。何もかも、ぜんぶ、すべて、どうでもいいんだし。悩なやむのもバカらしいですよ。ていうか、もともとそれ以前の問題なんですよね。ははははは……」

　ルーシーは笑った。笑うごとに身体からだから力が抜ぬけていった。そうしてぼくは抜け殻がらになってしまう。違う。たぶん、それがぼくなんだ。初めからぼくはからっぽなんだ。何もないんだ。ぼくという存在には、価値も、意味もない。重みなんてこれっぽっちもないんだ。ゼロに等しいくらい軽いんだ。

「少しはすっきりした？」

　マリアローズは平然としていた。唇くちびるの端はしに微び笑しょうさえ浮うかべていた。頭に血が上った。すっきり、だって？すっきりなんて、するわけがないじゃないか。何も解決していないし。状じよう況きようは何も変わらないし。変えられるくらいなら、こんなふうに思ったりしないし。

　わからないだろうけど。

　そうだ。

　わかりっこないんだ。

「ええ」

　ルーシーはうなずいて、笑い返してみせた。

「すっきりしました。整理がついたっていうか」

「そう」

「はい。ぼくがバカでした。こんなこと言ってもしょうがないですよね。だって、どうせわからないでしょう。マリアローズさんは強いし。そんなに細くてきれいなのに、トマトクンさんとかピンパーネルさんとか、あんな人たちと訓練できるなんて普ふ通つうじゃな

いですよ。才能がないとできないです。身体の大きな人が強いのは当然だし、ある意味、それよりずっとすごいですよね。それに、マリアローズさんには仲間がいるし。すてきな仲間が何人もいて。みんな、いい人たちで。ぼくとは──ぼくとは、違いすぎるんですよ。所しよ詮せん、持てる者には、持たざる者の気持ちなんてわからないですよね。そうだ。そうなんだ！　マリアローズさんみたいな人には！　ぼくみたいにダメなやつのことなんて、わかりっこないんだ……！」

　思わず大声を出してしまった。マリアローズは目を見開いている。いきなりルーシーが声を荒あららげたから驚おどろいているのだろう。同時に、ショックを受けているのかもしれない。言いすぎた。ぼくは、なんてことを。

「ご、ご、ご、ごめんなさい、ぼく──」

「や、まあ……ちょっと、その、そういうふうに言われたことがないもんだから、びっくりしちゃって」

「え、そ、そういうふうに、というと」

「強いとか。僕に才能なんて、あるわけないし」

　この人は、何を。

　いったい何を言っているんだろう。

　やっぱりそうなのか。本当にわからないんだ。トマトクンやピンパーネルと比べたら、自分なんか。きっとそんなふうに思っているに違いない。ぼくが言っているのはそういう次元の問題じゃないんだ。根本的に違う。ダメだ。これじゃあ話が通じない。通じるわけがない。

　ルーシーはすっくと立ちあがった。不思議とさっぱりした気分だった。たぶん、はっきりしたからだ。ぼくは違う。違いすぎる。ぼくはこの場所にいていい人間じゃない。ぼくはここにふさわしくない。

　歩きだそうとしたら、足がすくんだ。さっぱりした？　嘘うそだ。大嘘だ。なんてていたらくだ。開きなおることさえできないなんて。

「ルーシー」

　マリアローズに名前を呼ばれた途と端たん、いたたまれなくなって走りだした。振ふり向かずに門を開けて、トマトクンの家を飛びだして、息が切れて、腹が、肺が痛くなるまで全力疾しつ走そうした。思いきり走れなくなってからも、懸けん命めいに足を動かした。駆かけ足になって、やがて早足になって、歩くのと大差ない速度になって、ぜえぜえ、ひいひい、ひゅうひゅう、ひどい呼吸の仕方になっても、立ち止まることだけはしなかった。ルーシーは右手で脇わき腹ばらを押さえ、左手で喉のどのあたりをかきむしりながら歩いた。あてなんて、もちろんなかった。どこでもいい。とにかく遠くへ行きたい。遠くへ……？　バカだ。ぼくはバカだ。きたんだ。もうきてしまった。生まれ育ったシー・シリーを離はなれて、エルデンにいる。ここがその、遠く、なんだ。それなのに、もっと遠くへ？　いったいぜんたい、どこまで行けばいいんだ。どこへ行きたいんだ。きっと同じなんだ。どこへ行ったって、それがどれほど遠くても、たとえ地の果てでも、変わらない。ぼくがダメだってことは変わるはずもない。解決法はどこかへ行くことじゃない。

　ぼくがいなくなればいい。

　ダメで、ダメで、どこまでもダメすぎるぼくなんて、消えてしまえばいいんだ。

　とうとう雨が降りだした。

　ちょうどいい。びしょぬれになりたい気分だ。もっと降れ。もっと。もっとだ。

　霧きり雨さめに煙けむる街に色とりどりの傘かさが花を咲さかせはじめた。

　建物の軒のき下したに駆けこんで、雨宿りをしている人たちもいる。この雨がそのうちやむとでも思っているのか。そうはゆかない。雨はもっと降る。降ってほしい。もっと強く。土ど砂しゃ降ぶりになればいい。

　雨あま粒つぶがどんどん大きくなってゆけば、雨あま脚あしが激しくなれば、ぼくは我が物顔でこの街をのし歩くことができる。

　この雨のおかげだ。

　迷いこむようにたどりついた鉄鎖の憩い場の市場も、閑かん散さんとしているとまではゆかないけれど、ずいぶんすいている。誰だれかとすれ違ちがうことはあっても、押しあいへしあいすることはない。いつしかぼくの呼吸は楽になっている。ぼくはすいすい進む。

　この雨のおかげだ。

　だんだん頭がすっきりしてきた。沈しずみに沈んでいた気分もすっかり上を向いている。やっと雨の降り方が強くなってきた。市場には水たまりがたくさんできている。ぼくはよけない。あえて水たまりを選んで、露ろ店てんの庇ひさしの下に入らないようにして歩く。ぼくはもう、頭のてっぺんから足の先まで、下着から靴くつの中までぬれている。なんだか楽しくなってきた。

　この雨のおかげだ。

　いっそのこと、ずっと、いつまでも、時の終わりまで降りつづいて、世界中が水びたしになってしまえばいい。お父さんが言っていたっけ。いつかお前とハドリエラを、海が見える場所へ連れていこう。海っていうのは、途と方ほうもなくでかい水たまりなんだって。この雨が止やまなければ、全世界が水たまりになる。海を見られるんだ。ぼくはよく、暗い夏の夜、ワールー川で泳いだものだった。昼間だと、ブラーニーの連中に石をぶつけられて邪じゃ魔まされるからだ。泳ぎはわりと得意だ。ぼくは雨のおかげで海になった広い世界を泳ぐだろう。ずっと、いつまでも、死ぬまで泳ぎつづけるだろう。いろいろな泳ぎ方を試ためして、身につけて、上達して、一番の泳ぎ手になるんだ。楽しいな。考えるだけで、楽しくて楽しくてたまらない。

　歌だ。

　どこからか歌が聞こえてきた。

　引きよせられるように声の方向へ歩いた。

　露店と露店の間を通って角を曲がると、ちょっとだけ開けた場所があった。その真ん中に彼女は立っていた。

　裸足はだしだ。

　七本弦げんの弦楽器を抱かかえているけれど、弾ひいてはいな

い。彼女は雨に打たれて、ひたすら歌っている。

　力強い声だ。少しだけかすれているけれど、それでいて透とう明めい感かんがある。雨音にまったく負けていない。声量があるから。それもあるだろう。でも、それだけじゃない。彼女が楽器を奏かなでていない理由がわかった。必要ないからだ。

　彼女は雨の中で、雨の歌を、雨とともにうたっていた。

　この雨がどんなに人の心を冷やすか。同時に、人の涙なみだを洗い流すか。雨はときに恐おそろしいもので、恵めぐみでもあって、雨に降られて別れた恋こい人びとたちと、雨の下で巡めぐりあった者たちの数はきっと同じくらいで、悲しいことと嬉うれしいことは、この雨のように降りだしたらいつか止んでしまう。それでも、雨はまたいつか降るのだ。そうしたらわたしはまた、雨と一いつ緒しよに、雨の歌をうたうのだ。わたしはうたうことしかできないけれど、うたうことさえできれば、他ほかには何もいらないのだ。



　雨にもかかわらず、彼女の前には十人くらいの男女がしゃがんでいた。通りすぎかけて、足を止める人もいる。ルーシーは開けた場所の端はしっこに突つっ立って、彼女の歌声に耳を傾かたむけていた。曲が終わると拍はく手しゆや喝かつ采さいが起こって、彼女の足あし許もとに置いてある籠かごに硬こう貨かが投げ入れられた。ルーシーも十ダラー青銅貨をとりだし、投げようとしたが、ここか

らでは遠すぎる。まごまごしているうちに、彼女はまたうたいはじめた。今度はさっきよりも陽気な曲だ。彼女は弾はじけるような笑え顔がおで地面を踏ふんでリズムをとりながら、弦楽器をかき鳴らした。ルーシーもいつの間にか笑っていた。周りの人たちも笑っていた。誰かが手て拍びよう子しを打ちはじめた。ルーシーも青銅貨を握にぎりしめている右手で左の掌てのひらを叩たたいた。曲がわっと盛りあがって、もうすぐ終わる。たぶん、誰もがそう思ったはずだ。そうならなかった。彼女は最後の部分を何度も繰くり返した。誰かが唱和すると、他の誰かがつづいた。ルーシーもうたった。彼女は楽器の演奏をやめて、声を張りあげながら手て振ぶりでさかんに聴ちよう衆しゆうをあおった。野太い声が、甲かん高だかい声が、さまざまな声がそれに応こたえた。熱ねつ狂きようが頂点に達した。ルーシーがそう感じた途と端たん、彼女は両手をあげて、うたうのをやめた。一いつ瞬しゆんで静かになった。聞こえるのは雨音だけだ。

静せい寂じやくの中で、彼女はもう一度、最後の部分をゆっくりと、余よ韻いんたっぷりにうたいあげた。

そのあとの拍手、歓かん声せい、硬貨の乱れ飛び方はすさまじかった。よかったよ。すげえぜ。最高。まじやばいって。なんか泣いちゃった。大好き。がんばって。声をかけられるたびに、彼女は笑顔で、ありがとう、ありがとう、と頭を下げた。もう一曲、と求める者もいたが、彼女は笑みを浮かべてみせるだけで、うなずくことも首を横に振ることもなかった。

そのうち彼女の周りから人がいなくなっていったが、ルーシーは立ち去ることができなかった。少し離れたところから彼女を見つめていた。彼女の浅黒い肌はだも、額に巻いた布も、長い黒くろ髪かみも、身につけている衣服も、ずぶぬれだ。いくつくらいだろう。ルーシーよりはだいぶ年上だと思うが、よくわからない。ぬれた服が身体からだにぴったりと張りついて肌が透すけているのに、彼女は気にしていないようだ。目鼻立ちがくっきりしていて、美人と言っても嘘うそにはならないだろう。ただ、見る者に鮮せん烈れつな印象を与あたえる容姿ではない。言ってしまえば、十人並みの美人だ。でも、彼女が歌をうたっている姿を見れば、誰だって心を惹ひかれるはずだ。

聴衆がすっかりいなくなると、彼女は弦楽器を片づけはじめた。ぐずぐずしていたら、どこかへ行ってしまう。ルーシーは彼女に近づいていった。彼女はしゃがんで地面に落ちている硬貨を拾い、籠

に入れているところだった。

「あ、あの」

「はい？」

　彼女は手を止めてルーシーを見上げた。ルーシーは笑顔を作ろうとした。ダメだ。うまくゆかない。ルーシーは中ちゆう途と半はん端ぱな表情を隠かくすためにうつむいて身を屈かがめ、籠の中に十ダラー青銅貨をそっと入れた。

「よ、よかったです。あなたの歌。か、感動しました」

「ありがとう」

　彼女はたぶん、にこっと笑ってくれたはずだ。

　硬貨を拾っている音がする。見れば、だいぶ遠くに落ちている硬貨もあった。思わず手がのびてしまい、後こう悔かいした。これは彼女のお金だ。彼女の歌にみんなが認めた価値だ。ぼくなんかが手をふれていいものじゃない。そうはいっても、いったん拾っておいて、また地面に置くのも変だ。他にどうしようもないので、硬貨を籠の中に入れた。彼女は何も言わない。ルーシーは口の中で、よし、と呟つぶやいた。

「て、手伝います。あの、盗ぬすんだりしません。念のため」

　彼女は、ふふっ、と笑っただけで、やはり何も答えなかった。どうやら断られたわけではなさそうなので、ルーシーは次々と硬貨を拾い、どんどん籠に入れていった。あっという間に最後の一枚になった。

「これでぜんぶ、ですね」

「そうみたい」

　彼女とルーシーは、籠を間に置いて、向かいあってしゃがんでいる。正面から見つめあうと、とてつもなく恥はずかしかった。

「手伝ってくれて、ありがとう」

「いえ。そんな。ぜんぜん。えと、こちらこそ、ありがとうございい

ました。すてきな歌を聴きかせていただいて」

「わたし、一年くらい前までは、こんなふうにうたえなかったのよ」

　彼女は目を細めて笑った。よく笑う人だ。歌と同じくらい、彼女の笑顔も魅み力りよく的だった。

「何年も前に、喉のどを怪け我がして。それ以来、声がちゃんと出なくなったの。叔お父じさんのお店で働いて、雨の日だけ店番をしながらうたっていた。雨が降っていれば、ひどい声でも迷めい惑わくにならないから」

「怪我……治ったんですか」

「治してもらった」

　彼女は顔を上に向けてぬれそぼった髪をかきあげ、きれいな喉を見せてくれた。

「教えてくれた人がいて。モリー・リップスという医術士のことを。あれも雨の日だった。訪ねて、相談したら、治せるって。でも、時間がかかるって。それに、途中、とても痛くて、苦しいかもしれないって。それでもいいとわたしは答えた」

「本当に、苦しかった？」

「喉の組織をごっそり切りとって、再生してもらったの。その間は、呼吸と、栄養をとるために別の管を通して」

「……聞いているだけで、なんだか痛そうです」

「痛かったけど、治ってまたうたえる日のことを考えれば、苦しくはなかった」

「好き、なんですね。歌が」

　彼女は首を横に振り、蓋ふたを閉めた籠を抱かかえて立ちあがった。

「わたしのすべてなの」

胸に響ひびいた。同時に、打ちのめされた。

何かを自分のすべてだと断言できる彼女がうらやましい。だけど、そんなことを言えるのは、彼女に才能があるからだ。あんなふうに歌えるからだ。あれだけの歌唱力が備わっていれば、ルーシーだって歌に命を捧ささげるだろう。その素質が自分にあれば、一流の侵入者クラッカーを目指すだろう。何もないから困っているのだ。だって、可能性がないことをいくらやっても、どうせ無む駄だじゃないか。無駄なことをやってもつらいだけだし、絶望ばかりが募つのる一方じゃないか。

「ぼくにも、何か見つかるかな」

ルーシーは吐はき捨てるように呟いた。美しくてすばらしい歌い手の彼女にすてきな笑え顔がおを見せたかったけれど、苦い笑いしか出てこなかった。

「たぶん、見つからない」

雨にぬれた彼女の笑い顔はやっぱりきれいだった。

「転がっているのは、がらくたばかり。拾いあげて、丁てい寧ねいに磨みがいて、大切にしないと、どれもこれも、がらくたばかり。ここでは何も見つからない。自分で見つけないと」

彼女はケースに収めた楽器をかついだ。

「わたしはアンジェ。毎日どこかでうたっている。今日うたわないと、昨日みたいにうたえなくなるから。明日うたわないと、今日が無駄になるから。明日も、あさっても、どこかでうたっているから、偶ぐう然ぜん、声が聞こえたら、わたしの歌を聴いて」

ルーシーがうなずくと、彼女は背中を向けて歩きだし、その後ろ姿は間もなく雨と露店の向こうに消えた。

ため息をついて、立ちあがろうとしたら、膝ひざに力が入らなかった。すとんと腰こしが落ちて、尻しり餅もちをついてしまった。そのままでいた。他ほかにどうしようもなかった。

転がっているのは、がらくたばかり。ぼくはきっと、そのがらくたなんだ。

行き交かう人たちはこっちを見る。一いち瞥べつして、すぐに目をそらす。たぶん、一目でがらくただとわかるからだろう。

誰だれか、がらくたのぼくを拾いあげて、丁寧に磨いて、大切にしてくれないかな。そうしたら、がらくたのぼくも、ちょっとはマシになるんじゃないかな。ぼくはただのがらくたで、一生、死ぬまでがらくたで、がらくたのままで終わるのかな。そうじゃないって、思いたい。でも、思えない。誰かが言ってくれないと。がらくたじゃなくて、貴重品みたいに扱あつかってくれないと。誰かが認めてくれないと。守ってくれないと。愛してくれないと。

ぼくは立ちあがることさえできない。

いっそ、このまま雨にとけてしまいたい。

そのほうがいい。もうたくさんだ。あまりにもみじめで。あんなにすばらしい歌を聴いて、あんなにも感動していたのに、今この胸を焼いているのは妬ねたみだ。いいな。あんな歌をうたえて。ぼくには何もできないのに。いいな。うらやましい。不公平だ。誰も彼もそうだ。あの人も、この人も、妬ましくてたまらない。どす黒い感情がどこからか次々とわきあがってくる。抑おさえられない。醜みにくい。気持ち悪い。自分が。吐きそうだ。叫さけびたい。謝りたい。誰に？　ぼくの謝罪なんて、誰も必要としていないのに。

「を？」

聞き覚えのある声だった。

振ふり向いて、少しばかり魚類の特とく徴ちようを備えている顔を目にした瞬しゆん間かん、ルーシーの身体からだは跳とび起きて駆かけだしていた。

「──って、をいっ！　いきなし問答無用で逃にげんなやっ……！」

いいえ。逃げます。断固として逃げます。逃げさせていただきます。だいたい、突とつ然ぜんそんなお魚みたいな顔の人間を目もく撃げきしたら、誰だって普ふ通つう、逃げると思います。少なくとも、ぼくは逃げます。だって、見られたくない。こんな姿を。こんな顔を。知られたくない。こんな思いを。だから、逃げるしかない。

ルーシーは泥どろ水みずを撥はねあげて走った。曲がれそうなと

ころがあればどんどん曲がって、ひたすら走った。そろそろいいだろうか。そんなことはかけらも考えなかった。

　十数回目に右折して、ちょっと広めの道に出ると、前方に背高のっぽの後ろ姿が見えた。のっぽの男の人は傘を差していない。髪の毛も外がい套とうも背中の大たい剣けんもぬれそぼっている。ルーシーは慌あわてて急停止した。のっぽの人が振り向いて、片方の眉まゆをつりあげた。見つかった。というか、あの人まできているなんて。もしかして、総動員態勢……？　まさか、そんな。

　ルーシーは回れ右して来た道を駆け戻もどった。それから違ちがう方向に曲がって、見覚えのない場所を目指した。角から飛びだそうとしたら、何か悪い予感がした。足を止めて顔を出してみると、行く手の十字路の真ん中に魚顔の人物が仁に王おう立だちして、きょろきょろとあたりを見まわしていた。危ないところだった。ルーシーは引き返して、また別の方向に曲がった。そもそも、いつまでも市場の中にいるからよくないのだ。そうだ。市場から出よう。でも、どっちへ行けば。方角なんて、ぜんぜんわからないし。何げなく左に曲がったら、一つの傘を二人で差している女性二人組とばったり出くわした。

「……あ……」

「ルーシーしゃん」

「わぅっ」

　ルーシーはまたもや回れ右して、右に曲がり、左に曲がって、しばらく直進して、後ろから自分の名を呼ぶ声が聞こえてきたので、左に曲がって、右に曲がって、すぐ左に曲がった。なんだか理り不ふ尽じんな仕打ちを受けているような気がしてならない。なんでぼくが逃げないといけないんだ。追われる理由がどこにあるんだ。怒いかりが力になった。息は上がっているのに、まだまだ走れそうだ。闇やみ雲くもに突っ走っているうちに、どうやら市場の中心部からはだいぶ離はなれてきた。露店の密度がぜんぜん違う。このへんはたぶん、もう端はじっこだ。ここを曲がって。まっすぐ行って。ほら。あの先には露店がない。

　ルーシーは足を速めた。

「ぐえっ」

　息がつまった。

　後ろから襟えり首くびをつかまれたのだ。

　ルーシーは勢いあまって空中を蹴けった。それで余計に首が絞しまった。なんとか地面に足をつけて、ちょっと呼吸が楽になったが、なんでこんなことに。いったい誰が。

「捕ほ獲かくしまシタ」

「……ぴ、ピンパーネル……さん」

　ルーシーが咳せきこむと、ピンパーネルはすぐに襟首から手を放してくれた。自由になったので、逃げられる。そのはずなのだが、ダメだ。ピンパーネルが目の前にいると、そんな気にはなれない。全身ずぶぬれのピンパーネルは、雨に打たれて悄しよう然ぜんとしているようにも見える。でも、違う。まるで身体のどこにも力が入っていないかのような自然体だ。逃げられない。絶対につかまる。

　ルーシーはへたりこんだ。べつに自分の意思でそうしているわけではない。勝手に顔が下を向いてしまう。何もできない、がらくたのぼくだけど、それにしたってこんなにも無力だなんて。逃げることすらできないなんて。逃がしてもくれないなんて。

　ひどいよ。

　ひどすぎる。

「……どうして、放ほっといてくれないんですか」

　ピンパーネルは答えない。返事さえもらえないのか。

　泣きたい気分だが、泣けない。空がこんなに泣いている。がらくたのぼくは、涙すら空に奪うばわれる。

　近づいてくる足音の主が誰だれか、そんなことはわかっていた。

　肩かたに手を置かれた。

　こんな状じよう況きようで、こんな状態なのに、性しよう懲こりもなく嬉うれしくて仕方なかった。

「風か邪ぜひくよ。帰ろ」

　目をつぶって首を横に振ふった。帰りたくなんかない。帰れない。あたりまえじゃないか。それくらいわかるでしょう。どのツラを下げてあの家に帰ればいいんですか。

「きみの気持ちは……まあ、わからなくもないって言いたいとこなんだけど」

　でも、ぼくは、あなたがそばにいて、この肩にふれている、その手の感かん触しよくを意識するだけで、破は裂れつしそうなくらい、胸が痛くて。

「わからないよ。正直ね。僕はきみじゃないし。想像することはできても、それがあってるとはかぎらないし」

　いいんです。想像なんかしてくれなくて。どうせわかりっこないですよ。無む駄だなことをして、時間を浪ろう費ひしないほうがいいです。だけど、あなたがぼくのことを考えてくれている、そう思うだけで、つめたくなった手が震ふるえて。歯の根があわなくなって。震えが止まらなくて。

「あくまで僕の考えだから、聞き流してくれてもいいけどね。きっと、大事なのは、自分が何をしたいかってことで──」

　お父さんに会いたい。お母さんのことを伝えたい。

　立派に生きていけるようになりたい。

　そのためにはどうしたらいいか、わからないんだ。さっぱりわからない。見当もつかない。ぼくは何をしたいのか。

「でも、それよりもっと大事なのは、自分が何をするか、だと思うんだ」

　ルーシーは目を開けた。

　雨あま粒つぶが水たまりに降りそそぐと波は紋もんが広がる。波紋は別の波紋とぶつかりあい、乱れて、消えてしまう。さながら生まれては死にゆくちっぽけな命のようだ。それでも雨は降りつづける。そのうち止やんでも、雨はまたいつか降りだすだろう。

「今、何をするか。何を選ぶか。どんな決断をして、どれを選せん択たくするか。僕らにできることって、突つき詰つめれば、たぶん、それだけなんじゃないかな。先の景色を見み渡わたそうとしても、天気が悪かったり、何か障害物があったり、僕の背が低かったりして、見えないこともある。目的地がちゃんと定まってて、そこに向かってまっすぐ進んでいけばいい。そうできるなら、それに越こしたことはないよ。だけど、何かにつまずいて転ぶかもしれないし、うっかり落とし穴に落ちたり、ちょっと寄り道したら、変なとこに迷いこんじゃったりすることだってあるかもしれない。僕らに間ま違ちがいなく与あたえられてるのは、今だけなんだ。結局、何だってその今が積み重なった結果でしかないと思うんだ。後こう悔かいすることは、もちろんあるよ。ほんとに、いやになるくらい、失敗ばっかりだし。でも、今、このとき、この瞬しゅん間かん、精せい一いっ杯ぱい、これだって決めて、選んで、やるのと、やらないのとじゃあ、やっぱり違うんじゃないかな。少なくとも、僕にとってはぜんぜん違うよ」

　肩に置かれていた手が、いったん離はなれた。

　軽く、やさしく、肩を叩たたかれて、帰ろう、ともう一度言われた。

　ルーシーは立ちあがった。

　マリアローズとピンパーネルの顔を見ることはできなかった。

　でも、自分の力で立ちあがった。

「明日、みんなでアンダーグラウンドに行くんだ」

　朝十時。現地集合。

「今すぐ決めなくていいよ。そのときでいいから。とりあえず、今は」

　帰って、着き替がえないとね。

　マリアローズはそう言って少しだけ笑った。

　つい彼女が着替えているシーンを思い描えがいてしまい、大おお慌あわてで打ち消した。

だから、彼女、じゃないんだってば……。

Omenage 899 5th revolution 6th day

サンランド無統治王国首都エルデン第三区

chapter.13

ただそれだけで

早起きしてこっそりトマトクンの家を出た。

昨日きのうの雨が嘘うそのようだ。

風は少しつめたい。

まだ低い太陽が投げつけてくる強い光に目を細めながら、雲一つない晴れ渡わたった空の下を歩いた。

この時間のエルデンは、ひょっとしたら一番静かなのかもしれない。

鳥がさえずっている。

誰だれかとすれ違うことはまれだ。

自分の足音がやけに大きく聞こえる。

そうかと思えば、環かん状じよう通からマーベラス・グッダー・ストリートに入った途と端たん、ひっきりなしに行き交かう巨きよ大だいな貨物馬車の群れに圧あつ倒とうされた。

エルデンにはたくさんの顔がある。世界中からいろいろな人が集まってきて、ある者はこの街を一時的な止まり木とし、ある者は通りすぎて、またある者はしっかりと根を下ろしているのだ。

馬車に轢ひかれてしまわないように気をつけながら、マーベラス・グッダー・ストリートを東に進んだ。

行く手にそびえ立っている、豪ごう壮そうで、なおかついかにも堅けん牢ろうそうで、メタリックな建造物がエルデンの東門だ。

東門に近づいてゆくと、道みち端ばたに停とまっている馬車が目につきだした。これから停まろうとしている馬車もある。今まで停まっていて、また走りだそうとしている馬車もあった。

馬車から吐はきだされる雑多な男女の何割かはこの街に居つき、何割かは立ち去り、何割かは何かを覚かく悟ごする前に命を落とすのかもしれない。

　東門と乗合馬車と乗客たちをしばらく眺ながめていたら、いつの間にか手に力が入っていた。

　踵きびすを返して、今度はマーベラス・グッダー・ストリートをまっすぐ西に進んだ。

　ひたすら歩くと、この国の王様キング・グッダーが住んでいるという、シャイニンググローリーパレスが見えてきた。

　壕ほりに囲まれた壮大な城は、城じよう壁へきや大小さまざまな塔とうが組みあわされて出来ているのだろうが、ちょっと見ただけではどこがどうなっているのかさっぱりわからない。とりあえず、その名のとおり、全体が光り輝かがやいていることだけは事実だ。

　城は大勢の魔ま導どう兵に警護されている。鈍にび色いろの甲かつ冑ちゆうで全身を隙すき間まなく覆おおっている魔導兵は、鎧よろい兜かぶとを身につけた人間のように見えるし、人間みたいに動いているけれども、人間ではない。なんでも彼らは、キング・グッダーの偉い大だいな魔力によって操あやつられている、その実体は精せい巧こうな人形のようなものなのだという。

　思いきって城に近づいてみた。

　そろそろと足を進めて、城に通じる跳はね橋まで、あと十メーテルくらいだろうか。跳ね橋の前や、その向こうに立っている魔導兵たちは微び動どうだにしない。壕の周辺を一定の速度で歩きまわっている魔導兵たちも、とくに足を止めるでもない。こちらに顔を向けることもない。

　さらに五メーテルほど前進すると、跳ね橋の前で横一列になっている十人以上の魔導兵が、それまでまっすぐ天に向けていた棹状武器ポール・アームを一いつ斉せいに斜ななめに傾かたむけた。見れば、壕ほりの周辺を歩いていた魔導兵たちも足を止めている。

　冷や汗あせをかいて引き返した。

　だいぶ離れてから振り向くと、魔導兵たちはもとの姿勢に戻っていた。

　安あん堵どしながらも、魔導兵たちの様子をちらちらうかがいつつシャイニンググローリーパレスを回りこんで、トワイライト・ドレッドスターズ・ストリートを西に進んだ。エルデン以外ではお目

にかかれないだろう、かなり不思議な外観の建物ばかりが建ち並んでいる第一区を出ると、そこはもう第五区だ。

第一王立銀行が近づいてくるごとに、人通りが多くなってゆく。

第五区には鉄鎖の憩い場や大食小路グラトン・アレイがあるだけでなく、無数の商店が乱立している。たぶん、エルデンの中でも一、二を争うくらい、大勢の人が集まる場所だろう。

それだけに、いろいろな人種がいる。ちょっと近くには寄りたくない、そばにいるだけで緊きん張ちようしてしまう。そんな物ぶつ騒そうな雰ふん囲い気きを漂ただよわせている人間も少なくない。何しろ、数えきれないほどたくさんいるので、いちいち避さけていられない。それに、恐おそろしげな大男も、あやしげな中年女も、若い女も、世捨て人のような老人も、子供も、一いつ緒しよくたになってひしめいている鉄鎖の憩い場の市場は、存外、平和なのだ。

おそらく、第一王立銀行が近くにあるので、魔導兵がたくさん配置されている、という事情もあるだろう。

魔導兵は人間の敵意、殺気を察知して、反応する。自分に手向かってきた者に対して、即そく座ざに攻こう撃げきを加えるという性質が、魔導兵にはあるのだという。だから、もしもこのあたりでいきなり何者かに殴なぐりかかられたら、すみやかに魔導兵を見つけてその後ろに隠かくれればいい。相手が思いとどまらなければ、魔導兵はそれを自分への害意と解かい釈しやくして、攻撃態勢に入るだろう。魔導兵は連れん携けいする。たちまちのうちに周りの魔導兵たちが集まってきて、無む謀ぼうな不届き者を排はい除じよしてしまうらしい。

でも、それだけだろうか。

皆みなが皆、ここではあまり乱暴狼ろう藉ぜきに及およぼうとしないのは、魔導兵を恐れているから、ただそれだけなのか。

エルデンはちぐはぐでばらばらな街だ。地区によって、地域によって、雰囲気がぜんぜん違う。第五区も独特だ。他ほかでは感じられない、どこか日向ひなたの匂においのする活気がある。そこかしこに暗い染しみがあっても、全体的には明るい色しき彩さいを帯びている。第五区、とりわけ鉄鎖の憩い場に集つどう人々は、そうした活気や色彩に自然と染められる。誰かが刃にん傷じよう沙ざ汰

たを起こしたら、きっと人々は眉まゆをひそめるだろう。ここでそんな真ま似ねをするなんて無ぶ粋すいだ、やるなら余よ所そでやってくれ、と。

　鈍色の甲冑に身を包んだ大勢の魔導兵たちが始終うろつきまわっていることから、いつしかそう呼ばれるようになったという鉄鎖の憩い場は、まさしくエルデン市民にとって憩いの場なのだろう。

　そうはいっても、鉄鎖の憩い場をちょっと離はなれて細い裏道に入りこんだ途と端たん、手ぐすね引いて待ちかまえていた暴漢に襲おそわれ、身ぐるみ剝はがれるかもしれない。悪ければ、ついでに命さえも奪われるかもしれない。それがおそらくエルデンという街なのだ。

　鉄鎖の憩い場の一角にある公園のベンチに腰こしを下ろしていた。

　空腹を我が慢まんしきれなくなり、銀行に行って全財産の八千三百ダラーを引きだした。近くの屋台で腸ちよう詰づめを挟はさんだパン二つと、甘い飲み物をあわせて八百ダラーで買って、ベンチに戻った。ちょっと高い買い物だったかもしれないが、おいしかったし、腹はら一いつ杯ぱいになったので、くよくよしないことにした。

　残りの七千五百ダラーで、どこまで行けるだろう。

　乗合馬車を探して、エルデンから出ることだって、できなくはないはずだ。なんなら歩いたっていい。この街はかなり物価が高いので、食料や旅の装備をそろえるのは大変だけれど、食べ物にしても、十日分くらいならたぶんなんとかなる。

　何もできないなんて、嘘うそだ。

　何だってできる。

　何かを成し遂とげられるかどうかを別にすれば、この心に従ってやってみるだけなら、本当に何だってできる。

　今だ。

　大事なことは、今、何をするか。

東門まで行った。

行っただけで、戻ってきた。

そして今、ぼくはここにいる。

気がついたら、ぼくはちゃんと何かをしていた。

ここにいるのがぼくなら、ぼくはここにきたんだ。

ぼくは今を積み重ねている。これからもそうなんだ。

ただもうどうしようもなく、ぼくの一いつ瞬しゅん一瞬は大事なんだ。

なんて簡単なことだろう。

それなのに、どうして気づくことができなかったんだろう。

立ちあがり、鉄鎖の憩い場から少し離れて、商店を見て歩いた。時間が早いので、大半の店は営業していないが、このあたりはどうやら雑貨屋や武具関係を扱あつかっている店が多いようだ。ある看板が目についた。凝こった字体で、カンダヴァストリート、と書かれていて、矢印で方向が示されている。吸いよせられるようにそちらへ向かった。すぐにわかった。あそこだ。きっと間違いない。あの通りがカンダヴァストリートだろう。

真っ黒い箱のような建物がある。石造りの荘そう厳ごんな寺院を小さくしたような建物がある。硝子ガラス張りのくねくね曲がった塔とうのような建物がある。壁かべの全面に極ごく彩さい色しきの絵が描かれた建物がある。古くさい煉れん瓦が造りなのに、なぜか妙みようにかっこいい建物がある。入口が一階になく、二階まで階段で上らないといけない建物がある。逆立ちしているようにしか見えない建物がある。

信じられないが、見たところ、どれも商店らしい。しかも、扱っているのは、おそらく服ふく飾しよく関係の品物だ。

建物を眺めているだけでも楽しいけれど、まだ九時なので、残念ながらどの店も閉まっている。人通りも、まばらどころか、皆かい無むに近い。

立ち止まって空を仰あおいだ。

深呼吸をして、また歩きだした。

後ろのほうだった。金属がこすれあう音がした。振ふり返ると、白と青と黄色で彩いろどられたこぢんまりとしたかわいらしい建物の前に、女の人が立っていた。女の人は、建物前面の下半分を占しめている金属製のシャッターを押しあげているところだった。

迷わずにとって返した。背せ恰かつ好こうから女の人だと思ったのだが、ちょっと変だ。どうやら女の人のような服装をして、女の人みたいに化け粧しようをしている男の人らしい。

「あの、すみません」

「はい？」

男の人は手を止めてこちらを見た。あからさまに怪け訝げんそうだ。

「ええと、その、このお店の方でしょうか」

「そうだけど、それが何か？」

「お、お願いが、ありまして」

「まだ営業時間じゃないのよ。これから準備をするところで」

ちょっと化粧が濃こすぎるような気もするが、女の人めいた物もの腰ごしや、女の人のような装よそおいに違い和わ感かんはさほどない。華きや奢しやだからだろうか。顔立ちもきれいだ。それに、たぶん、センスがいいのだろう。

「……そ、そうですよね。迷めい惑わくですよね。いきなり言われても、困りますよね。でも、そこをなんとか、お願いしたいんです」

「そう言われても、あなたがあたしに何をお願いしたいのか、それをまず聞かせてもらわないことには」

「あ、そ、そうでしたっ。まず、それですよね。ごめんなさいっ」

「変な子ねえ」

　男の人は顔をほころばせた。きっといい人に違ちがいない。自分に人を見る目がないことはわかっているけれど、今、この瞬しゅん間かんに感じたことは大切にして、信じよう。その結果、裏切られるかもしれない。傷つけられて、打ちのめされるかもしれない。それでもいい。竜りゅう殺ごろしリューみたいにタフにはなれないだろうし、あの人はちょっと、いや、たぶん、かなり異常だから、真ま似ねしようとしても無理だろうし、真似したくもない。でも、何度失敗してもあきらめずに、ひたすら立ち向かってゆく、あの姿勢はすごい。傍はた迷めい惑わくで、そうとうおかしな人だけれど、見習うべき部分はある。それに、裏切られることよりも、疑ぎ心しん暗あん鬼きに陥おちいって、自分自身も、他人も、何もかもが信じられなくなることのほうがずっと怖こわい。

　男の人はクレム・シューと名乗って、相談に乗ってくれた。それだけでなく、開店前の店に入れてくれて、いろいろな品物を見せてくれた。助言してくれるどころか自ら選んで、これがいい、間違いない、と太たい鼓こ判ばんを押してくれた。値札を見ると持ち金では足りなかったのにおまけしてくれて、そのうえ、有り金ぜんぶ渡そうとすると、千ダラー返してくれた。

「いいんですか」

「いいのよ。同じジャンルなわけだし、あなたの気持ちはよくわかるわ」

「同じ、ジャンル……？」

「与あたえられた性別と自分が認にん識しきしている性別とが一いっ致ちしない。そういうことって、一いっ般ぱんの人にはあまりわからないでしょうけど、けっこうあるのよね」

「いえ。ぼくはべつに、そういうのではないんですけど」

「あら、そうなの。じゃあ、単なる趣しゅ味み？」

「まあ……そう、ですね。そういうことになるんでしょうか」

「それならそれでいいわ。あなた、かわいいし。性別問わず、かわいい子は大好きよ。またきてね？　今度はできれば、営業時間内に」

　クレム・シューに何度も礼を言い、再会を約束して、店をあとにした。店の名前は、シュープ・クレスト。建物の場所も覚えた。クレム・シューは本当にくるとは思っていないかもしれないけれど、必ずまたここにこようと心に決めた。

　カンダヴァストリートを出て、目的地へと向かった。すっかり時間を食ってしまったので、急がないといけない。

　中通りを通って、シャイニンググローリーパレスと南門を一直線につないでいるマクスペイン・ストリートに出たら、あとはひたすら南下だ。環状通とマクスペイン・ストリートが交わる交差点の少し手前、道の東側だから、あのあたりか。

　どうやら、そうらしい。急に建物の列が途と切ぎれて、更さら地ちになっている。アンダーグラウンドの入口付近は、だいたいあんな感じだ。

　足が重くて、息苦しい。心臓もばくばくいっている。ここまで急ぎ足できたからだろうか。きっとそのせいだ。

　空は相変わらずどこまでも晴れている。風はだいぶあたたかくなってきた。

　一歩踏ふみだすにはいい日和ひよりだ。

　思いきって足を止め、春の空気を胸むねーいつ杯ぱいに吸いこみ、ゆっくりと吐はきだしてみた。

　胸の真ん中を叩たたくと、背筋がのびた。

「よし」

　うなずいて、ふたたび歩きだした。

　いったんは収まった動どう悸きが、目的地が近づいてくるごとに、また激しくなってきた。

　足がもつれそうになる。

　目め頭がしらが熱くなって、泣いてしまいそうだ。

　帰ろうかな。

　どこへ？

　帰る場所なんかない。あったとしても、ぼくは帰らない。

　たしかに今、帰りたいと思いはしたけれど、本当は帰りたがってなんかいないことを、ぼくは知っている。ただ、ぼくには勇気がない。それだけなんだ。

　更地の手前までくると、もう足の裏が地面を踏ふんでいないような、ひどくふわふわした感覚だった。目頭だけじゃなくて、顔中が熱くて、熱くて、視界も狭せまくて、なんだかゆがんでいて、この身体からだは自分のものじゃないかのようで、でも、進めと命じれば進むから、かろうじてそれで、ああ、これはぼくなんだとわかる始末で。やめようかな。いや、やめない。やめたくない。目をつぶった。何も見ないで歩いた。目を開けていると、かえって決心が鈍にぶりそうで。坂道。もう坂道だ。彼らはいるだろうか。この坂道の先で、待ってくれているだろうか。もう約束の時間をすぎているような気がする。時間に遅おくれるなんて、どうしようもないやつだ。やっぱり引き返したほうがいいかも。今ならまだ間に合う。間に合うのか。もう手て遅おくれかもしれない。だけど、このまま姿を消してしまったほうがいいのかもしれない。そうして、二度と会わないほうがいいのかもしれない。いやだ。そんなのはいやだ。二度とマリアローズさんの顔を見られないなんて、声が聞けないなんて、いやだ。男の人なのに。女の人じゃないのに。そんなの関係ない。知ったことじゃない。だって、ぼくは今、そう思っているんだから。これが嘘うそ偽いつわりのない、ぼくの気持ちなんだから。

　目を開けた。

　彼らは、いた。

　坂道の果てに、半円というよりも円の下三分の一をぶった切ったような形をしたアンダーグラウンドＤ３出入口の手前に立って、こちらを見ていた。

　唾つばをのみこもうとした。口の中がカラカラだった。うまく息を吸いこむことができず、しゃっくりみたいな音が出た。いつの間にか足が止まっている。歩かないと。そうだ。歩くんだ。歩け。足を前に出せ。出た。ちゃんと、ではないかもしれないけれど、なんとか歩くことができている。その調子だ。一歩一歩だ。少しずつで

いい。耳みみ許もとで心臓が高鳴っている。全身が血管になったみたいだ。それでもぼくは歩く。変な歩き方で、みっともないかもしれないけれど、歩いてゆく。もうちょっと。あと少しだ。

　長い、長い、旅だった。

「遅ち刻こくだよ、ルーシー」

　太陽がまぶしい。

　違ちがう。

　まぶしいのは、例の、やれやれ、みたいな雰ふん囲い気きも若じやつ干かんあり、しょうがないなあ、と思っているようでもある、年上風味の、お姉さん的な、ほんのり笑え顔がおだ。

　ルーシーは頭を下げた。これ以上は無理というくらい、深々と下げた。

「遅れてしまって、お待たせしてしまって、ごめんなさい！　本当に、ほんとに申し訳ないです！　ごめんなさいっ！」

「まあ、ええやんか。そんな謝らんでも。なあ？　三十分も一時間も遅れたんやったら、またべつやけども」

　カタリが、むほほ、と笑いながらルーシーの肩かたをバシバシ叩たたいた。ちょっと痛かったが、顔を上げると、カタリはほっとしているような、安あん堵どのあまり興奮しているような、そんな表情をしていた。いい人だ。顔はお魚みたいだけれど、この人は本当に、底そこ抜ぬけにいい人だ。

「でも、時間を守らないのはよくないです。すみません」

「しょうね」

　ユリカが腰こしに手をあててうなずいてみせた。

「どこかの誰だれかしゃんみたいに、道でしゅれ違ったかわいい女の子にふらふらちゅいていって、約やく束しよくの時間に二時間も遅れたりしゅるのは、人として間違っているとわたしも思うわ」

「ほっほー。誰やねん。そんなアホいてるんかい。おるんやった

ら、いっぺんそのツラぁ拝んでみたいわぁー」

「サしやフィニア、たしか、手鏡を持っていたわよね。貸してくれない？」

「……はい。ちょっと待ってください、ね……」

「ホンマにすまんかった。その節はみんなにえらい迷惑かけたわ。ほれっ、このとおり、わしも反省しとることやし、な？　こういう場でそないなこと持ちだされるとな？　誤解を与あたえるやろ？　枝葉の情報が原因で本質を見誤ってまうかもしれへんやん？　そういう危険性もまったくないとは言いきれへんわけやんか？」

「意外と枝葉の情報が本質をよく表してたりするんだよね」

「マァァーリアロォォォーゥズ。あんまりなあ、見くびったらあかんて、お前じぶん。わしは枝葉の情報でガッチリ把は握あくされてまうような平面的な人間やないで？」

「顔ワ平面的」

「誰がヒラメ顔じゃっ！　おお！　ピンプッ！　誰が、いつ、ヒラメ顔やっちゅうねん！　ゆうてみろや、ああん！」

「アナタが常時・平面的なヒラメ顔death」

「ゆうたな？　ゆいよったな？　とうとうゆうてもうたな？　上等じゃっ。ええわっ。そんなら、そういうことにしといたるわいっ。せやけどなっ。ゆうとくけども、ヒラメは高級魚やからなっ」

「でも……顔は……ちょっと怖い、ですよね……気持ち悪い、というか……あ、これは、あくまで……わたしの、個人的な意見ですが……」

「サフィニアァァァァァァァァッ……！　今のはなあ！　今のんは！　地味にクリチカルヒットやぞっ……！」

「だけど、ああいうおしゃかなしゃんって、見慣れるとかわいく思えてきたりしゅるわよ。気持ち悪くてかわいい、みたいな」

「ナァァーイスッ。ナァァーイスフォロー。グレイテストヒッツッ。さっすがユリカやっ」

「結局、気持ち悪いことには変わりないんだけどね」

「カタリはマリアローズの一いち撃げきでとどめをさされたッ。さいならぁー。わし、ものごっつ疲つかれてもうたから、ちぃーっとばかし眠ねむらせてもらうわぁー。ちぃーっとばかしっちゅうか、むしろ永遠にぃー。ばたっ」

　カタリが地べたに倒たおれこむと、それまで顎あごを撫なでながらぼんやりした顔で皆みなのやりとりを聞いていたトマトクンが、ふむ、と一つうなずいた。

「とりあえず、メンツもそろったことだし、行くか」

「だね」

「はイ」

「しょうしましょうか」

「……はい……」

　マリアローズ。ピンパーネル。ユリカ。サフィニア。そのあとにつづいて自分が返事をすることに、ためらいを覚えた。自分のような者が、さも仲間の一員みたいな顔をして、はい、なんて答えてもいいのだろうか。

　永遠の眠りについてしまったカタリをのぞく全員が、ルーシーを見ている。

　大事なことは、自分が今、どうするかだ。

「はい！」

　恐おそれや気き後おくれを振り払はらうために、できるだけ大きな声を出した。

　マリアローズだけでなく、ユリカやサフィニアまで笑顔になって、それはとてつもなく豪ごう華かな眺ながめで、くらくらして、失神しそうになった。やばい。この女性陣じん、いや、一人は女性じゃないけれど、もういい、そう言ってしまっても、たぶん違和感を覚える人はほとんどいないだろうから、女性陣ということにしてしまおう、その破は壊かい力は、すごすぎる。とっくにわかってい

たことではあるけれど、本当の本当の本当に半はん端ぱじゃない。正直に言っていいですか。言わないけど。言えないけど。でも、この女性陣がいるというだけでも、ここにしがみつく価値は十分あると思う。彼女たちと一いつ緒しよにいたい。それってどう考えても十分以上に説得力のある理由なんじゃないかと思わざるをえない。

　倒れてしまいそうで、倒れないようにがんばっていたら、トマトクンがぬっと大おお股またの一歩で近づいてきた。

　大きな、とても大きな手だった。

　頭を撫でられて、髪かみの毛をくしゃくしゃにされた。

　黄玉トパーズの瞳ひとみにルーシーが映っている。唇くちびるの片かた端はしがほんの少しだけつりあげられていた。

　なんて笑い方をするんだろう。

　たちまちのうちに胸がーいつ杯ぱいになった。

　ぜんぜん違うけれど、まるでお父さんみたいだ。

「行くぞ」

　トマトクンが外がい套とうをひるがえして歩きだすと、永遠の眠りについたはずのカタリがビョーンと気持ち悪い跳とび起き方をして、猛もうダッシュして、先頭に立った。

「よっしゃああああああああッ！　おらああああああああああッ！うららあああああああッ！　ほんならなあっ。行くで行くで行ってまうでいてこましたるでえっ。気合入れてなあっ。どっしゃあああぁぁぁぁらああああああああぁぁぁぁッ……！」

「うっさいなあ、もう……」

　マリアローズがカタリに追い抜ぬかれたトマトクンの後ろについて、それからサフィニア、ユリカ、ルーシー、最さい後こう尾びがピンパーネルという隊列だった。

　アンダーグラウンドＤ３の入口はすぐそこだ。もう目の前だ。

　緊きん張ちようしてきた。

「そういえば」

　マリアローズが足を止めて振り返ると、皆、一いつ斉せいに立ち止まった。

「さっきから気になってたんだけど」

「はい？」

　世にも鮮あざやかな橙だいだい色いろの目は、どうやらルーシーを見ているようだ。

「べつに、たいしたことじゃないっていえば、たいしたことじゃないんだけどさ」

「はい」

「きみ、なんでスカート穿はいてるの？」

「──むおおうっ」

　カタリが魚眼を剝むいた。

「ほほほほホンマやあああっ。たたたたしかにっ。違和感まるっきしゼロやからサパーリ気づけへんかったっ」

「あ。言われてみれば、しょうね。わたしも、いま気ぢゅいたわ」

「わたしは……最初から……でも、そこは……あまり、突つっこまないほうが……いいのかもと思い……」

　ユリカはきょとんとしていて、サフィニアは気まずそうだ。振り返ると、ピンパーネルは難解な暗号を解読している学者のような顔をしていた。そういう学者がいるのかどうか、ルーシーは知らないが、なんとなくそんな感じだった。

　前に向きなおると、トマトクンと目があった。

　トマトクンは片方の眉まゆをつりあげて、軽く肩かたをすくめてみせた。

「まあ、俺が言うことだからあてにならんかもしれんが、わりと似合ってるからいいんじゃないか」

「……や、そうなんだけどね。うん。似合ってるんだよね。実際、かなり。かわいいとは思うんだけど。いいとか悪いとか、そういう問題でもないし」

　マリアローズの口から、かわいい、という言葉が出た瞬しゅん間かん、思わずにやけてしまいそうになった。かわいい。クレム・シューもそう言ってくれたが、自信は持てなかった。でも、マリアローズが褒ほめてくれたのだ。それに、トマトクンも。これはもう、ちゃんとかわいく見えていると思ってもいいだろう。

「こ、これは、あの」

　たぶん、顔が真っ赤だ。唇が乾かわいている。それがどうした。ルーシーは胸の真ん中を叩たたいた。よし。ちゃんと言おう。正直に、はっきりと、自分の思いを伝えるんだ。

「好きなんです。ぼくは。スカートが。今日は、好きな恰かつ好こうをしたかったんです。そうすれば、ここにくる勇気も出るんじゃないかと思って」

「……そ、そういえば、お前じぶん、ゆうとったな。おかんがスカート作ってくれよって、おとんもかわいいゆうてくれたったから、よう穿いとったって」

「ええ。そうなんです。なんか、男がスカートを穿くのって、あまり普ふ通つうじゃないみたいなんですけど。ぼくのお父さんとお母さんは、他の人のことは関係なくて、自分たちがいいと思えばいい、かっこよければ、かわいければいい、みたいな考えだったので」

「でも、エルデンこの街では、しょうゆう人、けっこう多いわよね」

「……そう……ですね。女性の服を着ている男性も……それなりに、いたりして……」

「ま、そういう意味で言ったら、わりとエルデン向きだったりするのかな？」

「ぼくが、エルデン向き……？」

「かもしれないよってこと。慣れっていうのも大きいし、何がどう

転ぶかわからないし、向いてるとか向いてないとか、そんなに考えなくてもいいと僕は思うけどね」

　エルデン向き。マリアローズは何げなく言っただけなのかもしれない。でも、ルーシーにとっては大きな一言だった。どんなことでもいいのだ。些さ細さいなことでいい。信じて、すがりたい。ぼくにはまだ、何もないから。何一つ、この手で握にぎることができていないから。ぼくは前に進みたい。気持ちは前に向いている。ぼくは顔を上げて、前を向こうとしている。だけれど、進むためには力が必要だ。いろいろなものをちょっとずつかき集めて、それを力に変えて、この重くて鈍い身体からだを前へ前へと進ませないといけないんだ。

「煌」

　暗いアンダーグラウンドの中へ足を踏み入れると、サフィニアが小声で何か唱えた。闇やみを切り裂さいたのは、サフィニアの杖つえの先せん端たん部に宿った白い光だ。そう。サフィニアは魔ま術じゆつ士しなのだ。でも、魔術がどういうものなのか、少なくとも本物の魔術のことは、ルーシーはよく知らない。これから知る機会があるのだろうか。あるといい。

「歩きながら、このＤ３〝渾沌峡間ケイオスハーロウ〟について簡単に説明しておくよ」

　マリアローズの声は天てん井じようや壁かべ、床ゆかに反はん響きようした。

「見てのとおり、ここは侵入者クラツカーの間でも人気がないスポットでさ。そういう場所はいくつかあって、もちろん、それぞれちゃんと理由があるんだ。ここは、端たん的てきに言うと、割りにあわない。苦労に見あうだけ儲もうかればいいんだけど、そうじゃないってこと。構造もめちゃくちゃ複雑だし、どうも刻一刻と変化してるっぽいし、他ほかではお目にかかれないような、名前もついてない異界生物フリークスがたくさんいる。次から次へと新種が発見されて、しかもそいつらがまた、やたらと手て強ごわいんだ。そのわりに、お金になるような物がほとんど手に入らない」

　ルーシーたちは下りの坂道を歩いている。がんがん掘ほり進めて、壁や天井の崩くずれそうな部分だけ木材で補強しました、といった様子のトンネルだ。木材はそうとう古いようで、大部分が腐

ふ敗はいしている。

「それでも今まで大勢が探たん索さくに挑ちよう戦せんしたんだけど、奥へ奥へと進もうとした者はたいてい生せい還かんしなかった。難度だけバカみたいに高くて、えるものは少ない。今、この時代に渾沌峡間ケイオスハーロウなんかにくるのは、よほどの物好きだけだろうね。ていうことになってる。表向きは」

「せや。大半の侵入者クラツカーはな。こんなとこ、見向きもせえへん。今んとこ、ここに注目しとるのんは、ごく一部の上級侵入者クラツカーだけや。知る人ぞ知る、最近注目の激げき熱あつスポットっちゅうわけやな！　鉄の心臓アイアンハーツ協会ソサエテイ、ザ・フラクタル、翠玉のエメラルド血盟・クラン、神聖帝国ホーリーエンパイア同好会・クラブ、ＲＫＢ、等々、そうそうたるクランと競きそいあう形で、このＤ３渾沌峡間ケイオスハーロウの探索を進めようとしとるのんが、何を隠かくそうわしらＺＯＯなんやで！」

「しょもしょも、しょうやって一ひと握にぎりの人たちがこっしょり探検を進しゆしゆめて、少しゆこしじゅちゅ実態が明らかになっていって、情報がだんだん広く共有しゃれるようになっていって──しょれがアンダーグラウンド探たん索しやくの歴史、だったわよね？　わたしはよく知らないけど」

「そのとーりやっ」

「……魔術の発展にも……似たような側面が、ありますね……」

「医い術じゆちゆ式しきも、もともとは魔ま術じゆちゆから派は生しえいしたものだから、しょのあたりは同じだわ」

「あの」

　話の腰こしを折ってしまいそうで怖こわかったが、しばらく前から疑問に思っていたことがあったので、思いきって訊きいてみた。

「その、医術式というのは、何なんでしょうか。魔術はなんとなくわかるんですけど」

　みんなに驚おどろかれてしまった。たぶん、そうなのだろうと思っていたが、やはり一いつ般ぱん常識らしい。なんとなくそういう雰ふん囲い気きだったので、今まで尋たずねられずにいたのだ。

でも、教えてもらっておいてよかった。医術式は、ようするに魔術のような超ちよう絶ぜつパワーで人間の傷を治してしまうというすごい技術で、それを身につけている者は医術士と呼ばれる。ユリカはその医術士なのだという。だから、怪け我がをしたときは、ユリカに治ち療りようしてもらえばいいのだ。なんて便利なのだろう。そんなものすごい技術を、こんなに小さな女の子が、と思い、尊敬の眼まな差ざしで見つめていたら、不意にユリカが、あ、しょうしょう、と手を叩たたいた。

「言ってなかったわね。わたし、こう見えて二十四歳しやいで、もうしゅぐ二十五歳しやいになるの」

「あ、そうなんですか」

「どういうことかというと、誤解しないでほしくて。医い術じゆちゆ式しきは一朝一いつ夕しえきで習得できるようなものじゃないの。わたしも、小しゃいころから一生懸けん命めい修しゆ行ぎようしていたし。精しえい一いつ杯ぱいがんばって力をちゅくしても、医い術じゆちゆ式しき自体、限界がある技ぎ術じゆちゆだから、しょのへんは気をちゅけてね」

「あ、はい」

　そうか。小さいころから。今も小さいのに。大変だ。きっとものすごく苦労したのだろう。そうか。二十四歳。もうすぐ二十五歳。誕生日が近いということだろう。いつなのだろうか。二十四歳。二十……四？　え？　え？　え？　え？　え……？

「えええええええええええええええええええええええええええええええええええええええ」

　眼球が飛びだしてしまった可能性がある。ルーシーは目のあたりを探さぐってみた。大だい丈じよう夫ぶだった。カタリみたいに目玉を飛びださせたり引っこめたりはできない身体からだだということに、少しだけ安あん堵どした。でも、待て。二十四歳。こんなに愛らしい二十四歳。せいぜい十二歳くらいにしか見えないのに、二十四歳。絶世の美少女にして、二十四歳のおねえさん。冗じよう談だん？　何かの間違い？　騙だまそうとしている？　そんなことはないだろう。考えてみれば、年ねん齢れいのわりに、ずいぶんしっかり者だという印象を抱いだいていた。このＺＯＯというクランにおける最年少者だとはまったく思えなかった。当然だ。そうではな

かったのだ。もちろん、びっくりした。衝しよう撃げきの事実としか言いようがない。でも、落ちついて。冷静に考えてみよう。ユリカさんが二十四歳。こんなにすばらしく可か憐れんなおねえさん。何か問題でも？

　ない。これっぽっちもない。だって、すっごくかわいいし。あー、ごめんなしゃい、いきなりだと、しょれは驚くわよね、みたいな、すまなそうな、ちょっとこう、恥はずかしそうな、あの表情。ぼくは謝りたい。全力で謝罪したい。いや、そんなことはないです。そういうことはぜんぜんありません。ぼくは力説したい。ぜんぜんいいです。あり、です。全肯こう定ていです。

「お、お、お姉様、と呼ばせてください……！」

「は……？」

　まずい。しくじったか。ユリカさんを仰ぎよう天てんさせてしまってどうする。みんなぽかんとしているし。

「しょ、しょれはちょっと……」

「で、で、ですよね。い、いきなり、困りますよね。きょうだいでもないのに」

「しょ、しょういう問題でもないと思うけど。わたしのほうが年上だから、まあ、しょういう意味では」

「……年上といえば……わたしも、一応……年上だと思うのですが……」

「そ、そうですよね！　じゃあ、サフィニアさんのことも、お姉様、と呼んだり━とか……ち、違ちがいますか？　ぼく、なんか、間違ってない……です？」

「……お姉様……」

　サフィニアはどこか遠くを見ている。こころなしか嬉うれしそうだ。

「わたしが……お姉様……」



　もしかして、ゴーサイン？　どうも周りの空気が微び妙みようのような気もするけれど、本人が喜んでいる様子なのだ。こういうことは、やはり本人の気持ちが一番大切だろう。

「じゃ、じゃあ、わたしは、しょの、ほら、おねえしゃまが二人もいたら、どっちがどっちかわからないし」

「それもそうですね！　だったら、ユリカさんのことは、ユリカ姉様で！　これなら、区別はつきますよね！」

「しょう……ね。でも、あの……べ、べちゅに、いいけど……」

「いいんですか⁉」

「え、あ、ええと、しょれは、しょの」

「いいんですね⁉　ユリカ姉様！」

「しょう……ね」

「Ｙｅａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　ルーシーは両手をあげて叫さけんでしまった。なんでこんなに浮うかれているのか。おそらく、こうしたいと強く思って、そのとおりにできたからだ。怖おじ気けづかずに、踏ふみだすことができた。ぼくにはできるんだ。

「お姉様！」

　ルーシーはサフィニアに呼びかけた。サフィニアは照れくさそうに顔を赤らめて、はい、と返事をしてくれた。

「ユリカ姉様！」

「……はい」

　まるでサフィニアみたいなかぼそい声だったけれど、ユリカもちゃんと答えてくれた。

「ええと……トマトクンさん！」

「長いな」

　トマトクンは片方の眉を大おお仰ぎようにつりあげて、頬ほおをゴシゴシこすった。

「さん、はいらんだろう」

「じゃあ、トマトクン！」

「それでいいんじゃないか」

「カタリさん！」

「お兄様、と呼んでくれたってもええんやで？」

「それはいやです！」

「なんでやねん！」

「なんとなく！　──ピンパーネルさん！」

「はイ」

「……は、ちょっとだけ長いので、ピンパーさん？」

　ピンパーネルは悲しそうな顔をした。やめたほうがよさそうだ。

「だったら……ピンプさん？」

「はイ」

　どうやら納なつ得とくしてもらえたようだ。

　ルーシーは最後にマリアローズを見た。

　一度、深呼吸をした。

「マリアさん」

「うん」

　やっぱりこの人は特別だ。別格だ。格別だ。アジアン。あの黒衣の男はそうとうな変人だと思うが、気持ちはわからなくもない。むしろ、わからないと思う人はちょっとおかしい。

　みんながまた進みはじめた。ルーシーも歩いた。立ち止まらずに、一いつ瞬しゆんだけ目をつぶってみた。焼きついている。マリアローズの顔が。姿が。瞼まぶたの裏にしっかりと焼きつけられていて、いつでも思いだすことができる。

　胸が苦しいよ。

　心臓が痛い。

　何かが心臓をわしづかみにして、無理やり三分の一くらいの大きさまでちぢめようとしている。ひどく息苦しいのに、不快じゃない。

　下り勾こう配ばいのトンネルはつづく。

　最初は右へ、それから左へ、トンネルは大きくうねった。

　その先だった。

　柵さくか。それとも、塀へいというべきか。鉄？　木？　岩？　いろいろなものが組みあわせられ、積みあげられた障しよう壁へきがある。トンネルの地面から天てん井じようまでは、たぶん三メーテルと四メーテルの間くらいだ。その三分の二近くまで達している障壁の高さは、二メーテルあまりということになる。下り坂なので、上から見下ろす恰かつ好こうになるとはいえ、ルーシーの背せ丈たけは百五十四、五サンチしかない。当然、障壁の向こうは見えないし、乗り越こえるのもなかなか骨だろう。

　一行は障壁の手前でいったん止まった。

「この先はちょっとだけハードだから。覚かく悟ごしといてね」

　マリアローズはニヤリと笑ってみせたが、一つ息をついてすぐに表情を引き締しめた。

「前回は僕らもよくなかったんだ。てゆうか、役割的に言えば僕がよくなかった。ＺＯＯうちのやり方に慣れすぎてたっていうのが一番の原因だと思う。言わなくてもわかるっていうのがね。どうしてもあって。配はい慮りよが足りなかったよ」

「つうかあ、わしらはもうツーカーやからな！　なんちて！　ナハハハハ——」

　全員のつめたい視線が氷の矢となってカタリの半魚顔にズバズバ突つき刺さささった。カタリは小声で、すんまへん、ホンマえらいすんまへん、と謝りながらみるみるうちに縮小してゆき、五分の一くらいの大きさになった。

「とにかく、同じ轍てつは踏ふみたくないんで、まず一通り僕らの

ふだんの隊形とそれぞれの役目を説明するから。覚えられなくてもいいよ。ただ、聞いといて」

「はい」

　ルーシーが勢いこんでうなずくと、マリアローズは少しだけ笑ってくれた。それはやめてほしいです。にやけてしまいそうになるので。

　クラン・ＺＯＯ。

　園長マスターのトマトクンはクランの大黒柱であり、戦せん闘とうでは先せん陣じんを切って敵を蹴け散ちらす突とつ撃げき隊長となる。トマトクンの決断は常に最優先されるが、ふだん指揮をとるのはマリアローズだ。

　マリアローズは全体の状じよう況きようを把は握あくすることに努め、適てき宜ぎ、皆みなに指示を与あたえる。さらには、何か足りない部分があって、他ほかに人員がいないとき、また、マリアローズが自分こそ適任だと判断したときは、その穴あな埋うめを行う。本人曰いわく、マリアローズはＺＯＯの中で個人的な戦闘能力がもっとも低いらしいので、主に頭脳労働で貢こう献けんしようとしているとのことだ。

　カタリはトマトクンと肩かたを並べて最前線に出ることが多い。一見してわかるとおり、楽天的で快活なので、ムードメーカーの役割を果たしている。マリアローズの評価では、ややムラがあるとのことだが、気分が乗ったときは実力以上の力を発揮するらしく、おだてて使うのがコツだという。まだ五分の一くらいにちぢんだままのカタリも、否定はしなかった。

　医術士のユリカは、なんと鵺ヌエ流古式戦闘術という武術の達人でもあるそうで、魔術士のサフィニアをがっちり警護する。状況次し第だいでは、マリアローズがこの仕事を引き受けて、ユリカが前に出ることもあるようだ。とてもそうは見えないが、ユリカは最強伝説の持ち主で、ＺＯＯの切り札なのだとマリアローズが冗談めかして話すと、本人は照れて否定していたけれど、ピンパーネルはなぜかこころもち顔を青ざめさせていた。

　マリアローズが言うには、サフィニアはエルデンで五指に入る魔術士なのだという。サフィニア自身は、そんなことはありません、

わたしなんてまだまだです、と懸けん命めいに首を横に振ふっていたが、その様子がなんとも微笑ほほえましかった。ともかく、さまざまな魔術を駆く使しして、全体の補ほ佐さから、敵の撃破まで、何でもこなしてしまう。ある意味、サフィニアに適切な魔術を最適なタイミングで使わせることこそが、戦術面での要点なのだとマリアローズは語った。

　ピンパーネルは戦闘のエキスパートだ。戦うことにかけて、ピンパーネルの右に出る者はいない。人間離ばなれした身体能力や経験、鋭えい敏びんな知覚をいかして、偵てい察さつ、突撃、攪かく乱らん、追撃まで、できないことは一つもないのだという。アンダーグラウンドの中を進む際は、隊列の最さい後こう尾びにつくことが多い。後ろを警けい戒かいしつつ、前方、左右にも広く気を配るなどという芸当は、ピンパーネルにしかできないからだ。また、その並外れた俊しゅん足そくと瞬しゅん発ぱつ力があれば、いざというとき、あっという間に前へ出ることもできる。

「この間は、とりあえず僕らのやり方を見てもらって、それから、みたいなつもりだったんだよね。でも、これがよくなかったんだ」

　マリアローズは眉まゆをひそめて唇くちびるをひん曲げた。

「見て覚えるっていうのも、間違った方法じゃないと思うよ。けど、何もしなくていい、ただ見てろとか言われるのも、けっこうきついもんだよね。なんか、無力感に襲おそわれたりさ。なんで自分はここにいるのか、みたいなことを考えちゃったり」

　そう！　そうだったんです！

　思わず叫びたくなったが、我が慢まんした。ぜんぶお見通しだったんだ。なんだか恥はずかしい。同時に嬉しくもある。マリアさんは、ぼくの気持ちをちゃんとわかってくれていたんだ。

「というわけで、今回はきみにも戦ってもらうから」

「はい！　わかりましたっ！　……て、え？」

「戦ってもらうよ。前に出てもらう」

「で、でも」

「精一杯やって、自分に何ができるか、どこまでできるか、試ため

してみて。僕らもきみを見きわめないといけないし。実戦では臨機応変に対応することになるけど、基本形としては、きみを真ん中に置いて、右にトマト、左にピンパーネル、それで、カタリにバックアップしてもらう。ごまかしても意味がないから、はっきり言っておくよ。この配置シフトは、とくにトマトとピンパーネルにはすっごく負担がかかることになるはずなんで、二人にはかなりがんばってもらわないといけない」

「うむ」

「はイ」

「ちょ、ちょっと、待ってください」

「なに？」

「お二人に負担をかけてしまうとか、そういうふうになるのは、ぼく、あまり……」

「しょうがないよ。僕らとは経験が違ちがいすぎるんだもん。足手まといになって当然」

「う……」

「それに、トマトとピンパーネルなら大だい丈じよう夫ぶ。何があってもきみをカバーしてくれるよ。全面的に信しん頼らいしていいから。ま、この二人にできないことは、たいていの人には無理だしね。そのときはそのとき。ダメだったらあきらめてよ」

「そ、そんな」

「情けない声、出さない！」

　平手でほっぺたを引っぱたかれたかのように錯さつ覚かくした。それくらい厳しく、清せい冽れつな、凜りんとした声だった。

「ルーシー・アッシュカバード！　腹をくくれ！　きみはちゃんと自分の足で待ち合わせの場所まできたじゃないか！　やる気があるなら、覚悟を決めろ！」

　刺し通すような、射い貫ぬくような、どこまでもまっすぐな眼まな差ざしだった。

　その橙だいだい色いろの瞳ひとみは宝石だ。稀け有うな宝玉だ。その宝ほう珠じゅに意思の輝かがやきが宿ると、稀まれにも見ない至宝となる。その目に自分の姿が映っているのだ。少なくとも今、この瞬しゅん間かんは、自分だけが。これ以上の幸福があるだろうか。

　こんなにも特別な人が、ここに、目の前にいることが、この人が平気な顔をしてエルデンを歩いていることが、道行く者たちがこの人を見ることが、大勢の目にふれていることが、信じられない。本来、そんなふうに軽々しく人前にさらされるべきではないと思う。そんなことは許されるべきではない。というか、誰だれにも見せたくない。もったいない。

　そんな人が、今、ぼくだけを見ている。あえて厳しい言葉で叱しつ咤た激げき励れいしてくれているんだ。これは鞭むちだ。鞭は鞭でも、マリアさんは皿洗い場の監かん督とくとは違うから、本物の、愛の鞭なんだ。愛。愛？　愛……!?　愛なんて、そんな。いや、でも、そうだといいな、なんて。勝手にそう思うだけなら、自由なんだし。ここは自由の国なんだし。

　胸の真ん中を拳こぶしで思いっきり叩たたいてみた。

　膝ひざが笑っている。喉のどはからからだ。きっと顔が真っ赤になっているだろう。

　でも、大丈夫だ。

　ルーシーはできるだけ力強く返事をした。

「はい……！」

　マリアローズは、例の、やれやれ、みたいな雰ふん囲い気きも若じゃっ干かんあり、しょうが（中略）的な、ほんのり笑え顔がおでルーシーの脳のう髄ずいを木っ端ぱ微み塵じんに破は壊かいしてから、トマトクンの背中を軽く叩いた。そうした何げない仕し種ぐさの一つ一つに、気安さが感じられる。正直、うらやましい。自分もあんなふうに信用され、信しん頼らいされるようになりたい。なれるだろうか。

「準備はよさそうだな」

　トマトクンは皆みなを見まわして、納なっ得とくしたようにうな

ずくと、障しよう壁へきの縁へりに手をかけて腕わん力りよくだけで身体からだを引っぱりあげた。障壁の上まで、あっという間だった。つづいたピンパーネルも、朝飯前どころかまばたきするのと同じくらい簡単に登ってしまった。次は、ルーシーの番だ。さて、どうすればいいか。ちょっと考えこんだら、ピンパーネルが上から手をさしだしてきた。こんなところで恰かつ好こうをつけてもしょうがない。ルーシーは素す直なおにピンパーネルの手を借りることにした。それから、カタリ、マリアローズ、ユリカ、サフィニアが相次いで登ると、天てん井じようまでの高さは一・五メーテルもないので、しゃがまないと頭がつっかえてしまうし、やたらと狭せま苦くるしくなった。ただ、障壁は思っていたよりも厚みがある。これだと、四メーテル、いや、五メーテルほどもあるだろうか。

　障壁の向こうには、トンネルというよりも洞どう窟くつみたいな景色が広がっている。けっこう広々としているようだ。真っ暗ではなく、薄うす明あかるい。かすかな緑色の光に彩いろどられているのだが、その源は何なのだろう。よく見ると、壁かべや天井に穴か窪くぼみのようなものがある。そこから光がもれているのか。そう思えなくもないが、定さだかではない。

　耳を澄すませば、音が聞こえる。

　シャーッとか、ハーッとか、ギュヒーッとか。あれは異界生物フリークスの声だろうか。Ｄ１にちょっとだけ似ている。それから、ギチギチ、ガシガシ、と、何かが軋きしむような、削けずられるような、ひどく不快な、肌はだが粟あわ立だつ音。これはいったい何なのか。

　マリアローズがため息をついた。

「このバリケードも、そのうち破られちゃうかもね」

「どうやろなあ。あいつらがこのへんで殖ふえだしたのんも、わりと最近のことみたいやしな。ちゅうても、けっこう持ちこたえとるし、まだ大丈夫やろ」

「さて」

　トマトクンが窮きゆう屈くつそうに背中から大たい剣けんを抜ぬくと、空気が張りつめた。ピンパーネルはいつの間にか両手に一本ずつ短剣を持っている。ルーシーもモトロール刀の柄つかに手をか

けた。指が震ふるえている。唇を舐なめたら、不意にアドリアンの声が蘇よみがえった。人の生き死になんざたいしたことじゃねぇ。くたばったって、失うのはせいぜいてめぇの命だけだ。だから、びびるな。ぼくは、でも、死にたくない。死にたくはないけど、怖じ気づいてばかりの自分は大だい嫌きらいだ。だから、びびるな。そうだ、ルーシー・アッシュカバード。びびるんじゃない。

「まずは掃除だな」

　トマトクンはほとんど這はうように前進して、障壁の向こう側に飛び降りた。

「──むうん……！」

　裂れつ帛ぱくの気合につづいて、何かを叩き潰つぶすような音がした。ピンパーネルの姿も消えた。ルーシーはもう障壁の縁にいる。見下ろしてみた。何、あれ。何なんですか、いったい。

　障壁だ。何かが障壁にたかっている。しかも、たくさんいる。虫？　虫だ。虫みたいに見える。ぼんやりと緑色に輝く甲こう虫ちゆうといった姿だ。でも、でかい。一メーテル以上ある。それに、虫にしては変だ。やっぱり違う。甲こう羅らみたいな部分以外は、なんていうか、こう、ねちょねちょしていそうで、うねうねしている。あれは手足、なのだろうか。何本もある。それらを障壁にのばし、先せん端たんの硬かたそうな部分でもって、やつらは少しずつ嚙かみちぎっているようだ。障壁を食べている。あの、ギチギチ、ガシガシ、という感じの音。あれは、やつらが障壁を喰くらっている音だったのだ。

　トマトクンとピンパーネルは、やつらを斬きって斬って斬りまくっていた。障壁をうまそうに、かどうかは判断が難しいところだが、とにかく食べていた巨きよ大だい甲虫モドキは、次々と食事を中断して二人に襲いかかろうとしている。気持ちの悪い足を駆使して飛びかかったり突とつ進しんしたりしては、トマトクンの大剣にぶった斬られ、ピンパーネルに蹴けり飛ばされて、その短剣によって解体されている。マリアローズに背中を押された。

「ほら！　行って！」

　びびるな。びびるな。びびるな。ルーシーはそう念じながら障壁から飛び降りた。着地の衝しよう撃げきで足が痺しびれたが、平気

だ。トマトクンとピンパーネルは十メーテルくらい障壁から離はなれていて、巨大甲虫モドキたちは二人に群がっている。このへんには死し骸がいしかない。死骸。うわ。ねちょねちょしてる。駆かけだそうとしたら、足が滑すべった。転んでたまるか。なんとか持ちこたえた。ルーシーはトマトクンとピンパーネルめがけて走った。でも、前には巨大甲虫モドキがいる。いっぱいいる。やつらを突破しないと、トマトクンとピンパーネルのところには行けない。どうしよう。というか、ぼく、何をすればいいんだっけ。何をしてるんだっけ。

「――む！　ピンプ！」

「はイッ」

　行く手で背中合わせになっていたトマトクンとピンパーネルがパッと離れると、巨大甲虫モドキたちも二人の動きにあわせて移動した。トマトクンは右へ。ピンパーネルは左へ。真ん中に隙すき間まができた。そうか。あそこだ。ぼくはあそこに行くんだ。

　ルーシーは足を速めた。すぐだった。ここだ。トマトクンとピンパーネルを結ぶ直線のだいたい中間あたり。ルーシーは鞘さやからモトロール刀を抜いた。それから、どうすれば。頭の中が真っ白だ。とか言っている場合じゃない。トマトクンも、ピンパーネルも、巨大甲虫モドキたちと戦っている。ぼくだって戦わないと。戦う。それだ。ルーシーはモトロール刀の柄を両手でガッチリ握にぎりしめ、腹の底から声を出した。

「しゃああぁぁぁうらああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　さあ、こい。かかってこい。こいよ。こいってば。どうした。さあ、さあ、さあ。こいって言ってるのに、なんで？

　無視だ。巨大甲虫モドキたちは、ルーシーには見向きもしない。虫だけに、無視、という言葉が脳のう裏りをかすめた。すぐに打ち消した。いけない。こんなくだらないダジャレを思いつくようになったらお終しまいだ。カタリさんみたいになっちゃったらどうするんだ。

「だあああああぁぁぁぁぁぁぁりゃああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ……！」

　ルーシーはもう一度声を出した。モトロール刀を構えて、前を見た。後ろを見た。左右を見た。むなしかった。

　どうやら巨大甲虫モドキたちの目には、トマトクンとピンパーネルしか入っていないようだ。目があるのかどうか知らないが、しかし、やたらといっぱいいる。障しよう壁へきを食べていたやつらでぜんぶではなかったのだ。天てん井じようや壁の窪くぼみだ。そこから新手の巨大甲虫モドキが続々と這はいだしてきたり、ぼたっと落ちてきたりして、トマトクンかピンパーネルに群がってゆく。

　ようするに、緑色の光の源は巨大甲虫モドキだったわけだ。甲羅より、ぐちょぐちょうねうねしている手というか足というか、そういった部位のほうがよく光っている。血液なのだろうか。切断面などからぶちまけられている液体も、ぼんやりとした光を放っている。

　見慣れてくると、それほど気持ち悪くない。臭においも、ちょっと鼻につんとくるが、さほど強きよう烈れつではないので、耐たえられる範はん囲いだ。意外と余よ裕ゆうだ。ぼくは何もしてないけど。

「ルーシー！　上……！」

「え？」

　声。マリアローズの声だ。どこから？　そういえば、トマトクンとピンパーネル以外はどこに？　というか、上？　上って何？　何じゃない。上といったら上だ。ルーシーは頭上に目をやった。落ちてくるところだった。巨大甲虫モドキだ。ルーシーのちょうど真上に窪みだか穴だかがあったのだ。

「ふ、わ……！」

　ルーシーは慌あわてて飛びのいた。巨大甲虫モドキはルーシーが一瞬前までいた場所にべちゃっと着地するなり、うねうねした足だか手だかで地面を叩いて跳とびあがった。向かってくる。ルーシーはさらに後退しながら、無我夢中でモトロール刀を振りまわした。むちゃ、ぐちょ、という感じの手て応ごたえがあった。足だか手だかを何本かぶった斬られた巨大甲虫モドキは、ルーシーの手前に、ぶちょっ、と落ちて、だが、またびょーんと飛びかかってきた。

「━ひっ……！」

　近い。刀ではダメだ。長すぎる。そんなことをちらりとでも考えたのかどうか。わからないが、ルーシーは気がつくと前蹴りを繰くりだしていた。巨大甲こう虫ちゆうモドキはぶっ飛んで、ひっくり返った。血の気が引いた。危なかった。

「ＯＫ！　前衛組！　こっちへ……！」

　安あん堵どしている暇ひまもなく、またマリアローズの声だ。後ろ？　そう、後ろだ。障壁とは逆方向だ。振り返ると、ずっと先にマリアローズとカタリ、サフィニア、ユリカが集合していた。彼らがいるあたりは、このへんよりもだいぶすぼまっているようだ。というか、その先がすぼまっているのか。

「よし、ルーシー！　こい！」

　トマトクンがそう叫さけぶなりマリアローズたちのほうへと走りだした。巨大甲虫モドキは、突とつ然ぜん、標的を見失って戸と惑まどっているようだ。仲間同士でぶつかりあったり、揉もみあったりしているやつもいる。わけがわからないが、ぼやぼやしているのは一番まずい。おそらく。

　ルーシーはトマトクンのあとを追った。何も考えずに走った。むしろ、何も考えられなかった。マリアローズたちのところにたどりついて振り向くと、ピンパーネルも追いついていた。でも、巨大甲虫モドキの大群が。大きいやつも、かなり小さいやつもいる。すごい数だ。押しよせてくる。何だよ、あれ。トマトクンやピンパーネルがあんなにやっつけたのに、ぜんぜん減っていない。呆ぼう然ぜんとしていたら、襟えり首くびをつかまれて引っぱられた。

「下がって……！」

「うぐぅがふぁい」

　はい、と返事をしたつもりなのだが、変な声になってしまった。ルーシーは半ばマリアローズに引きずられて、さらに奥のほうへと移動した。全員だった。トマトクンも、ピンパーネルも、ユリカも、カタリも。いや、違ちがう。サフィニアだけは残っていた。

「太崑閻貘羅宝眩苦ＲｅｕＬａｕＭａｕＬａｕ詩湛Ｌｅｕ」

　ルーシーは目を瞠みはった。銀糸のごとき髪かみが強風にあおられたかのようになびいた。寒気がした。何だろう。この力。感じる。すさまじい流れだ。

「歓楽Ｄｕｅｄ一切訣贋晧潔斎ＭｏｕＲｅｕＬａｕｄ韻吟至極氷監獄」

　驚おどろいたなんてものじゃない。魂たま消げて、震えあがった。寒いからだ。ものすごく寒い。真冬並みだ。景色も真冬だった。巨きよ大だい甲虫モドキたちはあっという間に凍こおりついた。地面にも霜しもが降りた。空気も凍った。たぶん、あのキラキラしている無数の粒つぶは空気中の水分なのだろう。壮そう観かんだった。感動した。恐おそろしくもあった。これが、魔ま術じゅつ。魔術はすべて、こんなにすごいものなのか。それとも、エルデンで五指に入る魔術士だからこそ、こんなとてつもないことができてしまうのか。ルーシーは睫まつ毛げにふれた。霜がついていた。息が白い。みんな同じだ。

「さ、今のうちだよ！」

　マリアローズの声は耳に入ったが、即そく座ざには動けなかった。

「ルーシー！」

「……は、はい！」

　しっかりしろ。ぼんやりするな。あたりを見まわすと、トマトクンとピンパーネル、それからカタリはすでに出発していた。残りの三人はルーシーを待っているのだ。ルーシーは全速力で走り、カタリに追いついた。

「こ、これから、どこに……!?」

「奥や！」

「それはわかるんですけど！　ていうか、今のはいったい……!?」

「あれはな！　光タコ虫、とか呼ばれとるけども、ちゅうかわしが勝手に呼んどるだけなんやけど、Ｄ３に入ったらまずどうにかせなあかん、最初の関門なんや！　方法はいろいろあるけどな！　まあ、わしらにはサフィニアがおるさかい、楽っちゅうたら楽や！

一匹ぴき一匹はさして怖こわないし、うざいだけやしな！　ある程度離はなれたら追ってこおへんし！」

　後ろにいるサフィニアの杖つえの先せん端たんに宿る光がなければ、このあたりは真っ暗だ。高さも幅はばもせいぜい三メーテルくらいだろうか。光タコ虫とやらが巣くっていた場所と比べたらだいぶ狭せまく、かなり曲がりくねっている。

　やがてトマトクンとピンパーネル、カタリが足をゆるめた。

　ついには立ち止まった。

　ルーシーも足を止めた。カタリが言っていたとおり、光タコ虫は追いかけてきていないようだ。ほっとしたが、思わずしゃがみこんでしまったのは、そのせいではない。

「……くっそぉ……」

　まただ。また何もできなかった。何だよ、しゃあらあああって。だあありゃあああって。かっこわるい。いくらなんでも、かっこわるすぎる。赤っ恥ぱじだ。ルーシーは頭を抱かかえた。歯を食いしばった。奥歯を嚙かみ砕くだいてしまいたかった。

「ここからが本番だよ」

　そっけなくさえ聞こえた。

　顔を上げると、マリアローズは、どうかしたの、とでも言いたげな顔でルーシーを見下ろしていた。悔くやしかった。これじゃあまるで、同情をひこうとしているみたいじゃないか。慰なぐさめてもらいたがっているみたいじゃないか。そういう気持ちは、たしかにあるかもしれない。でも、もし今、やさしい言葉をかけられたら、ぼくはもう面めん目ぼく丸まる潰つぶれで、立ちなおれなくなってしまう。そうか。だからだ。それがわかっているから、マリアさんは。

　ルーシーは拳こぶしで胸の真ん中を叩たたいて、一気に立ちあがった。自分の頰ほおを引っぱたいて、気合を注入した。カタリに背中を、どん、と叩かれた。いきなりだったので息がつまったけれど、気合の量は倍加した。

「じゃ、ピンパーネル。偵てい察さつ、お願い」

「はイ」

　ピンパーネルはマリアローズの指示を受けると、一人で前方の闇やみへと突とつ入にゅうしてゆき、すぐに同化してしまった。

　それから一分か二分、いや、三分くらいはたったのだろうか。やけに長く感じた。

　ピンパーネルが戻もどってきた。

「知らないヤツでしタ」

「またかいな……」

　カタリは顔をしかめて頭を掻かいた。

「どないなやッつやねん」

「直立。二本足。腕うで二本。人型。武装してましタ。手て強ごわそう。たくさん・いマス。十以上。あまり近づけなイ。きっと気づかれル」

　ピンパーネルは無表情だ。怯おびえていたり、緊きん張ちようしていたりする様子はない。それだけに、事実を淡たん々たんと語っているという印象を受けた。

「うーん……」

　マリアローズはほっそりした顎あごをつまんで首を傾かたむけた。

「いけそう？」

「みンナ・がんばれバ」

　ピンパーネルがひっそりと微笑ほほえむと、マリアローズは野に咲さく小さな花のように慎つつましやかで可か憐れんな笑えみを返した。

　胸がちりっとした。

　何だろう、これ。

「とりあえず」

　トマトクンが片方の眉まゆをつりあげて全員を見まわした。

「やるだけやってみるか」

「よっしゃッ」

　カタリは両手に持っている二本の手て斧おのをくるりと回した。ピンパーネルとサフィニアは静かにうなずき、ユリカはきりっとした表情になって棍こんの石いし突づきで地面を軽く叩いた。

「ルーシー」

　マリアローズに声をかけられた。

「一つだけ。僕とトマトの指示には絶対に従って。なんか変だとか、そんなの無理とか思っても、とにかく言ったとおりにしてほしいんだ。僕らは全体を見てる。見なきゃいけない。ここが難しいんだけど、一人一人がどんなに一生懸けん命めい、うまくやってても、全体としては形が崩くずれてる。そういうこともあるんだよね。極きよく端たんな話、みんなのために誰だれか一人を犠ぎ牲せいにしなきゃいけないことだってありうるんだ。そんなことしたくないけど、そうするしかないなら、僕とかトマトは決断する。僕はみんなのために、きみを見殺しにするかもしれない。僕一人の命でみんなを救えるなら、そうするよ。そこは納なつ得とくして、僕とトマトの指示には絶対に従って。そうしないと、僕らは勝てないんだ」

　重い。なんて重いんだ。マリアさんは、あの華きゃ奢しゃな身体からだで、そんなに重い責任を背負っているんだ。

「はい。わかりました」

「それじゃあ、ピンパーネルに先行してもらおっか。ピンパーネルのあとは、トマト、ルーシー、カタリ、僕、サフィニア、ユリカで」

　一行はピンパーネルに先導してもらう形でゆっくりと進みはじめた。

　サフィニアが杖に宿らせていた光を消したので、ほとんど真っ暗

だ。ただ、完全な闇ではない。どこかに光がともっていて、それがごつごつした壁かべや天てん井じように反射し、弱まりながらも、ここまで届いているのだろう。

　胸が何か硬かたいもので前後から挟はさみこまれているみたいだ。

　息を吸いこむことはできるのだが、うまく吐はきだすことができない。

　前にトマトクンの大きな背中がある。

　後ろにはカタリがいる。

　みんながいる。

　緊張するな。大だい丈じよう夫ぶだ。そう自分に言い聞かせて、頭ではわかっているつもりだが、身体からだが理解してくれない。

　道は蛇だ行こうしている。

　足場はあまりよくない。

　何度かつまずいてしまいそうになった。

　そのたびに謝りたくなったが、誰も口を開かないので、静かにしなければいけないのだと思い、我が慢まんした。

　やがてトマトクンが足を止めた。

　このあたりはもうだいぶ明るい。

　行く手に目を凝こらすと、かなりの急角度で左に折れ曲がっているようだ。

　ピンパーネルがそこから顔を出し、すぐに戻してトマトクンを見た。

　トマトクンはうなずいて大たい剣けんをかつぐように構えた。

　ルーシーはモトロール刀の柄つかを握りしめた。いよいよか。始まるんだ。まだ敵の姿を目にしていないので、実感がわかない。怖こわくはない。宙に浮ういているような気分だ。

ピンパーネルが、すっ、と曲がり角の先に消えた。すぐにトマトクンがつづいた。ルーシーの身体も勝手に動いていた。いい調子だ。ぼくはやれる。ちゃんとやれている。明るい。十メーテル。十五メーテルくらいか。光。前のほうが開けている。トマトクンが足を速めた。トマトクンの背中に遮さえぎられて、ピンパーネルは見えない。息づかい。自分の呼吸だ。それ以外は何も聞こえない。何も。足は動いている。走っている。もうすぐだ。開けている場所に出る。あと少しだ。トマトクンが斜ななめ右に、ダンッ、と跳んだ。それでようやく見えた。ここは。広間。そう。広い。それに、天井が高い。壁だ。壁が階段状になっている。松明たいまつ？　いや、篝かがり火びのようなものだ。階段状の壁のそこかしこに焚たかれている。でも、炎ほのおなのか。青い。青い炎だ。ていうか、何、これ。死し骸がい。そうだ。死骸だ。何かの生き物の、おそらく、ばらばらにされて、もはや残骸と化している死骸が、たくさん、それはもうたくさん、そこらじゅうに転がっている。散乱している。

ただ、ここにあるのは、死骸だけじゃない。生きて、立っているものもいる。ピンパーネルが言っていた。直立。二本足。腕二本。人型。武装している。そのとおりだった。

立ち姿は人間に似ているものの、明らかに人間じゃない。鎧よろい兜かぶとを身にまとっているのか。たぶんそうだ。でも、頭から飛びだして垂れ下がっている、でっかくてぶっとい鼠ねずみの尻尾しっぽみたいなあの物体は、兜の一部ではないだろう。そんなものが二本、三本、もっとか。それに、口。迫せりだしていて、牙きばのような歯が、上下ではなく、左右についている。鎧も、金属製なのだろうが、見たことのない光こう沢たくだし、身につけているというよりは、身体に嵌はめこんでいるかのようだ。身の丈たけは、約一・メーテル、あるいはそれ以上。人間であれば、筋骨隆りゅう々りゅう、逞たくましい身体つき、という表現があてはまるだろう。手の指は猛もう禽きん類るいの鉤かぎ爪づめみたいだ。人間の指のように関節があって、折れ曲がる鉤爪だ。その鉤爪でもって、彼らは、そう、大勢いるのだ、彼らは、二ふた股またに分かれた刀身を持つ刀だの、長い棘とげを生やした盾たてだの、縁へりがやたらと尖とがった円えん盤ばんだの、穂ほ先さきの代わりに鉄の鞭むちがついた槍やりだの、ちょっとそのへんではお目にかかれそうにない武器を持っていた。どれもこれもへんてこで、見た目は、でも、そうとう恐ろしい、いかにも凶きよう悪あくそうな武器だが、彼らにはものすごく似合っている。

　なぜなら、彼ら自身も凶悪そうだからだ。

「ＳＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨ……！」

「ＧＵＳＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＨＨＨＨＨ……！」

「ＳＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＨＨＨＨＨ……！」

　姿形も凶悪だが、声も凶悪だし、雰ふん囲い気きも凶悪だし、何よりこの惨さん状じよう、あのおびただしい数というよりも量の死し骸がいの残骸は、凶悪な彼らの凶悪な所業による結果に違ちがいなかった。つまり、これはルーシーの予測にすぎないが、おそらく大外れはしていないと思う。けっこう自信がある。ここにはもともと、今、死骸の残骸と成り果てている生き物たちがいたのだ。そこにあの凶悪な連中がやってきて、何の目的があってか知らないけれど、生き物たちを虐ぎやく殺さつした。そこにルーシーたちがやってきた。凶悪な連中はルーシーたちを敵と見なしたようだ。まあ、敵か味方かでいえば、たしかに敵だろう。かなり敵寄りだ。というか、完全に敵だ。敵以外の何者でもない。ルーシーたちと凶悪な連中とは敵同士だ。

　敵だから、当然、襲おそってくる。

　ああ。

　見つかっちゃった。こっちを見てる。どうしよう。くる。きちゃう。

　いや。

　こない。止まった。

　五メーテルくらい手前で立ち止まって、何、あの円盤？　え？　は？　何？　投げる？　どうして？　こっちに？　嘘うそ。待って。待ってったら。とっさにしゃがんだ。頭上を何かが、すごい勢いで飛んでいった。何か？　何かもクソもない。あの円盤だ。あいつは、いかにも凶悪そうな凶悪くんは、こっちめがけて円盤を投げつけた地点から動いていない。今だ。そうだ。逃にげないと。立ちあがろうとした。

「立たないで、ルーシー！　そのまま……！」

　マリアさん？　なんで？　疑問を抱いだきはしたが、指示には従って、しゃがんだままでいた。頭上をまた何かが飛びすぎていった。今度は、後ろから前へ。円盤。そう。円盤だ。戻っていった？　凶悪くんが鉤爪指で器用に円盤をキャッチした。悲鳴をもらしそうになった。もし、立っていたら。たぶん、あの円盤が命中していた。無事ではすまなかっただろう。きっと死んでいた。ダメだ。

　動かない。

　身体からだが。

　すくんでいる。

　手が。足が。

　凶悪くんが近づいてくる。速いんだか、遅おそいんだか、もうよくわからない。ただ、近づいてくる。そのことだけはわかる。凶悪くんがまた円盤を投げようとした。目をつぶりかけた。その前に、横合いから砂色の風が猛もう然ぜんと吹ふきつけてきた。

　ピンパーネルは左手の湾わん曲きよくした短たん剣けんで凶悪くんの手首をえぐりとるように斬きり落として、右手のまっすぐな短剣を凶悪くんの顎の下に突つき入れた。二本の短剣は片時も止まらなかった。ただちに引き抜ぬかれた右手の短剣は、ザンッ、ザムッ、ザンッ、と凶悪くんの肩かた口ぐち、脇わきの下、脇腹に穴を穿うがち、左手の短剣は見る間にその穴を広げた。凶悪くんも抵てい抗こうしようとしてもがいたのだが、ピンパーネルはまったく問題にしなかった。どうやら右手の短剣は鎧の隙すき間まを正確に突きまくっているようで、その隙間がいったん穴となれば、左手の短剣は自在に引き剝はがし、斬り分け、かきまわし、穴を裂さけ目にした。裂け目の拡大工事は途と方ほうもない速度で進められた。ルーシーは見た。見てしまった。ピンパーネルはうっすらとだが、笑っていた。薄うすく笑いながら、あっという間に凶悪くんを解体してしまった。

　小分けにされた凶悪くんがバラバラと地面に落ちた。

　ピンパーネルはもう笑っていなかった。あれは錯さつ覚かくだっ

たのか。

「よく見テ」

　砂さ漠ばくのように乾かわいた声でそう言われて、気がついた。

　ルーシーは何も見ていなかった。ただ目の前にあるものしか、凶悪くんしか目に入っていなかった。

　何も聞いていなかった。ここで何が起こっているのか、ぜんぜんわかっていなかったし、今もわかっていない。

　元軍人、アドリアンの声が蘇よみがえった。基本その一、だ。まずは状じよう況きようを把は握あくしろ。ここがどこか。味方はどこにどれだけいるか。そして、敵はどんなやつで、どこにどれだけいるか。ちゃんと見て、聞いて、感じて、その出来の悪い頭に無理やり叩たたきこめ。

　途と端たんに世界が広がった。

　広い。

　ここに足を踏ふみ入れたときも広いとは思ったけれど、こんなに広かったなんて。

　幅はばは二十メーテルほどだろうか。もっとか。幅よりも奥行きのほうが深い。両側が階段状になっていて、一番高いところ、つまり壁かべ際ぎわは、五メーテル以上ありそうだ。

　敵は凶きよう悪あくくんや凶悪さんたちだ。数は。五人、六人。いや、もっといる。もっと、もっとだ。奥のほうでひとかたまりになって、こちらに押しよせてこようとしている凶悪連中もいるし、とても数えきれない。多すぎる。多勢に無勢だ。

「無花果地軸音楽東軸ＫｕｇｅＬｄ□真土本土久土過渡人示度ＺｅｔＥｎ□ＩＮＤａＮＭａＮＫａＮＬａＮＳｅＮ□ＣＬＡＳＨ拝真名焼尽光ＶＭＢＬ」

「ルーシー！　左に跳とんで……！」

　サフィニアの詠えい唱しよう。それから、マリアローズの指示だ。ルーシーは一も二もなく従って、左に横っ跳びした。その直後

だった。

「□□Ｓｈｏｏｔｅｍ」

　目の前が真っ白になった。光だ。とてつもなく強きよう烈れつな光がルーシーの視力を奪うばった。重苦しい、音、というよりも、衝しよう撃げきを感じた。自分のすぐそばを何かが通りすぎていったような気はするのだが、よくわからない。見えなければわかるはずがない。果たして、そうだろうか。見て、聞いて、感じて、頭に叩きこむこと。そうだ、ルーシー・アッシュカバード。目だけじゃない。ぼくには耳もある。耳を澄すませ。足音。剣けん戟げきの響ひびき。聞こえる。近くには。いる。この息づかい。気合の声。トマトクンだ。それに、カタリも。ピンパーネルはわからない。ルーシーはまばたきをした。くそ。もどかしい。焦あせるな。左手で目の周りをごしごしこすっていると、ちょっとだけ見えるようになってきた。やっぱり。案の定だ。少し前にはトマトクンがいる。すぐそばには、カタリ。トマトクンは野や獣じゆうの咆ほう吼こうをあげながら大剣を振ふりまわして、襲いくる凶悪くんや凶悪さんをぶった斬り、吹っ飛ばして、ほとんど寄せつけない。それでも、トマトクンの大剣による殺さつ戮りく圏けんを迂う回かいしてくる凶悪くんや凶悪さんもいる。カタリはそいつらを二本の斧おので迎むかえ撃うつ。攻せめて、攻めて、攻めまくっているのに、守勢だ。なぜなら、カタリは自由に動きまわることができない。ルーシーがいるからだ。ルーシーから離はなれるわけにはゆかないので、攻めきることができないのだ。

　ピンパーネルは逆に、縦横無む尽じんだ。突とつ風ぷうのように奔はしって、矢のごとく飛んで、独こ楽まみたいに回転して、思うさまに斬って、貫つらぬいて、刻んでいる。

　奥のほうにいた凶悪連中の一団は壊かい滅めつしていた。やつらだけじゃない。きっとサフィニアの魔ま術じゆつだ。あの真っ白い光の射線上にいた凶悪くんや凶悪さんは、その身を焼かれ、あるいは溶とかされて、息絶えるか、息も絶え絶えの状態になっていた。すごい。というか、恐おそろしい。サフィニアの魔術が戦術面の要点だというマリアローズの話がよく理解できた。

　そのマリアローズ、ユリカ、サフィニアは後ろだ。この両側階段状広場の入口あたりに陣じんどっている。でも、べつに休んでいるわけじゃない。トマトクンとカタリ、ルーシーがいる場所をさけて、あえてそっちに向かう凶悪くんもいくらかいた。その相手をし

ているのは、もっぱらユリカだ。武術の達人でもあると聞いてはいたが、まさかあそこまでとは。ユリカは赤いラインが入った白い棍こんを自分の手足のように操あやつって、凶悪くんを子供扱あつかいしている。あんなに小さなユリカが、大きな凶悪くんを圧あつ倒とうしているのだ。まったく痛快としか言いようがないけれど、ダメだ、ユリカ姉様の活かつ躍やくを見て喜んでいる場合じゃない。ぼくはどうなんだ。マリアさんだって、戦ってはいないけど、常にきょろきょろあたりを見まわして、ときおりカタリさんやピンプさんに指示を飛ばしている。お姉様は魔術士だから、魔術の準備をしているに違いない。で、ぼくは……？　ぼくは、何もしていない。前線にいるのに、ここは最前線のはずなのに、ただいるだけで、守られているだけだ。

　何かしたい。今のぼくじゃ、何もできないんだろうけど。でも、何もできないなんて、やっぱり悔しいよ。

　ルーシーはモトロール刀の柄つかを両手で握にぎって敵を探した。前にはトマトクン。カタリは今、ルーシーの右側にいる。左だ。左から、こっちに近づいてこようとしているやつがいる。長い棘とげを生やした盾と、フォークみたいな形の短い槍やりを持っている凶悪くんだ。

　目があった。

　凶悪くんの兜かぶとは目の部分に黒い色の硝子ガラスのようなものが嵌はめこまれているので、実際、こっちを見たかどうかなんてわからないのだが、視線がかちあったような気がして仕方ない。

　凶悪くんはこっちに向かってくる。

　ルーシーは、ふっ、ふっ、と息を吐はいた。思いきり吸って、駆かけだした。

「□□Ｒａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈｈ……！」

「ＳＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＨＨＨＨＨ……！」

　凶悪くんめがけて突とつ進しんしてゆくルーシーの頭の中では、アドリアンの声が鳴り響いていた。敵は死ぬ気で殺せ。敵は死ぬ気

で殺せ。敵は死ぬ気で殺せ。死ぬ気で死ぬ気で死ぬ気で殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺Ｓａａａａａａａａｙ……！　Ａｈｈｈｈｈｈｈｈｈ！　脳から出てる！　何か出まくってる！　迸ほとばしってる！　ビュウビュウ出てる！　Ｋｕ□ｋｕｋｕｋｕ□Ａｈｙａｈｙａｈｙａｈｙａ！　ぼくは速い速いあいつが思うよりずっと疾はやァァァァァい！　だからあいつがフォークみたいなのを突きだすタイミングが遅おくれたよＹｅａｈ！　ぼくはキヒヒヒ言いながら刀を思いっきりぶん回した！　狙ねらいはあいつのフォークだガギャンッ！　弾はじいた！　弾いちゃったよＡｈａ！　あいつったら体勢を崩くずしてちょっとびびってるびびってる！　ぼくはここぞとばかりに突っこむんだ！　どこまでも突っこむんだ！　インサートだ！　レッツインサートッ！　そこにあいつが棘だらけの盾をテイッとばかりに突きだしてくるなんてそんなのお見通しだしぼくには見える見える見えるＵＵＵＵＵＵＵ！　ぼくはキュッとイカしてイカれた女の子の足首みたいに細い腰こしみたいに横にステップを踏んでターンして見て見てこの身のこなし！　ぼくはもうあいつの右みぎ腕うでの外側にいてあいつの脇わき腹ばらが見えてそこにこの刀を突っこんでグリグリしたらどんなに気持ちいいカナ⁉　その予感に打ち震ふるえながらぼくはあいつに肉にく薄はくしようとしたのにすっごいやな感じ！　後ろだ後ろ！　とっさに右方向に身体からだを投げだしたら、そこにあいつのキックが襲いかかってきて、ぼくは脇腹を蹴けり上げられて、一いつ瞬しゅん、目の前が真っ暗になって、なんかもう出てきた。ぼく、吐いちゃってる。朝、食べた腸ちよう詰づめを挟んだパン二つと甘い飲み物が出てきちゃってる。これは、涙なみだ。ぼく、泣いてる。泣いてる場合じゃないのに。そうだ。泣いてどうする。吐いてどうなる。ぼくはぬぐう。目の、口の周りをぬぐって、気がつくと、フォークみたいなものを持っていたあいつと、もう一人の、凶きよう悪あくくんか凶悪さんか知らないけど、その死し骸がいが、残骸が、すぐそばに転がっていた。

　トマトクンだ。それに、カタリも。ルーシーは二人のそばから離はなれて、フォークの凶悪くんをやっつけに行こうとしたはずだ。それなのに、なぜか二人はルーシーの近くにいる。助けにきてくれたのだ。また守られてしまった。

「どうした、ルーシー！」

　トマトクンがちらりと顔だけ振り返らせて、ニヤリと笑ってみせた。

「しょんぼりしてる暇ひまなんか、どこにもないはずだぞ！」

「せやで！」

　カタリはカカカッと大笑いしながら、二ふた股また刀とうを二本持った凶悪くんに突っこんでいった。

　そうだ。そのとおりだ。ルーシーは立ちあがってモトロール刀を握る手に力をこめた。落ちこんだり反省したりするのは、あとでもできる。今しかできないことが、もっと他ほかにあるはずだ。きっとある。あると思いたい。あってください。お願いします。

　まずは、見る、聞く、感じる、状況を頭に叩きこむ。

　アドリアンが教えてくれた、基本その三、が脳のう裏りをよぎった。

　曰いわく、やばくなったら、なんにも考えねぇでさっさと逃げろ！

「……わわわ」

　奥だ。両側階段状広場のずっと奥のほうから、凶悪連中が湧わいて出てきた。いや、おそらくどこかに繋つながっている通路があって、そこから出てきたのであって、湧いたわけではないのかもしれないが、そんな印象を受けた。

　ルーシーは振り向いて、マリアローズの様子をうかがった。マリアローズは当然、新手の登場に気づいているようだ。視線がそっちへ向けられていたので、間ま違ちがいないだろう。マリアローズはルーシーをちらりと見た。橙だいだい色いろの瞳ひとみに映ったルーシーの顔は、たぶん、かなり情けない表情をしていたに違いない。

「まだだよ！　まだやれる！」

　それがマリアローズの判断なのか。だったら、従うしかない。でも、やれるって言われても、何をすれば。今しかできないことって、何だよ、それ。とりあえず、がむしゃらに動きまわるのはまずい。さっきみたいなことになったら、みんなの手をわずらわせるだけだ。腰が引けている。そうかもしれない。だけれど、迷めい惑わくをかけていい情勢じゃないんだ。

「トマト、ピンプ、カタリ、後退バツク……！　真ん中にスペースができてる！　そう！」

　マリアローズの指示で、トマトクンとピンパーネル、カタリがやや後退した。当然、ルーシーもそのぶん下がった。押されているのか。そう見える。敵は倒たおされても倒されても後続があるのに、こっちは七人で、そのうちの一人は員数外だ。全身返り血まみれのトマトクンやピンパーネルが、凶悪くんや凶悪さんにやられてしまうとは思えない。でも、すでに相手もそれはわかっているようで、トマトクンにはあまり近づこうとしない。距きょ離りをとって槍だの何だのを投げつけてきたり、たまに向こう見ずな凶悪くんが突とつ出しゆつしてきて一刀のもとに斬きり捨てられると、その死骸を盾にして詰つめよってこようとしたり。トマトクンが少しでも移動すれば、その方面にぽっかり空くう隙げきができて、別の方向に敵が集中する。トマトクンがそっちに向きなおると、たちまち別の方面から後衛に攻せめかかろうとする。これではほとんどいたちごっこだ。ピンパーネルの瞬しゆん間かん的な加速には対応できていないようだが、一人の凶悪くんが犠ぎ牲せいになっている間に二人、三人、それ以上が押しよせるという戦法は、抑よく止し力にはなっている。敵の武器はなまくらではないし、敵の動きは決して遅おそくない。きっと、ピンパーネルといえども、無理をすれば手傷を負わされてしまうのだ。それに、ピンパーネルが得意としているらしい、敵てき陣じんのど真ん中に突っこんでゆき、混乱に乗じて大暴れするというやり方はとれない。そんなことをしたら、こちらの陣じん形けいに穴があいてしまう。

　正面にトマトクン、左にピンパーネル、右にカタリ。今やこの三人が両側階段状広場の入口の前に壁かべを作って、なんとか凶悪連中をせきとめている、といった恰かつ好こうになりつつある。

　ルーシーは三人の後ろでおろおろしているだけだ。もし前に出ても、三人の邪じや魔まになるか、凶悪くんの餌え食じきになるだけだろう。

　いっぱいいっぱいなのだ。

　危あやういところで、どうにかバランスをとっている。何かが乱れたら、一気に決けつ壊かいしてしまいかねない。いつ綻ほころびが生じてもおかしくないのだ。

　それどころか、もうヒビが入りはじめている。カタリだ。

　カタリはトマトクン、ピンパーネルほど常人離ばなれしていない。それでも、二本の変へん形けい斧おので必死に敵を食い止めている。トマトクンがリーチの長い大たい剣けんを駆く使ししてかなり広い範はん囲いをカバーしているので、そのぶん助かっているという側面もあるだろう。そうはいっても、奮戦している。力りき闘とうして、善戦し、ときに苦戦していた。カタリはそのたびに、どぅあッ、おっしゃいッ、どっせいッ、コナクソッ、と気合を入れて押し返した。驚きよう異い的な粘ねばりだけれど、いつまでもつづくものだろうか。

　でも、ぼくには応おう援えんすることくらいしか。手に汗あせを握にぎりながら、がんばって、と念じることしかできない。

「ユリカ！　カタリのカバーに……！」

　マリアローズは違った。決断した。わずかに遅かったのか。

「──ずおッ……！」

　カタリの左ひだり肩かたに、凶悪くんが繰くりだした槍やりの禍まが々まがしい螺ら旋せん状の穂ほ先さきが突き刺さった。カタリはすぐに槍の柄つかを叩たたき斬ったが、穂先は刺さったままだ。マリアローズの判断は素す早ばやかった。

「下がって、カタリ！　ユリカは治ち療りよう！　前には僕が！　ルーシー！」

　マリアローズは転がるようにして後退したカタリと入れ違いに、前衛の壁にあいた穴をすっと埋うめた。

「僕をバックアップして……！」

「はい！」

　勢いで返事をしてしまったが、何をすればいいのか。マリアローズは小型の弩いしゆみを手に、一番近くにいた凶きよう悪あくくんに飛びかかって、至近距離からその口めがけて矢を発射した。凶悪くんがのけぞると、マリアローズはすぐさま弩を捨てて腰から二本の剣を抜き、別の凶悪さんが振りおろしてきた変な形の鞭むちをかわしつつ、その隣となりの凶悪くんが突きだしてきた気持ち悪い刀をかろうじて受け流した。あのピンパーネルを相手に日々訓練しているのだ。目も身体からだも十分ついてゆけるだろうが、やばい。

じりじりと下がっている。なんとかしないと。ぼくがなんとかしないと。バックアップしてって、言われたんだ。やらないと。でも、どうやって。

「ルーシー！」

　後ろだ。ユリカだった。ユリカはカタリの手当てにとりかかろうとしていた。その前に声をかけてくれたのだ。

「心を燃やして！　頭はちゅめたくしゅるの！　しゃあ、行きなしゃい！」

「はい！　ユリカ姉様！」

　そうか。それだ。心を燃やして、頭はつめたくする。胸に炎ほのお。頭に氷。そうイメージしてみた。燃えろ、ぼくの心！　燃えて、燃えて、燃え盛さかれ！　でも、冷えろ、ぼくの頭！　冴えろ、冴えろ、冴え渡れ！

　この狂きよう気きを、ぼくは飼かい馴ならさないといけない。そう。狂気だ。ぼくの中にはある狂気が宿っている。ぼくを狂くるわせるそれを、暴走させるそれを、手なずけて、自分の武器にしないといけない。ぼくはその武器で戦うんだ。守るんだ。

　さあ、行け、ルーシー・アッシュカバード。モトロール刀を握る手に力をこめろ。いや、力を入れすぎちゃダメだ。適度に抜く。そして走りだせ。マリアさんは紙かみ一ひと重えの差で凶悪くんや凶悪さんの斬ざん撃げき、刺し突とつをよけている。というか、たまにかすって、髪かみの毛が、ぱらっ、ぱらっ、と切れ飛んで、外がい套とうや、ボディスーツに瑕きずが。おい。おいおいおいおい。何をするんだ！　大事な大事なマリアさんに、いったい何を！　殺す殺す殺す殺してやるＵＵＵＵＵＵＵ！　ぼくは加速、疾しつ走そう、そのまま突つっこもうとした。ダメだ。頭に氷。よく見ろ。見て、聞いて、感じろ。ぼくは一度、右へ。凶悪くんの視界から消えて、そこから一気に懐ふところに飛びこんだ。そのつもりだったのに、やつは反応した。気づかれた。Ｕｆｆｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕｕ……！　ぼくの身体は跳んでいた。跳んじゃった！　えーいもう、どうにでもなれ！

「□□Ｎｙａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａａｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　ぼくはやつの胸に両足で着地して、やつの口の中に刀をねじこんだ。このままグリグリしたい。グジャグジャにしてやりたい。ダメだ。頭を冷やせ。脳のう汁じるストップ！　くそ、止まらないＹｅａｈ！　それでも落ちつけ冷静に落ちつけ。ぼくは刀を引き抜ぬきながら後ろに跳んで一回転して、ピィィィーッ！　て、何がピィィィーッだ！　まともになれ。興奮しすぎだ。ほら、きてる！　敵の刀！　打ち返せ！　弾はじけ！　弾け！　弾け！　押されるな！　打ち返せ！　見えない。周りが。見ていられない。そんな余よ裕ゆう、あるわけない。目の前のやつに対処するだけで精せいーいつ杯ぱいだ。くそ。くそ、くそ、くそ！　これじゃあ。こんなことじゃあ──ＢＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＭＢ……！



　え？　何？　光？　衝撃？　熱風？　煙けむり？　魔術？　違ちがう。そうじゃない。どこだろう。前方。斜ななめ右。敵の真っ直ただ中なかだ。あのあたりだ。と思ったら、そこからちょっと左くらいの地点で、またもやＢＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＭＢ……！　光った。燃えた。炎だ。何人かの凶悪くん、凶悪さんが燃えている。煙。なんとなくだが、二度目は見え

た。マリアローズだ。マリアローズが何か小さなものを投げた。もしかして、あれが？　わからないけれど、おかげで相手はちょっと浮うき足だった。甚じん大だいな損害を与あたえたというわけではなさそうだが、目に見えて圧力が弱まった。ルーシーの目の前にいる凶悪くんも一瞬、いや、二瞬くらい、刀を振るう手を止めた。今だ。今しかない。脳に指令を出したら脳汁がドッパアアアアアアアアァァァァァァッとあふれて、ぼくは狂気に冒おかされそうになったけど、心は燃やして頭は冷やせ、そう、冷静に、冷静に、冷静になんてとてもじゃないけどやってられねＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！　ぼくはやつに詰つめよって喉のどと顎あごの境目あたりにグッサリ刀を突きあげて突き入れてＹｅａａａａａａａａａａａａａａａａｈ……！　爽そう快かい！　爽快だよ！　けど、ねじ伏ふせろ、ぼく！　この狂気は凶器だ。敵だけじゃなくてぼくにとっても脅きよう威いになるかもしれない凶器だ。ぼくはこらえて我が慢まんして耐たえに耐えて、凶悪くんを突き倒しがてら刀を抜いて、頭の中に氷をイメージ、氷を、氷を、氷をいっぱい敷しきつめるイメージだ、そう、そうだ、次、次だ、次の敵、次は、どこだどこだどこだどこだどこだぼくに殺させろ殺させろ殺させろ根こそぎ殺させろダメだいけない抑おさえろ抑えつけろ見ろ聞け感じろ、ぼくよ、ぼくを制圧しろ制せい御ぎよしろ支配しろどうにかしろ！

「フウウヌウウウウウオオオオオオォォォォァァァアアアアァァァァァァァッ……！」

　敵よりも内なる狂気と闘たたかうことを余よ儀ぎなくされていたルーシーの横を、一匹ぴきの漢おとこが駆け抜けていった。漢は今まさにルーシーに襲おそいかからんとしていた凶悪くんにまっすぐ突っこみ、二本の手て斧おのを猛もう回転させた。凶悪くんはたじたじとなった。一歩下がってしまった。そうなるともう、漢の独どく擅せん場じようだ。

「てやてやてやてやてやてやてやあぁッ！　いけいけいけいけいけいけいけぇいッ！」

　さっきまでとは別人だ。漢の斧は回転車輪で、暴風で、怒ど濤とうだった。漢は斧のみならず身体全体で全開の漢ヂカラを撒まき散らした。漢は蹴けった。飛びこんで肘ひじ鉄てつを食らわせた。頭ず突つきを見み舞まった。猛もう威いを振るう漢パワーは最初の凶悪くんだけでは飽あきたらず、その隣の凶悪さんも、その奥の凶悪くんも、さらにその向こうの凶悪さんも、どんどん巻きこんでいった。

「ぬらぬらぬらぬらぬらぬらぬらあぁッ！　きてきてきてきてきてきてきてぇいッ！」

　漢の左ひだり肩かたは、見たところ完治していないようだ。あまりに派手に動きすぎているせいもあるだろう。傷口が開いて出血していたが、漢はかまわなかった。

「わしの名を呼んでみいッ……！」

　かまうことなく、漢は押して、押して、押しまくった。

「わしの名はァァァッ！　復活のォォォ！　逆ぎやく襲しゆうのォォォ！　この世を滅めつ亡ぼうに導く終末破は壊かい神反逆のシンボル強きよう烈れつ覇は者しや未来のモテモテ王じつは王子様最強無敵の半魚人いや今のはナシや取り消すでそうやなくてとにかくわしが巷ちまたで噂うわさのカタリじゃあああぁぁぁぁいッ……！」

　漢の突進力はものすごかった。あれだけねちっこく、じわじわとこちらを追いつめようしていた凶きよう悪あくくん、凶悪さんたちが、あえなく突き崩された。

「今だよ！　畳たたみかける……！」

　マリアローズが鋭するどく叫さけんで、また小さな物体を投げた。三つ立てつづけだった。敵陣の後ろのほうで三度、閃せん光こう、何かが炸さく裂れつしたような音、熱風、衝撃、煙が巻き起こって、凶悪連中全体の勢いが完全に止まった。ルーシーにはそう見えた。トマトクンとピンパーネルが漢に負けじと前進しはじめると、敵は目に見えて動どう揺ようした。動揺はまたたく間に狼ろう狽ばいとなって広がった。こうなってしまったら敵はこちらを支えきれない。もともと個人対個人の戦せん闘とう能力ではこちらに分があるのだ。敵の利点は、頭数と、数をいかした連係プレーだった。その連係が崩れた今、凶悪くんや凶悪さんにできることは、がむしゃらにトマトクンやピンパーネルや漢ヂカラによってパワーアップしたカタリに立ち向かっていって各個撃げき破はされるか、あとは、尻尾しつぽを巻いて逃にげだすか。そのどちらかしかない。

　大半の凶悪くんや凶悪さんは後者を選んだ。

算を乱して逃げてゆく。潰かい走そうだ。

血がたぎった。ほとんどの敵は背中を向けている。今なら簡単だ。やれる。殺やれる。殺せる。追いかけていって、追いすがって、うなじとか、心臓とか、そのあたりに刀をぶっ刺して、グリグリして、殺せる。いくらでも殺せる。この匂においい。生き物の新しん鮮せんな血と生の肉と臓物の匂い。なんていい匂いなんだ。あそこにも死し骸がい。ここにも死骸。そこにも死骸。死骸だらけ。なんていい眺めだろう。勘かん違ちがいだよ。ぼくは勘違いしていたんだ。ぼくはこういうのが大好きだ。身み震ぶるいするほど好きで好きでたまらない。気持ち悪いと思おうとしていただけだった。だって、普ふ通つうの人はきっとそうだから。でも、普通なんてクソ食らえだ。普通なんてどうでもいい。ここはエルデンだ。ぼくはぼくを解き放ったっていい。そうだ。今日はぼくの解放記念日！　ぼくが本当のぼくと出会った記念の日！　さあ、パーティーだ！　祝おう！　殺そう！　走れ、ルーシー！　走るんだ……！

「深追いはしないで！」

つめたい水を頭からひっかぶったような心ここ地ちがした。マリアさん。そうだ。そうだよ。ダメじゃないか。胸に炎。頭に氷。勝手にパーティーなんかしてる場合じゃない。

トマトクンも、ピンパーネルも、カタリさえ、ルーシーの十メーテルくらい前方で止まっている。凶悪くんや凶悪さんたちは、様子を見つつ後退しているという感じではない。本気走りだ。追撃して全ぜん滅めつさせるとなると、かなり大変だろう。でも、逃がしたら逃がしたで、態勢を立てなおして、また押しよせてくるんじゃ。

ルーシーはマリアローズを見た。マリアローズはすでに剣を鞘さやに収めて、前のほうへと目をやっている。鋭い眼まな差ざしだ。険しいといってもいいくらいの表情を浮かべている。何かあるのか。ルーシーはマリアローズの視線の先を目で追った。この両側階段状広場には二つの出入口があって、そのうちの一つはルーシーたちが入ってきたところだ。もう一つの出入口には、今、凶悪くんや凶悪さんたちが殺さつ到とうしている。逃げてゆこうとしているのだ。

それはいいとして、何か変だ。

なんであの人（？）たちは、出入口の真ん中をさけているのだろ

う。遠いので正確なことはわからないが、あの出入口、幅はばも高さもけっこうありそうだ。それなのに、凶悪くんや凶悪さんたちは、あえて左右の壁沿いに列をなしている。

　まるで何かのために道をあけているかのようだ。

　もしかして、そのとおりなのか。

　マリアローズは前方を見すえたまま指示を出した。

「ユリカ、サフィニア！　僕のところまできて！　ルーシーも！　トマト、ピンプ、カタリはそこで待機！　何かくるよ……！」

　ルーシーは何も考えずにマリアローズのそばまで移動した。何だろう。この緊きん迫ぱく感かんは。すごくいやな感じがする。サフィニアやユリカも緊張しているようだ。ルーシーはもう一つの出入口に目を凝こらした。いきなりだった。地じ響ひびきのような音が聞こえだした。そう思った途と端たん、それは飛びだしてきた。獣けもののごとく、地を這はうように、だが、猛速度で駆かけてきて、跳ちよう躍やくして、トマトクンたちの真ん前に着地して、立ちあがった。

　ＺＧＵＺＧＵＺＧＵＺＧＵＺＧＵＺＧＵＺＧＵＺＧＵＺＧＵＺＧＵＵＵＵＵＵ……！

　咆ほう吼こう、声というよりは振しん動どうみたいだ。それも、十メーテル以上離はなれたところにいるルーシーの身体からだをぶるぶる震わせてぐらぐら揺ゆらすような、とんでもない振動だ。でかい。身の丈たけは約五メーテル。二本の足は短めだが、えらく逞たくましい。すごい胸だし、とんでもない肩かたと首で、腕うでなんか巨きよ木ぼくみたいだ。頭部はもう何がなんだかわからない。ただ、口の上下ではなく左右に牙きばが並んでいるのは、凶悪くんと一いつ緒しよだ。同種族なのか。凶悪くんも、鎧よろいを脱ぬいだら、あんな灰色とも青とも緑色ともつかない色の肌はだをしているのか。そんな肌の表面に、黒みがかった紫むらさき色いろの血管みたいなものが網あみ目めのように浮きだしていて、よりいっそう気色が悪い。ところが、やつの頭の両側から突きだしている二本の大きな角は、金銀宝石をちりばめたように、あるいは、金銀宝石そのものであるかのように、きらきらぴかぴかと輝かがやいているのだ。

「あの、角……」

　生なま唾つばを飲みこむ音がした。

　隣にいるマリアローズだった。

「高く売れそう」

「……マリアさん？」

「トマト、そいつの角は傷つけないで！　いい!?　他ほかのみんなも、あくまであの角の確保優先で！　わかった!?」

「ちょっと、マリアさんっ!?」

　ダメだ。目の色が変わっている。というか、そんなことをしている間に、角野や郎ろうが動きだした。トマトクンめがけて巨きよ大だいな拳こぶしを振ふりおろして、これはぎりぎりのところで命中しなかったのだが、地面が粉ふん砕さいされて陥かん没ぼつし、おびただしい量の破は片へんやら粉ふん塵じんやらが飛び散った。よく見ると、角野郎は全ぜん裸らじゃない。下腹部や肘ひじ、膝ひざ、それから足と手に、最悪くんたちが身につけていた鎧よろいと似たような質感、意い匠しようの防具を装着している。角野郎の手を保護している籠こ手ては、武器にもなるだろう。あの巨体で、あんなものをつけた手で、あの馬ば鹿か力ぢからでぶん殴なぐられたら、無事ではすまない。死ぬ。絶対、死ぬ。危険だ。あいつは危険すぎる。竜りゆうモドキも怖こわかったが、角野郎はその比じゃない。でかいくせに、やたらと速いのだ。あのサイズだから腕が長いし、その上、あんなにも素す早ばやいとなると、とても近づけない。ＺＵ！　ＺＵ！　ＺＵ！　ＺＵ！　ＺＵ！　ＺＵ！　ＺＵ！　ＺＵ！　ＺＵ！　ＺＵ！　ＺＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵ！　さらに、振動のような声を発しながら矢や継つぎ早に繰りだされる拳は、地面をザンザングジャグジャに破は壊かいして、どんどん足場を悪くしてゆく。角野郎は身体が大きいのでさして気にならないだろうが、トマトクンたちにとってはかなり動きにくいはずだ。それでも、飛んだり跳はねたり転がったりしながら、なんとか回かい避ひしつづけているのはさすがだが、逃げるばかりではどうにもならない。かといって、攻せめ手もない。でも、そうだ。こっちには切り札がある。

「お姉様！」

「……はい……？」

　サフィニアは、何でしょうか、とでも言いたげに小首を傾かしげてみせた。儚はかなげでありながら可か憐れんでもあり、なかなか胸がきゅっとなる仕し種ぐさだが、はい、じゃないですよ、はい、じゃ。

「あの、いいんですか。たとえば魔ま術じゆつとか、あと、魔術とか、それから、魔術とか」

「……角を……傷つけないように、するとなると……やはり……使える魔術は、かぎられてくるので……」

「で、でも！　いや、そもそも、そんなことを言っている場合じゃないような！　そうでしょう、ユリカ姉様！　ユリカ姉様だってそう思いませんか！」

「しょうねえ……」

　ユリカはちょっと考えこんでから棍こんの石いし突づきで地面をとんっと叩たたき、左の拳をぎゅっと握にぎりしめて凛りゝりしい顔でうなずいた。

「わたしたちも、もっとしっかり応おう援えんしましょう！」

「はい！　わかりました！　しっかり応援──応……援？」

　おっかしいなあ。何かずれているような。ずれているのは、ぼく？　それとも、マリアさんとお姉様とユリカ姉様？　三対一だから、多数決だと、やっぱりぼく？　そういう問題なのかな？　違うよね？　違う、はずなんだけど。だって、角野郎は相変わらず思うぞんぶん暴れまくっていて、トマトクンとかピンプさんとかカタリさんとかはその周囲をぶんぶん飛びまわっている蜂はちみたいな感じで。強い毒を持っている蜂の一ひと刺さしはたしかに怖いけど、相手に接近できないと毒針を突き刺すこともできないし。スズメバチでも、人間の一いち撃げきでぺしゃんこになっちゃうわけだし。ぼくはともかく、お姉様とユリカ姉様には力のかぎり声せい援えんを送る以外、それ以上のことができそうだし、マリアさんだって、こう、角がどうとか、そういうことじゃなくて、もっと有効そうな指示をキビキビ出したりとか、できるよね？　できるはずだよね？　それなのに、なんで。

「──腐ふっ腐っ腐っ腐っ腐っ腐っ……！」

　このちょっと腐り気味の笑い声は、もしかして、今もひっきりなしに動きまわっている、というか逃げまわっているカタリさん？

「よっしゃァッ！　見切ったでェ！　サフィニア！　アレや！　一丁アレ頼たのむわ！」

「……はい……」

　サフィニアはひっそりとうなずいて目を伏せ、杖つえを両手で握った。一いつ瞬しゆんで雰ふん囲い気きが変わった。別人みたいだ。すごい集中力だ。数秒間か、もっと長かったかもしれない。サフィニアを取り囲んでいる空気があまりに異質すぎて、よくわからなかった。

「術式アムラル……連鎖アコルド──」

　張りつめた沈ちん黙もくが破られた。

「Ｅｇｎｉ魔群Ｒｏｗ戒炎塵Ｈｅｙ瑯Ｓｈｏｗ燎螢ＩｎＢａＮａｍ」

　杖から立ちのぼったのは、熱。炎というよりも、熱そのものだ。揺らめく熱の流れは、いつの間にか角野郎から離れてこちらに近づいてきていたカタリの手斧に、右手で握っている手斧の刃はに吸いこまれてゆき、そして宿った。ただ、サフィニアの魔術はそれで終わりではなかった。立てつづけだった。

「餓羅Ｆｏｒｄ瞑賦裡Ｔａｎ罪Ｒｅｎ怨Ｇｉ条Ｄｅｘｕｓ」

　カタリの頭上に何かもわもわっとした黒いものが出現した。その物体から、カタリが左手で握っている手斧の刃めがけて、青白い稲いな妻ずま形がたの光、おそらく稲妻そのものが落ちて、消えずにとどまった。

「──おっしゃあァッ！　いっくでええええええええええええええええぇぇぇぇッ……！」

　カタリは、否いな、漢おとこは走りだした。グッジャグジャの悪路を物ともしない。漢は天あま翔かけるように駆けた。一直線だった。角野郎は漢の姿を見て、何なのだこの小さな半魚人は、このワ

シに向かって、馬ば鹿か正直にまっすぐ突っこんでくるなんて、アホじゃないのか、舐なめてんじゃねえぞ、いてまうど、コラ、というような気分になったのかもしれない。そんならええわ、わかった、わかりました、やったるわ、おお、やったるで、ええんやな、ええっちゅうたんはそっちやからな、どうなったってワシは知らんで、知らんからな。角野郎がそう思ったのかどうかはわからないが、とにかく迎むかえ撃うつ気満々といった様子だった。とはいえ、角野郎はああ見えてわりと慎しん重ちよう派だった。腕わん力りよくと体力に物を言わせてひたすら暴れまくっているだけのように見えるが、意外と計算しているのだ。だからタチが悪いのだ。角野郎はドカーンッと飛び下がって、漢に注意が向いている隙すきに距きよ離りをつめようとしていたトマトクンやピンパーネルを置き去りにした。そうして余裕たっぷりで漢を待ちかまえ、確実に叩き潰つぶしてやる、という覚かく悟ごがあからさまに見てとれた。漢は、だが、漢だけに、怯ひるんだりしなかった。さらに速度を上げて角野郎に突とつ進しんしていった。角野郎は、やっぱこいつアホや、しょうもないアホや、アホやからしゃあないわ、よっしゃ、望みどおりぺたんこにしたろ、よいな、恨うらむのであれば貴き様さま自身の馬鹿さ加減を恨むがいい、とばかりに両の拳を振りかぶった。その動作は大おお袈げ裟さすぎて見え見えではあったが、力感にあふれまくっていて、相手に対する威い嚇かくという面では十分以上に効果があると思われる。しかも、限界まで引き絞しぼられた矢が最大の威力を発揮するように、謎なぞの金属らしきもので固められたあの拳はとてつもない破壊力を秘ひめているだろう。もうすぐその超ちよう越えつ的な力をまざまざと見せつけるだろう。漢は、だが、漢だけに、ためらわない、退ひかない、よけたりしない。真っ向勝負だ。それは、でも、さすがにやめたほうがいいんじゃ。どう考えても、勝ち目がないんじゃ。ルーシーは目をつぶらなかった。つぶる暇ひまがなかった。呼吸もできなかった。心臓すら止まっていたかもしれない。

　ＧＺＵＺＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵＵ……！

　角野郎が左右の拳を矢や継つぎ早に繰くりだした。あたった。命中した。潰れた。木こっ端ぱ微み塵じんに砕くだけ散った。そう見えた。違ちがった。漢が。漢が、まるで紙切れに。そう。漢の形をした薄うすっぺらい一枚の紙と化したように、ルーシーの目には見えたのだ。もちろん、錯さつ覚かくだった。漢はひらりひらりと角野郎の拳をかわしただけだった。その、ひらりひらり、という身の

こなしが、あまりにもひらりひらりしすぎていて、紙切れみたいだったのだ。

「──見切ったっちゅうとんのやろがダボスケェッ……！」

　漢は、そして、舞まった。白鳥のように。いや、それは言いすぎだ。鴉からすのように、角野郎に飛びかかった。もはやパンチやキックで迎え撃つには近すぎる距離だったので、角野郎は漢をつかまえようとしたが、まただ。漢はまたもや紙切れと化して、するり、とその手をすり抜けた。正確に言えば、間かん一いつ髪ぱつのところでしゃがみながら身体からだをくるりと回転させつつ前進したのだ。こうして漢はとうとう角野郎の懐に入りこんでしまった。懐？　違う。あそこはもう、ほとんど股またの下だ。

「我流ゥゥゥゥッ！　秘ひ奥おう義ぎッ……！」

　漢はまず左手の手斧を角野郎の股こ間かんを鎧よろっている防具に叩きこんだ。その一撃は防具に弾はじかれたが、青白い光が角野郎の全身を駆け巡めぐった。角野郎は息をのむような声をもらして、ビクンッと一度、身体を震ふるわせた。漢の第二撃が角野郎の股間に襲いかかったのは、まさにその瞬しゅん間かんだった。

「漢殺しイイイイイイイイィィィィィィィィィイイヤアアァァァァァァァッ……！」

　灼しやく熱ねつを帯びた漢の右手の手斧は股間の防具をたやすく焼き切って、その奥へと達した。角野郎は絶ぜつ叫きようして股間を押さえた。そのときにはもう、漢は角野郎の股の間を通り抜けていた。恐おそるべし、魔術の力を借りて漢が漢を殺す、我流秘奥義漢殺し。ルーシーはその凄せい惨さんな必ひつ殺さつ技わざをしっかりと目に焼きつけた。それはいいんだけど、あれ？　ピンプさんがいない……？

　いた。

　というよりも、突とつ如じよとして現れたのだ。そんなふうにしか見えなかった。

　ピンパーネルは角野郎の頭の上に立っていた。

　まるで、ずっとそこにそうしていたかのようだ。

時が、止まる。

静せい寂じやくは半瞬で跡あと形かたもなく消えた。

ピンパーネルは目線を下げて、自分の足あし許もとを、つまり、角野郎の頭を見下ろし、唇くちびるの端はしをちろりと舐めた。

その先はとてもじゃないけれど目で追うことはできなかった。ピンパーネルはあの二本の短たん剣けんをでたらめに動かしているのだろうか。それとも、最初から決まっている動きなのだろうか。型のようなものをなぞっているのだろうか。どちらにしても、信じられない。ピンパーネルの短剣は穿うがち、削そいで、剝はがし、またたく間に金銀宝石そのもののような二本の角を抉えぐりとってしまった。ピンパーネルは片方の短剣を口にくわえ、あいた手で一本の角を抱かかえて後方に跳とんだ。もう一本の角は、ゲェェェェェェチュッ、と叫さけびながらカタリがキャッチした。角野郎はのけぞってふたたび絶叫し、左手で股間を押さえて右手で頭を抱えながら身み悶もだえた。その過程でたまたま前まえ屈かがみの姿勢になった。そのときを虎こ視し眈たん々たんと狙ねらっていたのだろう。

「ぬうううううううううううううううううううううううううううぅぅぅぅぅぅぅん……！」

トマトクンだ。トマトクンの大たい剣けんが角野郎の首を右みぎ腕うでごと斬きり飛ばしてしまった。

角野郎の生首と右腕がズジャッと地面に落ちた。

それでも角野郎は傷口から血を噴ふん出しゆつさせながらしばらく立っていたが、すみません、そろそろいいですか、もう限界なんで、さようなら、とでも言わんばかりに、ドウッと倒たおれた。

じつは、凶きよう悪あくくんや凶悪さんたちは完全に撤てつ退たいしたわけではなく、出入口のところに何人か残っていた。連中も角野郎の敗北を目まの当たりにして退いていった。

何て言ったらいいか。

どう言うべきか。

とにかく、ありえない。信じられない。

　角を一本ずつ抱えているピンパーネルとカタリ、それからトマトクンがゆっくりと引き返してきた。マリアローズが笑え顔がおで迎えた。

「お疲つかれ！　角！　見せて、角！　うーん。いい角。これ、まだ誰だれも知らない、未知の戦利品だったりして。てゆうか、たぶんそうだよね。絶対そうだよ。売れるね。きっと高く売れるよ。これだから新規開かい拓たくはやめられないよね」

「怪け我がは？　どこか痛いところがあったら言ってね」

　ユリカは三人の身体をざっと見て、カタリに座るように命じて治ち療りようを始めた。医術式による治療には興味があったが、観察していてもよくわからない。ただ傷の付近に手をふれ、祈いのっているだけのようだ。それなのに、だんだんと傷口がふさがってゆく。なんとも不思議だ。

「ほら、サフィニア」

「……は、はい……」

　マリアローズに背中を押されたサフィニアが、トマトクンに何か小声で話しかけている。顔が赤い。真っ赤だ。マリアローズとピンパーネルがその模様をあたたかく見守っている。ああ、そうなのか。少し残念というか、べつに残念がるようなことでもないし、第一、そんな立場ではないけれど、そうだったんだ。お姉様はトマトクンのことが好きなんだ。見え見えなのに、当のトマトクンは気づいていないのだろうか。おお、とか、うむ、とか、まあな、とか、あまり気の入っていない返事の仕方のようにも思える。でも、トマトクンはわりとそういう人のような気もする。つまり、ごく普通に受け答えしているだけ、というふうにも見える。やっぱり、気づいていない？　それか、どうでもいいと思っているとか？　後者だったら、もったいない。お姉様は、すごくきれいだし、守ってあげたい、と思わせるような人なのに。ぼくじゃあ守れないけど。お姉様のほうが、ずっとすごいし。トマトクンなら、できそうなのに。

「ルーシー、ちょっと手を貸してくれる？」

「あ、はい！」

　マリアローズに呼ばれて、ピンパーネルと一緒に、例の角を地面

に置いたり、ひっくり返してみたり、移動させたりするのを手伝った。角を調べているマリアローズの顔つきは真しん剣けんそのものだ。集中しているようなので、じっと見つめていても気づかれない。すごく真剣なのに、なんでこんなにかわいらしいんだろう。眉まゆの動かし方とか、たまに唇を尖とがらせたり、頬ほおをほんの少し膨ふくらませたりするところとか、その表情の一つ一つが宝物のようで。あんな角なんかよりも、ずっと、ずっと、貴重で。角を見た途と端たん、目の色を変えたのにはちょっとびっくりしたが、それもご愛あい敬きようというか、そういう人間的なところも魅み力りよくだったりするというか。

　目をつぶって顔を上に向けた。

　深く、深く、呼吸をすると、覚悟は決まっていた。

　ルーシーはトマトクンのところまで歩いていった。サフィニアはもう、思いつくかぎりの言葉を使い果たして、何も喋しやべれないのだが、トマトクンのそばから離れることもできない、といった様子だ。邪じや魔まをして悪いけれど、これだけは言わないといけない。

「あの、トマトクン」

「む？」

　トマトクンのみならず、サフィニアも、それからちょうど治療が終わったところらしいカタリやユリカもルーシーを見た。たぶん、マリアローズとピンパーネルもこちらに視線をそそいでいるだろう。途端に心臓がじたばたしだして、頭の中が真っ白になりかけた。でも、言わないと。このことは、今、思いたった今、はっきりと、自分の口から言わないとダメなんだ。

「ぼくは未熟で、何もできなくて、才能もたぶん、なくて、弱くて、ヨワヨワで、頼たよりなくて、甘ったれで、根こん性じようなしで、きっと迷めい惑わくかけっぱなしで、すごく、なんていうか、こんなことを言っていいのかって、図ずう々ずうしいんじゃないかって、思うんですけど」

　自分で言っているうちに、やっぱりダメなんじゃないかと思えてきた。いや。それでも言うんだ。だって、ぼくはそうしたい。今こうしたくて、こうする。二つそろえば最高じゃないか。もし断られ

ても、後こう悔かいはしなくてすむ。それだけでも十分じゃないか。

　トマトクンの黄玉トパーズの瞳ひとみはまっすぐぼくを見つめている。

　ぼくは正々堂々見つめ返した。

「ぼくを、ＺＯＯの一員にしてください！　お願いします……！」

「お前」

　トマトクンは眉をひそめた。険しい表情のように見えなくもない。ああ。ダメだったか。そっか。ダメだった。でも、しょうがない。そりゃダメだよ。ダメに決まっている。ぼくなんか。ぼくみたいなやつなんて。肩かたを落として、うつむきそうになった。その寸前だった。

「まだＺＯＯうちに入ってなかったのか？」

「……え？」

「いや、しばらく俺の家にいるし、今日だってお前も一いつ緒しよだと聞かされてたしな。なんとなく仲間のつもりでいたんだが。違ったのか」

「正式には、ね」

　マリアローズは斜ななめ上のほうに目をやって指先で頰をぽりぽり搔かいた。

「書面が必要とか、何かに署名しないといけないとか、儀ぎ式しきがあるとか、そういうわけじゃないから、正式もへったくれもないんだけど」

「ふむ。そうだったのか。まあ、どっちにしても、俺としてはとくに異存はないぞ」

「わしもフツーに仲間やと思とったしなあ。正確にゆうたら、仲間になるんやろうなぁーみたいな感じか。マリアローズのときもせやったけど、そういうのって、なんやこう、だいたいわかるもんやん？」

「……そう……ですね……」

「はイ」

「でも、考えてみたら、マリアのときのほうがけっこうしゅごかったわよね。カタリなんて、だいぶいろいろ言われてたし」

「ナッハハハハッ！　今となってはええ思い出っちゅうやッつやっ！」

「あーもーやめてよそんな僕のことはどうでもいいんだから！」

　マリアローズの顔が赤らんでいる。耳まで真っ赤だ。いったいどんなことがあったのだろう。機会があったら、是ぜ非ひ知りたい。もしかしたら、いつか教えてもらえるかもしれないのだ。マリアローズはルーシーをちらっと見て、わざとらしく肩をすくめてみせた。

「とりあえず、きみはちゃんと待ち合わせの場所に自分の足で歩いてきたしね。才能云うんぬんはそう簡単にわかるものじゃないし、おいとくとしても、素す直なおなぶんだけ僕よりはずっと見み込こみがあると思うよ」

「じゃあ、ようこそ動Ｚ物Ｏ園Ｏへ、だな」

　トマトクンは唇の片かた端はしをほんの少しだけつりあげてルーシーの頭を撫なでた。力が強すぎて、背がちぢんでしまいそうだった。ちょっとくらいなら、ちぢんでもいいと思った。

「こ、これから、よろしくお願いします……！」

　ユリカ姉様は、よろしくね、と向日葵ひまわりのように笑ってくれた。ユリカ姉様が小さな太陽だとすれば、そっと、はい、とうなずいてくれたお姉様は銀色の月だった。カタリさんには背中を、どん、と叩かれた。ピンプさんは無言で握あく手しゆを求めてきた。こうして手を握ってみるとわかる。戦いのときは恐おそろしい人だけれど、本当はやさしい。悲しいほどにやさしい人だ。

　目があうと、マリアさんはまだほのかに赤い顔を手で扇あおぎながら、例の、やれやれ、みたいな雰囲気も若じやつ干かんあり、しょうがないなあ、と思っているようでもある、年上風味の、お姉さん的な、ほんのり笑え顔がおになった。

「よろしく、ルーシー」

　ああ。

　ぼくは、だめだ。

「マリアさん」

「なに？」

　あなたの言うとおりです。ぼくは素直なのかもしれません。素直に生きることしかできないのかもしれません。

「ぼくは、あなたのことが好きです」

　マリアさんだけじゃない。全員が凍こおりついた。

　そうでしょうとも。そうなると思っていましたとも。でも、それでも、ぼくは伝えたいんです。正直な思いを。そうしないと、ぼくは自分を偽いつわることになって、結局、みんなを騙だますことにもなってしまう。せっかくＺＯＯに入れてもらったんだ。そんなの、いやなんだ。

「初めて会ったときから、好きでした。一ひと目め惚ぼれでした。それから、どんどんもっと好きになっちゃいました。ごめんなさい。今も好きです。とっても好きです」

「……や、で、でも、僕、女の子じゃないし……」

「関係ないです！」

　うわあ。ぼく、あの黒い服を着たアジアンみたいなことを言っちゃってるのかも。だけど、しょうがない。あの人の言うこともわかる。間ま違ちがってはいないと思う。ただ、ぼくの気持ちについて、あの人にどうこう言われる筋合いはない。



「いけませんかっ!?　好きでいたって、いいじゃないですか！　べつに、何かしたいとか、どうにかなりたいとか、そういうことじゃないんです！　ただ好きなんです！　それだけなんです！　迷惑はかけません！　好きでいさせてください！　お願いします……！」

「……あ、や、まあ、その……」

　マリアローズはちょっとだけ顔を青ざめさせて、でも、首を縦に振ふってくれた。

「変なことしないなら、べつにいいけど……」

「Ｙｅａｈｈｈｈｈｈｈｈｈｈ……！」

　ルーシーは両手をあげて声のかぎりに叫んだ。

　こうしてファー・セルジナの片かた田舎いなか、シー・シリー生まれのアシェローン、ルーシー・アッシュカバードは、クラン・ＺＯＯの末席に連なることになった。

　まだ見ぬ明日に何が待ち受けているかなんて、知るよしもなかった。

epilogue

変なことになっちゃったなあ、というふうに思っているわけでは、必ずしもない。

悪い子じゃないし。約束してくれたとおり、おかしな真ま似ねはしないし。気持ちの浮うき沈しずみはちょっと激しいけれど、わりとどうってことないっていうか、立ちなおりが早いっていうか。落ちこんで、すぐにぱっと復活して、深刻なんだかそうでもないんだか、よくわからないといえばわからない。でも、まあ、ずっとしょげ返っていられるよりはいいし。真ま面じ目めといえば、真面目だし。

戦力としても、順調に成長していってくれれば、意外と期待できそうだ。少なくとも、僕よりはね？　背は僕よりも低い百五十四サンチで、十六歳にしては小さいけれど、たぶんまだのびるだろう。お父さんはかなり大きいって言ってたし。戦せん闘とうの経験がほとんどないわりに、迫はく力りよくっていうか、敵に肉にく薄はくする力、みたいなものはある。動体視力もいい。筋力は並みだけど、僕よりはずっとマシだ。瞬しゅん発ぱつ力は悪くない。柔じゅう軟なん性もある。そんなに賢かしこく立ち回るタイプじゃないし、やけに興奮しやすいけど、考えなしってほどじゃない。まっさらなだけに、吸収が速くて、経験を積ませれば積ませるほど強くなる時期だ。

でも、過信しやすい。つまずくと、すぐにどん底まで落ちる。そのうち絶対にやってくる、伸のび悩なやんだときが勝負だ。頭が天てん井じようにつかえたとき、どうやって乗り越こえるか。

マリアローズは第二王立銀行の動物園事務所にいる。動物園事務所名物、大だい円えん卓たくを囲む椅い子すの一つに腰こしを下ろして、とくに何をするでもない。大円卓に突つっ伏ぷしたり、頰ほお杖づえをついたりしながら、ひたすら窓から射さしこむ朝の光を浴びて、目を細めている。まだ朝早いので、マリアローズの他ほかにはユリカしかいない。

このごろはほとんど毎日、アンダーグラウンドだ。新入りが入ったということで、とくに半魚人とか半魚人とか半魚人とかがやたらと張り切っている。

でも、懐なつかしいな。僕のときもそうだったんだ。でも、今や

立場が逆になった。正直、ＺＯＯには教え上手が少ない。園長マスターにしろ、元アッサシンにしろ、手とり足とり一から十までやさしく教えるっていうタイプじゃないし。半魚人は、わしの背中を見ろッ、とか、漢おとこは背中で語るもんじゃッ、とか、そんなバカなことばっかり言っている。ユリカも、努力と根こん性じようと忍にん耐たいで一つずつ確実に積み重ねてゆく人なのに、そのわりには伝え方が感覚的だ。ここをこう、ぎゅっとして、ちょっとふっと抜ぬいて、ぎゅーん、て、やるのよ、とか、平気で言ったりするのだ。サフィニアはもう、完全な天才肌はだだし。自分がどうしてそのことを理解しているのかわからないけれど、とにかく理解していて、他人がどうして理解できないのかなんて当然わからない。そういうところがある。魔ま術じゆつ士しだし、しかも、魔導士ウイザードを名乗っていてもおかしくないような超ちよう級きゆうの魔術士なんだから、普ふ通つうなわけないんだけど。

　そうなると結局、僕なんだよね。平へい凡ぼん。能力的には平均以下。考えて、工夫して、ひたすら頭を使って、なんとか乗りきってきた。ノウハウはある。自分のためだけに蓄ちく積せきしてきたその知識、やり方を、誰だれかに伝える。じつは、それなりにおもしろい。素す直なおにはいはい言うことを聞いてくれるし、生徒としてはかわいいんだよね。あくまで、生徒としては、だけど。

　つい早起きして、早めに家を出てしまう。朝っぱらからあの目で見つめられると、少々疲れるのだ。何だろう。崇すう拝はい？　尊敬？　敬愛？　とにかくやめてほしい。でも、相手はただ見てるだけなんだろうし、見るなっていうのも、なんだか。本当に、変なことはしてこないし。接せつ触しよくしないように、気をつけてるっぽいし。ただ、やたらと子犬に懐なつかれちゃってるみたいな感じで。僕は猫ねこ派だし。とくに犬が嫌きらいってわけじゃないけど。

「おはようございまーす！」

　そうこうしているうちに、新入りくんが動物園事務所のドアを開けて入ってきた。

「おはよう、ルーシー」

「おはようございます、ユリカ姉様！　マリアさんも！　おはようございます！」

「……うん。おはよ」

　ただ挨あい拶さつを返しただけなのに、目をきらきらさせないで。お願いだから。いいけど。そのうち慣れるだろうし。新入りくんにしても、なんかこう、その、好きだとか、何だとか、そういう気持ちなんて、だんだん薄うすれていって、ああ、そんなこともありましたね、みたいになると思うし。時が解決してくれるだろうし。

　う。

　いやなヤツの顔が脳のう裏りをよぎった。

「どうかしたんですか、マリアさん」

「え？　や、何でもないよ？」

「そうですか？」

　ルーシーは隣となりの、その隣の椅子に座った。べつに、そこまで気を遣つかってくれなくてもいいんだけどね。もうちょっと自然に振る舞まってくれたほうが、こっちとしてはやりやすいんだけど。そのほうが、かえって難しいのかな。そうかも。

「何でもないのなら、いいんですけど」

「うん。何でもない」

「やっぱり気になりますよ！　何かあるんでしょう！　教えてください！」

「ないってば」

「もぉー」

　だけど、そんなふうにほっぺたを膨らましたりしてると、なんか女の子みたいなんだよね。スカート、やたらと似合ってるし。

「……ぼくの顔、何か変ですか？」

「や、変じゃないよ」

「変じゃないのなら、いいんですけど」

「うん。変じゃない」

「やっぱり変なんですね！　どこが変なんですか！　言ってくださいよ！」

「だから、変じゃないってば！」

　つ、疲つかれる。若い。こっちだって、そんなに年を食っているわけじゃないはずなのに、明らかに世代間のギャップみたいなものを感じる。でも、世代の問題だろうか。違ちがうような。カタリなんか、わりとフィーリングがあってるみたいだし。そうだ。カタリだ。早くきてくれないかな、と思っていたら、動物園事務所のドアがバーンと開いた。

　まいど！　いつもならそんな第一声が飛びだすのだが、今日は違った。

　カタリは口を開こうとせず、足を引きずるようなだらしない歩き方で、だらだらと事務所に入ってきた。やや前まえ屈かがみ気味で、ポケットに手を突っこんでいる。その態度、姿勢もなんだか見ていて腹が立ってくるけれど、服装もよくない。やたらとスタイリッシュなチンピラ、とでも言えばいいか。基本的にきれいなシルエットの服なのに、わざと崩くずしてあって、それがどうも嫌いや味みなのだ。配色も気き障ざで、やりすぎ感が漂ただよっている。少なくとも、半魚人には似合わない。そのやけに大きなサングラスとか、やめてほしいんですけど。

「……わあ……かっこいい」

　ルーシーみたいな若い子は、素直にそう感じちゃったりするのかもしれないけどね。ユリカはぽかんとしてるし。や、ユリカはまあ、ファッションの方面にはぜんぜん興味ないし、ふだんのカタリと違いすぎるもんだから、ただ驚おどろいてるだけなのかもしれないけどさ。

「腐フッ」

　カタリは口くち許もとに気どった微び笑しようを刻むと、マリアローズとルーシーの間の椅子に浅く腰かけ、小こ脇わきに抱かかえていた雑誌を円えん卓たくの上に放ほうった。

「これや、これぇ。見てみい。あまりに最新すぎて、まだ広まっと

らん超最新のモードや。これから絶対流は行やりまくりやからな。モテモテ王としては、当然のごとく先取りしとるっちゅうわけや」

「ふーん……」

　マリアローズはカタリが放った雑誌を手にとってみた。タイトルは、アルトラモード。どうやら、ファッション関係の雑誌のようだ。最近、写真、という、そこにあるものをそのまま写す技術、というか、機械のようなものが闇やみ市いちで売りだされて、とても話題になった。この雑誌には、その写真が何枚も使われている。それにしても、この写真ってやつは何度見ても奇き妙みようだ。気味が悪いくらい精密で、本当に実物みたいだし、じつはしばらく前から一部では使われていたという噂うわさもあるものだから、機き術じゆつ士し匠しよう合ごうによってずっと秘ひ匿とくされていた技術が、何者かの手によって持ちだされ、拡散してしまったのではないかとも言われている。近々、機術士匠合が写真の撮さつ影えい機を発売するという話もあって、持ちだされ説は俄が然ぜん、信しん憑ぴよう性を帯びてきたというのが事情通の見方らしいけれど、どっちにしても、こういう雑誌って無む駄だに高いんだろうな。裏を見てみた。定価一万五千ダラー。高っ。一いつ般ぱん人じんが読むものじゃない。業界誌だ。呆あきれながらぺらぺらめくった。あ。これかな。カタリが着てるやつ。

　最初の見開きは、上下逆さまになっている上半身裸はだかの男だ。写真だろう。顎あごから下なので、顔はわからない。なんだか奇妙な身体からだつきだ。胸は逞たくましいのに、ずいぶんウエストが細い。男の胸には、

　Revice

　悪徳再生

　という黒い文字がある。これは、写真の上に字をのせたのではなく、男の胸にペンキか何かで描かいてあるようだ。

　次のページからは服や装そう飾しよく品などの写真がつづいて、これは何で何はどうで何がどうしてどうなったとか、ずらずらと書かれている。流し読みしたところでは、M□S□R（手しゆ淫いんせよ、ねじこめ、犯やれ）のメインデザイナー、リチャード・〝ディック〟・コック。ガルベル・ダのリードデザイナー、デメトリオ・アルベルティーニ。フェチ・バルのデザイナー、マスター・

オニオン。モン・ローのデザイナー、ゲフリー・ピーチマン。知っている名前もあれば、知らない名前もあるが、なんとなくすごそうだ。そういう人たちが結集して作った新しいブランド、それがどうやら〝悪徳再生Revice〟らしい。マリアローズもファッションにはわりと興味があるので、じっくり読んでみたい気もしたが、ルーシーが「ぼくにもぼくにも見せて読ませてくださいお願いします」光線を目から放射している。今、読まないと、なくなってしまうというわけでもない。マリアローズは円卓の上に雑誌を置いて、ルーシーのほうへ滑すべらせた。

「はい」

「ありがとうございます！」

　ルーシーは貪むさぼるように雑誌を読みはじめた。これでしばらくはおとなしいだろう。マリアローズはカタリを横目で見た。

「ところで、それ、いいと思って着てるわけ？」

「あたりまえじゃボケ。わしを誰だれやと思とるんや。常にモードの最さい先せん端たんを行くイケイケモテモテ王やで」

「ま、いいけどね」

「なんやワレ。その、そないな恰かつ好こうしたかてどうせ女にはもてへんわい、みたいな目ぇは。わからんやろ。やってみんとな。これからはなあ。極ごく悪ワルやで。極ごく悪ワルこそが、今年来年のトレンドキーワードなんや。そのシンボルが〝悪徳再生Revice〟っちゅうわッけや」

「へー……」

「あっ！」

　突とつ然ぜん、ルーシーが素すっ頓とん狂きような声をあげた。

「こ、これ。これ。これ。これ。これ」

「な、なんやねん。どないしたん」

「これ。これ。これ！　これ！　これ！」

　ルーシーは広げた雑誌を持ちあげて、マリアローズとカタリに見せた。

「これ、って──」

「をををををを ぅ……？」

「何？　何かあったの？」

　ユリカも何事かと駆かけよってきて、マリアローズとカタリの間から顔を出し、雑誌を凝ぎよう視しした。ルーシーは頬ほおを紅潮させて目を見開き、雑誌をばんばん叩たたきながら、これ、これ、これです、これ、と叫さけんでいるが、何のことはない。〝悪徳再生Revice〟とやらをとりあげたコーナーの最初のページだ。見開きで、逆さまになった上半身裸の男の写真がでかでかと載のっている。

「これが、どうかしたの？」

「これ！」

　ルーシーはつづけて何か言おうとして声をつまらせ、咳せきこんだ。呼吸と発声のタイミングが狂くるったらしい。いくらなんでも慌あわてすぎじゃない？　でも、ルーシーをそこまで取り乱させる何かが、この見開きページに隠かくされているということなのか。マリアローズはもう一度、写真を眺ながめてみた。あれ？　いや、知ってたけど。気づいてはいたんだけど。最初に見たときも、ちょっと引っかかったことは引っかかったけれど、わざとそうしてあるのだろうと思った。

　Reviceのｅが、左右逆になっている。９だ。

　たぶん、ｅが二つあるので、前のｅの形を変えて、ようするに恰好つけたのだろう。

　そういうふうにも考えられる。

　でも、これはｅじゃない。

　明らかに９だ。本当に９なのか。

　男の肌はやけに白くてなめらかで、まるで白磁のような質感だ。

　その胸のちょうど真ん中に、その文字は刻まれている。ペンキか何かで描いてあるように見えた。たしかに、そのとおりだ。〝悪徳再生〟をふくめた他の文字は、きっと肌の上にペンキ的なもので描いたのだろう。ただ、その文字だけは違ちがう。

「これ」

　ようやく咳せきが治まったようだ。ルーシーはその目に満天の星を浮かべて叫んだ。

「絶対、絶対、間違いないです！　顔は見えないけど、わかります！　この人、ぼくのお父さんです……！」

　Reviceの前のｅは、違う。

　これはｅじゃない。

　男は上下逆さまになって写真に写っている。

　ということは、９でもない。

　６、だ。

『薔薇のマリア　11．灰被りのルーシー』了

あとがき

二〇〇四年に歩みを始めた『薔薇のマリア』も『Ｘ』で一つの山を越こえまして、これから新しい山を登ってゆくことになります。

そうした意味もこめて、タイトルを若じやっ干かん変へん更こうして一から再スタートを切ることも考えたのですが、やはり『薔薇のマリア』は『薔薇のマリア』のまま最後まで行きたいということで、巻数表示だけローマ数字からアラビア数字に変えることにしました。

というわけで、十一冊目の本編は『11』で、次は『12』ということになります。

新章です。

内容についてはふれませんが、主人公交代というわけではありません。念のため、それだけは述べておきます。『薔薇のマリア』本編の主人公は、あくまでマリアローズです。

マリアローズは、僕ぼくにとってはとても手のかかる子です。それだけに、マリアローズを、ひいては『薔薇のマリア』を書くことは、非常に手間はかかるのですが、いろいろなことを学び、成長するきっかけを僕に与あたえてくれます。これからも、『薔薇のマリア』は僕にとって試練であり、同時に道みち標しるべでもありつづけるでしょう。

そういえば、この物語を始めるにあたって、だいたいこういう構想で、というふうに、当時の担当編集者や編集長に話したのですが、じつはちょっと嘘うそをついていました。本当は、もっと大きなことを考えていたのです。今も、その構想に従ってお話を進めています。担当編集者が交代する前に、実際これってどうなってどう終わるのか、と尋たずねられたのですが、僕は教えませんでした。基本的には、誰だれにも明かすつもりはありません。

終わりの場所まで行きつかないと、僕がこの物語にこめた本当のテーマは、たぶん見えてこないでしょう。なんとかそこまでたどり

つきたいです。平へい坦たんな道のりではないでしょうが、なんとしてもたどりつくつもりです。

　こんなふうに今、僕が前を向くことができているのは、本当に、『薔薇のマリア』を支えてくださっている皆みなさんのおかげです。

　ひとりではまっすぐ歩くこともできない未熟者ですが、どうか最後までおつきあいいただければと思います。

　それでは、紙数が尽つきましたので、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆様へ、あらんかぎりの感謝と愛をこめつつ、筆を置きます。またお会いしましょう。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア

11．灰はい被かぶりのルーシー

十じゅう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　11．灰被りのルーシー』平成21年5月1日初版発行

平成21年10月20日3版発行